
† 万有掌握 † 《トレジャーハンターキングに俺はなる！》

過労死志願 （大バサミではなく、阿良々木暦撰・文房具最凶の瞬間接着剤が武器です。）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十万有掌握十《トレジャーハンターキングに俺はなる!》

【Nコード】

N9732Q

【作者名】

過労死志願（大バサミではなく、阿良々木暦撰・文房具最凶の瞬間接着剤が武器です。）

【あらすじ】

ある異世界。

超能力が発達したこの世界において、トップクラスの实力をもつ、とあるトレジャーハンターがたまたま一緒に酒を飲んでいた魔法使いによって異世界に飛ばされた！

なんといきついたせかいはあの《ワンピース》の世界で！

原作介入は頂上決戦から！海賊ではなくトレジャーハンターの物語。

『すべてを掴む、皇になろう！』by主人公

1,000,000PV突破！！これからも応援よろしくお願
いします^^

プロローグ

とある異世界にて。

超能力者、勇鷲盗屋いさねあしとういつは最近知り合った銀髪の侍と酒をのみかわしていた。

その時の会話である。

『もひ、異世界に渡へるとひたら、お前はどんにゃところにひきたい？』

よって呂律が回っていない銀髪に苦笑しつつ盗屋はジェラード帽を外し渋く熟成された声で答えた。

「そうだな……………俺は《ワンピース》の世界に行きたい」

異世界にもジャンプはあり、あの腕が伸びる主人公が海賊王を目指す漫画もあるのだ。

「にやんでまた？しよんな物騒なところに……………」

「俺の本業は傭兵じゃなくトレジャーハンターだぞ？《一つなぎのワンピース 財宝》。これほどそそられる財宝なら自分の手で掴みたいと思うのが真のトレジャーハンターだ。それに、物騒さの度合いならこちの世界のほうが上だろう……………」

「ここにはいちゃくなくによか！」

「この国に遺跡なんてものはもうないしな……………トレジャーハンターにとつてはつまらない国や」

しょうか……………。

銀髪はそうつぶやくと、一枚の札をとりだし盗屋に貼りつけた。

「おい、なんの……………」

「まったく……………どいつもこいつも……………」このどろがふまんにゃんや!」

瞬間、盗屋は体の内側から何かに引きずられるような感覚とともに、この世界から完全に消滅した。

突如きえてしまった盗屋に飲み屋の親父は目を丸くしたが、やがて何事もなかったかのように銀髪のコップに酒をついだ。

「よかつたんですかシオンさん。息子さんがいないいま、あの人だけがあなたの支えだったのでしょくに」

「うつしえバーカ!」

銀髪こと、シオンは豪快に酒をあおったあと、いたずらっ子のような笑みを浮かべて、呟いた。

「男はな……………ゆめにいきるもんなんだよ」

シオンは最後の瞬間、盗屋の顔に歓喜の笑みが浮かぶのをしっかりとらえていた。

オリ主プロフィール（前書き）

やってきました二次創作第四だん！

オリジナル三つ、二次三つと抱えている状況ですが、まあ、何とかなるはずです。

オリジナル小説は《小元数乃》というペンネームで出しているの
で良かったらみてくださーい。

オリ主プロフィール

《名前》 勇鷲盗屋。

《能力名》 万有掌握。

《能力内容》

この世にあるすべての物を掴み取る能力。

空気、炎、光、水…… e t c.

当然、自然系能力者ロギアの実体を掴むこともできるが、クロヒゲのように能力自体を吸い取って掴んでいるわけではないので、掴まれているところ以外の体は自由に変化できるし能力も使える。

能力は両腕のみに発動するため他は生身の体。

掴んだ物は手の平サイズに圧縮して半永久的に保存することができる。この能力は普段は冷蔵庫代わりにつかっている。

空間を圧縮して保存することもでき、保存された空間はガラス玉に入った箱庭のようになり時間がとまる。

この場合保存できるのは十二時間まで。

最大で、半径3キロの球体状の空間を掴める。

人間を直接圧縮することはできない。

《過去》

もともとはやり手のトレジャーハンターだったが、生まれつき超能力を持っていた事が研究機関にばれて大学院生として研究機関に強制的にいれられる。

研究機関を潰した後は、傭兵としてある財閥に無理やり雇われる。
(理由の詳細は不明。)

交友関係はとてもひろく、呪術士、陰陽師、財閥の当主から盗賊団のリーダーまでその知り合いは多種多様だったようだが、知り合いの陰陽師に異世界に飛ばされてしまったため、元の世界では死んだことになっている。

夢はトレジャーハンターキング。

《外見》

三十代後半のナイスミドル。

黒髪

ジェラード帽、皮ジャンと鞭がトレードマーク。(同じ服を何着ももっているらしい。)

腰にはポーチを下げており、手の平サイズに圧縮された物が多々入っている。

髭はなく二十代後半に見えるが、基本的にハードポイルドを気取っているので、見た目より老けてみられる。(本望だそうだ。)

1話(前書き)

掴みのようなもの。

トウヤの普段の生活です。

1話

グランドライン内部。

ウザール島。

普段は静かな遺蹟と猿の島であるはずのこの島に物騒な声が響き渡っていた。

懸賞金300万ベリー。

《風神》のザンジ。そして彼が率いる海賊団、《風神海賊団》が、この島に上陸していたのだ。

普段は普通の村から略奪を行い生計を立てている彼らだが、一応海賊を名乗っているからにはお宝探しもする。

今回の彼らの目的はこの島の遺跡に眠るとされている《聖剣ペングラム》を見つけることだ。

「一振りで万の軍勢を吹き飛ばす聖剣……………これさえあれば、俺は無敵だぜえ！ギヒヒヒヒヒヒ！」

不可思議な笑い方をしながら風神は森の奥へと突き進む。

その時だ！

「そいつは困るな。あれは俺の獲物だ」

「は？」

風神は突然聞こえた声に反応しようとして……………。

…十…十……………十…十…

「どんな時でも警戒を怠るなよ小僧。だからこんな目にあつ」

異世界に飛ばされた盗屋は、イササギ・トウヤと名前を変えて充実した毎日を送っていた。

異世界で初めて立ち寄った村で能力を使い荒稼ぎをした彼は、船と宝の地図を（眉唾もの多数）購入し冒険の旅に出たのだ。

現在見つけた財宝の数は4つ。

半年で集めたものとしてはまずまずのかずである。

見つけた財宝を横取りしようとした汚職海軍大佐を殴り飛ばしてしまったため、懸賞金五十万ベリーの賞金首になってしまっただが、彼は特にきにしていなかった。

そして今は先程も言ったようにここの島に眠っている聖剣を探しているのだ。

閑話休題。

手の平サイズに圧縮された空間を暫く弄んだあと、トウヤは大きく振りかぶり力いっぱいその空間を放り投げた。

見た目はただのガラス玉だが、なかにはフィギュアのような縮んだ、男たちが入っており驚きの表情のまま固まっている。

そのガラス玉が見えなくなったあとトウヤは悠然と遺跡への道を歩き始めた。

数分後。

「ありきたりなトラップだな」

斜面を転がってきた巨大な岩を右手で受け止め圧縮。

手の平サイズまで縮んだそれを無造作にポケットに突っ込み再び歩を進める。

次は凄まじい勢いで流れてくる濁流。

これまた手で受けとめて圧縮し、透明な水の玉にしたあとポケットに。

弓矢だろうが落とし穴だろうが、あらゆるものを掴み取り圧縮、足場ができるトウヤにとってはどれもたいした障害にはならなかった。

そして……………。

「ありがちな聖剣だな」

巨大な岩盤に突き刺さった金色の剣が置いてある部屋にたどり着いた。

岩盤には何かの文字が書いてあったが、どうせ所有者に選ばれしものしか抜けないみたいなのが書いてあるんだろうと、あっさりスル―。

そして彼は剣をつかんだ。

当然力ずくで抜けるわけもなく、普通に抜こうとした彼は暫く頑張って引っ張って見たがびくともしない剣を見つめて満足そうに頷いた。

トウヤがあんな無駄なことをしたのは、この剣が本当に財宝の剣なのかと確かめるためだ。

ああいう、いやらしい罠が多発する遺跡に隠されている財宝は、それっぽい場所に偽物を、驚くような場所に本物、といった最後の罠が仕掛けられていることが多い。

三流のトレジャーハンターは偽物の方をつかまされ意気揚揚と帰っていき、鑑定の結果、偽物とわかり自棄酒をのむということになりがちなのだ。

今回の剣は何らかの高度な細工によって岩盤に剣が固定されているようだ。

偽物のためにわざわざこんな手間のかかることはしないだろうか、間違いなく本物だろう。

そう結論づけたトウヤは再び剣を掴み取り、今度は力ではなく能力を込めた！

剣はみるみるうちに縮んでいきあっさり岩盤から離れトウヤの手に納まる。

「今度からは剣が縮んでも抜けないような細工を用意しておくんだな」

この遺跡を作り上げた誰かにそう言い放った後、トウヤはタバコに火をつけ、煙を吐き出すのだった。

2話

『朝だよ、朝だぜ、朝ですぜ！』

個性的なアラーム音とともにけたたましい不快な音楽が時計からあふれてくる。

トウヤはそれを殴るようにたたき、音を止めた。

そして、ベッドから半身を起こし、暫くぼーっとしたあと目をこすり大きく伸びをする。

この世界に来てから一年。随分と時間がたったものだと感じに耽りながら、洗顔と歯磨きをすませコントロールルームへといく。

実はこの船、本当は百人単位で動かさなければならぬかなり大きな船なのだが、トウヤがもっていた世界で学んでいた工学技術フルにつんでおり、トウヤ一人でも航行ができるようになっていた。

財宝を積むのに金庫はでかいのがいいということでの船を買ったのだが、よくよく考えてみればなんでも手の平サイズにできてしまつトウヤには、そこまででかい金庫はいらないと気が激しくへこんでしまったのは秘密である。

そんなとき、カモメが一羽飛んできて新聞を落としていった。

トウヤはカモメにコインを何枚か投げつけ、カモメがうまくキャッチするのを見届けるとピカピカに磨かれた甲板に設置されたウツ

ドチエアに腰をおろし新聞に目を走らせる。

『またも襲撃！懸賞金は天井知らず！？キャプテン・キッド再び！』

『七武海ククロコダイル。またも海賊を退ける。国王からの感謝の言葉を賜る』

などなどの見出しの下に小さな記事が書かれていた。

『麦わらの一味・グランドラインいり』

トウヤはそれを見て少し眉をしかめたあと、大分前に新聞とともに送られてきた手配書を取り出した。

「麦わらのルフィ……………懸賞金3000万ベリー。」

麦わら帽子を被った少年が少年が気持ちのいい笑みを浮かべて写真に写っている。

そして……………もう一枚。

「カウンター アクセラレータ反射の一方通行……………懸賞金2000万ベリー？」

手配書をさらに読み進めると、どうやら麦わら海賊団においてゾロと並ぶサポート役をしているらしく、なぜか隣にはアルビダ（美人バージョン）が寄り添っている。

悪魔の身の能力者らしく、あらゆる攻撃を反射することから《力ウンター》の通り名がついたらしい。

さて、ここで疑問がわくわけだが……………

誰こいつ？

何度も記述しているようにトウヤはワンピースの原作を知っている。当然麦わらの一味の構成も、どのような冒険をしたのかも、すべて完璧に記憶していた。

当然、こんなヤツは原作には影も形もなかったわけ……………。

「どーなっている？どーいうことだ」

ここは漫画の世界ではなくパラレルワールドのようなものだといいことは薄々気付いていた。

当然だ。こんなリアルな漫画の世界があつてたまるか。

だが、設定自体は原作とほぼ同じだったはずなのだ。バギーは見事に失脚したし、エースはクロヒゲを追っていた。

クロコダイルはしっかり悪巧みをしているし、キャプテンクロは再指名手配を受けた。

だが……………こいつは明らかに違う。

麦わら海賊団に今の段階でいるもう一人のクルーだと？

おまけになにか、科学と魔術が交差する学園都市の最強能力者みたいな名前だしな。

トウヤはしばらく考えたあと、あることを思い出していた。

あの銀髪の息子が言っていた言葉を……………。

『二次創作のオリ主はな、自分で考えたオリジナル能力でチートにすんのもおもしろいんやけど、他の小説の能力をひっぱってきてチー

トにすんのもおもしろいねんなー。なにより、すでに能力の設定とか
練られとるから考える手間が省けるしー』

もしかして……………こいつがそうなのか？

チートオリ主人公。

どこぞからの転生者。

リアルに神から能力をもらったやつ。

だとしたら……………。

「一度、会う必要があるみたいだな」

もしこいつが、俺が考えた通りの人物なら間違いなくこの世界の
未来についてある程度知っている。

だとしたら、こいつは間違いなく世界をめちゃくちやにすること
ができるはずだ。

それは俺としてはこまる。

トウヤはそう考えながら新聞をたたんだ。なぜなら、現段階で彼は、自分が持っている原作知識を、全力で強敵との接触を逃れるために使っているからだ。

新世界にはいろいろともせずグランドライン前半の海に入り浸りながら往復しているのはそれが理由だった。

クロコダイルはもちろん、モリヤ、ドフラミンゴ、ミホーク、ハンコック、クマ、クロヒゲといった王下七武海はもちろん、原作やアニメなどででてきた海賊や億越えのルーキーたち。

そういったやばそうな奴らの目にはいらないようにひっそりと財宝狩りをしているのだ。

そんなところにオリ主なんてイレギュラーがでてこられた時には、それらの怪物たちがどんな行動をするのかわかったものではない。

とりあえず、この少年にあつて話を聞こう。どうするかはその時にきめよう。

そう考えたトウヤは船の進路をアラバスタへと向けた。

だが、彼は気付いていなかった、いや忘れていたのだ。彼自身も巨大なイレギュラーであることに……………。

3話

アラバスタに向かいながらのんびりと航行を始めてから三日目、トウヤは海軍に出会った！

BATTLE！

などというフラグは一切立たず、巨大な海軍の軍艦から出てきたのは親書を持った海軍中将・モモンガだった。

「俺の王下七武海入り？」

「ああ。世界政府直々の要請だ」

このモモンガとトウヤは実は知り合いだ。

半年ほどまえ、財宝の争奪戦をしていた海賊たちが海にでたあともしつこくおつてきたため、たまたま近海にきていたモモンガの軍艦にその海賊たちをバツティングさせてみたことがあったのだ。

さすがは海軍中将といったところで、モモンガは海賊たちを瞬殺した。

しかし、トウヤが海賊たちをぶつけてモモンガにいらん仕事を増やしてしまったのは厳然たる事実で……。モモンガはキレた。そりゃもう烈火のごとくキレた。

ちょうど半年ぶりに妻の顔をみに海軍本部へと帰っていたところだったらしく、それも合わさって燃えたぎる炎のように怒り狂ったのだ。

しかし、トウヤはモモンガの苛烈な剣撃をあっさり掴み取り、そのばで海にたたきこんでしまった。

しまった、と思ったトウヤは海中にいるモモンガを空間ごと掴み取り圧縮。それを軍艦に投げ入れた後、スタコラサッサと逃げ出したのだ。

以来、休暇をおえたモモンガはトウヤに会うたびに喧嘩をうつてきておりそのたびに軍艦にごと圧縮され、逃げられている。

いわゆる腐れ縁といった関係である。

「なんでまた、高々50万ベリーの賞金首程度を王下七武海に？それに、《海侠》《海賊女帝》《暴君》《クロコダイル》《モリア》《鷹の目》《ドフラミンゴ》の七人がすでにいて空席はないはずだが？」

「……………私だって納得していないさ。なんでこんなムカつく逃げ腰やろうを王下七武海に……………」

原作とは違い随分と口の悪いモモンガに苦笑しつつ、トウヤは圧縮保存しておいたカミュを元の大きさに戻しグラスに中身をついだ。

「飲むか？」

「いや、職務中だ、遠慮しておこう。」

モモンガの返事に肩をすくめながら、トウヤはカミュにクチをつ

ける。

「で？」

「まず王下七武海に誘われた理由だが、第一に海軍中将すら退け平然と逃走せしめているところから、実力は十分と思われたんだろう。懸賞金が少なかったことも少なからず起因している。やはり、政府との共同作業もある以上懸賞金が少ないに越したことはないしな。」

「ようするにお前との戦いが上の目にとまったと……。皮肉な話だ。お前との戦闘をめんどくさがっていたらもっと面倒な役職につかないか？とラブコールがきたか」

「へんな言い方はよせ、気持ちのわるい……………」

「入るとしたら俺の立ち位置は？八武海にでもするのか？」

「いや、今回は特別措置をとるらしい。王下七武海《裏》という立ち位置が与えられることになっている」

「なんだそれは？具体的な違いでもあるのか？」

「《裏》がついているだろう」

「……………」

二人は暫くだまりこくったあと、

「世界政府……ボケたのかな？」

「否定できんな……」

微妙に失礼なことをいいつつ、二人はため息をつくのだった。

…†…†……………†…†…

結局、この話は保留するということになった。

トウヤにとっても七武海は魅力的な条件が多数存在する役職ではあるのだが、世界政府に服従しなければいけないということと、上

納金（いいかたが悪いとモモンガに叱られた。）があることがネットとなりなかなか首を縦に振ることができないのだ。

とりあえず現在の進路はアラバスタなので、返答はクロコダイルから伝えて貰うことで保留をすることの同意をもらうことができた。

とにかく、今は七武海よりもあの《カウンター》である。

アイツが行おうとしていることによって、俺の行動は大幅な修正を行わなければならない。

今までのような不干渉を貫くのか、敵としてルフィの前に立ちふさがるのか、ルフィのサポートをしてやるべきか……………。

全てを決めるのは……………そこからだ。

4話

アラバスタについたトウヤはまず宿を探した。

何事をするにも拠点というものは必要である。

麦わらの一味が大分先になると予想されるため、長期滞在できる宿がベストだ。

原作を見るかぎりでも、ウィスキーピーク、リトルガーデン、ドラム島。

アラバスタにくるまでかなりの島に立ち寄り、それぞれの島で小説一つが書けそうな程の冒険をしている。

情報屋から買った情報を見るかぎり、リトルガーデンにはついて
いるらしいが、あいにくあの島に行く永久指針エターナルポースを持っていないため、
トウヤは直接麦わら海賊団に会いに行くことができないのだ。

つまり、麦わら海賊団に会うためにトウヤがとれる手段は、アラバスタでの待ち伏せ。

まあ、最近は財宝探しばかりやっていたから、たまの息抜きとしてこの期間をエンジョイするのも悪くないか……。そう思って
レインベースを訪問して、暫く滞在することにした矢先だった。

…
十…
十…
十…
十…
十…
十…
十…

レインベースにきて2日たった午後の昼下がり。トウヤはレインベースにあるとある喫茶店でブラックコーヒーに舌鼓をうっていた。

砂漠の国アラバスタでは水がないのがデフォルトなのだが、ここはやたらと水が豊富なのでトウヤはなかなか快適な生活をする事ができていた。

見飽きた財宝もいくらか換金したので、金には困っていない。

あとは麦わら海賊団がくるまでここでのんびりとするだけになっていた。そんなトウヤはいつになく気を抜いてしまっており、彼の接近にギリギリまで気付けなかったのだ。

そして……………。

「ミスター・イササギですね」

「人違いだ」

トウヤはそういつて喫茶店の席から立ち上がりさっさと出ていくとするが、いつの間にか周囲は漆黒のスーツを着た男たちが固めていた。

「初対面の相手に失礼な奴らだな。」

「こうでもしないと話を聞いていただけそうもなかったので……………」

忌々しそうに舌打ちをするトウヤに対して、はじめに話し掛けたきた男は悪びれた様子もなく返事を返し、トウヤに着いてくるように促す。

トウヤとしてはまわりにいるバカを蹴散らしてトンズラするといふ選択肢もあるのだが、間違いなくレインベースはでなければいけなくなるし、あの大物に目を付けられたら、流石に殺さずに退けられる自信がなかった。

そして、彼を倒してしまつたら、間違いなく世界政府に睨まれるだろうし、他の海賊たちは彼の代わりに俺を倒して名を上げようとしてくるはずだ。

そんなのはごめんこうむる。

「なんと呼べばいいのかな、壱の少年」

きかずともわかっているが、一応きいとかないと不自然になってしまったため、トウヤはそう尋ねた。

「Mr. 1。私のことはそうよんでください」

「コードネームみたいな名前だな」

こつそりと言葉に刺を混ぜつつトウヤはそう返事をかえし、前方に君臨するカジノを見つめた。

…十…十…十…十…十…十…十…十…

カジノ内部にあるオーナールーム。

トウヤはそこに招待され、ある男と対面していた。

顔を横断する横傷、偽手である左手のフック、葉巻を加えたいか
つい顔には人を怯ませる迫力と、他人を見下す冷たさが宿っていた。

王下七武海。元懸賞金8100万ベリ。

アラバスタの英雄にして実は内紛の首謀者

サー・クロコ

ダイルの登場だった。

5話

妙な威圧感を感じる室内でトウヤは平然とした表情で、ポケットから酒を取出しゴクゴクと飲み干した。

「飲むか？」

「……………」

そして、何時ものように話相手に酒をすすめてみるが、相手は無言でこれをながす。

「ふーん。さすがといったところか、王下七武海。この程度では会話の主導権は渡してはくれないか？」

「その程度で主導権を渡すのはよほどのバカかお人好しだけだろう」

「ちがいない」

面白そうに笑うトウヤに対して相手は眉一つ動かさずとしなかつた。

王下七武海にして、アラバスタの英雄。

サー・クロコダイルその人である。

「それで、世界政府すら実力を認め、権力を与えた大海賊の一人が、

このしがないトレジャーハンターに一体なんのようだ？」

「しがないトレジャーハンター？過小評価のしすぎじゃあねえのか。東の海の伝説と言われた《北斗の七宝》を集めた怪物が……………」

「《北斗の七宝》？なんだそれは。知らないぞ」

「……………」

トウヤはそうとぼけながらこの店のオーナーを名乗る美女が出てくれたお茶に口をつける。

酒飲み人気が高い《ミ・コノス社》製のブランデーティーを出すとはなかなかの気遣いである。

「ありがとう」

「大したことじゃないわ」

礼を言ったトウヤは無言のままこちらを見据えるクロコダイルを見つめ返した。

数分後。

いい加減に根負けしたトウヤは両手を上げてその事実を認めた。

「オーケー。わかったよサー・クロコダイル。残念ながら《七宝》を見つけだしたのは確かにこの俺だ。認めよう。だが、別に東の海の財宝じゃないぞ。二つ目はグランドライン、最後のーは西の海で見つけたしな」

「そうか」

ようやく交渉の席で笑みを浮かべたクロコダイルだが、その笑顔はちっとも友好的な印象を与えてはくれなかった。

どちらかといえば、借金の取り立てにきた大物ヤクザの恫喝に近いものが含まれている。

「それで、俺になんのようだ王下七武海」

「おまえに俺の計画の協力をしてもらいたい」

やはりそうか。

原作のことは空島までしか知らないトウヤだったが、アラバスタの動乱はその前なので何とか知識として保有していた。

正直協力する気はサラサラないトウヤは丁重にお断り申し上げたところだったのだが、そんなことをすれば間違いなくアラバスタをでなければならなくなる。命を狙われるだろうし………。

面倒な奴に絡まれちまったものだな。

トウヤは心底鬱陶しそうな表情を浮かべながら、タバコに火を点けた。

実はタバコとは別物の健康ハーブによって作られる薬煙なのだが、別にいまはなすことではないだろう。

「それで、その計画ってのはなんだ？」

「仲間になるなら教えてやる」

「……………」

さて、どう返答を返す？

どう答えてもろくなことには……………ん？まてよ……………。

「協力……………してもいい」

「テメエの立場がわかってんのか？」

まあそう言うだろうな。王下七武海がなんか企んでいるなんて知ったら、どう考えても協力しての生と反発しての死の二択しか無いわけだし。

だからほんの少しだけ交渉をさせてもらおう。ほんのちよつとの嘘を交えた……………。

「いや。おまえに協力することは俺にとっては決定事項だ。だが、

お前が計画を実現するための組織の戦力について詳しく知りたい」

「……………」

「自分が身を預ける組織だぞ。実働隊のナマの仕事を見て力を確かめたいと思うのは当然だろう」

「……………いいだろう」

最初から最後まで何企んでいるんだこいつ……………といつた視線をトウヤに向けるクロコダイルだったが、最後には許容範囲と思ったのだろう。あっさりとトウヤの申し出は受理された。

「ただし見張りは付けさせてもらう。ミス・オールサンデー」

クロコダイルがそう呼ぶと、先程の美女が現れトウヤの座るソファアの隣に立った。

「こいつをリトルガーデンにつれていけ。逃げるようなら殺してかまわん」

「私が？珍しいわね。Mr・1はどうしたの」

「Mr・1はMr・2を呼びに行かせている。いま動けるのはお前だけだ」

「……………わかったわ」

二人の会話を聞き流しながら、トウヤは計画を立てる。

リトルガーデンに行けるかどうかはかなりの賭けだったのだが、
なんとか行けるようになったか。渡りに船とはこのことだな。

さてさて、Mr. 3は排除するにしても麦わら海賊団とはどう接
していくか……………。

トウヤはやはり裏切る気満々なのだった。

…+…+……………+…+…

リトルガーデンに向かう航海はクロコダイルの高速艇を使わさせ
てもらった。

残念ながらトウヤの船では、ルフィ達がいる間に、リトルガーデンにはたどり着けそうも無かったからだ。

「よかつたの？自分の船を置いてきて」

高速艇を運転する美女　ニコ・ロビンにそう尋ねられて船の後部座席に横たわりながら寝ていたトウヤは、日除け代わりに顔に乗せていた帽子を少しだけ持ち上げニコ・ロビンの背中に言った。

「どちらにしろアラバスタには帰るんだ。組織の一人になったわけだし、帰りはこの船を使わせてもらえるんだろう」

「ええ……………」

「だったら何の問題もない」

そういつて再び眠りこけるトウヤにロビンは哀れみの目を向けた。

クロコダイルは組織に入って間もない部下が自分の船を持っていると、逃走防止のためにその船を叩きつぶす。

そして組織のMr.2という例外を除いては、すべての組織のメンバーにはクロコダイルの私有船を許可を出して使わせるのだ。

そうすることにより組織からの脱走はかなり減るし、もし私有船を使って逃げ出しても発信機が船のどこかに取り付けられているため、すぐにどこにいるのか特定できるのだ。

組織　バロックワークスの鉄の規律はこのシステムによって守

られているといっても過言ではない。

帰った頃にはもう船は無くなっているでしょうね。

ニコ・ロビンの視線を知ってか知らずか、トウヤは香気にいびきをかいていた。

…
十…
十…
……………
十…
十…

数時間後

「ついたわよ」

「早いな……………さすが高速艇」

トウヤとロビンはリトルガーデンに到着していた。

上陸と同時に襲い掛かってきた虎が無数に生えた手によって関節技をきめられたのはご愛敬だ。

「今のは……………能力？」

「ええ。ハナハナの実の能力。自分の体の一部を好きなところに咲かせることができるの」

「……………」

悪魔の実つてのはなんでもありだな。

自分の超能力のことは棚上げしながら、トウヤはリトルガーデンへと足を踏み入れた。

その時！

「ダガネエ〜！」

何かが森の奥から吹っ飛んできて地面に突き刺さった。

「ああ？」

トウヤが振り向くと、そこには頭から地面に埋まった人間という
奇怪なオブジェができていた。

「Mr・3!?まさか負けたの!！」

ああ。こいつがMr・3か………………。こいつが吹っ飛んでき
たということは……………。

「なんだおまえら!!!3頭の仲間か!！」

そいつは激しい怒りを込めた声で怒鳴り付けてきた。

漆黒の髪に意志の強そうなひとみ、目のしたの傷が海賊らしさを
表す唯一の証。

主人公、モンキー・D・ルフィの登場だ。

だが……………。

「エリアクロース
空間握り」

「な!」

「あなた何を!」

瞬間、ニコ・ロビンとモンキー・D・ルフィはトウヤの目の前から姿を消した。

トウヤはいつの間にか握り締めていた両の手のガラス玉のうち、一つをポケットに、もう一つを握り締めたまま森の中に分け入っていく。

「対応決定。 とりあえずカウンター以外は圧縮停止してもらおう」

さあ、海賊狩りのお時間だ。

凶悪に笑いながらトウヤは確かにそう呟いた。

6話

しばらく森を歩いていくと二人の巨人と麦わらの一味の面々が見えてきた。

リアルなサンジを始めてみたが、なんであんな不思議な眉毛してるんだらう？

内心で考えていることを完璧におし殺して、トウヤはタバコに火を点けながら、一味の前に姿を表した。

「誰だテメエ!？」

真っ先に気付いたサンジが警戒心たつぷりにガンを飛ばしてくるが、トウヤは平然と無視してタバコを燻らせる。

「誰ってきかれてもな……。通りすがりのトレジャーハンターとしか答えようが無いわけだが」

瞬間、トウヤは手にもっていたガラス玉を放り出し一味の前に転がす。

ゾロが刀に手を乗せ、ウソップがパチンコをかまえ、サンジが足に力をこめ、ナミが棒を手に取り、ビビがイヤリングに手を伸ばす。

そして……………。

アルビダが棍棒に手をかけ、一方通行が驚愕に目を見開いた。

こいつ………意外と冷静だな。

もしかしたら、《とある》の原作から来たのかも思ったが（見た目が異常なほど似ているし）その可能性は無くなった。

あいつにしては冷静すぎる。

トウヤはそう判断しながら、全員の注意がガラス玉にむくように一言つぶやいた。

「おまえたちの船長だ。なかなか可愛くなっただろ？」

「な！」

「……ルフィ（さん）！」「……」

一瞬、全員の視線がトウヤから外れる。そのスキにトウヤは巨人二人に手のひらを向けた。

「エアークローズ
空間握り！」

今までその巨体をもって存在をアピールしていた二人が一瞬にして消失する。

「え！？」

「能力者か！」

気付くのが遅い。あと超能力者だ。

内心で呟きながら、トウヤはすでに次の布石をうち終えていた。

真っ白な球体をポシエットから取出し宙に投げつけ、サングラスをかけたのだ。

次の瞬間、純白の閃光が辺りを照らし、一味の目を潰した。

そして、光が納まったときには……………。

「……………つく！」

「意外とあっけなかったな」

一方通行以外の一味は全て、トウヤの手の中に納まってしまっていた。

「バカな……………原作ではこんなやつ！」

「ああ。それだ。それについて話がある」

一方通行　　アクセルが呟いた言葉を耳ざとく聞きつけ、トウヤは凶悪に笑うのだった。

さて、技の解説はここまでにして、話を元に戻そう。

トウヤは一味全員が封じられた圧縮空間をてのひらで弄びながらアクセルとの交渉の席に着いた。

アクセルはトウヤのスキを伺い一味を奪還しようとしているようだが、仮にもトウヤは傭兵の経験もあるこついったことのプロである。

スキなど見せるはずもなかった。

「さて、面倒なことは嫌いなんで……単刀直入にきこう。お前はどうかってこの世界に入ってきた？なあ、オリ主くん」

「……………!!」

驚愕に目を見開くアクセルを見てトウヤの予想は確信に変わった。

こいつは別の世界からの人間。それもワンピースの原作がある世界からきた人間だ。

「神様のミスでトラックに撥ねられて……生き返るかわりにこの世界に転生させてもらいました。そう……あなたは？」

「俺はダチにトレジャーハントができるところに行きたいと言ったら送られてな。いろいろと荒稼ぎをさせてもらっているよ。さて、

次が俺の聞きたいことだ。お前は这个世界で何をするつもりだ」

トウヤの目が刃物のように鋭くなり、濃密な殺気が全身からあふれ出る。

アクセルの顔からは一気に血の気が引き、体はガタガタと震え始めた。

トウヤの殺気は特別強いらしくどんな大物でも初見でくれば怯んでしまう。

ましてや相手は転生した一般人。どれだけでたらしめな力を持っていても、経験して慣れることでしか克服する事ができない殺気を当てられては身動きをすることも儘ならぬだろう。

ダラダラと冷や汗を流しているアクセルだが、やがて意を決したように口を開いた。

「俺は頂上戦争の結果を変えるためにここに来ました」

「……………頂上戦争？」

知らない単語をきき首を傾げるトウヤに、アクセル一瞬呆然としたあと、少し慌てたように言葉を続けた。

「え、ちょ……………知らないんですか！頂上戦争！？」

「知らんな。なんだそれは？」

「海軍本部で勃発した、海軍と白ひげ海賊団の戦争のことですよ！」

「……………はあ！？」

今度はトウヤが驚く番だった。

海軍と白ひげが戦争？なんだってそんなことに！？現段階で白ひげを敵に回すなんて、悪いことしかないだろうが！

啞然としたトウヤにアクセルは頂上戦争の流れを懇切丁寧に説明してくれた。

その話を聞き進めていくごとに、トウヤの額の皺は深くなり、最後には頭痛がしてきたのか顔を押しさえてため息をついた。

「まったく……………そんなことになるぐらいだったら火拳を逃がした方がまだ安くつくだろうが。海軍は全員ボンクラなのか？」

頂上戦争の詳細を聞き終えたトウヤの結論はそれだった。

呻くトウヤを心配したのか、アクセルは大丈夫ですか？とこちらに気を遣ってくれた。

いいやつである。オリジナルとは似てもつかない。

「了解した。お前の目標に協力しよう」

「本当ですか!？」

「ああ。平和にトレジャーハントをするためにも海が荒れてもらっては困る」

かなり切実な表情でそういうトウヤにアクセルは首を傾げた。

「ああ?どうした小僧」

「いえ。うちの一味を瞬殺したトウヤさんなら前半の海にいる海賊程度ならあっさり蹴散らせるはずでは?」

「喧嘩はしないに越したことはない。それに俺が狙っているのは遺物だからな。下手に海賊を倒しまくって、世界政府に睨まれたくないんだよ」

トウヤがこの世界に来て最初に調べたのは、世界政府が秘密にしている歴史がないかどうかである。

これを知っていれば、余計なもめ事は随分と回避できるのだが、残念なことに調べ終わったときにはすでに、トウヤはその歴史が刻まれた財宝を手に入れてしまっていた。

もちろん、即座に海溝の上で捨てはしたのだが、知ってしまった

ことにかわりはないし、最終的にはワンピースをいただくのが目標なのでいずれにせよこの問題にはぶちあたってしまう。

だが、現段階で世界政府を敵に回すつもりは毛頭ないトウヤはひっそりと前半の海でトレジャーハントをしながら、対策を講じようとしていたのだ。

それなのに白ひげが死に新たな勢力が台頭してこられたら、この計画に大きな支障をきたす。

計画を変更するか。

「とにかく、海が荒れるのは困るからな。こっちは別の方向から頂上戦争にアプローチしてみる」

「よろしくお願いします。あと……うちの一味なんですけど……」

「ああ、心配するな。二時間もしたら元に戻る。ああ、あとそれが

「う

「はい？」

「ニコ・ロベンは俺の配下に加えるが、文句は言つなよ」

「え………ちよー」

「アクセルが何か言う前に、トウヤは空間をつかみ、強引に引つ張った。」

瞬間、空間自体が大きく歪み、トウヤの目の前に斜めになった浜辺の風景が出現する。

「ではアクセル。幸運を！」

タバコを燻らせ、言いたいことだけをのたまいながら、トウヤは浜辺の空間に入り込み、手を離す。

バンッ！

轟音と共に凄まじい衝撃波を撒き散らしながら空間が元にもどり、トウヤの姿はアクセルの前から消えてしまったのだった。

7話

「うっ……………うっ。」

ニコ・ロビンはうめき声を上げながら、目を覚ます。

すぐに視界に入ってきたのはみしらぬ天井。

「一体……………なにが？」

そこでロビンは思い出す。自分に向けて何のためらいもなく手を向けてきた、あの新入りの顔を。

「あの人！」

ロビンはあわてて飛び起き、自分が寝ていた部屋を飛び出す。

トウヤの目的が何なのかはわからないが、万が一クロコダイルを裏切るつもりなんだとしたら、早く説得して諦めさせないといけない。

どんな手を使う気なのかはしらないが、クロコダイルから逃げられるわけがないのだから！

ロビンはいくつもの扉をあけ、甲板に飛び出した。そして……………

…。

「え……………」

信じられない光景に愕然とした。

それもそのはず。ロビンが飛び出した甲板はアラバスタに置いてきたはずの、トウヤの船の甲板だったからだ。

…
十…
十……………
十…
十…

モーター音を出して掃除に励むドラム缶型の生活補助ロボットを

見送りながら、トウヤは甲板に設置したベンチの上に寝転がりながら、今後の計画を立てていた。

頂上戦争の話を聞いた以上、今までのようなのんびりとした策はとれない。

だとするなら可及的速やかに戦力を集め、頂上戦争に介入。最悪の結末である《黒ひげチート化エンド》はなんとしてでも回避しないといけない。

アクセルはその圧倒的チート能力で戦局をひっくり返し、結末を変えようとしているようだが、それだけでは確実性に欠ける。

トウヤの方でも介入をしたほうが白ひげの生存率は上がるだろう。

「年寄りの冷や水って言葉を覚えろご老体。おかげでかなり面倒なことになった……………」

タバコを燻らせながら頭をガリガリとかくトウヤはとりあえずはじめの布石を打つために電伝虫を手にとろうとした。

その時、

バン！

凄い音をたてて開いた甲板へ出る扉を見て、トウヤはそちらに注意を向けた。

そこには啞然とした表情で立っているニコ・ロビンがいた。

「やっと目を覚ましたか？ 気絶するような技は使っていないんだがな」

トウヤはそういいながら、顔に苦笑を張りつけニコ・ロビンに近づいていく。

ニコ・ロビン。懸賞金7900万ベリー。悪魔の子。

オハラ of 惨劇についてはトウヤが《ヤバイ歴史》を調べるときに真っ先にぶち当たった事件であり、その事件からたどったロビンの来歴もある程度予測はついていた。

こいつを仲間にするれば、並みの海賊程度なら、間違いなく世界政府に消される。だが、トウヤにとってはそれに目をつぶってでも、情勢に詳しく、世界の裏側について深く知っているロビンの知識は捨てがたいものだった。

おまけに彼女は考古学者だ。トレジャーハンターとは切っても切れない関係にある。

「あなた……………一体どういつつもり？それにこの船……………」

「それに関してはまだ言えないな。話せるようになるのは、お前が俺が出す条件を飲んでくれた時だけだ」

「条件？」

「ああ……………」

トウヤはそういつと、口元に若干の笑みを浮かべながらタバコの煙を吐き出す。

その紫煙はポケットから取り出された灰色の玉に吸い取られ姿を消す。

「あなた……………能力者だったの？」

「秘密だ。仲間にもなっていない奴に素性を話すほど考えなしではないさ」

トウヤはそれだけいつと、さっさと立ち上がり掃除をしていたロボット達のうちの一体を呼び寄せ、ロビンが飛び出してきた扉へと入っていく。

「ま、交渉はもっと落ち着いてからしよう。とりあえずもう昼だから、ランチにしようか。ニコ・ロビン」

…十…十…十…十…十…

トウヤが用意した昼食は美味しくもなければ不味くもない微妙な味だった。

食卓にあるのも、スープに焼いたパンというシンプルさ。

ぜいたくは言わないけどもう少し工夫を凝らしてもいいんじゃないかとロビンは思う。

「これ、誰が作ったの？」

「なんだ？うまくなかったか」

「いや、まあ……………不味くはなかったけど」

複雑な表情をするロビンに不思議そうな顔を向けながらトウヤは黙々と料理を口に運んだ。

ロビンもしかたなく料理を口に運び、無言の食卓というかなり居心地の悪い環境が場を支配する。

トウヤとしてはいつも自分がたべているうまい料理でもご馳走して、ロビンの警戒心を緩めようとしていたのだが、あてが外れてしまったようだ。

まあ、実際に条件を飲ませるのは交渉でしかできないわけだし、別にきにはしないがな。

昼食がおわりタバコをすいはじめるトウヤをみてロビンは眉をかめた。

「なんだ。タバコが嫌いな人種か？」

「そうではないけど、食事中の人がいるそばで平然とタバコを吸う

感性が理解できないわ」

意外と辛辣な言葉を平然と言ってくるロビンに苦笑を浮かべながらトウヤは再び灰色の玉を取出し煙を吸収させる。

それで文句はなくなったのか、ロビンは食事を再開した。

数分後、食事を終えたロビンとタバコを吸い終えたトウヤは真剣な表情で向かい合っていた。

「さて、始めに言っておこうニコ・ロビン。俺はクロコダイルを裏切ったわけではない」

「じゃあ、このままアラバスタに帰ってくれるのかしら？」

「いいや。俺ははじめからクロコダイルの味方だったつもりはない。だから裏切ることなんてできないだろう」

トウヤのセリフにロビンは額を押さえた。

クロコダイルと交渉をしていた時は嘘八百を並びたてていたようだ。

王下七武海相手にいい度胸である。

「アナタ……………絶対殺されるわよ」

「ああ。だろうな。だが、そうならなかったらお前はどっする」

「どうもしないわ。そんなことはありえないもの」

「じゃあ、もし俺が生き延びたら俺の仲間になってくれるか？」

「え……………」

ロビンは少しの間驚きで固まったあと、発作にみまわれたかのよう
うに笑いだした。

「……………ふふふふ。おもしろいことを言うわね」

「そんな笑えることを言った覚えはないんだが？」

「私が世界政府から何て呼ばれているか知っているの？悪魔の子よ。
王下七武海ぐらいの権力を持たないかぎり私を受けとめることな
んて誰にもできないわ」

「つまり王下七武海になったら仲間になってくれるんだな」

「できるわけないでしょう。そんなこと」

「いいから答える」

「……………」

ロビンは視線に多分な呆れを含ませながら諦めたかのように両手
を上げた。

「わかったわ。あなたがクロコダイルに殺されるまでに王下七武海になれたら仲間になってあげる。そんなことは万が一にもないでしょうけど」

「言ったな」

トウヤは不敵に笑うと同時に、キッチンで片付けをしていた、ドラム缶型のロボットを呼び出し電伝虫をとりにかせる。

「ひとつ聞きたいことがあるわ」

「なんだ」

電伝虫がくるまでまた暇になってしまった二人は雑談に興じることにしたのか、幾分か緊張を緩和させながら話を続ける。

「どうして私を仲間になろうと思ったの？」

「お前が考古学者で俺がトレジャーハンターだからだ、ニコ・ロビン」

「……………」

「オハラのこととは残念だった。いまでもあるなら、オレも色々聞きたいことがあったんだか……………」

「……………!!あなた…………それをどこで!?!」

「パッと調べれば誰だってこの事実にはぶつかさるさ。この世界の奴ら

「がバカなだけだ」

平然と世界の闇について暴露するトウヤにロビンは愕然とした。

この人は命が惜しくないのかと。

しかし、トウヤにとっては、本当にこの世界の暗部なんてものは大したことはない二級線にしか感じられなかった。

秘密が知られれば即抹殺などという原始的方法をとるこの世界と比べて、トウヤがいた世界では陰謀の方法も清廉されており、都合なことを知られた相手を、いつの間にか仲間につけていることなど日常茶飯事。

抹殺するにしてもオハラのようなバレバレでスケスケな隠ぺい工作等はされずに、本当の意味で闇から闇へと葬って行くのである。

傭兵をしていたトウヤは日々そういつた泥沼の暗部につかりながら生き延びていたため、交渉のスキルはこの世界の基準で考えると異常なまでに高い。

正直世界政府の陰謀なんてものがお遊びにしか感じられない程に……。

ロビンはその才能の一端をこの時に見ることになる。

…
…
…
…
…
…

数分後、電伝虫に乗せたドラム缶が戻ってきてトウヤに電伝虫を渡した。

「ありがとう」

トウヤの礼に、ドラム缶はガタガタと音を鳴らしながら再びキツチンに消えた。

「さっきから思っていたのだけれど、あのドラム缶はなに？」

「機密事項だ」

一応あれも部外秘なので、トウヤはそう答えた。

サイボーグがいるのだからロボットぐらいいるのかも知れないが、トウヤはその存在自体を知らないのでそう答えるしかないのだ。

「プルプルプル……………」

低い声で発信音を口で奏でる電伝虫は初めてみたトウヤに大爆笑を提供してくれたが、今は関係ないので割愛。

しばらくするとトウヤが望み、ロビンが予想していなかった人物と通信が繋がった。

『この詐欺師が。どの面下げて電話をかけてきやがった』

「そう目くじらをたてるなよ先輩。あの時は余計な恨みを買いたくなかったから話をあわせてあげたんだぜ」

『その目論みは見事に失敗しているがな後輩。今すぐにも貴様を追い詰めて殺してやりたいよ』

「やりたいのなら世界政府の許可をとってからにするべきだな。もつとも許可なんて物は下りないだろうが」

『……………』

電伝虫の向こうから怒気と殺気を送り届けてくる声に、ロビンは

驚愕の声を出した。

「まさか……………クロコダイルに電話をかけているの!？」

「正解。さて先輩。この呼び方が通じているということはあなたも大体の事情は察しているはずだ。そしてアナタの陰謀の成就も、七武海の席も俺の手によって握られている」

『……………。何が望みだ』

「俺に裏切られたことは忘れる。俺はあんたに招待なんてされなかったし、仲間に誘われもしなかった。おわかり？」

『言われなくても、こんな忌々しい記憶は即座に消すつもりだ』

「あともう一つ、アンタの陰謀が終わったあと、アンタの部下を貰い受けたい」

『……………誰だ』

「ニコ・ロビンだよ。トレジャーハンターとして考古学者の彼女が仲間に入ってくれると鬼に金棒だからな」

『ふん。いいだろう。どちらにせよ、ポーネグリフの解読が済んじまえばそいつはようなしだ。好きにしろ』

「あと、モモンガ中将に連絡をしておいてくれ。裏・王下七武海の仕事お受けいたします。これからマリンスフォードに向かいます。と…

……………」

『先輩をあんまりこき使ってんじゃないよ』

「先輩しか使えないから頼んでんだよ」

トウヤはそれだけいうと、通信を切りクロコダイルとの舌戦を終えた。

そして啞然としたロビンの肩を叩き面白そうに笑う。

「さて、ニコ・ロビン。仲間になってくれるんだよな」

ロビンに断るといふ選択肢は存在しなかった。

8話(前書き)

五老星との交渉編スタート!

8話

「裏・王下七武海か……………考えたのう」

「近頃は億越えのルーキーが多いからな。世界政府側も人員強化をしないとやっていけないわい」

「しかし、宜しいのかな？王下七武海が七人なのはそれ以上増やすと手綱が取れなくなるからそうなったのだぞ」

「ふん。何を今さら手綱なんぞ始めから取れてはいない」

「しかし……………しかし今回の王下七武海に選定されたものは臆病者じゃ。何かしらの能力を持っているらしいが、それを全て逃走のために使っておると言うのが、モモンガの言じゃ」

「なるほどなるほど。ならば、はじめのうちに脅しておけば……………」

……………」

「クマに次ぐ我らの忠実な僕が出来上がるだろう」

世界政府最高権力者。《五老星》はそういつてほくそ笑み、CP9に司令を下した。

だが、彼らはまだ気付いていなかったのだ。彼らが臆病なスズメだと思っていたものが、爪を隠した鷹だったということに……………」

……。

…
…
…
…
…
…
…
…
…
…

海軍本部。マリソフォード。

モモンガ中将与無事に合流したトウヤは自分の船に乗ってここに
やってきたのだ。

「とつとつついたな。マリソフォード」

「本当にあなたが言っていた計画を実行するの？」

船の到着と同時に整然と並び歓迎の意を示す海兵に口笛をふくトウヤに後ろを歩いていったロビンはそう尋ねた。

「計画つてのは実行するために作られるんだ」

「だとするならば、ここマリンフォードが騒ぎにならないような計画であることを切にいのるよ」

ロビンの隣を歩きながらそういうモモンガにトウヤは肩をすくめることで返事を返す。

「安心しろ、モモンガ。慌てふためくのは五老星だけだ」

「……………さらに不安が増したぞ」

顔を引きつらせてそういうモモンガに海軍に恨みがあるロビンですら大きく頷いた。

その時！

「サーブルス
砂嵐」

凄まじい砂嵐がトウヤに襲い掛かった。

「おっ」

トウヤはその攻撃に少しだけ眉をあげ、右手で砂嵐を掴み取り圧縮保存した。

「再開しよつぱなから宣戦布告か？血の気が多い先輩」

「口のきき方に気を付けろよ詐欺師が。ここでは中将以上の立会人がいれば王下七武海同士の模擬戦も許されているんだぞ。その時おれがついつつかりとお前を殺してしまうかも知れないぞ」

葉巻を燻らせやってきたのはサー・クロコダイル。今回の、トウヤの王下七武海（裏）入りの式典には他の王下七武海も呼ばれている。《裏》が付いているから内輪だけの小さな式になる予定だが……。

いまのところマリンスフォードに到着しているのは、《海侠のジンベエ》《暴君クマ》《ドンキホーテ・ドフラミンゴ》。

そして、このサー・クロコダイルのみだ。

他の面々は忙しいだの、興がのらんだの、興味がないだのといって海軍の召集をはねつけたようだ。

さすがは曲者ぞろいの王下七武海。ここに来た連中もどうせろくな理由で集まっていけないな。

トウヤは不敵に笑いながらタバコに火をつけて、煙を吐き出す。

「ま、先輩がおこるのは無理もないだろうが、今日は俺のめでたい日だ。あんまり物騒なことはしないでくれ」

「ちっ」

クロコダイルはしたうちをみると、そのまま去っていった。

ロビンに目を向けなかったのは、クロコダイルが彼女を配下に加えたことを世界政府にかくしているからだ。

彼の目的が目的なだけに当然といえる処置だろう。ロビンもそのへんはわかっているのか、トウヤが襲われた時以外は一切クロコダイルと視線を合わせようとしなかった。

「クロコダイルと何かあったのか」

「アイツの愛人を寝取ってしまったな」

「嘘はばれないようにつけ」

「おいおいモモンガ。始めに言っておくぞ」

トウヤはそっぴいながら、タバコを燻らせ、煙を五老星が滞在している海軍本部の方向へ吐き出す。

「俺がばれないウソをつくのは敵にだけだ」

トウヤが気合いを入れるように、ギョッギョッと手をにぎりしめる。その様はまるで、凶悪な肉食獣が獲物を咀嚼しているように見えた。

9話

『式典の前には、王下七武海になるにあたって与えられる権利と、政府に支払う対価の説明がされる。契約内容のご確認というわけだ』

モモンガがしてくれた説明を思い出しながらトウヤは苦笑を浮かべた。

「どこの金融機関だ」

まあ、そのおかげで本来声すら聞けない世界政府の最高権力者にあえるわけだが……………。

トウヤが現在いるのはマリンフォード・七武海用の宿泊施設である。

さすがは王下七武海と言つべきかやたらと豪華な部屋で冷暖房完備のうえ、プチ冷蔵庫には各海の高級酒が収められていた。

手元には四つのガラス玉。その中身をみたロビンは思わず顔を引きつらせた。

「……………バレたら殺されるわよ」

「バレればだ」

言外にバレないと言い切りながら、トウヤはグラスのブランデーを煽る。

ロビンはそんなトウヤを見てため息をついたあと、シャワーを浴びにバスルームに入った。

一時間後、バスローブだけを纏ったロビンが姿を表したのだが、トウヤは特に気にすることもなく、広い部屋の中で変わった格闘術の練習をしていた。

「少しは反応してくれないと女としての自信をなくすわ」

「反応してほしいなら俺をおまえに惚れさせることだな。異性に対する愛情をもてない女に襲い掛かるほど節操なしじゃない」

トウヤはそれだけいうと汗で濡れた上着をその場で脱ぎ捨てバスルームに向かった。

その時のトウヤの体を見て、ロビンは目を見開いた。

体中が傷痕だらけだったのだ。

海賊にもこういった体の人はいるにはいるのだが、トウヤに関してはまさしく、桁がちがうと言えばしっくりくるだろうか。

上半身全体に余すことなく、銃痕、斬痕、打痕、火傷 e t c ……
…が刻まれており。無事な部分が見当たらない。

「どづしたの……………それ」

「ん？ああこれか。まあ、いろいろとな」

あいまいな笑みを浮かべて、すげなく返答を拒絶された。

ロビンはそれに肩をすくめ布団に入りねむりについた。

…
…
…
…
…
…
…
…

翌日。

マリンフォード海軍本部は異常なほどの狂騒に包まれていた。

マリンフォードに滞在していた五老星の五人のうち、四人もが行

方を眩ませたのだ。

「マリンフォード内でこんなことが起きるとは……………一体何がどうなっている!？」

怒りのあまり執務机を殴り付けるセンゴク元帥の覇気に、五老星失踪の報告をした海兵は気絶してしまった。

しかし、いくらセンゴクが怒り狂ったところで五老星が見つかるわけもなく時間だけがただむなしく過ぎていくのだった。

一方そのころ唯一失踪しなかった五老星は泰然自若といった面持ちでトウヤとの会談へとむかっていた。

ひどく小柄な老人で世界政府最高権力者の雰囲気など微塵も感じさせないほど威厳のない老人だったが、実は世界政府の《裏》戦力の統括をしており、暴力をもってここまで押し上げてきた悪鬼である。

「ふん。五老星の失踪……………いや、誘拐かの?それを許してしまつとは近頃の海軍は随分とたるんでおるようじゃ」

「他の五老星の帰還を待たれないのですか」

漆黒のスーツに身を包んだ美女がそういつてメガネをクイツとあげる。

CP9の紅一点。カリファである。

今回の彼女の任務は交渉の席にてトウヤの不意をうち、圧倒的な力を見せつけ世界政府に逆らおうとする精神を（トウヤにあるとは思っていないが念のため）完膚なきまでにへし折ってやることである。

一度はロブ・ルツチにやらせようという話もあったのだが、彼らは今は大切な任務に従事しているためてがはなせない。

そこで、たまたま潜入先から休暇をもらい報告にきていたカリファに白羽の矢が立ったのだ。

「残念ながらそれはできんなカリファ。相手は懸賞金五十万程度の小物トレジャーハンターじゃ。宝物を嗅ぎつける嗅覚はぴかーじやろつし、海軍中将から何度も逃げおおせる実力も持っているようじやが、所詮は小物。そんな奴を相手にわしら五老星が弱味を見せる訳にはいかないんじやよ。」

そして、五老星は扉をくぐり豪華な会談室へと足を踏み入れた。

…十…十…十…十…十…十…

先に会談室へと通されたトウヤはいつまでたっても五老星がやって来ないのを見て、自分の作戦が失敗したのではないかと少し不安になっていた。

これで日にちを改める等と言われてしまえば、これからの交渉がかなり難しくなるのだが……………。

その時だ、秘書らしき美女をつれた五老星の一人が開け放たれた扉から会談室へ入ってきた。

トウヤは内心安堵の息をつきつつ、それを表情にはおくびにも出さずに五老星を迎え入れた。

「お初にお目にかかります。イササギ・トウヤです五老星どの。この度は私のような若輩を《裏》王下七武海へと推薦していただきまことにありがとうございます」

五老星は他の王下七武海では見られなかった、トウヤの丁寧な仕草に驚きながらも表情は一切変えずにトウヤのむかいがわに座った。

「誰が勝手に口を開いていいといった若造」

「お言葉を返すようですが、言葉は人類が生み出したもつとも偉大なツールにございます。このような席だからこそ必要不可欠。ですので私はこの席では口をつぐむつもりはございませんよ」

五老星は内心唸り声をあげながら、トウヤの対応に及第点をつけた。他の王下七武海の連中はジンベエやクロコダイル以外はまともな交渉すらせずに自分の要望を叩きつけてくるだけだったがこの男は違う、と。

「こちらときちんと対話をする気があるのだ、と。」

そして、それと共に警戒心も跳ね上がった。

どう考えても交渉ごとでは一筋縄ではいかないタイプの男だ。おそらくこのまま言葉を交わし続けるとこちらも幾つかの条件を飲まされる可能性がある。

早めに心をへし折っておくか。

五老星は扉がしまっているのを確認するとトウヤにばれないようにカリファに指示をだした。

「ふむ……………若造。一つだけ忠告だ」

「はい？」

「ずこのるな」

瞬間、《剗》で加速したカリファが指銃を解き放ちトウヤの右肩を貫こうとした。

しかし！

「五老星……………もうしわけありませんが……………」

一瞬でトウヤの両手は蛇のように俊敏に動き、左手で指を、右手でカリファの首を捕らえて握り締めていた。

「な！」

「この程度で私をどうにかしようだなんて、片腹痛いですよ」

トウヤは元の世界ではたった六人しかたどり着くことができなかつた《クラス5》。総合的戦闘力ならば白ひげの《グラグラの実》の能力と並び立つほどの最高位超能力者の一人だった。

その頃は傭兵をしていたため実戦経験も豊富。暗部にも深く関わっていたため原作でCP9がしていた任務よりもえげつないことをしたこともある。

何より、トウヤはカリファより五歳ほど年上だ。（見た目による大雑把な判定だが年下ということはないだろう）

つまり、その年数の分だけカリファよりも、場数と経験を踏んできたことになる。

現状でカリファがトウヤに勝てる要素は何一つとして存在しないのだ。

「さて、五老星殿。小細工はなしにしよう。我々はここに話し合いに来たはずだ」

不敵に笑いタバコをふかし始めたトウヤに五老星は齒軋りをし、カリファは自分が軽くあしらわれたことに愕然としていた。

…ナ…ナ………………ナ…ナ…

夜。自室でブランデーを飲んでいるトウヤをロビンは信じられないような物を見る目で見ていた。

「一体……………こんなことどうやって認めさせたの。」

そこには一枚の契約書。

契約書には五老星直筆のサインと世界政府公認の印鑑。

内容は『ポーネグリフの解読権。この権利をイササギ・トウヤとその傘下の人間に授与する』

オハラが抹殺された原因と同じほど、ヤバイ歴史が刻まれたポーネグリフの解読をする許可を、この男はたった一日でもぎ取ってきたのだ。

すべての考古学者の悲願を……………。

「種明かししてほしいか」

「あたりまえじゃない!」

ロビンはの叫びを耳を塞ぐことで回避しつつ、トウヤはブランデーのグラスを机に置いた。

「まあ、無条件で貰えた訳じゃない。解読した内容は逐一世界政府に報告しなくちゃならないし、その資料を手元に残すことも許されなかった」

「それじゃ……………」

「まあ、手元にはこつそりと残すつもりだが」

「……………」

世界政府との契約を破ると平然と言つてのけるトウヤにロビンは戦慄を覚えた。なんてことはなく、はいはいと言つて軽く流した。

「なんだもう少し驚かないのか？」

「そんなことはどうでもいいの。あなたがまともに約束を守つたことなんて数えるくらいしかないんだから。そんなことより、条件つきとはいえ、こんな無茶苦茶な契約、締結するのはかなり渋つたでしょうに」

「相手が普通の状態だつたらな」

「どづいつこと」

トウヤはタバコに火をつけ不敵に笑う。

「俺はこの交渉を円滑に進めるために一つの布石を打ち、一つの戦闘をした。」

布石の方は《五老星四人の拉致》。これは昨日俺が持っているのを見ていただろう」

「ええ。でもあなた空間圧縮は制限時間があつて十二時間が限界とか言っていなかった？」

「ああ。だから圧縮した空間は常に持ち歩いている。効力が切れそうになったら能力をけけなおして延長しているんだ」

どつりで海兵が草の根搔き分けて探しても見つからないわけである。まさか、五老星が持ち運び便利なサイズに縮んで、とある男のポシエットに入っているなど誰も考えはしないだろう。

「五老星が五人いる理由は五人が意見を出しあつて最前の結論をもさくするためだ。

それが突然四人もいなくなって1人で結論を出さなくてはいけなくなつたときはどうする。

いつも五人で考えていたぶん、多少言動が不用意で考えなしになるのは自明の理だろう」

「戦闘は？」

「CP9の一人と一戦交えた」

「さらつとんでもないことを言うわね。都市伝説の類かと思つていたのだけれど……………」

「実在するんだから仕方ないだろう。でだ、CP9は世界政府が握っている戦力（軍以外）では最高個人戦力を持つ奴だろう？そんな奴に俺が圧勝すれば、老獪な五老星といえ怖気づく。

そこで、及び腰になつた五老星を脅迫と多少の利益で吊つて終わる。この契約書が作られたと」

まあ、カリファが思った以上に弱かつたためこの戦闘の効果は、

トウヤが思った以上の結果を出したのだが、それは彼女の尊厳のためにも言わないでおこうと、トウヤは固く決意していた。彼は意外とフェミニストなのだ。

「でも、よく五老星がそれなりの戦力を連れてくると解ったわね」

「ああいった権力者は示威行為が大好きだからな。初対面の相手には圧倒的優位性を見せ付けてやりたいんだよ。

王下七武海相手じゃそれはできなかつただろうし、臆病者ともつぱらの噂の俺には今までの分も含めてやってくるだろうと予測はしていた」

トウヤの話聞き終わったロビンの脳裏に、トウヤの手のひらで踊り狂っている五老星が浮かびあがってきてしまい、思わず顔が引きつってしまったのは内緒である。

…十…十…十…十…十…十…

深夜。マリソフオード。

闇に蠢く一つの影が、ある部屋の前に立っていた海軍中将二人をかき消した。

その両手には手のひら大のガラス玉。

そう。影の正体は主人公イササギ・トウヤである。

昨日の五老星拉致も実はこうやって行ったのだ。

トウヤの能力によって空間ごと圧縮された人間は、空間ごと時間を止められるので、圧縮されている間は意識がない。

完璧な不意打ちを食らってしまうと、攻撃を受けたことにすら気付かず、いつの間にか時間が経っているという摩訶不思議な状態が形成されるわけだ。

「さてさて、今日交渉した人を拉致って、違う奴を外に出すか」

トウヤがこんな面倒なことをしてまで五老星を入れ替えるのは訳がある。

実はトウヤ、あと三つほど五老星に条件を飲ませる予定なのだ。

そしてトウヤは五老星の一人にこの四つの条件を飲ませるのではなく、五老星をローテーションさせて一人につき一個ずつ条件を飲ませていく腹積りなのだ。

五老星は『五人寄れば文殊の知恵』の策略家達である。

しかし、五老星一人の結論が五老星全体の結論になるのもまた事実。

トウヤはそれを利用するのだ。

トウヤは明日、違う五老星に会ったらこういつもりだ。

『交渉って難しいですね。昨日は私が望んだとおりの結果にはなりませんでした』（本当は四つの条件を飲ませたいので一つだけではない。）と……………。

これを聞いた五老星は勝手にこう勘違いするはずだ。

『ああ、昨日の交渉は何だか訳のわからないうちに終わってしまったが、昨日交渉にでた五老星はちゃんて職務を全うして、こちらの不利な条件は飲まなかったんだなあ……………』。

どれ、ムチだけでは人は従わない。今度は甘いアメでもくれてやるか』と。

今日、トウヤが飲ませた条件は当然アメであり、本来ならここではムチを選択すべきなのだが、まさか五老星がただのトレジャーハンターの手玉にとられているわけがないと思いついて彼らは当然のごとくそうかんがえてしまっただろう。

今日の交渉………というか、王下七武海と五老星の交渉は完全にオフレコであり、今日の交渉の実態を知っているのは、トウヤとその相手だった五老星。そして空気に帰るに帰れなかったカリファだけである。

そして、カリファは夕方の船でエニエスロビーに帰っており、今日の担当は今からトウヤのポシエットの中である。

明日、今日の交渉の内容を知っているのはトウヤだけ。これほど相手を騙し安い状況はないのだ。

「さてさて、五老星。誰に喧嘩を売ったのか………思い知れよ」

どうやら、カリファの不意打ちのことを知っているらしい。

意外と陰湿な奴だった。

…ナ…ナ……ナ…ナ…

とある新聞の記事より。

『狂気！？あり得ない権利を手にした男！！』

昨日《裏》王下七武海に選ばれた、イササギ・トウヤ氏。

彼を《裏》王下七武海に入れるために世界政府は信じられないようなカードを切ってまで彼の参入を望んだようだ。

トレジャーハンターとして名を上げ始めた期待のルーキーだったが、世界政府がこうまでして仲間に引き入れたいとするなら、きっと彼には何か秘密があるのかもしれない。

本紙はこれからもかれの動向を追っていきたいとおもつ。

《裏・七武海の参入特権》

- 1・ポーネグリフ解読の許可。
- 2・バスターコールの永久対象外権
- 3・発見した財宝の即刻所有権の移譲

（見つけた財宝は即座に自分のものにできる。）

4・《悪魔の子》ニコ・ロビンの手配書の撤廃

記事の隣には写真ものっており、何故かやつれている五老星から、不敵にわらうトウヤが任命状貰っているシーンがうつさされていた。

9話（後書き）

《編》

ととっても一話で終わってしまった！

10話（前書き）

お待たせしてすみません。

いつの間にか一千点越えをしていたこの小説。

3日連続投稿です！！（断言）

紫煙を風にたなびかせながら、トウヤは塔の上から荒れるアラバスタ首都を見つめてため息をついた。

「やるならもつとスマートにやれよ、先輩殿。原作で知っているとはいえ高々ルーキーの海賊ごときにここまでやられるなんて情けない……………」

いや、この場合麦わら海賊団の方が異常だったというだけか。海軍でさえてこずるような巨大組織相手にたった一人の仲間のためによくやる。さすがは主人公といったところか。

裏王下七武海になるための手続きを済ませたトウヤは観光がてらにアラバスタの動乱を見ていくことにした。

いままで徹底的にこの手の原作行事を無視してきたトウヤだったが今回に限って傍観とはいえ、参加する気になったのはいくつか理由がある。仲間になったロビンアクセラレータが参加するからというのも理由の一つだが、最も大なる理由は一方通行の実力の確認。

ともに頂上戦争の結果を変えたい存在として、相方の能力について調べておくことは重要なことである。

そのときだ、突然一つの建物が砲弾のように飛び城の城門に突き刺さった。

「なかなか派手好きのようだな。あの小僧……………」

ぼつ禁書のアフセラレータ一方通行最高質量攻撃（ビルを砲弾にして窓のないビルにぶつけたあれである。）に苦笑を浮かべるトウヤ。

当然城門ごときに窓のないビル並みの耐久力があるはずもなくロビンが無数の手を咲かせていた城壁はあっさりと粉碎。立ち往生していた軍は歓声を上げて城の中になだれ込んだ。

「あいつだけで頂上戦争は何とかなりそうな気もするが……………」

いまさら考え直しても仕方がないか。と考えながらトウヤは煙草を地面度揉み消しながらその吸殻を携帯灰皿に投げ込む。

王下七武海に入った時から賽は投げられてしまっているのだ。いまさら後には引けない。

「さあて、俺はそろそろ仲間を助けに行くか」

クロコダイルが遺跡に潜ってロビンがポーネグリフを解読するまでは遺跡の中に入れておく必要性がある。

アクセルのせいで原作が変わっており、ルフィが来る前にロビンが殺されたりしたら目も当てられないからな。

「げろ！！お前何者でゲロ！？」

そんなときだ、トウヤの後ろから変な声が聞こえてきた。

「ああ？」

トウヤが振り向くとそこには、カエルのような衣装を着た変態A

と全身に七の文字が刻まれた変態Bが立っていた。

「……………ああ。そういえばこんな奴らいたな」

ということは……………。

とうやはあわてて塔の中に入り込み、そこにつられていた巨大な鐘の中に丸く黒い塊が安置されているのを発見した。

「ここ、爆弾が設置されている塔だったのか……………」

悪運がいいのか悪いのか……………。

「な、なにをするつもりゲロー！」

「そ、それに触れることは許さん……！」

変態二人組が何か言ってくるが、トウヤは空気を圧縮した《空弾》を破裂させ二人を党の下にたたき落とした。

「まあ、何かに使えるだろう。鳥と王女様には無駄足を踏ませてしまっことになるがな」

とうやはそういつて、爆弾を圧縮保存して回収。空間をゆがめ遺跡の入り口につないだ後その塔からさっさと姿を消した。

クロコダイルの話を聞きあわててやってきたビビとペルは爆弾を発見することができなかつたため、アラバスタに甚大な被害を与えることができるところをしらみつぶしに探さないといけないことになるのだがそれはトウヤの感知することではなかった。

…? …? …? …? …?

それから数時間後。王墓に侵入したのはいいが、ガチで迷ってしまったトウヤがクロコダイルたちを発見するのはそれから数時間たってからだった。

まさか俺にもゾロと同じように《方向音痴S+》がついているのでは?と若干恐怖を覚えつつもやってきたトウヤの目に映ったのはクロコダイルに首を絞められているロビンの姿だった。

「ああ、意外と腹立たしいなこの光景は……。何よりこんなことなる前に仲間を見つけられなかったおれ自身に腹が立つ」

どこかの暑苦しい主人公のような感情を覚える自分に自嘲の笑みを浮かべながら、トウヤは一足飛びにクロコダイルの横に移動した。

「つつ！！てめえきてやがったのか！」

「なにをしているのかな、先輩どの」

そして、ロビンをつかんでいる右手のひじあたりをつかみ取り力を込める。

「俺の大事な仲間を離してはくれないか？レンタルまでは許可したが、生殺与奪権までは与えていないつもりだが」

「だまれよ、ルーキー。いまおれは機嫌が悪い。貴様のいうことが聞けないくらいにな」

トウヤハその言葉を聞き、ロボンの顔色がみるみる悪くなっていくのを認識した。……………そして、彼はこの世界に来て初めて自分がかぶっていた仮面を外した。

「言い直そうか、先輩殿……………。手を離せよ、ド三流。てめえの右腕が無事なうちにな」

突如、今まで落ちて着いた大人の笑みを浮かべていたトウヤハの表情が能面のような無表情に変わり、全身から濃密な殺気がこぼれ始めた。

しかし、クロコダイルも歴戦の海賊である。この程度でビビるよ
うな柔な心胆はしていない。

「調子に乗るなよ新入りが！！サーブル……………」

しかし、このときクロコダイルは判断を誤った。

彼はもう少し真剣に、正体不明のトウヤの能力について考察しておくべきだったのだ。

そして彼は……………。

「ワンバイト握り潰し……………」

トウヤのつぶやきとともに永遠に右腕を失うことになった。

……………?
……………?
……………?
……………?

それは一瞬で起きた。

力を込められたトウヤの手が、まるで食いちったかのようにクロコダイルの右腕を肘から握り潰し、引きちぎったのだ。

「は？」

そして、それは砂になって元に戻ることはなく鮮血を噴水のよう
に噴出させながら地面に落ちた。

首を絞められていたロビンは当然解放されたが、彼女はむせ返り
ながらも今見たありえない光景に呆然としている。

そして、

「呆けてんじゃねえぞド三流。」

何が起きたのかわからず氷結してしまっていた、クロコダイルの
顔面を蹴り飛ばし、トウヤはクロコダイルをロビンから離れた。

「グ……………てめえ、何しやがった！！」

ちぎられた腕からかけられた返り血で顔を濡らしたクロコダイル
は傷口を砂に変えることで疑似的な止血を行い、トウヤを睨みつけ
た。

「超人系ニギニギの実の《掴み人間》^{パラミシア}。それがおれの能力だ。俺の
能力はあらゆるものと掴み取り保存。または握り潰すことができる
のさ。無論、能力者の実体もな」

真っ赤なウソである。能力の内容自体は本当であったが彼の能力

は悪魔の実ではなく超能力。ニギニギの実なんてものは食べたこともなければ見たこともないトウヤだったが、これはまた違うウソの布石となるので何の迷いもなく彼はそうのたまった。

「とうぜん実態を握りつぶされた能力者は自然系ロキアだろうが再生は不可能だ。高密度の覇気で切られたと思ってくれて構わん。握り潰しという性質上、傷口はミンチ状になっちまうから切断されたときみたいに医術で繋ぐことはできないからあしからず」

トウヤはそれだけ言うと、再び空間をゆがめ王墓の入り口につきなぎ、グツタリをしたロビンを抱えながらその空間から出て行くこととする。

「き、君は一体」

そして、とうぜんあらわれ去って行くこととするトウヤに啞然としつつ声をかけようとしたコブラ国王に一言。

「申し訳ありませんが俺はこいつを助けに来ただけであってあなたを助けに来たわけではない。助けてほしいならば早くしたらくる麦わらの少年に……………」

「クロコダイルウウウウウウウウウウー!!」

言おうとしたときにルフィがやってきてしまい話をさえぎられてしまった。

「……………ああ。そういえばもうすぐ来るんだったな」

「って、おまえー!!皮帽子ー!!」

「俺そんな呼び方になっているのか……………」

微妙に嫌そうな顔をしながら、トウヤはさっさとゆがめた空間に足を突っ込む。

「あ、まて!!」

「残念だが聞けないな小僧。海軍と戦争することになったら相手をしてやる。だからそれまでは生き延びろよ。未来の海賊王殿」

トウヤはそれだけ言い残し、さっさとその場から退場するのだった。

11話

「というのがアラバスタ動乱編の顛末なわけだが……………」

「要するに勝ち逃げしてきたんじゃない」

「当たり前だ。あんな化け物相手にガチンコ勝負ができるはずがないだろう。普通にやりあえば七回死ねる」

現在トウヤ自分の船にのりグランドラインを航行していた。

アラバスタの動乱から約三日。そして、意識を取り戻したロビンに、いつものように超絶的に平凡な味の料理をふるまいながらロビンが意識を失っている間に起った出来事について説明をしているのだ。

「それにしてもクロコダイルがああ麦わら君に負けるなんて……………」

「ま、おかげで助かったじゃないか。クロコダイルはインペルダウに収容。俺たちはあいつの逆恨みの被害をうけなくなった。万事が万事うまくいった結果に終わった」

「あなたに感じるうらみに関しては逆恨みとっていいのか微妙なところだけれど……………」

「辛辣だな」

少しだけ眉をしかめるトウヤに肩をすくめて返事を返すロビン。

「私は基本的に秘密がある人は信じないたちの」

「自分のことは棚上げしてよく言う」

「あら、これはあなたを守るためのよ」

「知っている。だが余計な気は回すな。くだらない陰謀とやらに巻き込まれないように二重三重に対策はしてある。王下七武海入りもその一つだ」

トウヤのその言葉にロビンは若干表情を変化させたが、すぐに元の無表情に戻し紅茶をすすった。

「まるで鉄の女だな」

「正確には鉄面皮の女でしょう」

「まあ、頑固な女は嫌いじゃないよ」

トウヤはそう言って、ドラム缶型のロボットをよびだし、一枚の海図を広げさせた。そこには精密に書かれた無数の島々と、漆黒のバツ印が書かれている。その隣には、ロビンの知らない文字でいくつかの備考が書かれている。

「これはおれが数年かけて完成させたグランドライン前半の海図だ。バツ印は俺が刈り取った遺跡の場所。隣にはそこから回収した財宝の種類が書かれている」

「これがどうしたの？」

「これが、お前がおれについてくる理由になると思うぞ。実はこの備考には……………ポーネグリフの場所も書き込まれている」

トウヤのそのセリフにロビンは椅子を転がすほどの勢いで立ち上がった。

「どういうこと！？海軍ばれたものは即座に消されるからほとんどポーネグリフは隠匿されているのよ！！」

「俺はトレジャーハンターだぞ。基本不法侵入して情報を集めたに決まってるだろうが」

「あなたはそんじょそこの海賊よりも極悪だわ！！」

ロビンのツツコミがきれいに決まったところで苦笑を浮かべながらトウヤは流れるような動作で煙草を取り出し、火をつけた。

「まあ、実害を与えるつもりはないから安心しろ。海軍に漏らすよくなこともしない。そのために俺だけが知っているはずの文字で情報を記載しているんだからな」

「……………いったい何の文字なの？」

「それを教えるときは、お前が心から俺の仲間になってくれた時だけだな」

「……………」

「どうだ？どんどんデメリットがたまってきただろう。いい加減意

固地になるのはやめて俺の仲間になれ」

トウヤは、ロビンが自分に心を許していないのを理解していた。当然である。ロビンが歩んできた過去とはタイプが違うとはいえ、トウヤも元の世界ではどっぷりと闇の中に浸かっていたことがあるのだ。その警戒心はよく理解している。しかし、これからはそれでは困る。

仮にも頂上戦争への介入を目指すトウヤとしては形だけの仲間では安心できないのだ。心から信頼できる仲間………トウヤの秘密を明かしても大丈夫な仲間がトウヤには必要だった。

「………ほんとにバカなのね。寿命を縮めることになるわよ」

「いまさらその程度の脅しで引く男に見えるのか？」

「残念ながら見えないわね………」

そこで、ロビンは初めて心からの苦笑をトウヤの前で浮かべた。

「イササギ・トウヤ。いいでしょう、私があるの第一のクルーになっただげるわ」

そしてロビンの返事に、トウヤはにやりと笑い手を差し出した。

「よろしく頼む。ニコ・ロビン」

ロビンもその手に自分の手を重ね固い握手を交わした。

「さて、俺の秘密を話さないといけないな」

「あ、まって、その前に……………」

「なんだ？」

「料理は私に作らせなさい。少なくとも今の料理よりかはましなはずだから」

「……………え、おいしくなかった？」

トウヤが初めて見せたショックを受けた顔に、ロビンの顔は少しだけほころんだ。

12話

「つまり、あなたはその、『陰陽師の侍』とやらに妙な術をかけられて異世界からやってきた人間。そこではあの麦わらの坊やの生涯がフィクションの物語として書かれていた。だからあなたにはこの世界で起きることが大体わかり、将来必ず起きるであろう白ひげと海軍の戦争を止めたいと」

「まあ、そういうことだ」

一通りの説明を終えてドラム缶に酒を持ってこさせるトウヤ。ロビンはそのような彼をしばらく見つめてから一言。

「はあ、初めの冒険は優秀なお医者様を見つげるところから始めないといけないみたいね」

「まあ、早々に信じろとは言わんが、信じるポーズぐらいはしてほしかったな……………」

「ものに限度というものがあるのよ。本当に信じてほしいなら証拠を見せなさい」

「一理あると言えはあるのだが……………。未来がわかる云々はさすがにすぐには証明できないし……………。俺が超能力者だっていうことはすぐに証明できるが……………」

「だったらやって見せてよ」

「……………あまり驚くなよ」

トウヤは一通り予想通りの掛け合いを終えると食堂からロビンを連れ出し船の甲板に出た。

「それじゃ、ちょっと泳いでくる」

「はあ？」

瞬間。トウヤは何のためらいもなく甲板から飛び降り海の中にダイブした！

「ちょ、なにをしているの！！」

クロコダイルの前で紹介していたトウヤのことはロビンは真に受けていた。つまり、トウヤのことをニギニギの実の掴み人間だと真剣に信じていたのだ。

そして、悪魔の実の能力者すべてに共通する弱点。カナヅチ。

ロビンはあわてた。そりゃあもう今までのクールさが失われるほどあわててしまった。

自分も悪魔の実の能力者のため飛び込むのは論題。しかし、なぜかこの船には救命用の浮き輪なんてものは積んでおらず（普通の船ならまずありえないことである）この船のメンテナンスをしているドラム缶型のロボットは間違っても泳げそうもない。

つまり、現在この船には海に飛び込んだトウヤを助ける手段が一切ないのだ。

「うそ、そんなー!」

「いや、だから驚くなって言っただろう」

ロビンがその顔に絶望の色を色濃く浮かべたとき、水面に浮上してきたトウヤが白い目でロビンを見つめていた。

……? …? …? …? …?

「それにしても意外とかわいい反応をするものだな」

「……………黙りなさい。首をへし折るわよ」

微妙に恥ずかしかったのか、少しだけ顔を赤らめてトウヤの肩に腕の花を咲かせるロビンにトウヤは微妙にひきつった笑みを浮かべた。

「お前の能力はほんとに反則だ。パラミシア系の奴なら大半は即殺できるぞ……………」

「あら、あなたにも苦手分野があったのね」

「殺害を前提とした戦いならな。生け捕りならほぼ無敵なんだが……………」

空間每封じ込めてしまえばいいわけだし……………。

微妙にみもふたもない戦い方であったが、彼はこの能力で人を殺さずに無敗を誇った男でもあるのだ。恥じるつもりは毛頭なかった。

「まあ、とにかくあなたが違う世界から来たことは信じます。頂上戦争についてはいまだに半信半疑だけど……………」

「今はそれでいい。どちらにせよいずれわかることだ」

全身に張り付いた海水をつかみ取ることにより体を乾かしていたトウヤはそれだけ言う一枚のバッジをロビンに投げ渡した。

「なにこれ？」

「徽章だ。俺たちは海賊じゃないからな。海賊旗以外にチームを象徴する何かが必要だろう？」

「ハンターズ？」

「トレジャーハンターだからな。あんま複雑な名前付けると覚える

のも面倒だしこのくらいがちょうどいいだろう。さて、ここから本題に移るわけだが……………」

「まだ本題じゃなかったの？」

「お前がすんなりと信じてくれたらもっと楽だったんだがな」

「無茶言わないですよ……………」

苦笑交じりに飛ばされた皮肉に眉をしかめながら、ロビンは続きを促す。

「とりあえずさっき言ったように俺たちの目標は頂上戦争の結果の改変だ。白ひげを生かし火拳をいかし、黒ひげを無力化する」

「よくばりね」

「それぐらいしないとわざわざ危険を冒して介入する意味がない。まあその後もいろいろと暗躍する予定ではあるが今のところこれが目標だ。でだ、この目標をかなえるためにまず俺たちがやることは……………」

いつの間にかやってきたドラム缶型ロボットが空中に半透明の画面を展開する。ロビンはそれにも驚いたがそこに書かれた文字を見てさらに驚いた。

「仲間集めと資金稼ぎ!？」

「ああ、そうだ。資金稼ぎはどつとでもなるが、仲間集めはかなり難航するだろうからな。今からでも始める」

「難航ってどういうこと？」

「仲間の人数は俺とお前を入れて最低七人。今なら幸い裏王下七武海っていう受け皿がある。ハンターズのカモフラージュとしてこいつらを裏王下七武海に入れる」

「まって、世界政府は、裏王下七武海は一人しか作らないつもりなんじゃ……………」

「何を言っているんだ。表が七人いるんだから裏が七人いてもいいだろ。そういう解釈をしたということで世界政府の奴らには押し通す」

「……………まただますのね。でも、それだと……………」

「ああ。世界政府を黙らせられるほどの、表の奴らに匹敵するほどの、高い戦闘能力を持つ奴らが必要だ。だから難しくなる。ある程度時間があるとはいえ鍛えなおしているような余裕はないからな。現段階でクロコダイル級の奴らをあと五人、集める必要がある」

「無理じゃない？」

「あきらめるな。さがせばどっかその辺にいるだろう」

「いないわよ」

ロビンの冷静沈着な否定に、トウヤはため息をつきつつ肩をすくめた。

「……………勝率の低いかけだっているのは百も承知だ。だが俺たちはやらないといけない。世界の平和のために……………」

「……………」

その時のトウヤは珍しく真剣だったとロビンは思う。いつも人をだまして利益をかすめ取る卑怯者だ。しかし、彼にはそうやってでも守りたいものがあつたことをロビンは知っている。

その守りたいものが自分だというのは多少気恥ずかしくはあつたが。

トウヤが世界政府にたたきつけた最後の条件。ニコ・ロビンの手配取り消し……………。

その一文を思い出し、ロビンの口元には淡い苦笑が浮かんだ。

こいつには返しきれないほどの恩を作ってしまった。だったら狂人の戯言だろうとなんだだろうと、最後まで最後まで協力するのも悪くないかもしれない。

ロビンはそう思っていた。

「何より俺の平和のためにな」

「ごめんなさい。船を下りてもいいかしら」

すぐに考え直したくなってしまうが。

ノースブルー・トコフユ王国にて

ここは、北の海。トコフユ王国。

トウヤたちはその王都に船を止めて、とある酒場でのんびりしていた。

「ねえ。どうしてグランドラインをでたの？」

「ん？何だわからないのか。頭のいいお前のしては珍しいことだな」

ロビンの疑問の言葉に、トウヤは酒を口に含みながらわらう。微妙に馬鹿にされている気分がしてロビンの額に若干青筋が浮かぶ。

「その表情、ほんと腹立たしいわね……。強い仲間を集めるんじゃない？」
「やなかったの？だったらグランドラインで集めたほうがいいじゃない？」

「確かにグランドラインは強い奴がたくさんいる。悪魔の実の出現率も高いし、多くの猛者たちが夢を求めて乗り込んでくるからな。だが、七武海の実力がある奴なんて、たいていは自分の海賊団を製作しているか、海軍に引き抜かれている」

「ああ。言われてみればそのとおりね……。そんなに強い人がいるなら海軍も海賊も見逃さないでしょうし……」

「それに比べて、こういった外の海の連中はよっぽどのことがない限り強くて気づかれぬ。悪魔の実に対する認知度も低いみたいだし、結構掘り出し物が見つかるものだ。俺が冒険している間にで

きたつても結構あるしな」

「それで外海に出たのね……………」

「そついうことだ」

「で、ここに來たつてことは何かあてがあるの？」

「ああ。明日はこの国の最北端。バリツサムーイ村に行くぞ」

「そこに何がいるのかしら？」

「うん？」

トウヤハしばらく黙りこんだ後若干渋い顔をして、口につけるものを酒からたばこに変えて煙を吐き出す。

「吸血鬼と……………それを従える死ネクロマンサー霊術士だ」

「……………やっぱり医者さんに行つたほうがいいんじゃない？」

「そついうと思つたから言つた嫌だつたんだよ……………」

苦笑を浮かべながらロビンの言葉を軽く受け流し、トウヤは煙草の煙をリング状に吐き出すのだった。

その後、美女と酒を飲むトウヤに酒場でたむろしていた荒くれ者たちが刺激され、二人に因縁をつけてきたが、トウヤたちが返り討ちにしてしまい、なぜか国王に感謝されるという事件が起きたが、その話は完璧に余談であらう。

トコフユ王国。寒村、バリツサムーイ村。

…
十…
十…
…
…
…
十…
十…
…

その村からさらに北に行つたところにその家はあつた。

見た目は丸太で作られた小ぢんまりとしたかわいらしいログハウス。しかし、その内側には無数の魔法が組み込まれており、見た目とは違う広大な空間を形成していた。

だいたい海軍本部と同等の広さがあるその空間は、無数の尖塔と家屋が立ち並び、異形の姿をした人々が平和に過ごしていた。

外海で確認された動物系悪魔^{ソオン}の实の能力者。その中で最もレア度が高いとされる《幻獣種》。彼らはその実を食べてしまい姿を異形に変えたまま元に戻れなくなつてしまつた人々だつた。

グランドラインのように能力の制御を教えてくれる人物もおらず、悪魔の認知度も低い外海では、直接姿が変わつてしまふ動物系の能力者たちは悪魔がとりついたといわれ、迫害を受け自分が住んでいた村をおわれるのだ。

そんな彼らに居場所を与えようと、とある死霊術師が作つたのがこの村だつた。

あらゆる存在が平和に過ごそうと努力する閉じた世界。

この世界は、何の冗談か、桃源郷と呼ばれトコフユ王国に伝わる伝説と化していた。

そんな平和な国で、漆黒のダークスーツを着こんだオールバツクの男が走り抜け、おどろおどろしい家屋の中に駆け込んだ。

「あ、主！！大変……………」

瞬間。

パン！！という銃声とともに、男の頭部が跡形もなく消し飛んだ。

銃を撃った人物は、オートマチックの銃口から立ち上っている硝煙をふつと、吹き消した後、剣呑な声で頭部を失い倒れてしまった男に話しかけた。

「家に入ってくるときはノックをしる。二百年前からそう言い聞かせているだろう。ヴァイ・クロスロード。相変わらず貴様はスポンジのような頭の構造をしていると見える」

『いや、だからと言っていきなり殺してくるのは何か違いますか？あるじ……………」』

そんな声とともに、頭部を失った男は平然と立ち上がり、口もないのにそう発言した。

そのとたん、男の首から骨が生えだし頭蓋骨を形成。続いて筋肉線維がその周りを覆い、最後に目玉が再生される。

そして、それを皮膚が覆っていき最後にオールバックの髪が頭から生えだし男を元の姿に戻した。

「ああ！！このスーツ高かったですよ！！買って三日しか経ってないのに血みどろになっちゃったじゃないですか！！」

「自業自得だ。クリーニング代は払わんからな」

「どこまで傲岸不遜なんですか！！正当防衛どころか過剰防衛かどうかすらあやしいラインですよ！！」

男の文句をうつとうしそうに聞き流しながら、拳銃を撃った人物は再び机に座りそこに置かれた弾丸に何か模様を刻みつけていく。

「で、なにがたいへんなんだ？くだらない事だったら、お前を殺した後火葬してその灰を七つのつぼに埋めて海に流すぞ……………」

…」

「さりげなく俺の正式な殺し方を上げないで下さいよ！！そこまでされたらさすがに死にます！！」

「いいから話せ。これ以上私の時間を奪うなら本気でさっき言ったことをするぞ」

「……………イササギのやつがかえってきました」

「ほつ……………」

男の言葉を聞き、拳銃を撃った人物は目を細めた。

「あれだけのことをしておいて私たちのところに来るか……………。なかなか太い肝をしているようだなあ詐欺師は」

「どつしまししょうか？」

「別に財宝を盗まれたことに関しては怨んではいないが、このままおとなしく通してやるのは業腹だな……………」

それって怨んでんじゃないでしょうか？

男はそう思ったが、余計な事を言っただけで殺されるの自分なので黙って聞き流した。

「より、歓迎してやれクロスロード。方法はお前に任せる。骨の一つや二つへし折ってやっても構わんが殺しはするなよ。お前と違って人間の死体は処理が面倒だからな」

「イエス・マイロード」

男はそう言っただけで家を飛び出した。

「さあて……………この前は戦闘はしなかったからな。吸血鬼真祖相手にあの小僧はどう立ち回るか、楽しみにさせてもらおう」

その人物は黒に近い灰色の短髪をいじりながら、血色の唇を釣り上げた。

「私も少しは準備をしておくか……………」

そう言っただけで、凶悪な笑顔のまま、触れれば切れてしまいそうなほど鋭い瞳と、色素の薄い肌をもった美女は腰に下げたもう一丁のりボルバー式の拳銃を取り出し整備を開始した。

ノースブルー・トコフユ王国にて（後書き）

空島偏は介入させないことに決めました。

ただ、あの神様気取りと空島は必ずどこかで出しますので許してください

13話

真つ白な吹雪が吹き荒れる溪谷の中をトウヤとロビンは歩いていった。

「本当にこんなところに人が住んでいるの？」

「正確には人だったものだ。いや、悪魔の実の能力者は人だったな。やっぱり人だ。一人だけ純粋な怪物だがな」

場所は閉じた世界のログハウスの近く。とはいってもまだ十キロほどは離れているのだが……………。

国王から専属の護衛になってくれと頼まれたり、裏王下七武海とばれて宴会を開かれたりしている間にバリツサムーイ村に来るのが遅れてしまったトウヤたちは、あの酒場からの騒動から一週間たった今ようやくここまでやってきたのだ。

そして、このブリザードにまきままれてしまったわけだが……………。

「安心しろ。ホワイトアウト（吹雪に視界をおおわれて方向がわからなくなること）しても大丈夫なように磁石はちゃんと持ってきた。グランドラインと違ってここではちゃんと磁石が使えるからな。なによりここは一本道の溪谷だ。反転することはあっても迷うことはない」

「だといいのだけれど……………。ふせて!!!」

瞬間、何かに気づいたロビンが地面に花を咲かせトウヤの足を踏み取った。

当然不意打ちを食らったトウヤは地面にばったりと倒れてしまう。

しかし、トウヤはそのことについて一切文句を言わなかった。彼自身も吹雪の奥から真紅に輝く矢が飛んでくるのを確認していたのだ。

トウヤの頭があつたところを正確に打ち抜いた後、弓矢は雪原に突き刺さり爆発！！あたりに炎をまき散らした！！

「ふつ。ミシャーナか？なかなか熱烈な歓迎だな」

トウヤはそんなことをいいながら、その炎をつかみ取り圧縮保存する。

「フリーズアロー！！」

再びの射出音。名前からして氷結系か。

トウヤはすぐに判断し、先ほど圧縮した炎の球を弓矢に向かって投擲する。

「炎弾！！はじける！！」

その言葉と同時に、保存されていた炎が解放！青白く輝く矢を迎撃した！！

「なに！？こんな吹雪の中でも正確に弓を放ってくるなんて、何者

なの!？」

「氣い付けるよロビン。……………どうやらあんまり歓迎されていないみたいだ」

「あたりまえでしょう、この詐欺師が」

半ばあきれたような声とともに、純白のゴーグルのついた飛行帽をかぶり、白いローブをはためかせた人物が吹雪の中から姿を現した。

「何者なの?」

「おや、仲間を連れてくるのですか?あなたにしては珍しい。友達は作っても、仲間は作らない主義では?」

「事情が変わったんだ。いろいろとな……………」

背格好や声からして二十代前半ぐらいの女性。起伏には少々乏しいが、女性らしい丸みを帯びた体のラインが彼女が女性であると主張している。

「あいつは、《ヒトヒトの実・幻獣種・フォルム『エルフ』》たべた能力者だ。数百キロ離れた地点でも正確に射抜く弓術と、『魔法』をつかう!!!」

「魔法?」

「便宜上はそう呼んでいるだけだがな。あいつは一部の例外を除き、言葉通りの現象を起こすことができる!!!」

「能力説明ありがとう。お仲間の方が信じられないならもう一つ使
って差し上げましょう。メテオストライク……！」

「ふん。前座にしては派手な技を使う………クールな女はもう
少しスマートに暴れるものだぞ」

「うるっさい……！」

瞬間、トウヤたちの頭上に空気摩擦によって灼熱をまとった巨石
の軍団が飛来する……！」

「エリアクロース
空間にぎり……！」

瞬時に判断を下した、その隕石群を空間ごと掌握。エルフに向か
って投げつけ解放する……！」

「はじける……！」

「さすが………！」

若干口元にはほえみを浮かべながら、エルフの女性は後退。かわ
りに真紅の巨躯を持つ怪物が前にでて、彼女に直撃しそうな隕石を
片手で受け止めた。

「がははははははは……流石はトウヤの坊主じゃ。不意打ちして
やったのにうまく反撃して来よるワイ……！」

もじゃもじゃの髪に、らせんの模様が入った長いつの。牙は短剣
のように長く口は耳まで裂けている。

「存在自体が幻獣種……………《オニオニの実・フォルム・酒呑童子》
……………セロの翁か。ロビン、こいつらの関節は人間と変わらない。
お前の技はちゃんと効くから任せろぞ」

「残念だがイササギ……………そいつはできない相談だな」

突如後ろから聞こえた聞いたことがある声に、トウヤは目を細めて後ろを振り向く。

「ほれ……………何つつの？彼女縛っちゃったしさ」

そこにはぐるぐる巻きにされ地面に転がされた猿轡をはめられ、海楼石の手錠をはめられたロビンと、その上に座る、真っ白な髪を持ち真紅の瞳をした口から鋭い牙をのぞかせる男がいた。

「陽動ご苦労。セロ、ミシャーナ。ここからは俺が相手をする……………」

そして、その男は静かに立ち上がり漆黒のマントを体に羽織る。男の言葉を聞きエルフの女性とオニの男性は吹雪の中に姿を消した。「さあて……………五年ぶりだったか？いや、三年ぶりか？長生きすると一桁の年数の単位があいまいになっていけねえな……………」

「一年ぶりだよ。久しぶりだな……………真祖殿。あの村の中で唯一人間ではない怪物」

そしてあの最強のネクロマンサーの騎士……………。

「ヴァイ・クロスロード。遊んでやるよ詐欺師の小僧」

吹雪にマントをはためかせながら最も凶悪な異形の王は笑うのだ
った。

ただの手刀が地面を陥没させ、吐息が無数の蝙蝠に代わる。時には狼に変身し、翼をはやして回避を行う。空間ごと閉じ込めようにも、発動しようとするると谷一帯を覆うほどの霧となり少しでも捕まえ逃すとそこから実体を再生させる。

霧の中からつかみだそうとすれば手に牙を突き立て吸血を行おうとしてくるのでたちが悪い。

「くっ！！相変わらずの化け物っぷりだな！！」

そんなことを叫びながらトウヤはいくつかの手札を切った。

まずは粉じん。圧縮されたこれらをばらまき、霧になった時の動きを阻害する。

続いて閃光。純粋な太陽光線を圧縮したこれを使い少しなりとも動きが鈍ることを願う。

最後に無数に存在する攻撃型圧縮爆弾。「炎」「レーザー」「雪崩」「濁流」「巨岩」「雷」「空気」！！トウヤがこの世界に来てせっせとため込んだそれらを素晴らしい速さで消費しながら、少しでも打撃を与えられるように破裂させていく。

「そつちこそ、相変わらずえげつないタイミングで攻撃を使ってくるな。実体化した瞬間にレーザーの圧縮弾とかマジでシャレにならないぞ！！」

「そう思うなとつとくたばれ吸血鬼！！頭吹き飛ばされても平然と復活とは……………どこまで反則なんだ！！」

「真祖級吸血鬼ってのはそういうもんだろ。簡単に勝てると思うな人間！！」

瞬間、トウヤの懐に瞬間移動したとしか思えないスピードでもぐりこんできたヴァイは、岩どころか海すらち割る威力を込めた正拳突きをトウヤの腹部に向かって容赦なくはなつ！！

「しっ！！」

しかし、トウヤはそれにいち早く反応しまるで舞い踊るように体を旋回。その間に微妙にバックステップを踏みながら力を逃がし残ったこぶしの威力は右手で掴み取るにより相殺する。

「それにお前も十二分にチートだろう。その回避技術とあらゆる力を無視して攻撃をつかみ取るその能力を併用すればまさしく絶対防衛御だろうが」

「こうなるのには二十年近い研鑽を積んだんだ。一緒にしないでもらおうか怪物」

トウヤの言は本当である。彼は異常な能力者がひしめき合う元の世界を裏を渡り歩くためにあらゆる攻撃に反応し、両手で受け止めることができるようにオリジナルの格闘術を生み出しようやく最強の座についたのだ。

6人いるクラス5の中でトウヤが常勝無敗の座についていたのも、彼の能力ではなく二十年かけて彼が作りあげたこの格闘術のほうか

要因としては大きなものだった。以前ロビンに目撃された彼の全身に刻まれた傷跡は、まだ修業期間中についた彼の戦歴のあかしなのだ。

「さあて、そろそろ主も出撃の準備を終えてくるだろう。次で決めさせてもらおうぞー!!」

「つくー!!」

全身から威圧感を放出しながらヴァイは体を霧に変化させ渓谷中を覆い尽くす。

『くくくく……………以前お前を半殺しの目にあわせた俺の固有スキル『ミストコロシウム』……………今のお前には攻略できるかな?』

大仰なことを言っているが、この技は要するに白猫のスモーカーのコピースキルである。ヴァイの本当の固有スキルはもっと違うものだ。しかし、厄介なことには違いない。

彼はこの力を使い桃源郷の平和を守ってきたのだ。戦績はこの数百年間無敗。吸血鬼のため覇気を使って切り付けられたとしてもすぐに再生するため自然系ロキアよりもたちが悪い。しかし……………。

「初めに教えておこうヴァイ。前回の負けは……………今回の勝ちのための布石だ!!」

ようやく自分が望んだ状況になったことに凶悪な笑みを浮かべながら、トウヤは凶悪に笑った。そして、再び先程は吸血されそうになつて失敗した、霧の中から実体をつかみ取るという手段を行使するため、再び霧に向かって手を振りかぶる。

「馬鹿か？それはさつき攻略されただろうが！」

「そうかな？」

瞬間、トウヤの手には純白の先のとがった何かが握られていた！！

「お！！！」

「俺の能力はこうお前やロギアみたいな実体のないものに化けるやつに対して、つかみ取りを発動させるときは好きな場所をつかみ取ることができる。今回はその効果を使って、お前の牙をつかみとらせてもらった！！これで吸血はできないだろう？」

「ふあふあおど。ふあのみふえのみふえはふあういつたふあふあふあふあふいファイふあふあふあふあふあふあふあふら！！！」

「……………」

確かに……………歯を直接つかみ取られているわけだからしゃべりにくいのはわかるが……………。

いまいち歯切れの悪い状況に、微妙な表情をするトウヤに対して、縛りあげられたロビンは寝ころびながら三白眼を向けていた。

まあ、そんなこんなで吸血を封じたトウヤは余った右手でヴァイの首を握りつぶし殺害。そのあと現れた死体の四肢をもぎ取り巨大な木のくいで心臓を貫く。

「まあ、ここまでやっても死なないんだが……………」

「クルーの前でこれだけ凄惨なまねをしておいてその言葉はないと思うわ」

間近でスプラッタショーを見せられたロビンは顔を青くしながら、杭を打ち付けるトウヤにそういった。いくら裏を歩いてきた彼女でもここまで凄惨な殺し方はそう見たことはそうないだろう。

「言ったはずだ。こいつは吸血鬼の真祖。下手に手を抜くとまた襲いかかってこられかねない」

「正解だ。イササギ・トウヤ」

瞬間、聞こえてきた声に即座に反応したトウヤは先程のエルフと鬼を伴って姿を現した短髪の美女を確認した。

「クロスロードにはそれでも足りないくらいだな。本当にそいつを殺したいなら全身を焼いた上にその灰を七つのつぼに分けて海に流す必要がある」

「誰彼かまわず俺の殺し方教えんのやめてくれませんかマスター……」

その言葉にロビンは驚愕で目を見開きあわてて振り向く。そこにはハンマーで地中深くまで打ち付けられた杭を片手で引き抜き、平然と立ち上がって美女の元へ歩きだすヴァイの姿があった。

「うそ………あそこまでされてなんでいきているの!？」

「吸血鬼真祖だって言ってるんだろお嬢ちゃん。信じてなかったのか

よ？」

平然とそんなことを言いながら、ヴァイは二人とすれ違い美女の隣にたった。

「それで、なんでこんな真似をしたんだ、ネクロマンサー。俺は永久追放されてしまったのかな」

「まさか。私たちは友人を大切にするしあんな役にも立たない骨董品の鎧を盗まれた程度のことですこまで腹は立てない。だが、泥棒をもろ手を挙げて歓迎するのは結構抵抗ある。だからお前の骨のいくつかを欠損させたうえでなら歓迎できるかなと思っただけを送りつけただけだ」

「そこそこひどいこと言っているぞ？」

「これがうち流だ。しばらく滞在していたあなたなら知っているだろう？妖精もいるから骨の損傷ぐらい五秒で治るしな」

人より頑強にして再生力もある幻獣種たちは基本的に致命傷以外の怪我に関しては寛大だ。粉碎骨折だろうが全身の筋肉が断絶しようが、生きてさえいれば『唾でもつけておけば治る！』と豪語するあたりからその寛大さがうかがえるというものである。

おまけにあらゆる怪我を一瞬で治す《ヒトヒトの実・フォルム妖精》の能力者が所属していることもその考えに拍車をかけていると言っただろう。

閑話休題。

とにかく、ようやく姿を現したネクロマンサーにトウヤはため息をついた。

「では国王殿。入国許可をいただけますか？そしてすぐにでもあなたに謁見して話したいことがある」

「わかった。ついてこい。入口の一つに案内してやろう」

美女はローブをはためかせて踵を返す。その後ろのヴァイは追従しミシャーナとセロはトウヤ達の後ろに回り込み先程突然襲撃したことに對する謝罪をしていた。

「いやあ、ごめんなさい。あれも命令だったから仕方がなかったの。まさかトウヤが仲間を連れてきているなんて思いもありませんでしたし……………」

「にしてもえらくわかい嬢ちゃんじゃのう？脅かすような真似をしてすまなかつたわい」

「おれに對する謝罪はなしか？」

ロビンにだけ謝る彼らを見て、トウヤは苦笑を浮かべながら煙草に火をつけるのだった。

…十…十…十…十…十…

そのころ、トコフユ王国のとある港町。

トウヤ達がゴロツキを殲滅して国王から感謝状をもらったその港町は………阿鼻叫喚の地獄絵図と化していた。

「ゼハハハハハハハ！こんな寂れた街には用はねえ！行くぞ野郎ども！！俺たちが目指すの怪物の町、桃源郷だ！！」

漆黒のコートに海賊帽をかぶったビールっぱらの巨大な男が闇を振りまきながら島に上陸してくる。

壊され、炎上する自分たちの家をぼうぜんと見ながら、街の住人も警備兵たちも……その国の兵でさえも、彼らを黙って見送ることしかできなかつた。

15話

「つまり、私たちの協力が仰ぎたくてお前はわざわざ帰ってきたと？」

「だめか？」

時は移ろい……………トウヤが桃源郷の住人たちの猛攻を辛くも切り抜けたその日の夜。

真つ暗な家の中、トウヤたちの近くだけにろうそくが灯された部屋の中で闇に隠れた美女は不機嫌そうに眉をしかめた。

いい加減彼女の名前を言っておいたほうがいいだろう。

彼女の名前は《リリカ・T・ソウル》。ネクロマンサーであり、不老の少女。半分吸血鬼とか、半分死んでいるとか、実は神の娘とか、いやいや実は悪魔の子などといった伝説が数多く存在する怪物である。

ほとんどの地域ではなまはげのような扱いを受けており、北からやってくる死体あさりの怪物として有名である。本人自身はそう言われるとひどくきれいな笑みを浮かべながら銃を乱射してくるのでトウヤは彼女の前ではそれらのうわさを言わないようにしているが……………。

「返答は？」

「別にかまわないが……………条件がある」

「……………そういっただろうと思っていたよ」

ここからが本番だ。と、表情を引き締める塔屋を知るい眼に、余裕たつぷり通った表情で何かをすすする音を響かせるリリカにロビンは思わず首筋を押えてしまった。自分の血が吸われているような錯覚を覚えてしまったからだ。

みたこともないような型の銃も持っているし、わけのわからない力を使うこの少女に、正直ロビンは圧倒されてしまっていた。

トウヤの世界ではこの手の力の使い手は普通にいたらしいので、彼は特に何の感慨もなく彼女と向き合っている。そのおかげでロビンはなんとかここでの正気を保っているのだった。

「なに、そう身構えることはない。簡単なことだ。うちの国民はほっておけない。私を連れていくなら奴らも一緒に連れて行け」

「むちゃお言っなりリリカ……………」

リリカの信じられない要望に、ロビンは立ち上がりかけトウヤは明確な拒絶を示す。

リリカは少しだけ笑いながら（温かさなんてまったくくない、絶対零度の笑みだったが……………）暗闇の中で身を動かし、ろうそくの光がぎりぎりどく範囲にまで顔を出してくる。

「……………即答だな。奴らが怪物だからか？」

暗闇の中に爛々と輝く深紅の瞳に怖じ気づきながらロビンは気丈

にも声を出した。

「私たちの船にあなたたち全員を乗せることはできないわ。積載量をオーバーするし何より食料が詰めない。見たところこの空間にはそれなりの広さがあり、過密とはいかないまでも土地が少し足りないかなと思われるほどの数の幻獣たちが住んでいる。こんな空間にいた人たちを賄えるほど私たちの船は大きくないわ!!」

「いい答えではあるけれど……それを応えることで状況が好転するかしないかぐらいは考えるよ少女。おまえたちがそういうならこの話は白紙だ。かえってくれ」

完全な失敗。ロビンは申し訳なさそうな表情をし、トウヤに帰るように促そうとした。しかし、ロビンは気づいてしまった。彼が不敵な笑みを浮かべ、まだ諦めようとしていないことを。

「タダとは言わない。ネクロマンサー。私が知っているグランドラインの動物系能力者を何人が紹介して、この国の住人たちの指導につけよう」

その言葉に、暗闇の中にいたリリカは反応を示す。

「ここにいる奴らが外の世界でなじめないのは、その姿が異形のまま戻れなくなってしまうからだ。だったら話は簡単。人の姿に戻れるように訓練してやればいい」

リリカはしばらく考え込むがやはりすぐに首を横に振る。

「……………だめだ。それだけでは足りない。その程度の条件ではあの子たちを預けることはとうていできない」

まあそうだろうな。トウヤは苦笑を浮かべながら、リリカの言葉にうなづいた。だがトウヤが提示できる条件はそれだけじゃない。

「外の世界での就職口の相談には乗ってやる……………。」
「というか俺のもとで働け。少々大がかりな計画だからな。人が多いに越したことはない」

「私たちを戦闘要員として使う気か？」

若干鋭くなるリリカの瞳を真っ向から受け止め当夜は不敵に笑いながら足を組んだ。

「通常のゾオン系よりも戦闘能力が高く、不老や不死の特典をもった人間すらいるこの人たちをそのまま泳がせておくのはもったいない」

「うちの国民のほとんどが戦闘要員ではない。まともな戦いを経験したことがあるのはさっきの二人だけ。後の奴らは訓練はさせさせているが、ほとんど素人と同じような経験値しかもっていない。お前の計画の役には到底役に立たないと思うが？」

「だったらゾーン系の指導を受けさせた後外界に放してやるさ。だがいいのか？ 外の世界は過酷だぞ？ 何かの間違いで能力がばれたときは、この国に逃げ込んだ時の二の舞になってしまうんじゃないのか？ だったらある程度の数をまとめて組織に入れてしまっって、社会的権利を確立しておいたほうがいいと俺は思うが？」

その言葉に、リリカが揺れ動くのが手に取るようにわかる。トウヤは不敵に笑ったまま最後のひと押しをした。

「王下七武海なんて入っているが俺がつくる組織は犯罪組織なんかじゃない。むしろその逆だ。あらゆる依頼を金によってひきつけるマルチ企業だ。それなりの環境と安全な生活は保証しよう。そして……その中でも最も大きな部署にしたいと思っているのが、トレジャーハンターの互助組織だ」

「互助組織？」

「要するにギルドを作ろうと思っっているんだ。海軍と同じように、海の平和を守りつつ多数の財宝をかつさらう東西南北の海での知名度をあげる……。そして俺たちは、海軍になり替わり……」

「その四つの海を統一する！！」

「……………本気で言っているのか？」

「ああ。そこまでいったらこの国の国民が迫害されることはないだろう？ 何しろ四海を救った英雄だ。金で動き人数も多く、グラウンドラインに本部がある海軍本部より四海での行動は格段に速い。弱小の海のために最大戦力をいつでも辺境に送ることができる……そんな組織に人々は歓喜の声をあげるだろう。おまけに海軍に所属していないから海軍の不正をただすこともできるしな。さらに、未来に海賊になる可能性がある奴は、根源たるこの四つの海にいる段階でこちらのトレジャーハンター互助組織に入れ、合法的な活動をさせることができる。《ワンピース一つなぎの財宝》を探すために海に出てきたやつらが、金がないから略奪を始めてしまったのが海賊の起源だ。ロマンの為に海賊を名乗っている奴らはさすがに入ってはくれないだろうが、利にさとい犯罪者じみたやつらなら必ずこちらに食いついてくるだろう。それにより海は平和になり、大海賊時代は終わり

を告げる」

「それがお前の真の狙い？」

「ああ……………俺がより安全にワンピース一つなぎの財宝を探すための最高にして最大の手段だ」

「……………」

話を聞き終わったりリリカは暗闇の中で黙り込んでしまい、微動だにしない。

悪くない提案のはずだ。そう確信し、不敵に笑いながらもトウヤは内心で冷や汗をかいていた。あたり前だ。

先ほど話したのはあくまで理想論。トウヤが行ったことで《こうなる可能性がある事象》をさも確実に実現するように言いきっただけにすぎない。

トウヤ自身だって、ゾオン系に対する差別消滅や、海賊の芽つぶり、海軍になり替わってでの四海の治安維持、そんな夢物語じみた奇跡のすべてが確実に起こせるなんて思っではない。

だが、ここで彼らの協力を得られないとトウヤの計画は大幅な遅滞を強いられる。たとえこの場にいる全員をだましてでも協力の契約を取り付ける必要があるのだ。

リリカの思考が終わるのをじっと待ちながら、トウヤたちは長く暗い沈黙の時間を異常までの緊張感を持って過ごすことになったのだ。

どれほどの時間が過ぎただろう。暗闇の中でリリカがようやく身じろぎをしトウヤたちの緊張がとかれる。

「うけても……………いい」

「そうか……………」

色よい返事をもらいトウヤは安堵の息を小さくもらし、ロビンはほっとした表情で胸をなでおろす。しかし、

「ただし条件が一つある」

その言葉に、トウヤとロビンは再び眉をしかめた。

「なんだ……………その条件とは？」

「お前の力量を見せてるトウヤ。これから私が乗る船の船長であり、この国の運命を握る存在であり……………世界を激変させるといったお前の夢物語を確実にかなえることができる存在であるのかを私に見せる」

「どつやって……………?」

いまさら器を見せるなんて言われても困る。トウヤの若干おどけた言葉にリリカは部屋の明かりと受けながら、大きく伸びをする。

「なあに。単純な話だ。単純にお前の暴力を見せつけてみると言っているんだ」

「喧嘩ならいつも付き合ってたっただろう」

「あんな奥の手を隠しまくっているお前の底を測れと？馬鹿を言うんじゃない。私はこう見えても他人を見る目は悪いほうだ」

「威張って言うことじゃないわ……………」

リリカのあまりな言葉にさすがのロビンはあきれきった声を出す。その条件は苦笑を浮かべながらその条件をのんだ。

「いいだろう。その条件飲んでやる……………で、實力を見せるといっても具体的に何をすればいいんだ？」

「そつだなあ……………」

その時、この国の入国の門のほうですさまじい轟音がした!!

…+…+…+…+…+…+…+…+…+…

「馬鹿な!! あいつはグラウンドラインを中心に活動しているはずだ!! なんでこんなところにいる!!」

先ほどの言葉を言った途端、黒ひげの手に掴まれていたヴァイが霧となって消えるたのを見て、黒ひげが慌てふためいている。

トウヤはその光景をみながら、《吸血鬼のスキルは無効化できない》と黒ひげのデータに付け加えつつ舌打ちをする。

「ああ……最近やたらとでかい新人りが入ってな。そいつをうわさを聞きつけて最近海賊たちがよく来るんだよ。仲間にしようとかペットにしようとか兵器にしようとか、くだらない事を考えて……」

そこまでいった時、リリカはいいこと思いついたと言わんばかり

に手を打ち、にやりと笑った。

「トウヤ……………実力を見せてもらう方法が決まったぞ」

「なに？」

「あのくそムカつく小僧どもを、ぶち殺すか半殺しにするかしてこの国から追い出せ。それができたら私は仲間になってやろう」

最後の課題の無理難題っぷりに、普段は冷静沈着なトウヤの顔が引きつったのは言うまでもないだろう。

16話

トウヤの能力は基本的に何でも掴み取ることができる。それゆえのクラス5だし、異世界最強の名を冠したのだ。

しかし、そんな彼でも、つかみづらいものというものは厳然として存在する。

一番つかみやすいものは実態がある物質。要するに物理攻撃のことである。拳銃、刀剣、転がる岩石などがここに分類される。例外的に水という存在があるが、あれは液体という形状がないという性質上、形を固定し捕まえるのに多少ややこしい演算が必要だけで捕まえる時間はさほどかからない。もちろんマグマはここに分類される。

次点で視認することは可能だが形がないもの。つまりはエネルギー攻撃である。黄猿のレーザーや蛇姫のメロメロ甘風^{メロウ}、虜の矢^{スレイファロー}、モリアのカゲカゲの実の能力、スモーカーのモクモクの実の能力がここに分類される。液体と同じように複雑な演算が必要かつ特殊能力の封印などもしないといけないため、こちらは物質に比べるとやや固定化に時間がかかるが戦闘に支障が出るほどのラグではないため特にトウヤは危険視していない。

最後に最も掴みにくいものが視認できないエネルギーである。白ひげにグラグラの実を使った衝撃波、ミホークの飛ぶ斬撃、青キジの冷氣などがここに分類される。これらを受け止める時は30秒弱の集中が必要なためトウヤが2番目に苦手とする相手であるといえよう。これらの相手と戦う時はよっぽどのがない限り回避に専念し《握り潰し》を使うのがトウヤの戦闘スタイルとなる。

白ひげのような大規模攻撃はさすがによけきれないがその場合はきちんと受け止める。その手の能力は大半が連射は不可能であり受け止める時間は十分に取れる。能力的に、威力によってかかる時間が変わるといことがないこともその手段を取らせるファクターの一つである。

連射ができるようなら一撃受け止めると同時に煙幕でも使いトンズラを決め込むようだ……。……。

さて長々と説明をしてしまったが、最終的に言いたいことはこの1点に尽きる。

黒ひげの闇とやらは……いったいどの攻撃に分類されるのだろうか？

…
十
…
十
…
十
…
十
…
十
…

「とうわけで、あのたいこつぱら親父を叩き出すことになった。手伝え」

「一緒にいたんだから知っているわ。でも大丈夫なの？あなたの話を信じるならあの人、四皇の白ひげすら倒す危険人物なんでしょう？勝算はあるの？」

こつそりと黒ひげに近づきながら、トウヤは首をしっかりとふる。

「正直言つてわからないというのが妥当なところだな……………」。
捕まえられるなら捕まえたほうが楽なんだが……………」

それはかなわないだろう。あそこにはかなり腕のいい狙撃種がいると聞く。遠くからの攻撃に関してはそういつが警戒してしまっているはずだ。本当ならここでこつして近づいていることすらかなりの賭けなのだ。不用意な手を取って、隙を作りたくはない。

なにより、問題なのは黒ひげ自身の能力だ。

「あいつの能力が純粹な重力操作ならやばいが、あの黒い煙に実体があるならまだ何とかなる可能性がある」

「どづいつこと?」

「俺の能力の有利不利は話したか? 黒ひげの能力がああ黒い霧みたいな物質の力を頼っている……つまり《あの黒い煙自体が重力エネルギーをもっていて、黒ひげはそのエネルギーのオンオフをするだけ》なら、まだスキにならない程度の速度で能力を行使してあいつの能力を封じることが出来る。だがあれが《黒ひげ自身が重力操作能力を持っていて、あの黒い煙は能力発動時に何らかの理由で勝手に出ているだけ》なら、明らかに俺が苦手とする《不可視の攻撃》おまけに《連射》のできるタイプだ。下手をすれば間違いない殺される」

「ということはその辺も賭けということね」

「ああ、そうなるな。ったく………すまないなロビン。最初からこん難敵を相手にすることになってしまった。今なら逃げても攻めはしないぞ?」

いつも不敵な笑みを持って先頭に臨むトウヤにしては珍しく、その顔には若干の自信のなさが浮かんでいた。おそらく戦いになれば切り替えるのだろうか、仲間には正確な戦力差を伝えておきたいということなのだろう。

「はあ、そんなことできるわけがないでしょう。乗りかかった船よつきあうわ」

当然そんなトウヤを彼に恩を感じているロビンがほおっておけるはずもなく、苦笑交じりにそその隣にならぶ。

「あなたはわたしの船長なのよ? もっと自信を持ちなさい」

そんな自分を励ますようなロビンの言葉にトウヤはしばらく絶句した後、

「……………すまない」

目が覚めたよ。少しだけ笑い、ロビンのあたまをガシガシと乱暴になでた後、そう言って自分のほほをパンパンとたたきトウヤはいつもの不敵な笑みを顔に浮かべた。

トウヤたちは順調に黒ひげたちに近づいていく。

そして、彼らの真横にある家の影にやってきたトウヤは凶悪に笑いながら、空間を握りこんだ。

「さあて……………開戦だ!!」

………

「な、なんだ!？」

突如として空間がゆがんだ!! 黒ひげはその光景に、自分が今まで仕えていた白ひげの地震攻撃を思い出し戦慄する!!

「せ、船長!？」

「ま、まさか白ひげが!？」

ほかのクルーたちも目に見えて怯えだす。今の自分たちが勝てる相手ではないということ十分に承知しているのだ。

「くー! びびるんじゃないやねえ!! 俺にはこのヤミヤミの実の能力が………!!」

その時、信じられないことが起きた！！その歪んだ空間に、黒ひげのクルーたちが呑み込まれ姿を消してしまったのだ！！

「な、なんだ！？親父の能力でこんなことができるわけが……………」

「そりゃそうさ……………白ひげの能力じゃないからな」

そんな言葉とともに、今まで黒ひげの隣に立っていた家の影から一人の男が歩みでてきた。

「おめえ……………なにもんだ？」

白ひげではないと分かり若干ほっとした様子を見せながら黒ひげは闇を展開、いつものように不敵に笑いながらトウヤに脅しをかけた。

「なあに。通りすがりの……………」

そんな黒ひげに答えるように、トウヤも凶悪な笑みを深めながら、いままで掴み取っていた空間を手放す。

「トレジャーハンターさ！！」

瞬間！！強制的にゆがめられていた空間はすさまじい速度で、元に戻りそれによって溜め込まれていたエネルギーが衝撃波となってあたりを蹂躪し尽くす！！

「うをおおおおおおおおおお！！？」

衝撃波にもみくちゃにされながら吹き飛んでいく黒ひげを見送り、

トウヤは先ほど彼のクルーと一緒に姿を消したロビンが出現する方向を見つめた。

「死ぬなよ……………。まだ少ししか旅をしていないんだからな」

トウヤはそう言い残すと、黒ひげが吹き飛んだ方向へ駆け出す。

あいつの能力的に離れて戦うことは絶対に不利だ。このまま捕獲してもよかったが、それでは黒ひげの能力解析ができないし、何よりトウヤの能力自体が防がれる可能性が高い。白ひげの衝撃波も事前に止めることができるようだし……………。

くそ……………こんな早くに会うと分かっていたらアクセルにももう少し詳しい情報を聞いていたのに！！内心でそんなことを考えながら、トウヤは足を動かすのやめない。しばらくすると血まみれになりながら立ち上がり、闇を展開する黒ひげの姿をとらえた。

「まあ、いまさら後悔しても仕方ないな。超能力者にも悪魔の実の能力は有効なのか……………調べるいい機会だ」

冷や汗を流しながらも、トウヤが不敵な笑みを崩すことはなかった。

…十…十……………十…十…

「ドス・ソーマ二本樹クラッチー！」

黒ひげのクルーたちが自分と同じ空間に出現すると同時に、ロビンすでに能力を発動、二本の腕を彼らに咲かせ首を締め上げる。

「おま……………ニコ・ロビン!?」

突如として出現したロビンに、驚いた表情を見せたシルクハットの男がいたが、あっさり締め落とされ意識を失った。

トウヤがロビンの能力が凶悪だといった理由がここにある。ロギア系や例外的に筋肉があるもの以外にはロビンの回避不可能。おまけに関節を決められるという性質上抵抗することもできずあっさり意識を刈り取られるのだ。これでは初遭遇で勝てる人間はほとんどいないだろう。

だが……………。

「やっぱり……………そんなにうまくいくわけがないわね」

「ウィーハハハハハ！なんだこの非力な腕は？少し驚いちまったが俺を締め上げるのは不可能だぞ！！」

変な笑い声をあげながら、容赦なくロビンの腕を振りほどきロビンを殴りつけてくる。

「ベインテフル 二十輪咲き カンデュラ 金盞花！！」

ロビンは何とか防御技を展開するが、その防御の上からすさまじい衝撃が走りロビンの細い体を吹き飛ばす！！

「うー！！」

「ウィーハハハハハ！！見たかこの俺の力！！」

そういいながら筋肉を盛り上げながら格好をつけてくる音をにらみつけながら、口元から流れている血を拭い取り、ロビンは能力を行使するために構えを取る。

「まあ、それならそれでやりようはあるわ」

シエンフルール
百花繚乱。

トウヤが率いる《ハンターズ》と《黒ひげ海賊団》の戦争が始まった。

17話

黒ひげを吹き飛ばした後、彼が吹き飛んでいった方向にトウヤは駆けていた。初撃は見事に決まったが、アクセルから聞いた情報によると、奴はかなりの耐久力を持っているらしい。油断することはできない。

さらに奴は能力者になる前に、あのシャンクスに傷をつけた男だ。得体の知れなさは人一倍だ。だったら……………。

「反撃のすきを与えることは死につながるか……………」

異世界最強とはいえ、トウヤの能力は正直言ってかなりしょぼい。能力カテゴリー的にはルフィーのゴムゴムの実よりもしょぼいだろう。絶対無双の防御力を誇るとはいえ、クマのように攻撃に転用できる能力でもなければ、火力がある能力でもないのだ。油断はそのまま死へと直結する。

「見つけた。空爆」

そしてようやく視界の端に黒ひげを捕まえたトウヤは、さきほど作成した空気の圧縮爆弾を放り投げ黒ひげの目の目で破裂させる。
この世界にいる暴君クマの熊ウルススシヨックの衝撃とにたような……………というか、まったく同じものだ。

とはいえクマのようにゆっくりと集まらないので、一気の大規模な空気を集めると、暴風が吹き荒れて自分自身ですら危険なため、かなり小規模なものに収まっているが……………。

それでも爆弾は爆弾。黒ひげの目の前できつちりと衝撃波をまき散らしその顔面を強打した!!

「ぐあ!! いてええええ!! いてえなあ!!」

痛みのあまりのた打ち回る黒ひげを見て、トウヤは黒ひげの能力考察の、痛みをも引き寄せるといふ一文を思い出す。

なるほど………痛覚の倍加、もしくは増加というペナルティがあるといふのは本当らしい。この特徴だけとってもヤマヤマの実がほかの自然系とは違つことを如実に表している。

「まあ、デメリットでそんなことを実感しても仕方ないだろうが………」

そつつぶやきながら、トウヤは再び手札を切る。

続いて投げた爆弾は炎の圧縮弾《炎爆》と水素のみを抽出して圧縮した《水素弾》。

空中で爆発したその二つは交わり融合し。

「な!?! や、やめる!?!」

「やなこつた」

本物の爆発を引き起こした!!

この二つはトウヤが普段からコツコツと集めていたもので、先ほどの空爆とは規模が違う。炎爆は島で火事や山火事が起こるたびに

消火活動と称して集めたものでその規模はエースの炎帝に匹敵する。さらにそれが水素によって強化されたのだ。その爆発の規模は黒ひげとエースが激突した時の比ではない！！

結果……………。

「つて、あぶなあああああああああああい！！」

黒ひげどころか、街を根こそぎ吹き飛ばしそうになる爆発を見てトウヤは慌ててその爆発をつかみ直し圧縮保存した。トウヤの目的はこの町を守ることであり、黒ひげを倒すために根こそぎ吹き飛ばしたりしたら本末転倒もいいところ。というかりりかに殺される。

「な、なんだあ！？何がしたいんだお前？」

「……………済まない黒ひげ。お前お相手取ることになつて少々あわてていたようだ」

黒ひげの言葉に自重の笑みを浮かべつつ、トウヤは煙草に火をつけた。これによって、黒ひげとの闘いに緊張していたトウヤの脳がおちつき、いつものクリアな思考を提供する。

年はとりたくないものだ。不測の事態に対応しずらくなっている。

若干ジジ臭いことを考えながら、トウヤはポーチから再びいくつかの球を取出し投げつけつつ黒ひげに接近した。

「次は本気だ。お前を殺す」

そう言つてトウヤが切った手札は二つ。

巨大な岩石と、この前収集しておいた《土砂崩れ》の圧縮弾！！

「はあ！！闇穴道ブラックホール！！！」

さすがにこれには反応した。物理攻撃を闇の中にすべて取り込みやり過ごす黒ひげ。

しかし、それを見たトウヤはさらに加速。一気に黒ひげへと距離を詰める。

「な！？」

「握り潰しワンバイト」

そして、トウヤはその首を絞めるように握りこみ力を加える。

本来トウヤの手のひらでは握りきれないであろう黒ひげの太い首だが、この《握り潰し》は対象をトウヤが握りつぶしやすいサイズ・形状へと変換する副次的効果がある。そのためトウヤは巨人の腕すら握り潰すことができるのだが……………。

「！！！」

「はあ！！！」

一向に発動する様子を見せない自分の能力に驚愕し、慌てて身を離そうとするトウヤに黒ひげは凶悪な笑みをつかべボディーパーを叩き込んだ。

「があー!!」

口から血を吐き吹き飛ばすトウヤ。そしてそのまま家の壁に激突した。彼はその壁を破壊しながら家の中に叩き込まれた。

「くそ!!—撃で内臓破裂だど……………どんな腕力をしているんだ、あの怪物は……………」

だが、彼の世界のクラス5には片手でビルを棍棒のようにふるう怪物もいたのだ、この程度ならかわいいもの(?)である。内心でさえそう強がりながら黒ひげのステータスに《超能力にも能力吸収は有効》の一文を書き加える。

なかなか利便性が高いじゃないか……………。血反吐を吐きながらなんとか立ち上がるトウヤは自分の体の各所を抑えどこに損傷があるのか調べる。

……………肋骨が三本骨折。腸と胃袋が小欠損。骨が肺に刺さる事態は何とか避けているみたいだが、あんまり長く戦えそうはない。まったく、あんな拳何発も喰らっても平気なこの世界のやつらほとんどな体をしてやがる。

「ゼハハハハハハハ!!—どんな能力を持っていたのかはしらねえが、残念だったな!!—俺のヤミヤミの実は能力者の能力を吸い取る!!—お前がどんな能力を持っていようが俺に触れている間は発動しねえのさ!!—」

説明ありがとう。あと喰らったけ、小僧!!

内心そう毒を吐きながら、トウヤは空間を握りこむ。

「エリアクロース
空間握り」

「させるかよ！！闇水クロース」

瞬間、トウヤの能力が発動しかけるのを見て黒ひげは手を黒く染め、トウヤの体を引き寄せる。

そして、無理やりトウヤの能力を封殺した黒ひげは、トウヤの首を握りしめながら彼の体を持ち上げる。

「ゼハハハハハ！おめーはよくやったぜ。未来の海賊王にここまでの手傷を負わせたんだ。それに敬意を表して……………苦しくないように殺してやるよ！！」

そして、トウヤに向かってこぶしを振りかぶる黒ひげを見て……………トウヤは不敵に笑った。

…
十…
十…
…
…
…
…
十…
十…

「シエンラルル デルフィニウム
百花繚乱大飛燕草！」

その声が響くのは無数の尖塔に囲まれた小さな墓地。トウヤがなぜこんな趣味の悪い場所に自分を転移させたのかはわからないが、塔があるのは好都合だ。そう思いながらロビンは技を発動する。

「ウイは!？」

突如として足もとに出現した手たちによって捕まえられた黒ひげ海賊団操舵手・ジーザス・バージエスはその声を上げながら、街に立っていた尖塔の頂上まで運ばれてしまった。

「ういーはははははは!!何をするつもりかはしらねえが、お前の能力は俺にはかねえぞ!!」

「ええ………だからこうするのよ！三十輪咲き トレインタフル ハング！！」

そういうと同時に、ジーザスを解放。塔から叩き落とす際に無数に連結した三十本の腕を使い、彼を振り回した後、その塔に叩き付けた！！

「ぶぐあー！！」

「オチエンタフルクロトウ・マーン」
「八十輪咲き四本樹ショック！！」

そして無数に咲かせた腕を使い四本の巨大な腕を作成。塔に叩き付けられたジーザスを大質量をもって殴りつける。

塔の一部が陥没してしまったが、海賊退治のためだ。許してもらおう。

ロビンがそう思いながら踵を返そうとした時だった、

「ウイーハアー！！」

「……」

塔の穴から、ジーザスは変然と飛び出してきた。ロビンに高高度からの飛び蹴りをヒットさせた！！

「どれほどお前の非力な腕が集まろうと、俺の頑丈な体には傷一つつけられないぜ！！うーはははははははははは！！」

「バカな！？どんな強度をしているの！！」

内心でそんなことを言いながら、ロビンは何とか戦いを続けようと構えを取ろうとするが、彼女の腕が折れてしまっていることに気づいた。

別に構えを取らなくても戦うことはできるが、咲かせた腕の捜査はかなり甘くなる。関節を決めたり大規模に咲かせたりするのはかなり困難になってしまうだろう。

「く……………」

仕方なしに戦略的撤退をしようとするロビンに向かい、ジーザスは凶悪に笑いながら尖塔を根元から引き抜きを持ち上げた！！

「な！？」

「つぶれる！！ういーはははははは！！」

そして、尖塔を持ち上げたまま大きく跳躍した彼はロビンに向かってその家を投擲！こうして彼の勝利は確定したのだ。

「まあ、部下じゃこんなものか」

「一応伸びしろもあるみたいですし……………何とかなるのでは？」

「そうだな。とりあえず今は……………」

そんな言葉とともに、吸血鬼を伴ったネクロマンサーが、ロビンの影から出現するまでは。

「な!？」

「ういは?」

「ウィハウィハウるさい。死ね」

さらつととんでもないことを言いリリカは拳銃を発砲。その弾丸は漆黒の軌跡を描きながら飛来する尖塔に着弾。そして、その着弾した箇所我真つ黒な球体が発生し容赦なくその尖塔を包み込んだ。

ネクロマンシード
「死霊魔術・ヘルズゲート」

バースワード
発動呪文の終了とともに、弾丸に刻み込まれた術式が高速回転し、漆黒の球体を収束。その黒い球体が完全に消えるころにはそれに包まれていたはずの尖塔も消え何事もなかったかのような静寂がそこに訪れた。

「うーっははははははははははは！船長が言ったとおりだ！ここにいる奴らは不思議な術を使うようだな！！」

「ふん、そこまで調べているのか。なかなか優秀じゃないか、お前の船長さんは」

まあ、先約がいるから絶対に仲間にはなってはやらないが……
……。

ロビンにだけ聞こえるようにそうつぶやいたりリリカは、さっと身をひるがえしロビンをお姫様抱っこしてやる。

「さあ、行くわぞ。あいつのたたかひを見ないといけないな……」

「まあまでよ！！船長が言うには力づくでも従わせるといわれているんだ。付き合ってもらおうぞ！ウィーハ！！」

リリカそういつて飛んでくるジーザスを心底うっとおしそうに見

つめてから、

「ヴァイ。殺せ」

「イエス・マイロード」

平然とそう命令をだし、吸血鬼を解き放った。

そして、彼女を守るように立ちふさがったヴァイは片手でジーザスのこぶしを受け止める！！

「な！！」

「何を驚いている小僧。人間風情が吸血鬼真祖の俺に腕力で勝てると思っただのか？」

心底心外である。言外にそう言いながら、ヴァイは容赦なくこぶしを振りぬきジーザスの胸を殴りつける。それと同時にバキボキという何かが折れるおとにもジーザスの胸が変形、尋常じゃないほどの量の血反吐を吐きながら砲弾のように飛んで行ったジーザスに向かってヴァイは跳躍する。

「汚い声で主に話しかけおつて……………塵すら残してやらんぞ！！」

先ほどのジーザスと同じ飛び蹴り。しかし、その威力はジーザスの比ではなく、ヴァイが着弾した箇所には無数の地割れが走り、その衝撃をもって周りに立っていた尖塔を吹き飛ばした！！

「ああ、そうだ少年。もし生きて帰れるようなら船長さんに伝えておけ」

そんな光景に、うるさいな………とつぶやきながらリリカは拳銃を引き抜き、発砲。発射された弾丸が食い込むのは、おそらく死人が埋められていると思われる墓の下。

「ここは私のテリトリーだ。どんな能力を持っているのかは知らないが、次からは中には入らないことを進めする」

瞬間、弾丸が食い込んだ墓の下から、無数の白骨死体が飛び出してきたかと思うと、灰色の煙を立ち上らせながら、彼らはゾンビへと変化した!!

「死霊術師!! 本当にこんなことができるなんて!!?」

「ふん。まだ序の口だ」

リリカの言葉通りに、ゾンビの体からはさらに煙が立ち上り、見る見るうちに筋肉や皮膚が戻り最後には生前の姿と変わらぬ姿になりそれぞれまるで生きているかのように準備運動を始めたではないか!!

「おお!! 生き返った!?!」

「大方また戦闘だろうよ」

「リリカ様か………相変わらずこの術はばかげている」

そんなことを言いながら、準備体操を終えた彼らは、見る見るうちに変化を開始し異形の姿へと変身していく。

「目標はあのプロレスラーもどき。手加減はいらない。幻獣種の恐ろしさ……思い知らせてやれ」

「『イエス・マイロード』」

紅蓮の炎に包まれた猫が、稲妻をまとった狼のような獣が、暴風をまとった狸が……それぞれ凶悪な方向を上げてジーザスへとびかかっていくのを背中に、リリカは歩みを進めた。

「ネクロマンシード死霊魔術リザレクション」

神の復活と同義の奇跡。己の邪法がそうであると傲然と宣言しつつ、リリカは狂った様に笑い続けるのだった。

…寸…寸…………寸…寸…

ロビンが逆転したのと同時刻……………。

「おい三下……………」

「ああ？」

首を絞められながらも、不敵な笑みを浮かべていたトウヤも同じように逆転していた！！

「俺が能力頼りのモヤシだと思ったら大間違いだぞ！！」

その言葉と同時に、トウヤの回し蹴りがヒット！！黒ひげの側頭部を強襲した蹴りはとても首を絞められて持ち上げられている人間が出したとは思えないほどの威力をもって、黒ひげを吹き飛ばした！！！！

「がああああああああ！！」

先ほどのトウヤと同じように家にツッコむ黒ひげをしり目に、何とか首絞めから解放されたトウヤはのどをさすりながら、ボロボロになり邪魔になったズボンのすそを引きちぎる。

するとその足には、鋼色の金属が輝き、無数の駆動音を響かせながらトウヤの足を守っていた。

「この世界の人間は素で人間の体の常識を超越してくるから困る。だからこそ俺は普段からこの鎧を着て武装しているんだが……………」

自動駆動補助装置……………パワードスーツ。元いた世界の技術の粋が集約された最強の人型兵器が姿を現した。

18話

パワードスーツ。最もわかりやすい例を挙げるなら平成仮面ライダーの何人かのライダー。人類の技術の粋を集めて作られたこれらは簡単に世界の常識を超越する。

「といっても、俺が作れたの足の部分だけ……。おまけに、この世界ではまだまだ出力不足だがな」

なにせ、脚力だけで普通に空を飛ぶ奴がいる世界だ。スーパーマリオもびっくりするはずである。

そんなことを言いながら、トウヤはパワードスーツの補助を借り一気に加速。六式の《剋》級の速度をえたトウヤは即座に吹き飛んで行った黒ひげを肉薄し、浮遊している彼の腹に踵落としを叩き込む！

「があー！！」

血を吐きながら地面に叩き付けられる黒ひげを見ても、トウヤは攻撃の手を緩めない。

即座に、つま先を顎にひっかけ、すこしだけ黒ひげを宙に浮かせる。そして、浮き上がった彼の鳩尾に容赦ない足刀蹴りを叩き込む！！

「ぐはぁ……！」

「能力行使のスキは与えない！！気絶したところで海楼石の手錠をはめてやる！」

実はトウヤ、この前海軍本部へ行ったときに海楼石の手錠をパクって来ておいたのだ。こういつた事態を予想してのことだったが、まさかこれほど早く使うことになるとはトウヤ自身も思っていなかった。

まあ、今はそんなことはどうでもいい。今はとにかく黒ひげである。

トウヤは黒ひげが壁に叩き付けられたのをいいことに、容赦ない蹴りのラッシュを黒ひげへと叩き込んでいく。

後ろの壁を壊さないように加減しているためその一発一発は大した威力はないが、それでも普通の人間なら十二分に致命傷になる蹴撃が黒ひげに叩き込まれていく。

「ぐはぁ、がはぁ、ぶはぁ……！」

さらにトウヤが狙いこんで打ち込んでいるところは鳩尾、股間、

関節といった人体的に決して鍛えることができないところ、さらに黒ひげには痛みを引き寄せるといふ弱点がある。徹底的に痛めつけなおかつ逃がさないように壁に押し付けるといふトウヤの策は功を奏したようで、黒ひげは見る見るうちに衰弱していった。

「これで、終わりだ!」

とどめとばかりに、顎に叩き込まれた蹴りによって意識を刈り取られた黒ひげはドオツという重たい音を立ててその場に倒れこんだ。

「はあ、はあ、はあ……………勝ったのか?」

トウヤはそういつつ、黒ひげの意識の有無を体に触れて確認していく。

「ふう……………これで終了か」

何ともあつけない……………。これが未来の凶悪犯罪者か……………?

いささか拍子抜けしつつ、そしてこの程度の相手に自分の平穩を乱されると思っちまったのかと、若干不機嫌になりながらトウヤは海楼石の手錠を黒ひげの手にはめた。

「終わったみたいだな」

「その足についている鎧みたいなのは何?」

そして、いつの間にかやってきていたりリカとロビンい声をかけられ、トウヤは若干驚きながら黒ひげに背を向けた。

こうして……ハンターズが初めて行った実践は、トウヤ
たちハンターズの圧勝という形で幕を閉じた。

…
十
十
……
十
十
…

……はずだった。

「来てたんなら手伝えよ……………」

「お前の真の実力を確かめるのが今回の目的だ。私たちが手伝っては意味がないだろう」

「まあ、そうだが……………」

トウヤがそういいながら、彼女たちのほうへ歩んでいこうとした時だ……………。

パンッ！！

一発の銃声と、一発の弾丸。その弾丸がトウヤの右胸を打ち抜き、その口から血を吐き出させた！！

「トウヤ！？」

「ふむ。無様だな……………」

ロビンの悲鳴とリリカの軽い声を聞きながら、トウヤは驚愕の表情で後ろを振り返る。

そこには凶悪な笑みを浮かべながら銃を構えている黒ひげの姿があった。

「ゼハハハハハ！聖人君子相手にしているんじゃないぞ。相手の命を奪うまで油断をするなよ！！」

そういいながら笑う黒ひげに、医学的に気絶した演技ができるとかどんな人体構造しているんだ……………。

と、若干この世界の理不尽さを恨みながら、トウヤは意識を手放してしまうのだった。

…
十…
十……………
十…
十…

「トウヤー!」

悲鳴を上げ、下に降りようとするロビンを引き留めリリカはミシヤーナとゼロに指示を出す。

「トウヤを妖精のもとに。絶対に死なせるな」

「イエス・マイロード!」

いざとなったらトウヤの援護に行けるようにこの近くに待機していた二人は即座にトウヤの隣に出現。彼をこの国に唯一いる医者のもとへ連れて行く。

「ゼハハハハハ! さあてどうする!? 俺の傘下に入るか!」

黒ひげはそんなことを言いながらロビンたちに近づいてくる。

トウヤを倒した黒ひげに、ロビンは思わず威圧されてしまうが……。

「ゼハゼハうるさい。死ね」

リリカは一切表情を動かさず、拳銃を発砲。黒ひげを容赦なく狙い撃つ。

「うお! お、俺はロギアだぞ! 拳銃はきかねえ!」

「能力が発動できたなら………という言葉がついたらな。海楼石をつけられたのをお忘れかな？」

「俺のヤミヤミの実は特別だ！！海楼石なんかきかねえ！！」

そういつて、黒い煙を展開する黒ひげにロビンは驚愕の表情を浮かべた。こいつももしかしてのトウヤと同じ超能力者なの？と………。

だが、その疑問はリリカの嘲笑で瓦解した。

「裾から見えているわよ？発煙筒………」

「ぐー！！」

今度は黒ひげが後ずさる番だった。よくよく見てみれば黒ひげのマントの裾から紅い棒のようなものが見える。おそらくあれが黒いが無理を出していたのだらう。何とも無様な詐欺であったが、ロビンはそんな詐欺にすら引っかけた自分に激し自己嫌悪に陥った。

トウヤので慣れたつもりだったのに………。

若干ショックを受けてしまい、立ち直れそうもないロビンを放置し、リリカはかちりともう一つの銃の撃鉄を上げる。

「別に私としてはここでお前を殺してもいいんだが………」

「ぐー………」

「やめておこつ」

その言葉に、黒ひげは安堵の笑みを浮かべながら笑い声をあげる。

「ゼハハハハハ！！どうした？俺に惚れてついてくる気になったのか！！」

「調子に乗るなよ小僧」

その言葉を聞き終わった瞬間、リリカの体から凄まじい殺気があふれ出した！！

「うをお！！」

びりびりと肌が震え、自然と鳥肌が立ってしまうほどの濃密な殺気に黒ひげとロビンは委縮する。

な、なんて野郎だ！！この殺気……………まだ健康だったころのおやじ以上だぞ！！

まるで蛇にいらまた蛙のように動こうとしない自分の体を叱咤しながら黒ひげは何とか口を開こうとした。

その時、リリカの弾丸が海楼石の手錠を打ち砕き、黒ひげの能力を回復させる！！

「！？……………ゼハハハハハ！！狙いでも間違えたのか！！闇水くろみづ！！」

そして、能力を行使しようとした黒ひげに向かって飛んだ弾丸が、

容赦なく黒ひげの頬を切り裂き、鮮血をまき散らせる。

問題なのは……黒ひげが感じた痛みが通常の弾丸がかすった時の痛みしかなかったことだ。

つまり……あの弾丸には黒ひげの能力は作用しないということ……。

「な………!?」

そのことに思考が行き着いた黒ひげはここに来て初めて恐怖を覚えた。

痛みが少ないというの彼としては望むところだが、もしも闇穴道ブラックホールや能力吸引が通じないなら………!

「な………なんだ………」

冷や汗を流しながら、自分を傷つけた女の銃口を見つめる。女は特に何の感慨もないといった様子で拳銃から立ち上る硝煙を吹き消し、凶悪にわらいながら口を開いた。

「おまえたち悪魔の実の能力者は《覇気》によって一定のダメージを受けられないか？ 私たち魔法使いが《魔力》と呼んでいるものは、おまえたちが《武装色》《見聞色》と呼んでいる覇気を掛け合わせ、そこに術者本人の精神エネルギーを掛け合わせることで生成される。本来この力は様々な条件や理論を使い奇跡を起こすために使われるんだが………悪魔の実の能力者に対しては絶対的なある能力を持つことができる」

そこで言葉を切ったりリリカは瞬時にそこから消え、黒ひげの前に出現。その顎と心臓に拳銃を押し付け殺気をこぼしながらこういった。

「悪魔の实の能力者の体に魔力を流し込むことによって、そいつの体を数時間の間………ただの人間と同じものになることができるんだよ」

「!?!」

突如として、自分の中の悪魔の力が収束していくのがわかり黒ひげは一気に青ざめる。今まで展開していた闇もその活動を強制的に終了させられてしまい、雲散霧消してしまった。

「ここでお前を殺すのは簡単だけど、これ以上ここで騒いでトウヤの治療の邪魔になるのはこまる……。治療を邪魔された妖精はおつかないからな。だからひいてはくれないか？お前の命と引き換えに………」

「わ、わかった………」

黒ひげのその言葉を聞き、リリカは少しだけ頷くと………黒ひげの体を一撫でする。

するとどういいうわけか、黒ひげが隠し持っていた無数の武器が服から飛び出し、地面にジャラジャラと落ちたではないか!!

「!?!」

「魔法使いにとって武装解除術は必須だぞ？不意打ちできないよう

にこの武器は私が預かる。さっさと帰れ。ああ、あと墓地で眠っているゴミたちも連れ帰れよ。一人死んでいるかもしれないがそれもよろしく。一人でも残したら……………殺すぞ?」

数時間後……………黒ひげが仲間を連れてすごと帰っていくのをしっかりと確認した後、リリカは結界の出入り口をすべて封鎖し、しばらくの間誰も入ってこれないようにした。

…†…†……………†…†…

「う……………ん？」

トウヤはそうづめき声をあげながら、身を起こした。

見たこともない天井……………というわけではない。というか初めてこの村に来た時に凍傷になってしまった俺が運び込まれた場所だった。

「ということはあの妖精の家か……………」

死んだと思ったけどな……………。心臓が完全に打ち抜かれていたし……………。

トウヤがそう思いながら自分の傷の具合を確認していると、部屋の扉がノックされ返事も待たずにリリカが入ってきた。

「おや……………おきていたのか。死んだと思っていたぞ」

「俺自身もそう思っていたよ……………」

サラリと吐かれる毒舌に苦笑を浮かべつつ、トウヤは隣に立てかけてあった自分のコートを手取る。傷は完全に塞がっているし、少し動いたぐらいで開いたりはしないだろう。

「どこかへ行く？今まで瀕死の重体だったんだからもう少し休んで
いったらどうだ？」

「なんだ、やけに優しいじゃないか？お言葉に甘えたいところだが
なあ……………負けてしまった以上契約の履行はしてくれないだろう
？だったらここに用はない。違うやつを探さ……………」

「そおか……………せっかく仲間になってやろうかと思ったん
だが、残念だ」

「そうそう……………負けてしまった俺にお前がついてくるわけ……………
なに？」

いつものように毒舌が飛んできたのだろつと思ひ、かるーく流そ
うとしたトウヤだったが、よくよくリリカが言った言葉を咀嚼して
みると、以外すぎる答えが返ってきていたので、思わず振り返り固
まってしまう。

「そお……………私たちがいらはないというなら仕方ないな。お帰りは
あちらだ？」

「いや、待てお前！！今のはなしだ！！」

「今の話だ？どのお話だ？」

「そんな文字にしてでしかわからないような微妙なボケはかますな
！！そうじゃなくてさっきのお前たちがいらはないというやつだ！！」

「わかっている、そんなことは。相変わらずからかうと面白い男だ
な」

「……………」

完全な無表情でそんなことを言ってくるリリカに、ため息をつきつつトウヤはドスンとベッドにもどり座り込んだ。

「それで……………いったいどうつもりだ？ 負けた俺の仲間になるうだなんて……………。お前はそんな甘い女じゃなかっただろう？」

疑いが含まれたトウヤの視線を、失礼なやつだな！とトウヤにデコピンを喰らわせながらそらし、リリカは指を二本たてた。

「理由は二つ。一つ目、いい加減この閉塞した空間では幻獣種を囲えなくなってきたから。それを解決するにはお前が提案してきた案はまさしく完璧だ。問題はお前の力……………つまりは威光によってあの子たちが守れるかという不安があったんだが、裏・王下七武海の名声と、あのくらいの力があれば十二分にあなたはあの子たちの盾になれるだろうからな。今回の敗北には目をつぶることにした。二つ目、そろそろ私も外に出て研究を再開したいから。私たち魔法使いは総じて世界の真理を解き明かすための研究者だ。ここにとどまって研究を熟成させる時期はもう過ぎた。ぶっちゃけさっさと実践して私の長年の研究が正しかったのか調べたいんだ。《リザレクション》とか《ヘルズゲート》とか……………。というわけで、生傷たえなさそー&戦闘多そう&死体がたくさん転がりそうなお前の近くにいたいというわけ」

「最後の一言は余計だと思っが……………」

トウヤに死体を量産する趣味はない。

「まあ、とにかく、よろしくな船長クルネツト！私の研究のためにせいぜい頑張れ」

「非常に不本意な呼び方だが……………仲間になってくれるなら問題はなにか……………」

とりあえず……………こうしてトウヤは新たな仲間を手に入れたのだった。

そして……………北の海・洋上では。

「ゼハハハハハハハハハハ！！魔力！！魔術！！この話を聞いただけかなりの収穫だ！！これで俺の野望はまた一步前進した！！」

一人の男が高笑いをしていたのだが、トウヤたちはまだこのことを知らない。

ある海上レストラント、暴風の関係性について

イーストブル
東の海にはほんの十年前から噂となっている伝説がある。

グランドラインでもないので、突如として暴風が吹き荒れすべてを破壊していくという伝説だ。理由、発生源、予兆などは一切が不明。

しかし、その嵐に見舞われた人々は必ず口をそろえてこういうのだ。

「あの嵐は生きている！！中に子供がいたんだ！！幽霊のように真っ白な……………不気味な子供が！！」

洋上をさまようその嵐は、幽鬼の嵐とおそれられ人々に恐怖を与え続けているのだという……………。

海上レストラン・バラティエ。

その昔海賊として名をはせた『赫足のゼフ』が船長を務めるこのレストランは世界一がそろったレストランである。

世界一の味。

世界一の戦闘能力を持つレストラン。

世界一血の気が多いコックたち。

後半二つは料理とは全く関係なかったが、今はそんなことはどうでもいい。

のちに『黒足』と呼ばれるサンジを輩出することになったこのレストランだったが、コックたちは特にそんなことを気にした様子もなくいつも通り料理をしていた。

義足をつけた料理長ゼフもその一人。サンジを送り出して一週間たった今でも料理には決して手は抜かず、黙々と料理を作り続ける

その姿はまさしく料理長にふさわしい姿だった。

そんなあるとき……………。

「ゼフ船長!!」

一人のコックが飛び込んできてゼフに飛びついた。

「なんだ騒々しい!!」

料理の邪魔をされて若干いらだった声を上げたゼフだったが……………。

「食い逃げです!!」

その言葉を聞いた彼は、さらに凶悪に細められた。

「おーい。このままじゃパーティが店の備品全部壊しちゃまずぞ」

「ひれを開けー。そこで喧嘩させるぞ」

逃げ回る少年を捕まえようとしたパーティに壊されたテーブルやいすがそろそろシャレにならない量になってきたため他のコックたちが、船の隠し機能の《ひれ》を開きに行く。

そしてコックたちがその機能のスイッチを押すとともに、《ひれ》と呼ばれる隠し舞台が船から吐き出され海上に広い足場を作った。

「おお！！よくやったあ！！」

パーティはそれを見て歓声を上げると同時に、少年の体を殴り飛ばし、その体をひれへとはじき出した。

「おっと………………。危ないじゃないですか。僕だからよかったよ
うなもの、子供に使っていい《暴力》じゃなかったですよ」

木製とはいえそれなりに頑丈な椅子や机を素手で叩き割るパーティのこぶしを食らいながら平然と立ち上がる少年に、コックたちから若干の歓声が聞こえた。

「おお……………あのガキけっこうやるぞ」

「やっぱり副料理長じゃないとだめなんじゃないか？」

「ばか……………サンジはもういねえだろうが」

「でもパーティじゃんだか、力不足に感じるんだよなあ……………」

船内から聞こえてくるコックたちの感想に、パーティの額に青筋が浮かぶ。

「うるせえ!! あんな小僧がいなくてもこの船の平和はおれが守って見せる!!」

そんな怒声とともに、パティが少年に殴りかかる! しかし、少年は不敵な笑みを浮かべて右手を前に突き出した。

「風圧弾丸…………… 蛮風!!」

瞬間、少年の手のひらからせん状の小型竜巻が発生、パティの体を容赦なくうちぬいた。

「!!」

「能力者か!？」

突然吹き飛んだパティを見て、コックたちは驚愕のあまり口を嘩然と開き降りてきたゼフは鋭く目を細めた。

この海で一週間たたないうちに二人もの能力者に会うとはな……………。今週は厄日か何かか?

そんなことを考えながら、ゼフは偽足がコツコツ鳴らしながらひれへと出てくる。

「ああ、ここの船長さんですか? その人の介抱はちゃんとしたほうがいいですよ。結構な強さで心臓と額を叩きましたからしばらくは意識は戻らないでしょうし……………」

「そんなことはどうでもいい。うちのコックたちは無駄に頑丈だか

らな。そのうち勝手に目を覚ますだろう」

「えっと……………とりあえず言わせてもらいますと、どんな人体構造しているんですか？」

微妙に冷や汗をかきながら少年は再び右手を突き出した。

「どれで、次の相手はあなたですか？」

「まあ、食い逃げを許すわけにはいかねえからな」

「許してくれませんかねえ……………餓死しそうないけな子供を一人救ったと思って」

その少年の言葉に、ゼフはようやく少年の姿に気づいた。ぼろぼろになって服の役割を果たしていない布切れを何重にも重ねて何とか体を覆っている少年の体は、ひどくやせ衰えており服の隙間から覗いている手は骨ばっている。

どうしてこんな客を通したといたいところだったが、この船のコックたちの感性は基本的にずれているのでそれについては何も言わないゼフである。

とにかく、餓死しそうだったということは本当のようだ。今も食料を食べたばかりのためか、腹に収めた食物がきちんと栄養になっておらず、足元がおぼついていない。これでよくパーティから逃げ切ったものだ。

だが……………。

「そういうわけにはいかねえ。ここに飯を食いに来てくれる客はきちんと金を払って飯を食っていく。お前だけ特例を認めちまうとそのお客たちに申し訳がたたねえ。だから……………」

ゼフはそれだけ言うと、っすつと腰を落とし、サンジに教えたケリの姿勢をとる。

「金は置いていけ」

少年は無言で手から無数の空気の弾丸をはなつ！しかし、ゼフは腐っても《赫足》と名をはせたなだたる猛者だ。少年の狙いがかなり粗いことを先ほどのパーティとの戦闘で気づいていた。おそらくこの少年は戦闘なれをしていない。悪魔の実の能力を持っているとはいえこれではただの宝の持ち腐れだ。

ゼフは義足だとは思えない速さで少年との距離を詰め、その喉元に義足によるけりを叩きこんだ！

「があー!!」

喉がつぶされたかのような激痛に、少年は涙を流しながら膝をつく。

「うあ……………」

「さあ、金を置いていけ」

「はははは……………ないぞでは振れないっで言葉を知っていますか？」

目元に涙をにじませながら、少年は床に手をつく。

瞬間！！少年の体を守るように竜巻が展開！！ゼフをはねのけ少年との距離を無理やり開けさせた。

「ああ、くそ！！ここを襲ったのは失敗でしたかねえ。普通の村だったらまだ皆さんビビッてすぐに食料を渡してくれるのですが……」

「お前……………最近噂になっている生きた嵐か！？」

竜巻の中で、せき込む少年を見て、ゼフ八ようやくここ最近噂になっている竜巻の話の思い出した。

少年の歳は大体十五歳ぐらい。だとするならば、この少年は五歳のころからこんな生活を送っていたことになる。

「ええ。ちょっとした事故で悪魔の実を食べてしまいました……………能力を発動する自分を見て怪物といいながら両親は僕を捨てました。当然他の人が僕のことを預かってくれるわけもなく、飢えをしのぐためにこんな事をするしかありませんでした。でも、最近海軍に目をつけられてしまったみたいで、村を襲えなくなってしまったんですよね。村の人に被害がでないように気をつけていたのですが……………とことん僕は付いていない」

まあ、今更そんな事を言っても救われることはないのですけど……………少年は自嘲気味の笑みを浮かべながら、何とか立ち上がる。

「今回の食い逃げの件は本当にすいませんでした。ここに来たら飢えている人なら食事を必ず出してくれるコックさんがいると聞いたのでやってきたんですが、当てが外れてしまったみたいです。です

が先ほど言ったように無い袖は振れません。申し訳ありませんが天災にでも襲われたのだと思ってあきらめてください」

そう言う少年の周りを取り巻く竜巻の威力が見る見るうちに上がっていく。そのうち少年の体は浮き上がり始め天空へと上がっていった。どうやら今までこういう風にして海を渡っていたようだ。

「では……………さようならお強いコックさん。本当にすみませんでした」

少年がそう言って船から離れようとしたとき！

「待ちな！…！」

形状的に風の守りが薄くなっている竜巻のしっぽを貫いたゼフが、竜巻の中に侵入！少年の股間に偽足を叩きこんだ！！

「くぺ！？」

断末魔にしてはあまりにダサイ悲鳴を下ながら、少年は竜巻の制御を失い再び船へと落下。股間を抑えた姿勢のままヒレへと叩きつけられた。

「ふん。食い逃げ犯を黙って見逃すほどおれたちは甘くはねえよ」

その隣にスタツと着地したゼフが鼻を鳴らしながら、コックたちにあるものを取りに行かせる。

「ぼ、僕をどうするつもりですか……………」

若干顔色を悪くしながら、少年は涙目でゼフにそう尋ねる。

今までの経験から、捕まってしまった以上ろくなことにならないことを知っているのだ。

ああ……………短かったなあ僕の生涯。このまま獄死でもしちゃうのかな？村をけっこう襲っちゃったし悪くすれば処刑かも……………。

と、少年が目をつぶり、あきらめきつた顔でゼフの沙汰を待っている……………。その頭に何やら清潔な、洗剤のにおいがする布地の何かがかけられた。

「は？」

少年があわてて目をあけると、自分の頭にかかっているのは真っ白な下働きのコック服だった。

「金がねえなら働いて返せ。お前が出した被害と損失を考えて大体半年間ただ働きをしてもらうからな」

「ど、どうして……………」

「なにがだ？」

信じられないものを見るような少年の瞳に、ゼフは首をかしげた。

「だって……………僕は怪物なんですよ？親にも見捨てられた怪物なんです。そんな僕を働かせるなんて……………何を考えているんですか！？」

そう言って、大声を上げる少年のほほを、ゼフは義足で容赦なく蹴り飛ばした！！

「ぺぷ！？」

「いいか小僧！！ここにいる奴らはまともなレストランでは働けないような荒くれ者どもだ。今更悪魔の実の能力者が一人増えようがビビるような肝っ玉が小さなやつは一人としていない！！そんなことよりも、俺たちにとっては料理人のプライドをこげにされたことのほうが何よりも悔しいんだ！！俺の目が黒いうちは悪魔の実の能力者たるうがなんであるうが、食い逃げは決して許さん！！」

少年はその言葉を聞き、大きくうなづいているコックたちを見て………涙を流しながら頭を床にこすりつけた。

「あ、ありがとうございます！！」

とても乱暴だったが、とても粗雑ではあったが、このコックたちは初めて少年のことを人間扱いしてくれたのだ。今まで怪物とさげすまれてきた少年のことを………。

「小僧………お前、名前はなんていうんだ？」

「ぼ、僕の名前は………ロレン。レスター・D・ロレンです」

こうして、バラティエの新たな名物となる《暴風少年》がこの船へと乗り込んだのであった。

ある海上レストランと、暴風の関係性について（後書き）

ゼフのキャラがわからない……………もうといい感じの話になるはずだったのですが、作者の執筆力が足りずにこういう事態になりました。

ご感想募集……………というか苦情を募集しています。

何度読み直しても駄作くさいこの話の改善のために、お力をお貸しください！！

19話

「海上レストラン？」

「ああ……………次の目的地はそこだ」

「よかつたら理由を聞かせてもらえる？」

トウヤが作った機械たちが順調に船を航行させる中、船室でだれていた……………もとい、リラックスしていたロビンとリリカに、トウヤは唐突にそういった。

何か理由があるんだろうと思いなにも聞かないリリカと、あからさまな不信感を浮かべるロビン。どうやらロビンにはいまだに信用されていないようだ。

「もちろん。噂に名高い海上レストランバッテリーの味を確かめるために……………」

「あんまりほらを吹いていると本気で船から降りるわよ」

「半分本気だぞ……………？」

ロビンのセリフに薄い笑みを浮かべて肩をすくめるトウヤにロビンは諦めたように嘆息した。仲良くなれたのか、仲が悪くなったのかはかなり微妙なところだったが今はそんなことはどうでもいdarう。

「組織を作る上で必要なことはなんだと思う？人材？金？土地？信

用？確かにどれも必要だが、本当に必要なのはたったの三つだ。ト
ップのカリスマと、金と、美味しい飯！！」

「前の二つはまだわかるけど……………最後の一つは必要かしら？」

「じゃあきくがロビン！お前は毎日毎日代わりしないような地味
な料理を食べ続けて人は活力がわくと思うか？わからないだろう！？」

「暗に私の料理が変わり映えしないといたいのかしら……………」

「まあ、否定はできないな。血だけ吸っておけば生きていけるヴァ
イと違って、私たちは毎日違う料理を食べないと飽きてくるし……
…………。東西南北の海に散ったあの子たちのためにも、おいしい料理
を作れる人が来てくれるのはありがたい」

普段とは違い熱弁をふるうトウヤ。

若干青筋を浮かべてトウヤの首を絞め始めるロビン。

そんな力オスをしり目に、リリカもこの意見に賛成した。

「それに人の活動基盤は食事から始まる。朝からおいしい朝食食べ
て、おなががすいたらおいしい昼食。そして疲れた夜には豪華なデ
イナー。そんな風に世話をしてもらえら組織に入る人も増える
だろう。トウヤの意見は間違っていない」

「でも、その人たちはかなり頑固だと聞いたわ。そんな人たちが
らどうやって引き抜きをするつもりなの？」

リリカの補足説明によろやく納得したロビンは、若干顔色が悪く

なっているトウヤにそう問いかけた。

「まあ、なんとかするさ。所詮はただの頑固おやじ。世界政府より厄介な交渉相手ではないだろう」

トウヤはそいつって、煙草に火をつけ自信ありげに笑ったのだが……。

「帰れ!!」

交渉のテーブルについた途端、出てきた料理長ゼフに言われた言葉に思わず顔を引きつらせることになるのだった。

…十…十………………十…十…

時間は少し前までさかのぼる。特に何事もなく航海を終えたトウヤたちは海に浮かぶ魚型の船を見つけた。そう、海上レストラン・バラティエにたどり着いたのである。

「あれが海上レストランバラティエ？」

「ずいぶん変わった形をしているな……………」

「輸血パックは置いてあるのかトウヤ？」

「吸血鬼用のレストランじゃないからおいて無いと思うぞ……………」

さすがに船から移るといふこともあり、今までリリカの影にもぐりこんでいたヴァイも姿を現し、トウヤたちは船を接舷しバラティエに乗り込んだ。

「いらつしゃいませ」

そういつてトウヤたちを出迎えたのは原作のようにコックではなく、きちんとしたウェーターだった。

「あれ？ウェーターは全員逃げたって聞いたんだが……

……」

「……よくご存知ですねお客様？しばらく前からここで下働きをさせていただいてします、レスター・D・ロレンと申します。当店のコックは職人堅気で気難しい方が多いので、一般の方についてはこれないんですよ。だから私が接客をさせていただいている次第で……」

見事に悪印象を与えることのない言い訳をしつつ、ロレンと名乗った真つ白な少年はトウヤたちをテーブルへと案内した。原作と同じようになかなか繁盛しているようで、にぎやかに談笑しながら食事をとる人々が印象的である。

「ではお客様。メニューはこちらに。お決まりになったらそこに設置してあるベルをお鳴らしてください」

そういつて、全員の椅子を引いて立ち去るロレンに口笛を吹きながら、トウヤたちは席へとついた。

「なかなかできるウェーターが入ったみたいだな」

「でも、人数が足りていない。さっきからあいつ、独楽鼠みたいに走り回っているぞ？」

「でも楽しそうだね」

トウヤの好印象の感想を聞いたリリカは、メニューをガン見しながら評価を付け加える。そしてロビンはわずかにほほ笑みながら楽しそうに仕事をするロレンを評価した。

「にしてもDの一族か……………いろいろと問題を起こしそうなやつをウェーターとして雇っている」

だてに長生きしていないヴァイはそんなことを言いながら、手元に置いてあった水をがぶ飲みした。

「ヴァイ……………それ、フィンガーボウル」

「げー？」

……………だてに長生きしている吸血鬼だった。

そしてしばらくの間料理にしたづつみをつつたトウヤは、他の仲間から合格点をもらったこともあり喜び勇んでゼフとの交渉に臨んだのだが……………。結果はあれである。

「えつと理由をお聞かせいただいてもよろしいですか？」

「理由？わからねえのか。おれたちは料理人だ！戦争するための兵隊じゃねえ！！」

「ですから、前線に出ていただく必要はないですし、うちのギルドはあくまでトレジャーハンターの互助組織です（表向きは）。あな

た方はうちに加入してもらってわが拠点でおいしい料理を作りたいただだけでいいのです!!」

「だとしても御免こうむる。おれたちは長年ここで働いてきた。どこにもなじめない荒くれ者のコックたちもここを頼ってきてくれるものも何人もいる!!おれたちはここを離れるわけにはいかない!!」

「でしたら、ここにいるコックを何か紹介してくれるだけでもかまいません!!加入は形だけで、あなた方は今まで通りの仕事をしていただいで結構ですから……………」

「それも断る!!ここにいる奴らはまだまだひよっこばかりだ!!そんな奴らを、バラティエの名を背負わせて表に出せるわけがないだろう!!」

喧々諤々とした議論を繰り広げるトウヤを見て、ロビンは目を丸くしていた。

「あのトウヤが説き伏せられないなんて……………珍しいものを見たわ」

「まあ、頑固親父にはあいつが得意とする《利益を盾にした交渉術》通じないからな。理論ではなく感情で語る人が多いし……………。まあ、あいつにとってはいい経験だろう」

そんなロビンに解説を加えつつ、とくに興味もないといった風体で追加した料理を食べるリリカとヴァイ。

「そんなこと言ってないでこの爺を口説き落とすを手伝ってくれよ。」

無駄に年取っているわけじゃないだろう、魔法使い、吸血鬼!！」

「誰が手伝うか。私は料理を楽しみたいんだ」

「すいませ〜ん。トマトリゾットおかわり」

「は〜い。只今」

そんな取りつく島もない二人の答えに、トウヤは頭をかかえる。

なんとも冷たいクルーたちである。

まあ、それはともかくとして……………。

「はあ……………わかりました。ここでの交渉はあきらめます」

トウヤはそう言って、肩を落としながらメンバーが座る椅子へと帰ってきた。

「あら……………意外と引き際を心得ているのね」

「こつ見えても交渉できる奴と交渉できないほど馬鹿な奴の見分けぐらいつけられる」

「負け惜しみ?」

「……………つるさい」

否定しないところをみるとどうやら本気で負け惜しみだったようだ。トウヤにも苦手な人がいるんだあ

とちよつとだけ感心しながら、ロビンは出されたトロピカルジュースをストローで飲み干す。

だが……………。

「それで、まさか本気であきらめるの？」

「まさか……………ここでしばらく滞在する許可をもらった。その間に足元から崩していくぞ。何人かのコックを金で引き抜く。手伝え」

まあ、トウヤだし……………ただでは転ばないわよね。

ワイングラスを傾けながら血のように赤いワインを飲み干す洞爺の瞳には闘志の炎がちろちろと踊っていた。珍しい。あのトウヤが本気でやる気を出しているようだ。ロビンはそのことに若干驚きながらも、そこまでして仲間に引き入れる必要があるのかと首をかしげながらも、宿泊のための荷物と、船のもやい綱をしっかりと結びに行くのだった。

…
…
…
…
…

その日の夜……………。

「なんだ、眠れないのか？」

「魔法使いは寝ないんだ。知らないのか？」

きれいな満月をつき世を眺めながら甲板でワインを飲んでいたり
リカに普段着のトウヤが歩み寄ってきた。その手にはグラスが握ら
れており、ご相伴にあずかりに来たのだということがわかる。

「そうだったのか？知らなかったな。おれをこの世界に送り込んだ
陰陽師は一日50時間寝ないと生きた心地がしないとかいっていた

ぞ？」

「その人時間跳躍の術でも使えたの？」

若干笑いながらそう返してくるリリカの隣に座り、煙草を差し出すトウヤ。リリカは特に何のためらいもなくその煙草を受け取り、その先端に火をつけた。

「ヴァイはどうした？」

「寝てる」

「吸血鬼なのか！？」

「あいつは昼行性の吸血鬼だからな」

「それはもう吸血鬼じゃないだろう………ギャグの世界にいる何かだ」

「はっ、そうかもしれないなあ。で、わざわざ私がおきだすのを待ち構えて、何がしたかったんだ？」

「……………気づいていたのか？」

「当たり前だろう。部屋の中で完全に気配を殺しながらこつちを窺っているんだ。何か聞きたいのだろうと思うの当然のことだろう？」

「気配を完全に殺した人間の視線がわかるのか……………」

「年の功をなめるな小僧」

不敵にそう笑いながらワインを掲げてくるリリカに、敵わないと言わんばかりに頭をかいた後、トウヤは真剣な声を出す。

「おまえはどうやってこの世界に来たんだ？魔法使い……………」

トウヤの突然の問いに、リリカは若干目を見開いた後、苦笑交じりに言葉を紡いだ。

「何の話？……………といっても通じなさそうだな。どうして気づいた？私が外の世界から来た人間だって」

リリカはそう言いながら、肩をすくめる。リリカの肯定のセリフに、トウヤは眉をしかめた。

「フロントロック式のピストルが主流のこの時代に、リボルバーやオートマチックの銃を持っているやつがいるわけがないだろう。第一魔法使いというところからして怪しかった。ミス・ゴールデンウイークあたりがそれ臭い技を使っていたが、完全に魔法だと断じたのはお前が初めてだったからな……………おまえに、お前から漂ってくる雰囲気、あのうさん臭い陰陽師のにおいにそっくりだ」

「最後のは理論的ではなかったけど、まあ許してあげるわ」

トウヤの言に苦笑を浮かべながら、私もフロントロック式に変えたほうがいいか？と自分の銃を取り出し弄ぶリリカを見てトウヤはため息をついた。

「で、いったいどこから来たんだ？アクセルみたいに転生か？」

「……………初めて言うておくが、私はこの世界が漫画化されている世界があるなんてこれっぽっちも知らなかったぞ。お前に教えられて初めて知った。私がここに来たのはただの偶然。新しい魔法の実験していたら次元のひずみに飲み込まれてしまったな……………。家族もヴァイだけだったから、まあ帰らなくてもいつか、といつてとどまったのが私の始まりだ。そのあと、村の人にいじめられていた幻獣種の子供を助けてあの村を作ったんだよ」

「以外と普通な理由だな。たした情報がなくて損した気分だ」

仮にも異世界からの訪問者のくせにやってきた理由が事故とか普通に笑えない。

「知ったことがそんなこと……………。勝手に何か御大層な理由があるんじゃないかと勘繰ったのはお前だ」

「ということは原作知識も？」

「この世界の漫画がないのに知っているわけないだろう。まあ、知らないほうがいろいろ楽しめると思っではいるがな？」

珍しく穏やかな笑みを浮かべ、ワインを飲み干すリリカに苦笑を浮かべつつ、一応万が一の事態を考えてアクセルと同じ疑問をぶつけてみる。

「まあ、いい。じゃ一応聞いておくけど、二次創作とかにありがちな……………ハーレムを作つてやるぜ！とか、やべえおれ、TUEEEEEEEEEEEEEEEEEEE！！とかやる気はないんだな？」

「何だそれ？そんなバカなこと考えるやつがいるのか？」

心底さげすんだ瞳でトウヤを見つめるリリカ。どうやら真剣にそういった類のことが嫌いなようだ。

「一人知っている」

「名前を教える。殺しに行つてやる」

「ま、まで、違う！！そいつは真剣にこの世界の事を考えているから！！ただ、転生者つていうところがおんなじだというだけで……」

「なんだ。紛らわしいこと言つてんじゃない！！」

「……まあ、いいけどな」

なぜか逆ギレされてしまったトウヤは多少疲れた顔になりながらも、なんとかリリカの怒声を受け流した。

「で、それが分つたところでお前ははどうしたいんだ？異世界からきた超能力者」

「ああ？……まあ、そういわれると別にどうこうしようつて考えはうかばないが」

原作知識のない異世界人なんて、電気がないところにある豆電球よりも役に立たないだろ。と結構失礼なことを考えつつ、トウヤは何とかリリカに頼むことを見つけ出す。

「まずあなたにはうちの組織の入ったやつらに魔法を教えてほしい。最低限魔力が生成できるように鍛えてほしい」

「別にいいが………私の世界では魔法って才能によるところが大きいものだったから、ものにならない奴のほうが多いと思うぞ」

「そっちはおれが超能力開発のカリキュラムを組んで能力を発現させる。仮にも海軍と張り合って四つの海を統治しようなんて考えるんだ。半端な鍛え方をしたらおれたちの命が危ない」

なるほど。とトウヤの言葉にひとまず納得した後、リリカは再び首をかしげた。

「それはいいんだが………前々から思っていたんだが、どうしてお前はそんなに組織を作ろうとしているんだ？」

「ん？」

月夜にたばこの煙をたなびかせながら、今後の計画をくみ上げていくトウヤの言葉を、リリカの質問が遮った。

「お前の目的は頂上戦争の結果の改編でしょうか？ だったら仲間を集めるだけで十分に変えられそうじゃないか。この前戦った黒ひげも大した手ごたえはなかったし、そんなに怖がらないといけない相手でもなかったと思うが」

「油断は禁物だ。原作ではあいつは二つの悪魔の実の能力を使いこなしていた男だ。きつとまだ隠し玉を持っている。それに対抗するために、でかい力を持つておくにこしたことはない」

「ふうん」

「それにおれは白ひげとエースを生かそうとしているわけだ。裏王下七武海に入ったのは、わざわざ白ひげたちと一緒に戦端を切り開いてエースのところまで行くというハイリスクな真似をしなくても、海軍の仲間に行ったんだった後、エースを処刑台の足元で守っていたほうが簡単に助けられると踏んだからなんだが……………」

「意外とえげつないことを考えているんだな……………」

平然と海軍と世界政府を裏切る算段をしているトウヤのセリフに半眼になりながらリリカは先を促した。

「さてここで一つの疑問が浮かんでくるわけだが……………そんな事をしたやつを、果たして世界政府と海軍は許してくれるだろうか？」

「……………ないな。洋上で私たちの船を見ただけでバスターコールが発動される可能性も十分にあるし、下手をしたらゴールド・ロジヤー以来の大粛清のあらしが巻き起こる可能性がある」

「それを防ぐための大組織設立だ。いま世界の均衡を保っている三大勢力とためを張れる大組織の長に収まれば、あちらさんもそう簡単には手を出してこないだろう。しかも、この組織は海賊の組織ではなく民間人を助けるための慈善団体という側面も持っている。海軍や世界政府も、四皇たちのおれたちのことを絶対悪だと断じることができない。民間人たちがかばい立てしてくれたらなおのこといい」

「なるほど……………。つまりお前が作っている組織は、お前が海軍を裏切った後の盾にするための組織だ」と

「裏切ったあとが一番危険だからな。保険の一つや二つ、用意しておくのが定石だ。情報操作戦もこの前やってみたら圧勝できた。後ろ盾があればまさしく盤石。もちろんお前の前で言ったことも嘘ではないけどな」

平然とそんなことをのたまうトウヤにため息をつきつつ、リリカはその鼻をつまんだ！

「ひゃひすふんだよ!?!」

「うっさいバカ。よくも騙してくれたな。何がゾオン系能力者に平穩をくれてやるだ。思いつきり保身のための組織作りじゃないか!?!」

「いいだろう別に!?!その過程でゾオン系能力者たちに平穩をくれてやることができるんだから!?!」

「それはわかっているけど、でも情的に納得できないんだよ!?!」
身勝手な奴め!?!とトウヤが悲鳴を上げたが、彼にそんな事を言う資格はないと思う。

「じゃ、じゃ……………船を降りるのか?計画が滞るから、降りられると困るんだが」

「馬鹿を言え。乗りかかった船だ。最後まで付き合っさ。ただし……………」

その言葉と同時に、ぬかれた拳銃が、即座にトウヤの額と心臓に

突きつけられ安全装置が外される。

「契約の履行ができないようなら、すぐに殺すから、そのつもりでいろよ?」

「ああ……………あんたを仲間に入れると決めた時からそのことは理解しているよ」

拳銃を突きつけられ殺される寸前だというのに、豪胆に煙草を取り出しそれに火を付け不敵に笑うトウヤを見て、リリカは静かに笑った。

「お前がが目的を違えぬ限り、私は永遠の忠誠をあなたに誓おう」

「なんだそれ?」

「知らないのか。魔法使いは言葉に縛られる」

「おおっと、いいこと聞いたな。じゃあゼフの爺サンとの交渉を代わってくれるように契約を……………」

「調子に乗るな?」

そして容赦なく放たれた弾丸に食い殺され、トウヤは絶命した。

数分後、甲板で目を覚ましたトウヤは、へらへら笑うリリカと血で真っ赤に染まった甲板を目撃することになった。

リリカが言うには、ネクロマンシードを極めた人間は死後五秒以内の人間だったらどんな傷も元に戻して完全復活させることができるらしいのだが………それがあつたとしても、あのツツコミはな
いんじゃないかと思うトウヤだった。

閑話休題・・・とある会議場にて

世界政府中枢部。

そこに設置された巨大な会議室で、五人の老人たちが集まり会議をしていた。

議題は最近勢力を伸ばしてきた、総合ギルド・ハンターズ。

トウヤが放った桃源郷の住人達は、あらゆる地方へとび散り直実にその根を張っていた。

そこで困ったのは五老星だ。わざわざ海賊の力まで借りて王下七武海などというふざけた組織を作ったのに、こんな新進気鋭の組織に三大勢力並ばれるほど大きくなられては困るのだ。せつかくなるとか保った世界の均衡が崩れてしまうことになる。

「くそ……………しかし手を出すわけにはいかんぞ!? どういうわけか、いつもはきちんと言ったことを聞く新聞社のやつらがハンターズのことになると一切いうことをきかん!!」

「おまけに表立った罪も犯していないしのお……………。近隣の海賊を吸収しておることが唯一罪といえば罪じゃが……………」

「完全に改心した海賊も多いと聞く。おまけにそいつらが一般の街の治安維持にも協力しておるせいで民からの人気もうなぎ上りじゃ」

「サイファーボールCPは何をしておるのじゃ!!」

「は、はあ……………それが今CP9のジャブラ、フクロウ、クマドリを潜入させているのですが、いまだにやつらの信用を失墜させる情報は握れていません。フクロウに至っては正体不明のヒトヒトの実の能力者に捕まったうえで、無傷で解放されて送り返される始末で……………」

怒り狂った五老星に尋ねられ、CP9の長官をしているスパンダムは冷や汗を流しながら頭を下げている。

仮にも世界政府最強の裏組織があつさりと一蹴されたと聞き、五老星の顔から血の気が引いた。

「くそ……………どうなっておる。これほどの事態はあのイササギ・トウヤと交渉をした時以来じゃぞ」

「あ奴には完全に手のひらでおおらされてしもつたからなあ……………」

「とくに、新聞にやつのが就任の記事が事細かに記されてしまったところは痛かったのお……………あれさえなければ今まで通り暗殺でもしてなかったことにしたのにお」

本来、トウヤの裏王下七武海参入は、海軍・世界政府・七武海の中のみ知らされる、文字通り極秘事項のはずだった。

それは五老星が狙った、裏でも使える新たな手駒を作るという意味でも、前回の会合では話されなかった『代替物を用意することによって、《いつでも交代させることはできるんだぞ》と水面下で王下七武海を脅し、七武海の手綱を取りやすくする』という狙いのためには必要なことだった。

そうしなければトウヤが暴走した時に暗殺という手段が取れなくなってしまうからだ。

そして、そんな裏事情まみれの人物をを表に出してしまっってはろくなことにならないということは、トウヤに『前時代的』と揶揄された五老星であつてもわかつていた。

しかし、トウヤはひそかに買収した新聞社を使いあっさりとそのことを暴露。トウヤに暗殺の手が差し向けられる危険性を排除すると同時に、トウヤに社会的名声を与えてしまう………どこるか！裏王下七武海という新組織発足の布石になつてしまつたのだ！！

「げに恐ろしき男じゃ……………。あれほどの才気、敵でなければ諸手を挙げて次代の五老星へと向か入れたというのに……………」

「いまさら、あ奴のことを惜しんでも仕方がない。いまはハンターズのことじゃ」

「いったいどうしろと！？先ほども上がったように、八方ふさがりではないか！！これでは全く手が出せん！！」

会議室に重たい沈黙が下りる。

そんな空気が続くこと数分。重たい空気に、スパンダムが戦々恐々としていた時、五老星のリーダー格の男がようやく口を開いた。

「ウォーターセブンのロブ・ルツチを呼び戻せ。あ奴にはハンターズの内偵をやらせる。ハンターズに振り分けていたCP9はすべてウォーターセブンに回すのじゃ」

「は、はい！！了解しました！！」

ようやく命令が下されたことと、この部屋から退室できることに安堵を覚えながら、スパンダムは転がるように部屋を退室した。

「して…………… ロブ・ルッチでどうにかなると思うか？」

「主こそ忘れていいのか？あの鬼才にできなかった裏の仕事など今まで存在しないということを……………」

リーダーの言葉に疑問の声を上げた五老星は黙り込んだ。

彼が若いころに解決したあの凄惨な事件が浮かんでいた。

燃え上がる真紅の焰を背景に、砲撃を受けてなお毅然として立っている行き過ぎた正義の権化の姿が……………。

閑話休題・・・とある会議場にて（後書き）

大規模な編集を行いました。

まだ直し切れていないところがあれば教えてください。

リリカと意見のすり合わせが終わり、それなりの忠誠を誓ってもらった次の日の夕方。

客が増えてきたということで、バレティエはヒレを開きオープンテラスにして入りきらない客をもてなしていた。

そして、その賑やかなひれの一角に設置されたしゃれた丸テーブルの上で……………。

「くそつたれ……………。どうなっている？」

二日酔いと計画の挫折に頭を痛めたトウヤが、珍しいことに途方に暮れた様子で机に突っ伏していた。結局トウヤのコック買収計画は破たんしてしまったのだ。

理由はゼフの異常といってもいい人望と、金で転ぶような不実なコックがいなかったこと。味方にそういう人材がいたらトウヤは喜ぶだろうが、今は傍迷惑なことこの上ない男気だった。

「どうなっているもこうなっているも、ゼフさんの人望があなたよりも上だったというだけよ」

ロビンの辛辣な物言いに眉をしかめながら、トウヤはロレンに出してもらった頭痛薬を水で流し込み舌打ちした。

「まさかここまで人望が厚いとはなあ……………。いやはや、敵ながらあっぱれ。男色の気を疑ってしまうよ」

「交渉戦で負けたからっていわれのない中傷をするのはよくないわよ」

「軽いストレス発散だ。軽く流せよ。それにしてもバラティエが入ってくれなかったのは痛いなあ……………あいつらの料理は結構楽しみにしていたんだが」

基本的に料理に無頓着なトウヤではあるが、やはりおいしいものを食べれるならそれに越したことはないという最低限の美食の思考は持ち合わせていた。

ましてやこれからトウヤは巨大組織の長に収まるのだ。そうなる以上組織の人間のために最低限美味い飯を食べさせてやりたいと思うのが人情だし、食糧の世話もできないようじゃ東西南北の海の統一など到底おぼつかない。

それに、昔自分が所属していた裏組織が給金だけ渡してあとは何もしてくれないという労働条件的には最悪なところになっていたことも、彼をここまでバラティエに執着させる一因となっている。その時は近くにあった食堂で食事をとっていたのだが、その飯がまずいものなの……………。かなり深いところの暗部に所属しているということもあり、あまり表に顔を出すことを許されていなかったトウヤはほかの場所で食事をとることも許されず、泣く泣くその食堂で食事をとり続けたのだった。

そんな悲しい過去を持つているため、いろいろと味覚が壊れてしまった自分はともかくほかのメンバーにはおいしい食事を食べさせてやりたいと思えばバラティエへと交渉に来たのだったが……………

「もうあきらめるかあ……………おいしい食事だけ作れるやつらなら募集すれば集まってくれるだろうし。でも組織の性質上結構荒くれ者どもも集まるからなあ。それなりに自衛ができる奴がほしかったんだが……………」

「そんなことかんがえていたの？」

「あたりまえだ。せつかく雇ったコックが客にいじめられてやめましたなんてお話にならない。海賊の芽を摘み取るという性質上あんまりいいやつばかり集まるわけじゃないし……………。うん。学校でも作って洗脳……………もとい、教育でも施して普通のコックでもやっていけるように性格を矯正するか？でも、そんなことしている予算も時間もないしなあ……………」

バラティエの参入は結構重要なことだったらしく、色々と計画の変更を考えるトウヤを見てロビンは肩をすくめる。

ちなみにリリカはがつり二日酔いになってしまっており、現在船でヴァイの看病を受けながら眠っている。

ちなみに、二日酔いはたいいの人間を醜くするが、リリカはなぜかありえないほど色気を放つ存在へと進化してしまっており、長年付き合っているヴァイ以外にはかなり目の毒だったため絶対に船を出ないようにトウヤが厳命していた。

閑話休題。

頭痛に苦しむトウヤを眺めながらロビンが優雅に本を読んでいると、コトリという音ともにロビンの目の前にコーヒーが置かれた。

「注文はしていないけど？」

「長い時間座っておられましたからそろそろのどが渴くかなと思っ
て？」

そんなことを言いながら、微笑んできたのはロレンである。昨日
今日とウェーターとして忙しく動き回っていたロレンだったが、今
は私服を着ている。

「制服はどうした、少年」

「ちょうど半年ほどたちましたからねえ。ただ働き期間が終わって
借金も返し終わったので今日はお昼から休暇がもらえたんですよ。
といってもやることなんかなかったから、ここに暇つぶしに来た次
第で」

お恥ずかしい限りです。

トウヤの質問にはにかみながらそう答えるロレンはともうれし
そうだった。休暇がもらえたことではなくようやくゼフに借金を返
し終わったことがうれしいようだ。

つくづくできた少年である。

「なあ、少年。お前料理ってできる？」

「こんな子まで勧誘するの？」

「藁にもすがる思いだよ」

さすがに情けないとは自覚しているのか、トウヤ自身もものすごい嫌そうな顔をしながらそうつぶやいた。そして、恥ずかしさをこまかすように煙草に火をつける。だが、この時トウヤが掴んだものはわらなどではなく、頑丈な鎖だった。

「ええ。半年働かせてもらいましたから、仕込みの技は大半盗みましたし最近では急病のコックさんとかのヘルプで厨房に入ることもありますよ」

「おお……………!?!」

「あら……………この子、ジョーカーだったみたいね」

そのロレンの言葉を聞きちよつとだけ色めき立つトウヤを見て、ロビンは苦笑をうかべた。

「いやまて……………料理の道はそんなに簡単なものじゃないはずだ……………よく知らないけど。そんな半年でものにできるわけがないだろ」

危うくだまされるところだった。と冷静になったトウヤが苦笑交じりに首を振った時、若干不機嫌そうな声が飛んできた。

「そいつは本当のことだ。こいつはたった半年でうちの料理の技を盗みやがった。たく……………天才っていうのはいるもんだなあ」

そういつてきたのはパティと『極道コンビ』を組んでいる、バラティエの看板コックカルネだった。

「あ、カルネさん！！給仕なら僕がやりますよ！！」

「何言ってるんだ。今日はせっかくの休みなんだから、おとなしく休んでろ」

「うう……………ありがとうございます」

ひどく落ち着かない様子でしばらく給仕をしているカルネの様子を見ているロレンに苦笑しながら、トウヤはゼフ攻略計画の骨子をくみ上げていく。

ぶつちやけ、ロレンを切り口にしてゼフが攻略できないかと考えているのだ。この少年は今や此処の看板少年になっているらしく、きちんとコックたちのことを尊敬しているためコックたちからの人気も高い。

サンジがいなくなつて、表面上は平然としていたゼフだったがやはり少しさびしかったのか、自分のことを親のように慕ってくれるロレンにはかなり好意的だった。

「まあ、確かに切り口にはなりそうだよなあ……………策略家としてのプライドを全部無視すればの話だが」

ガキを利用するとか普通に悪役である。いまさら自分が善人だと言いつ張りつもりはないトウヤだったがやはり少しだけ気が引ける。

「で、どうするの？彼のことを利用するの？」

「ああ……………どうするかあ。あんまりたくないんだけどなあ。最低限仲間にはしておきたいよな。うちの船にもコックは必要

だし……。仲間に来たら脅迫するなり情に訴えるなりしてゼフにきちんと話を聞いてもらつこともできそうだし……。一応明日あたりに打診してみるか？」

こそこそと話し合う二人を見て、ロレンは首をかしげるが、しばらくして何かを思いついたのかどこかへ行ってしまった。

「交渉のテーブルにゼフさんをつかせることはいいけど、今度はうまく説得できるの？」

「そこなんだよなあ……。一応策があるといえはあるんだよ」

「どんな？」

「この船は時代背景的に武闘派のコックが多いんだけど、裏を返せばそうでもしないと海上レストランなんてやっていけないことだ。東の海が最弱の海とはいっても、海賊はそこそこ凶悪だし、この前話したドン・クリークや百計のクロみたいなグランドラインでも十分やっていけそうなのも多い。それを考えるとゼフに戦闘手段を与えられていたサンジの欠番は戦力面ではかなりの痛手のはずだ。実際そのあと何度か海賊を撃退しているみたいだけど、圧勝するときにはゼフが前線に立つときだけで他は結構な被害を被っているらしいし……」

トウヤが話を聞く限り、ほかの客は気づいていないがこのレストランの戦力は確実に落ち込んでいる。あたりまえだ。アーロンパークでは魚人空手の使い手を沈め、その後も目覚ましい活躍を見せているサンジが抜けてしまったのだ。戦力が落ちないほうがおかしいしゼフ自身が戦う機会も確実に増えてきている。

「なんか、最近はロレンががんばっているみたいだけど、あんなガキができることなんてたかが知れているだろうし……ゼフも年だからなあ。このまま船を守っていくのは年齢的に厳しいだろう。そこをきちんとして認識させたいので『俺たちが守ってやれるぜー』という風に交渉を持っていけばさすがのゼフも断れないはずだ。足元見るみたいで仲間になってほしい奴にする交渉じゃないけどな」

「私の時は思いっきり足元見たじゃない」

「……………しかしだ」

「軽く流さないで」

ロビンの若干の怒気をはらんだ死線をかろくながしつつ、トウヤは話を続ける。

「そういう風に交渉を持っていくためにはそこそこ実力を示す必要がある。ここを襲ってきた海賊たちを一蹴できればなおのことよしだな」

「そんなうまいこと行くわけがないじゃない」

「まあ、確かに。そんな都合よく海賊の襲撃があるわけないよなあ」

トヤガ若干のあきらめをはらんだ視線で海の彼方を見つめていた時だった。

「トウヤさん！…ちょっとお聞きしたいことがあるんですけど!？」

再び戻ってきたロレンがへたくそな似顔絵を持ってきたのは。

「ん？だれだこ……………」

そこでトウヤは気づいてしまった。この人物が誰なのか。

まるで保育園児が描いたような、雑かつ独創的な絵ではあったが、眉のあたりに書かれている渦巻で大体誰なのかがわかってしまったのだ。

「ああ……………もしかして、サンジかそれ？」

「はい！！ぼくの憧れのコックなんです！！強くて優しく、飢えている人は誰であろうと必ず助けるといふところを特に尊敬しています！！いつかサンジさんみたいな立派なコックになるのが僕の夢なんです！！」

「ええ……………」

きらきらと目を輝かせるロレンに、トウヤは若干嫌そうな顔をした。確かに認めるべきところは多々あるが、あんな口の悪いスケベコックにはなつてほしくないなあ……………。というのがトウヤの気持である。

まあ、それはともかく……………。

「まずはこいつから攻略していくか」

さて、交渉を始めますか。内心ではすっごく嫌そうな顔をしながら、トウヤはにこやかな笑顔で、

「ああ。もちろんだ。俺はサンジのことをよく知っているぞ（原作で）。俺ほどサンジを知っている人間はいないといっても過言ではないな（大嘘）」

いつものように平然と嘘をついたのであった。

21話

「そこでサンジはこういったんだ。『俺は死んでも、女はけらねえ！』」

「かっこいいいいいいいいいい！！」

トウヤはアクセルから聞いたエニエスロビー編を面白おかしく（知識不足のため7割ねつ造）ロレンに聞かせてやっているところだった。

「あれ……………でもロビンさんってトウヤさんの仲間なんじゃ？」

「同姓同名の人がいるんだよ。いや、世の中は広いよな」

「嘘をつかない……………」

結局、こんな少年をだますのはやはり気が進まなかったのかトウヤの嘘はいつものキレを失いすぐばれてしまうものとなった。気の進まないことはやるものじゃないなあ……………と真理に至った人のような顔をしながらトウヤはロレンから目をそらしながら紅茶をすすする。

「あははは……………。やっぱりウソでしたか。でもいいです。かっこいいサンジさんいっぱい聞けましたし」

そういつて寛大に許してくれるロレンをまぶしく思い、ちよつとだけ自分の汚さに嫌悪感を覚えながら、トウヤは一言だけ言った。

「でもあいつの夢は本当だぞ？」

「オールブルーですか……………」

トウヤの話の初めあたりに出てきた、東西南北全ての海の魚が泳いでおり、あらゆる海の食材が揃うと言われる幻の海。ゼフとサンジが発見を夢見た神秘の海である。

「本当にそんなところがあるんでしょうか？」

「うん。可能性がないわけじゃあない」

「ほんとうですか!？」

トウヤの肯定の言葉に、ロレンはうれしそうに笑う。

「よくよく考えてみる。東西南北の海があるということは四つの海は球体を四等分した感じに配置されているはずなんだ。ということは必ずどこかで四つの海の境界が交差する地点があるはずだ。単純に考えればそこがオールブルーの可能性が高い。その地点にすべての海集約されていることになるからな」

「な、なるほど……………」

「まあ、そんな屁理屈を言ってもない可能性のほうが高いが……………」
……………。その中央線が北極や南極で交差していたら海水の温度が極端に違いすぎるからその地域にあわせて進化した生物しか生きられないだろうし、もしそれが南極や北極じゃなかったとしても、まず間違いなくグランドラインの中にあるだろう。あそこは気候も不安定で水温の変化も激しい。あそこに魚がすめていること自体が奇跡

みたいなものだ」

まあ、生物学者じゃないからそんなこと実際はよくわからないんだけど。

最後にそうつぶやくトウヤに、ロレンは感心した声を上げた。

「博識なんですねトウヤさん。どこでそんなことならったんですか？」

「うん。内緒」

まさか異世界の学校というところで。なんていうわけにもいかずトウヤは煙草の煙でロレンを煙に巻き質問をかわす。

「オールブルーですか……………僕も一生に一度でいいから探してみたいですねえ」

「だったら俺の船に乗るか？最終的には新世界に入る予定だぞ？そのついでに四つの海が交差する地点に連れて行ってやってもいいし」

「えー！あ、いや……………でも、僕まだ修業中の身ですし、ゼフさんの介護もしてあげないといけないので」

あははははは。すいません。

最初に大きく食いついたかのように見えたロレンだったが、最終的に残念そうな笑みを浮かべてトウヤの申し出をやりわりと断った。

まあ、こつなるよなあ……………。

初めから大して期待していなかったトウヤは、気にするなどいわんばかりに手を振りカルネを呼びつけオーダーを入れる。

「まあ、せつかくの休暇に俺の無駄話に付き合ってくれたんだから何かおごってやるよ。といってもお前は食いあきたものばかりだろうがな」

「いえ！！そんな！！気を使っていたただかなくていいですよ！！」

「お、だったらパーティが作った新作料理でも食べるか？あいつにしては珍しく美味い物が作れたらしいぞ」

「いえ、でも……………」

何やら恐縮してしまっているロレンの頭をカルネはポンポンと叩いた。

「ばあか。お前は今までちゃんと働いたんだからこつこつ時ぐらい俺たちに甘えろ」

「……………はい！！」

うれしそうに笑うロレンを見て、カルネはため息をついた。

「どうしたんですか、カルネさん？」

「いや……………サンジもこれくらい可愛げがあったらよかったのになあ、と思っちまってなあ」

そんなことを言っているカルネだが、それなりにサンジのことを
気に入っていたのは周知の事実であるのでロレンは苦笑をうかべ、
トウヤは鼻を鳴らすだけで流した。

その光景を見ているひとりの人物がいるとも気づかずに……………。

…
十…
十……………
十…
十…

「はぁ……………結局交渉は失敗。あゝ頭がいたい」

深夜……………何故か目が覚めてしまったトウヤは酒をもらいにバラ
テイエのキッチンを訪れていた。海賊の襲撃に備えるために誰かが
不寝番をしているとロレンに聞いていったからその人物に酒をもら
いに来たのだ。

だが、そこにいたのは意外な人物だった。

「ん？最近の船長は不寝番を買って出るほど勤勉なのか？」

「なあに。ちょっと目がさえちまってな。酒でも飲もうとしただけ
だ」

「おお、俺と同じか……………」

カウンターに座って酒を飲んでいたのはオーナーのゼフだった。
さすがに今は制服を脱いでおり、ラフな格好でグラスを傾けている。

「じゃ俺もご相伴にあずかるうか。オーナー俺には飛び切りきつい
奴を頼む」

「また二日酔いになるぞ小僧……………」

今朝トウヤが二日酔いで苦しんでいたのを知っているゼフは若干
の呆れとともに酒瓶をトウヤに投げつけた。

「なんだよ……………グラスにして出すぐらいのことはしてくれてもいいだろう」

「営業時間外だ小僧。出してほしいなら営業している時間に頼みやがれ」

そんなことばをかわしながら、二人はしばらくの間無言で酒を飲み続けた。

何とも言えない空気の中、グラスの中で氷がぶつかり合う音だけが響き渡る。時折外からさざ波の音が聞こえ、窓から除く景色では、おぼろ月が海を照らしていた。

「小僧……………ひとつききたい」

「なんだ？」

そんな静かな時間がしばらくすぎた後、ゼフがよつやく口を開きトウヤに話しかけた。

「お前は本当にオールブルーがあると思うか？」

「なんだ、ロレンとの話を聞いていたのか？」

「いいから答えろ。あれはお前お得意の嘘なのか？」

トウヤはしばらく無言になった後、フツと吐息を漏らし酒をあおった。

「嘘じゃない。昼にも言っていたが可能性は十二分にある。仮にも王下七武海だ。グラウンドラインの異常性と………奇跡はよく知っている。オールブルーがある可能性は十二分にある」

「そうか………」

ゼフはそれだけ答えると、グラスをカウンターへと叩き付けた。

「足を失ってから俺はオールブルーへの到達をあきらめて俺みたいな荒くれ者どものコックたちが安心して働ける場所をと思ってこのレストランを開いて、それなりに充実した人生を送ってきた。それで満足していたし文句もない。そんな奴らも大勢いる。奴らにとつてここはようやく見つけた安住の地だ。だが………」

そこでゼフの脳裏によりみがえるのは、泣きながら別れた最初の息子と、苦笑をうかべて自分を介護するといった二人目の息子。

「若い奴らには………この船は狭すぎるのかもなあ」

ゼフはそういった後、しばらくは無言だったが、やがてトウヤのほうを向き直った。

「なあ小僧………お前なら、あいつらに世界を見せられるか？」

トウヤはその言葉に、少し目を見開いた後少しだけ笑って立ち上がる。

「当然。俺はすべてをつかむ男だ。できないことなんて何も無い」

トウヤの言葉にゼフは大言壮語だなと笑い、手を差し出した。

「いいだろう。バラティエはお前の傘下に入ってやる。だが、つかえねえと分かったら即座に切り捨ててやるから覚悟しておけよ小僧」

「……………望むところだクソジジイ」

トウヤは不敵に笑い、その手を取るのだった。

…
…
…
…
…
…
…
…

それから一週間後、

「ぜふざあん。お、おぜわになりまじだあ………………。か、必ずオ
ールブルーを見つけて戻ってきますがらあ、それまでげんぎでい
てくださいよお！！」

端正な顔をぐちゃぐちゃにゆがめながら真つ白な少年はゼフの体
に抱き着いていた。ほかのコックたちもその光景を見て涙ぐんでお
り、パティヤカルネに至っては号泣している始末である。

「風邪ひくなよ」

「はい……………」

ぐずるロレンの背中をたたきそつつぶやくゼフの顔はひどく穏や
かだったという。

「本当にあんな子を連れてグランドラインに入るの？」

「ああ……………世界政府に召集がはいつたからな。仕方がない。なんでも別の王下七武海からの救援要請だそうだ」

自分の船の上でそんな別れの光景を見て煙草を吹かせていたトウヤにロビンは不安そうに話しかける。トウヤはため息をつきながらそう答え、肩をすくめた。

「それにゼフの話だとあいつは能力者のようだ」

「能力者！？なんの！！」

「わからねえ。風を操ることができるらしいんだが……………風のロギアはドラゴンの可能性が高いつてアクセルが言っていたしなあ……………。何か別の能力だと思うんだが」

正体はトウヤ自身も知らない。いつか悪魔の実の凶鑑を手に入れる必要があるのかもしれない。そう思いながら、トウヤは肩をすくめる。

「まあ、次の島につくまでには調べておくさ。少々長旅になるからな。時間はたっぷりある」

「目的地はどこだ？」

下の別れの光景など一切興味がないといわんばかりの態度でベ
チで爆睡していたリリカだが、さすがにそれは気になっていたのか
体を起こしてそうたずねてきた。

「次の目的地は風の海内部。男の理想郷にして女だけの国……………」
……………」

トウヤはそこで言葉を切ると、ちよつとだけ冷や汗をかきながら
忌々しそうな顔をして粒やした。

「アマゾン・リリー。別名女ヶ島。俺の天敵がいる場所だ……………」
……………」

閑話もどきの22話（前書き）

今回は短め……………といつかしばらくは短編が続きます。

ハンコック編はその次に。

閑話もどきの22話

「えっと……これでいいですか？」

「この場合はこうなるのか？結構融通が利かない能力だな」

トウヤとロレンがいるのは彼らの船の甲板の上である。最近になってロビンの勧めで芝生が敷かれたこの甲板で、ベンチに寝転びながらロレンの能力観察を行っているトウヤと、水の入ったガラスコップに能力を使い高速回転させているロレンの姿があった。

「ふつう回転系の能力者は中の水を回すものなんだが……。あくまで回転させられるのは触れているものだけか……。あと能力に関してはオンオフができるみたいだけど、基本的に常時発動型。一方通行の反射に近い効果を持っているな。服や装飾品は唯一の例外といったところか？ロギアでも服とかは能力の影響下にあつたしここら辺は予想通りだが……。」

「どうですか？僕の能力わかりましたか？」

わくわくしながらそう尋ねてくるロレンに、頭をかきながらトウヤはこういった。

「正式名称はわからないけど名前を付けるとするなら《グルグルの実の回転人間》といったところか？触れた物体を回転させたり、動いている物体のベクトルを大きくらせんを描くような軌道へと捻じ曲げることができる能力みたいだな」

一方通行のベクトル操作に近い能力か……。反射みたいに木

原拳法で抜かれることはなくなったが、代わりに汎用性がひどく低くなった感じだ……………。

「ぐ、グルグルって……………もつと格好いい名前ないんですか!?!?」
《ラセラセの実の螺旋人間》とか!?!」

「お前にとってはそっちのほうが格好いいのか……………」

いいじゃないかグルグルの実。グル……………もとい、ゴロがよくて。

「それでこのことはどう鍛えていくの?」

「鍛える……………ですか?」

後ろでその様子を見ていたロビンがそう尋ねてくるのを聞き、ロレンは首をかしげた。

「ああ……………。分けあって俺の船は狙われやすいからな。乗組員はそれなり（王下七武海級）の強さがひつようなんだが……………。あんまり期待できそうもないなあ。防御力は高そうだけど、も…の回転させるだけじゃなあ……………」

その時だ、トウヤの頭の中に天啓が降り立った!

「そうだ。おまえならあれが使えるかもしれない!?!」

「あれ?」

「あれですか?」

首をかしげるロビンとロレンをしり目に、トウヤはニヤリと不敵に笑う。

「またるくでもないことを考え付いたわね……………まあ私には関係ないけど」

船の一室を研究室に改造したりリカは、そんなトウヤをあきれた風な瞳で見つめながらフラスコの中に毒々しい薬品を入れている。

そして、その薬品をがんじがらめに縛りつけ抵抗させないようにしたヴァイのほうへと持っていく、器具によって無理やりこじ開けられたヴァイの口に流し込んだ。

「あなたがいてくれると本当に便利だね。どんな薬を使っても死なないんだもん。治験しほうだいじゃない！」

「ggrrtyppmghtrwdgfs!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

もはや人間では出せないような悲痛な悲鳴が響き渡るのを必死に聞かないようにしながらトウヤはロレンにこつ話しかけた。

「なあロレン……………必殺技ほしくないか？」

「必殺技？ですか……………」

その響きに絵をキラキラさせるロレンを見てトウヤは黒い笑みを浮かべるのだった。

完全なる閑話休題・とある組織の日常

ここは東の海フーイストブルシャ村。そこには新しい村の名物となつた二階建ての巨大な建物『ハンターズ本部兼東の海支部統括局・吾輩なまえはは猫またないである』がある。

この長官は便宜上《動物系・ヒトヒトの実・タイプエルフ》の能力者であるミシャーナ・T・ソウルが勤めていることになっているが、本当のリーダーはイササギ・トウヤである。

このことがばれると世界政府が契約を反故にしてもトウヤを襲う可能性があるということ、本当のリーダーは伏せられているのだ。

この事実を知っているのは元桃源郷の住人たちのみ。それ以外の組織の下の人間はそのことを全く知らないでいる。

「はあ……………別に人間の姿に戻らなくてもいいとは言われたけど、やっぱり気味が悪いわよねえ」

早朝。カーテンの隙間から入り込んださわやかな光に起こされたミシャーナは、身だしなみを整えるためにリリカからもらった鏡の前に座ったのだが、そこに映った鋭くとがった長い耳を見て嘆息してしまった。

組織に人間は順調に増えている。元海賊や賞金稼ぎなど……………
…どちらにとっても定期的に一定の収入が入る組織というのはありがたい存在だったのだろう。利益を求めてやってきた海賊たちは海賊旗を焼却することを条件に入会。今ではいっぱしの傭兵として四

つの海を飛び回っているし、賞金稼ぎたちには腕前に見合った、ハンターズ所属ではない海賊を紹介。その居場所と詳細な情報を渡し、仕事に成功したら賞金の一割を仲介料としてもらっている。

おまけに副業の食堂も大賑わいだった。しばらく前にバラティエのコックと名乗る人たちがやってきてその腕前をふるってくれている。その料理はとても美味しく、あの見た目で美食家を自称するセロですら文句をつけなかつたほどであった。

組織の運営に関しては何ら問題はない。むしろ順調すぎるぐらいだ。今までにないような細かく分けられた無数の部署。それらが不正をしていないか調べる《暗部》。それらのデータを今までの書類とは比べ物にならないほどの速度で処理が行える、トウヤ謹製の《こんぴゅーたー》の活躍も大きい。

このまま順調にいけば、ハンターズは四つの海内だけでいえば海軍を上回る大組織へと成長していくだろう。

問題なのは……………。

「私たち幻獣種なのよねえ……………」

この支部にはミシャーナを含めて約四人の幻獣種たちがいる。その四人はトウヤのつてで紹介されたゾオン系の能力者のおかげで何とか人間の姿に戻ることができたのだが、他の幻獣種たちはいまだに戻れる気配を見せていない。

どうも長い間その姿に慣れてしまったせい、元の人間の形が分からず元に戻ることができないらしい。セロもその一人である。

そのため、各地に散らばった桃源郷の住人たちはいまだに幻獣種の姿のままに活動しているものも多いし、あの町から出ていない住人はさらに多い。

そんな状況のまま自分たちだけが人間の姿でいるわけにはいかないと言ってトウヤにこの姿のままに活動する許しをもらったのだが

.....。

「やっぱり怖がられているわよねえ.....」

ハンターズに入った会員たちはまだいい。もと悪党やそれを討伐していた豪の者たちだ。多少姿が違ってくるくらいで驚いたりはいし、中には悪魔の実の能力者だっている。見た目が違い、多少変わった力を使いこなす程度の存在に怖気づいては彼らの仕事はできないのだろう。

だが近隣住民は違う。彼らはただの一般人だ。そんな人たちに自分の姿を見ておびえないでくださいというほうが無理な話。

自分が入るたびにシンと静まり返る一般人にも開放している食堂の様子を思い出し、ミシャーナは再びため息をついた。

桃源郷だったらいちいち驚かれたりしないのになあ.....。

若干桃源郷のことを恋しく思いながら、ミシャーナは身だしなみを整え朝食をもらうために、食堂へと向かうのだった。

…
十…
十…
………
十…
十…
…

階段からミシャーナが下りてくるのを見て、食堂がしんと静まり返るのを見て、食堂で給仕をしていたマキノはため息をついた。

この支部ができるまでルフィー行きつけの酒場を営んでいた彼女だったが、ハンターズ本部ができバラティエのコックが入ったため客が減ってしまった食酒場をたたみこちらへと就職したのだ。

普通なら食堂をつぶされて恨んでいそうな状況だったが、食堂をつぶしてしまったと聞いた時ミシャーナが泣きながら土下座してく
るのを見てそんな気持ちは消えてしまっていた。

話を聞いていくうちにミシャーナの外の世界に対する知識が酷く
少ないことに気がついた彼女は、ミシャーナの友人として彼女のフ
ォローをしようと、彼女のもとで働くことを決意して食堂で給仕を
やっているのだ。

そんな彼女だからわかるが、今の状況はあまり望ましいことでは
なかった。

悪魔の実際の能力者を差別する働きはフーシャ村内部では全くない。
当然だろう。仮にも現四皇《赤髪のシャンクス》の帰港だったこと
もあるし、最近までゴム人間ルフィーがいたのだ。悪魔の実際の能力
と説明されればいくら見た目が違っても気にするような村人は誰一
人としていない。

実はトウヤもそのあたりを見越してここをハンターズの拠点とし
たのだが、それはまた別の話。

とにかく、村人しかいなかった当初はここまで激しい拒絶はなか
ったのだ。問題なのは人が集まってきた後だった。

ハンターズの本部ということもありフーシャ村はここ半年でかな
り発展した。もはや村というか町といってもいいほどの規模に発展
している。それはともうれいことなのだが、それと同時に悪魔
の実に対する正しい知識を持っていない人々も大量に増えてしまっ
たのだ。

彼らは人と姿が違うミシャーナ達を激しく拒絶し差別した。さすがに彼らはハンターズの幹部であるということもあるので表立って差別する人間はいないが、彼らにたいする蔭口はここで働いているマキノにはよく聞こえてきていた。

「おはようマキノさん」

「おはようミシャーナ。食事部屋まで持っていこうか？」

「いいえ。ここで食べるわ」

気丈にもそう言いながらサラダランチを頼むミシャーナに、マキノは少しだけ微笑んだ後厨房で働いていた中年のコックにオーダーを入れる。

「おお！！エルフの大将！！今回はいい稼ぎになったぜ！！」

「懸賞金の一割はマキノサンに渡しておけばいいんですね？」

「なんだよ大将！またそんな草ばかり食ってんのか？肉を食え肉を！！」

そんなことを言いながら食堂の悪い空気を察知したのか、賞金稼ぎ達がミシャーナの周りに集まり彼女にひっきりなしに話しかけ始めた。元海賊たちは恐れ半分憧れ半分といった様子でミシャーナを見ている。

海賊たちの中には何やら勘違いしている人が多かつたらしく、ハンターズ加入後いつものように略奪を働いた不届きものがいたのだ。

それもハンターズの名前で。

ミシャーナはその海賊団を許すことはせず、一人でその海賊船に乗り込んでいったあと黒こげになり原型すら残していない死体を無数に担いで戻ってく来た。そのあと海軍で無事に監禁された額を調べてみると、それがハンターズの名前を名乗り略奪をした海賊たちだということは誰にでもわかっただろう。

ということがあったので、彼らはどうしてもミシャーナに打ち解けることができないでいたのだ。

まあ、そんなことは今はどうでもいい。

賞金稼ぎ組によって、ようやくミシャーナの顔に笑顔が浮かび口数は少ないながらキチンと会話をしてく。そんな光景にホッと安堵の息をつきながらマキノが食事を持っていこうとしたときだった。

「おっとすまないねえ……………」

「!?!」

突如突き出された脚に引っかかってしまったマキノが転び、料理をぶちまける。

「すまんえな嬢ちゃん。でもあんな化け物に食事を出してやることなんてないわい」

そうやってきたのは帽子を目深にかぶった、ぼろい服を着た老人だった。本当にマキノには悪意がなかったのか、マキノが料理を取り落としたのを確認した後は紳士的に彼女を助け起こしてくれた。

「お嬢ちゃん。あんな怪物のために働くなんてやめなさい。いつ裏切られるかわかったもんじゃないぞ」

その言葉を耳ざとく聞きつけた賞金稼ぎ達や、喧嘩を売られたと理解したハンターズ所属の元海賊たちが立ち上がる。

しかし、老人が一步も引かず立ち上がると、その周りには立ち上がったハンターズ構成員以上の人数が老人の周りに集まり始めた。

誰もかれもがこの町に流れてきた能力者を忌避している人々だ。

「てめえら……………誰に喧嘩売ったのかわかってんのか!!」

「ふん!!化け物に化け物といって何が悪い!!」

「そうだ!!おれたちの村は能力者の海賊《道化のバギー》の壊されちまった!!今はあいつらはおいはらえただけだしんじまった奴だつて多いんだぞ!!」

「能力者なんて怪物ばかりじゃねか!!なんでそんな怪物たちをかばってんだよ!!」

人々の怒声と構成員たちの殺気がぶつかる。マキノはそんな光景を黙って見守るしかなかった。これが前まで営んでいた酒場の喧嘩だったらまだ対処できる。だがここはパーティーにも使えるような巨大な食堂だ。喧嘩をする人の腕も規模も違いすぎる。マキノではもう止められない。

一触即発。

そんな空気が食堂内に立ち込めた。そんな時だった……………！！

「やめなさい！！」

ミシャーナの怒声が食堂を席卷し、喧嘩寸前ということ騒がしくなり始めていた食堂を一瞬で黙らせた。

ミシャーナの言葉には力がある。その言葉はどつやら本当だったようだ。

マキノがほっと安堵の息をつくとどうじに、ミシャーナは立ち上がり構成員たちを無理やりさがらせる。

「今回はこちらの落ちどです。この方たちを傷つけることは私の名前を持って禁止します！！」

「な！！でも大将！！」

「だまりなさい。わたしの命令がきけないのですか？」

「つく……………」

ミシャーナはそう言って構成員たちを黙らせると、先ほどから殺気立った視線を向ける人々にすつと頭を下げた。

「不快な思いにさせてすいませんでした。ですが、わたくしたちは決してあなたたちがあ思うような非道なマネはいたしませんの……………」

……………」

しかしその言葉の途中でミシャーナの頭に老人が持っていたビールがぶちまけられた。

「怪物が……………謝罪ができれば人間になれると思ったか!!」

老人がそう言って食堂を出ていくのを見て、他の人々も飲み物や食べ物をミシャーナに投げつけ食堂を出ていく。

「……………」

ミシャーナは無言のままにそれを見送り、すべての人々がいなくなるのと同時にため息をついた。

「ミシャーナ?」

マキノが心配そうに声をかけるとミシャーナは目元をゴシゴシとこすり、いつもと変わらない微笑みを浮かべた。

「あははは。汚れてしまいましたね。シャワーを浴びてきますから、朝食は私の自室のほうへ運んでおいてください」

ミシャーナはそう言いながら階段の上へと消える。マキノその時の彼女の笑顔が泣いているように見えた。

…
ナ…
ナ…
…
ナ…
ナ…

シャワーを浴び終えて、新しい服に着替えなおしたミシャーナはそこで洗濯物として彼女の汚れた服を回収していた執事に出会った。

「大丈夫ですか？お嬢様」

ざまあみろと言わんばかりの笑みを浮かべてそつたずねてくる執事に苦笑を浮かべながら、ミシャーナは答えた。

「クラハドールさん……………」

「私の名前はクロですと何度言えばわかるのですか？お嬢様」
クソ魔女

若干額に青筋を浮かべながらそう言ってくる眼鏡をかけた執事服の男にミシャーナは微笑んだ。

「あら……………クラハドールのほうがカッコいいと思いますけど？」

「……………あなたに捕まったのが私の運のつきでした。あなたのお仲間に呪われて、法に触れることができなくなるわ常に敬語で話さなければなくなるわ、あなたに危害を与えることができないわ、もうさんざんですよ」

「これがかの百計のクロだとわかったらみんなびっくりするでしょうね」

くすくすと笑うミシャーナに舌打ちをしながら、クロことクラハドールは洗濯物をまとめる。

言わずともわかると思うが、この男はあのルフィーにぶちのめされたクロである。

海賊団を再結成した彼は東の海で暴れまわっていたのだが、ある時ミシャーナが派遣したグランドライン出身の賞金稼ぎの手によってあっさりと捕縛。

六式の《剋》に匹敵するほどの速度を持つ《杓子》の技術をほし

がっていたトウヤの指示によって、契約を絶対に順守させる呪いを扱う《アクアクの実・タイプ・メフィストフェレス》の能力者によって悪行を禁じられ、ハンターズの命令には絶対に逆らえないかこの鳥となっていた。

まあ、彼の海賊団はシロップ村蹴撃の後一度解散しているのだからまさら海賊に未練があったわけではないのだが……やはり元海賊のプライドという観点から見ればあまりうれしいことではないことは確かだろう。

ちなみに、メフィストフェレスの能力を持った能力者は海賊を仲間にする時はかなり活躍しており、クロほどではないが限定的な契約をかけることで彼らの再犯を防いでいたりする。

それはともかく……………。

「また何かあったんですか？」

「きいてくれるんですか？」

「……………あなたが聞けと言ったら私は嫌でもその指示を聞かなければならなくなるんですよ？知っていましたか！？」

若干殺気がこもったクラハドールの言葉にミシャーナは苦笑を浮かべながら、先ほど食堂で起こった事件を話し始めた。

「あなたならどうしてこの事件を解決しますか……………百計のクラハドールさん」

「クロです。そんな人たちさっさと殺してしまえばいいじゃないで

すか？いろいろと厄介の種になっているんでしょっ？」

「あなたに聞いた私がバカでした」

名前通りかなり黒いことをいってくるクラハドルにため息をつきミシャーナはため息をついた。

二人がそんな風にだべっているときだった。

「た、大変ですー！！」

朝食をコックに作り直してもらいミシャーナの部屋の前まで持ってきたマキノが慌てふためいた様子でミシャーナの部屋に入ってきた。

「どうしたんですかマキノさん？」

「はあはあはあ……………さっさっきのおじいさんがー！！」

…
十…
十…
十…
十…
十…

「ふん……………化け物め……………」

「じ、爺さん。いくら何でもやりすぎたんじゃ……………」

「バカモン！！あいつらにされたことを忘れたのか！！わしの目が黒いうちは能力者なんて怪物どもには好き勝手させんぞ！！」

この老人はオレンジの町出身の老人だった。しかし、バギー海賊団がそこを拠点として使い始めた時におびえた彼は真っ先のその街から逃げ出したのだ。

そして、バギーがいなくなったときいて街に帰った彼は自分が住んでいた町の変わり果てた姿にがく然とした。そこはがれきの山に変わっており自分と妻の思い出がたくさんつまった家も跡形も残さず木端微塵になってしまっていたのだ。

あまりの絶望に彼は荒れ果て、酒におぼれるようになってしまっていた。そんな彼に苦勞させられた長年の連れ合いである妻は過勞でぼっくりと言ってしまうのだが、それすらバギーのせいにした彼は能力者を逆恨みし、彼と同じような経歴を持つ者たちを集めて《能力者追放組織》を結成。さまざまな村を訪れてはあらゆる能力者たちを差別し村から追い出していった。

そして今回の標的に最近急速に勢力を伸ばしてきたハンターズのリーダーを狙ったのだが……………。

「で、でもよあ……………あの人がかなりいい人だつて噂だし。何よりあんなかわいい子があんなが言うような悪行をするとは思えねえよ……………」

「バカ者！！それがあいつらの策なのじゃ！！見た目にだまされると痛い目を見るぞい！！」

最近士気が下がっているなあ。老人はそう思い舌打ちした。

あのヒトヒトの実の能力者……………ミシャーナとかいったか？
あのような見た目でわしらのことをたぶらかしおって。全く能力者とは忌々しい存在じゃわ。

老人が内心では外見だけは認めたように、《ヒトヒトの実・タイプ・エルフ》は《メロメロの実》《スベスベの実》に匹敵するほど

の美貌を能力者に与えるものである。

もともと伝説上でもエルフは最も美しい妖精といわれる種族である。その美貌も納得といったところだった。

その彼女の美貌にほだされてしまった何人か（大体が若い男）が逆にハンターズの下働きとして加入してしまうという事件がこの老人の悩ましていた。

このままではあの悪魔にわしが心血を注いで作り上げてきた組織をつぶされてしまう。やはり早々に決着をつける必要があるな………。

老人がそんなことを考えながらもないことを考えようとしたとき………。

「おい、じじい。ハンターズの本部がある町はここでいいの？」

「ああ？そうじゃが、おぬしあの悪魔たちに一体何のようじゃ？」

老人がそう言って振りむいた時、巨大な腕が老人の首を絞めるように回されその枯れ木のような体を持ち上げた！！

「なあに………あれほどの組織力を持っているんだ。ちょっとばかりこのドン・クリークにそのすべてを譲ってもらおうと思っとな」

砕かれたウーツ鋼の鎧の代わりに、正体不明の銀色の鎧を着こんだ巨体の男がこの町を襲撃した瞬間だった。

「…さくら…」

…
…
…
…
…
…
…
…

「おおつと動くなよ。この爺の頭に風穴が開くぜ」

マキノの知らせを聞いたミシャーナはあわてて下に降りてきたが、食堂で待っていたのは正体不明の金属の鎧をまとったあの男だった。

「ドン・クリーク………………。グランドラインの落ち人が、こんなところに何の用かしら？」

そう聞いてみたがミシャーナは彼がここに来た理由を大体知っていた。クラハドールが指揮するハンターズ直轄の諜報部隊がクリークの情報をたまたまつかんでいたのだ。

ドン・クリーク。海賊艦隊を率いてグランドラインに入ったものの、王下七武海《鷹の目》ミホークにあっさり一蹴。ぼろぼろになってこの海の戻ってきた後にルーキー《麦藁の》ルフィーに撃退され消息不明になっていた男だ。

しかし、彼女が持っていた情報はもう少し先のものがあつた。

あくまでクリークを諭して再びグランドラインに入ろうと励ましていた《鬼人》のギンを彼は殺害してしまつたらしい。それから彼は再び周囲の海賊たちを不意打ちしそれを配下に置いた。

艦隊を再組織しながらグランドラインの情報を東の海で集め回つた彼は、東の海で集めきれぬグランドラインの情報をすべて集めた。しかし、それでも不安だつたクリークはこうしてハンターズの本部を襲撃しその組織力を一手に奪い取るうとしたのだ。

「さあて……………見たところあんたがここの大将みいだなあ。知ってるぜえ。見た目が変わっているという事は《超人》パラミニアか

《動物》^{ソオン} だろう？ 動くんじゃないぞ。どんな能力を持っているのかは知らねえが不用意なまねをしてみるこの爺を殺してやるからな」

これが海賊同士しの戦いだったらこんな真似は通用しなかっただろう。しかし、いくら荒事をこなすといっても相手は一応慈善組織をうたっている団体だ。おまけにこの本部はかなり地元に着しており、地域住民たちの協力を借りることもあるらしい。だから、このような卑怯な真似も十分に通用するとクリークは踏み町の住人を人質に取ったのだ。

……しかし、クリークは知らなかった。

「フリーズ」

彼が相手をしている能力者は、異常な力を操る能力者の中ですら規格外とされる《幻獣種》であるということ……。

………

「おじいさん!!」

ミシャーナがあわてて下に降りると、そこには先ほど自分に殺意をぶつけてきた老人を人質に取った鎧を着た男だった。

あの顔………見たことがあるわね。ドン・クリーク。懸賞金1700万ていどの卑怯者海賊でしたか？

内心で辛辣な評価をしながら、ミシャーナは会話を交わしながらクリークのすきをうかがう。

「よろしいのですか？」

「!?」

その時だ、突如後ろに立ったクラハドールがミシャーナにそう話しかけてきた。

「あの老人はあなたのことをひどく嫌っているんですよ。あなたのお仲間をひどく嫌っているんですよ？ そんな人を助ける必要がどこにあるんですか？」

「……………」

クラハドールの言葉にミシャーナの心の中にどす黒い感情があふれ出してくる。自分を追放した生まれ故郷の村人たち。

何も知らないで無責任に怪物と自分のことを呼び石を投げてくる人々。

銃的にされたこともあった。

犯されかけたこともあった。

しにかけたことなど……………数え切れないほどあった。

しかし、最後に思い浮かんでくるのは。

『人間を恨むんじゃないわよミシャーナ。彼らはただ無知なだけなの。あなただって他の人がそんな姿になれば嫌ったはずよ。だから人間をさげすんだり憎んだりするのはやめなさい。あなたも人間なのだから、いずれその言葉は貴方へと帰ってくるわよ』

無表情のまま自分の恨み言を聞きおえた後に発せられたリリカの言葉だった。

「くだらないことを聞かないください。クラハドールさん………私には人間なんですから。他の人が困っているならその人を助けるのは当然のことではないですか」

「そうですね………」

そう返事を返した後、クロは背後から姿を消す。そしてそれに気づいたミシャーナは即座に言葉を紡ぎだし能力を発動した。

「凍りつけ!!!」
フリーズ

その言葉と同時にクリークの足元のみが一気に凍りつき、クリークの動きを阻害する!!!

「な!?!」

驚くクリークの背後をとったクラハドールが猫の手を一閃!!! 鎧でおおわれていない肘関節を切り落とし老人を開放させる。

「な、おまえは!!! キャプテンクロ!!!」

「違いますよ。今の私はただのクラハドールです」

忌々しいことにね。最後にそう言い残し、老人を抱きかかえたクラハドールは抜き足で消失。瞬時にミシャーナの隣に現れた。

「くそー！だが人質がいなくなっただぐらいどこのドン・クリークを倒せると思うなああああああああー！」

クリークがそう叫んで、鎧に隠していた無数の銃口をミシャーナに向けるが……………その時には言葉を紡ぎおわっていたミシャーナは興味がないといわんばかりに背をむけていた。

「メテオストライク」

最後にそう呟かれた言葉とともに、深紅の巨岩が屋根を突き破って上空から飛来。グランドラインから取り寄せたウーツ鋼以上の高度を持つ《剛金》^{こうきん}の鎧を着こんでいたクリークの体を押しつぶし、跡形もなく消し飛ばした。

こうして、ミシャーナはハンターズリーダーの実力を遺憾なく見せつけ、この事件に幕を引いたのだった。

…寸…寸………寸…寸…

「な、なんて奴じゃ……………やはりあいつは悪魔」

クラハドールに助けられた老人は、真紅に燃え上がる巨岩を背景にこちらに歩み寄ってくるミシャーナを見てそんなことを呟く。その言葉を聞いたマキノはツカツカとクラハドールに抱えられている老人に歩み寄り、その頬をひっぱたいた!!

「!?!?」

さすがにこの事態は予測していなかったのか、老人は目を白黒させた。マキノの瞳に涙が浮かんでいるのに気付き絶句してしまふ。

「い、いい加減にしてください！！あなたの境遇には同情しますが、あの子が一体何をしたというんですか！！この村になじむために身を粉にして働いて、海賊さんたちを改心させて、あまつさえあなたの命の恩人になった彼女に、どれだけ恩をあだで返せば気が済むんですか！！」

そんなマキノの怒声に老人やその取り巻き達は黙り込んでしまった。

「あ、悪魔の実の能力が人を悪くするんじゃないやありません！！悪魔の実は人に特別な力を与えるだけにすぎないんです！！それを悪く使うか正しく使うかはその人次第じゃないんですか！！」

「し、しかしのお……………」

「そんなことを言うのなら、さっきの人を思い出してください！！あの人は悪魔の実の能力を持っていなかったけど、あなたに酷いことをしたじゃないですか！！ミシャーナさんは悪魔の実の能力者なのにあなたを助けたじゃないですか！！どちらが悪いかなんてすぐに分かることなのに、この中ではだれよりも長生きなあなたがどうしてそんな簡単なこともわからないんですか！！」

マキノがそう叫び終わった時、戻ってきたミシャーナがその頭をポンポンと叩く。

「ありがとうございます、マキノさん。でも、もういいんです。私なんかのために泣かないでください」

「でも……………でも！！」

何か言いつのろうとするマキノにやさしく微笑んだから、ミシャーナはクラハドールから降ろされた老人に話しかけた。

「おじいさん…………… けがはないですか？」

「あ、ああ。大丈夫じゃ。かすり傷ひとつついておらん！」

「そう…………… よかった」

ミシャーナは本当にうれしそうにそう笑った後、悠然とした歩みで二階の自室へと消えた。

「……………」

そんなミシャーナを老人たちが呆然と見送った後、クラハドールはぼそりとつぶやいた。

「爺さん。あんたがいた村は確かオレンジの町だったな？」

「あ、ああ……………。それがどうかしたのか？」

「そこにいた道化のバギーを撃退したのは…………… 麦わらのルフィ。お前が毛嫌いしている悪魔の実の能力者だそうだ」

「……………」

「わかるかじいさん。あんたは自分の仇だと思っていた能力者に自分の故郷を救われていたんだよ」

クラハドールの最後の言葉に老人は崩れ落ち、涙を流す……………。

「わ、わしは……わしは……なんということをしてしまったんじゃない！」

泣き崩れる老人に言葉をかけられるものは誰一人としていなかった。

完全な誤算だ。事件の後、屋根の修理を終えた、クロはそんなことを考えながら洗濯物にいそしんでいた。

あの時、ミシャーナにたきつけるようなことを言ったのは別に彼女を奮起させるためではなく、彼女がこのままあの老人を見捨てることを願ったからだ。あそこで、彼女が老人を見捨てて殺してしまえばその話を膨らませて村中に吹聴することで彼女の権威を失墜させることができた。

そうなれば自分が自由になれる可能性も出てくるというものだ。

「また腹黒いこと考えているみたいですねクラハドルさん」

「はいそうですよ？」

「ふふん。契約はちゃんと聞いているみたいですね」

そういつて洗濯をしながら苦々しい顔になったクロの後ろに立ったのは、いたずらっぽい笑みを浮かべた黒い羽根を持つ女。《メフイストフェレス》。本名はほかにあるようのだがどうも本人が名乗るのを嫌っているようなのだ。そのため彼女の本名を知っているおは今のところリリカしかない。

「でもまあ、あなたがあんな情報を流すなんて珍しいじゃない？ど
ういう風の吹き回し？」

「別に他意なんてありませんよ。ただ単に仕事をしただけです」

クロの答えにうんうんと頷きながら満足するメフイストフェレスの姿にクロは舌打ちをしたくなった。彼は彼女に対して一切嘘がつけられないように契約を結ばされているのだ。

「確かに近隣住民との仲を取り持つのもあなたの仕事だしねえ。ま
あ、よくやったとほめてあげるわ」

「そう思うのなら、契約の一つでも解除してくださいよ」

「いやよ。そんなことをするにはあなたは危険すぎるもの」

「……………いつ彼方を出し抜いて殺して差し上げます」

「できるのかしら？高々ちよつと頭が回るだけの人間がこの悪魔たる私に」

心も体も悪魔に売り渡してしまった《悪魔の実の能力者》メフィストフェレス。そして無数の計略によつて相手をはめる《百計のクロ》二人の視線は空中で激突し火花を散らす。

「ふん。まあ、期待して待っているわよ。ボクヤ」

そして黒の視線に何かを感じ取ったメフィストフェレスはトウヤのような黒い笑みを浮かべてその姿を消した。クロはそれに舌打ちをしつつ今日も家事にいそしむのだった。

後日談というか今回のオチ。

「なんでこんなことになっているの？」

「「「「「おはようございます！！ミシャーナさん！！」「」「」」」」

きれいに敬礼を決めてくる、昨日まで自分のことを毛嫌いしていた集団を見てミシャーナは啞然とした。

「なんでも昨日のあなたを見て惚れたんですって。良かったねミシヤーナ」

「ああ、そうなんですか……………よかった」

マキノにそんなことを言われて、ミシャーナは恥ずかしそうに……………しかし、嬉しそうにはにかんだ。

こうして、このフーシャ村に本当の平和が訪れたのだった……………

……。

が！

「てめえら何昨日とは違うことしてんだよ！！大将まもんのは俺たちだ！！素人はさっさと帰って寝てろ！！」

「何を言っておるか！貴様らのようなガサツな奴らにミシャーナ様を任せておくことはできん！！貴様らこそミシャーナ様の半径二メートル以内に近づくないわ！！貴様らの臭いにおいが移ってしまわ！！」

「……………そうだそうだあああああ！！」「……………」

「な、なんだとこのくそじい！！野郎ども、やっちまいな！！」

「……………おおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」「……………」

「よ、よかったのかなあ……………」

その数分後に再び喧嘩を始めそうになっている昨日のメンツを見て、ミシャーナは大きくため息をつくのだった。

完全なる閑話休題・とある組織の日常（後書き）

しばらく続くといった割に二話でネタ切れ……………。

次回、ハンコック編です

23話

海軍本部。マリンフォード。

ハンコックのところへ行く前にアマゾンリリーの注意事項を聞いていけとのこと、久しぶりの此処に訪れたトウヤは……………。

「……………なあ、モモンガ。これが最近の王下七武海の迎え方の最先端なのか？」

「そんなわけがないだろう。お前ちょっと好き勝手やりすぎだ。細心の注意を払ってことでセンゴク元帥からこうするように指示が出たんだよ」

なぜかグルッグル巻にされた拳句海楼石の手錠をはめられてしまっていた。

これで囚人服でも着せられたには真剣に殺されるんじゃないかと思ってしまう状況である。

「まあ、逃げることなんて簡単なんだが……………」

トウヤの能力は悪魔の実とは完全に別物である《超能力》だ。ぶつちやけ海楼石なんてまるで効かないし、その気になれば『握り潰し』での逃走は十分に可能だ。

まあ、このことも秘密なのでこんなくだらないところで手札を切ったりはしないが。

「マリンフォードを罪人みたいに引きずられるという結構恥ずかしい事態に、益体もないことを考えながら現実逃避をしていると、一人の男がトウヤの目の前に現れた。」

「旅行するならどこに行きたい」

「いっぱいあるけどあんたに答えるところなら《ここ》って答えさせてもらうよ《暴君》バーソロミュー・クマ」

全身のほとんどを機械に改造された（このことはトウヤは最近知った）誰よりも世界政府に従順な王下七武海の一人。暴君クマその人である。

「おいおい……………七武海のうち二人を同時召集なんて、いったいアマゾンリリーで何が起きているんだ？」

「ボア・ハンコックを入れれば王下七武海は三人になるな」

トウヤの軽口にクマは律義に訂正を入れる。原作を知っているアクセルもキャラがつかみにくいか言っていたけど……………ほんと何考えているのか分からねえよなあ。こいつ。

改めてクマのキャラにどう付き合っていくべきかと閉口するトウヤ。仲良くなれそうな気はしたが、さっき会った瞬間にどこぞに吹き飛ばされるフラグ立てられたし……………。

トウヤがもっていた世界にもあくが強い奴なんてたくさんいたが、ここまでわけがわからないキャラは初めてである。

「俺に聞かれてもしらん。ただ……………この救援要請はあの海賊

女帝から出されたらしい」

「あのボア・ハンコックからだと！？かなり高慢ちきなおんなで誰かに頼ることなんてまずないって聞いたぞ？」

「なんで絶世の美女っていう情報の前にそんな情報を集めているんだよ」

お前の情報の集め方何かおかしくないか？モモンガにそんな事を言われたトウヤだったが、トウヤはいたって平然とした表情でモモンガの言葉を聞きながし、どんな事件が起こっているのかの予測と対策を立て始めるのだった。

…
ナ…
ナ…
…
ナ…
ナ…
…

「能力者災害？」

セングクの口から飛び出た聞いたこともない言葉にトウヤは首をかしげるが、見た目に反して意外と親切なのかトウヤの疑問にはクマが答えてくれた。

「未熟な悪魔の実の能力者が起こす事故のことだ。ロギアでもない限り大半は軽いものはずだが……………」

「残念なことに暴走しているのはロギア系能力者だ」

セングクはそういいながらクマには書類をわたし、縛られて動けなくなっているトウヤには見やすいように書類を掲げてくれる。

『アマゾン・リリー南西部にて大量の毒ガスが発生。死者はいないが複数名の重症者が出た。発生当初はアマゾン・リリー内部にでの解決を模索するが失敗。海賊女帝ボア・ハンコックが調査にあたり、その内部にて一人の男性を発見。ガスの発生源はその男と思われる。ボア・ハンコックはその男に戦いを挑んだが石化攻撃が全くきかず《武装色》の覇気すら弾き返した。このことから男は覇気使いと予想される。予想能力は《ガスガスの実》のガス人間。この世界で最も利用価値があり、かつ最も危険な《自然系能力》である』

「ガスガスの実……………？モクモクの実とどう違う？」

トウヤの疑問にセンゴクはため息をつきながら説明を開始した。

「この能力はモクモクの実とは違い多彩なガスを発生させることができるが特徴だ。《可燃ガス》《天然ガス》といった有効利用できそうなものから、複数の《有毒ガス》を発生させることができる。図鑑には書いてある。能力者がガスを手のように使い、物体をつかみ取ることはこの可能。能力使用時はモクモクの実とは違う桃色の毒々しい煙を発生させることができるそうだが……………」

センゴクはさらにそこで言葉を切り、眉をしかめた。

「あれは本格的に使いこなせばかなり凶悪なガスを作成することができるそうだ」

「どんなガスなんだ？」

「無味無臭にして視認不可能……………致死性の神経毒をもつ透明な毒ガスだ」

冷や汗をかきながらセンゴクが紡ぎだした言葉にトウヤは思わず眉をしかめた。

24話

「海賊女帝かぁ……………できれば一生で会いたくない相手なんだけどなぁ」

トウヤはそんなことを言いながら海軍からパクった……………もとい、借りた軍艦の甲板で寝そべっている。ちなみに海兵は一人も乗っていない。代わりにトウヤが連れてきたドラム缶がとロボットがこっそりと運び込まれ、船の運航をしていた。

蛇姫の能力の大体の内容は聞いていたのだが、聞けば聞くほどトウヤの天敵。もう出会うことは絶対ないだろうしそんな事態になる前にトンズラを決め込むはずだったのだが……………。

「そんなに会うのが嫌なの？へんなひとね」

「なぜそう思う？ロビン」

「だって海賊女帝って絶世の美女なんでしょう？それだったら一生に一度は会いたいと思うのが男のサガなんじゃない？」

「女のお前に男のサガを語ってほしくないな。それに俺は高慢ちきな女は嫌いだ」

トウヤのその言葉に苦笑を浮かべながらロビンは肩をすくめる。そして彼女は再び自分の手元に集中しはじめる。

現在ロビンはトウヤの指示を受け自分の能力の開発と、覇気の習得を行っているところだった。

つい先日のことだ。トウヤと喧嘩をしまい全身の骨をバツキバキにしてトウヤをのしたロビンだったが、その能力を見たリリカがこんなことを言い出したのだ。

「ロビンの能力、相性次第では確かに無敵だろうけど、相性が悪かったらとことんまでつかえない能力じゃないか？」

「……………」

リリカの指摘に全身の骨がやばいことになっているトウヤと、ロビンは思わず固まってしまった。

いわれてみればその通り。基本的にこの船の船長のトウヤには圧倒していたから特に問題はないように思えたが、ロビンの戦闘方法は関節技を決めて骨をどうこうしてしまうものである。原作に出てくる悪魔の実の能力者や《六式》の使い手にはほとんど無効化されそうだと。《ゴム人間》しかり《スベスベ人間》しかり《バラバラ人間》^{パラミア}しかり……………最弱なんて呼ばれている超人系にすらよほどの条件が整わないと効くことはないだろう。もとより関節がほとんど変わってしまうゾオン系にすら無効化されてしまいそうだが、そのあたりは長年の研鑽でどうにかしているらしい。

もつとも問題なのはロギア系である。あいつらはほとんどの攻撃を無効化してしまう。当然ロビンの関節技なんてすり抜けてしまうのがオチだろう。頂上決戦に出る以上相性が悪いからどうにもできませんではお話にならない。少なくともロギアを一人で打倒できる程度の実力を持ってもらわないと困るのだ。

「特訓するか……………幸い《異能》に関しては《魔法使い》

と《超能力》の二人のスペシャリストがいるわけだし、能力開発のアイディアには困らないだろう。覇気に関してもリリカが使えるしな」

「あなたは覇気を使えないの？」

ロビンの答えにトウヤは肩をすくめる。

「超能力者っていうのはあらゆる封殺することによって高出力の《唯一絶対の異能》を覚えることを目的として造られた異能だからなあ。昔魔法使いに超能力を覚えさせる人体実験が行われていたこともあったけど……………超能力者になつた魔法使いたちは魔力を消失して一生魔法の使えない体になっていたし……………。覇気は多分使えないぞ？」

トウヤの元いた世界では、研究で超能力といるいろな異能を併用できないかということとで人体実験が行われていた時代があったのだが、この研究は《理論上不可能》の烙印を押されて凍結されてしまっている。あの銀髪の陰陽師兼侍を自称するバカなら何か考え付きそうではあるが、いないものを頼っても仕方がない。

「それに俺の能力はそこそこ強いしなあ。いまさらほかの能力を覚えるつもりもないよ」

「はいはい……………」

「すごいすごい」

「え、トウヤさんの能力ってそんなに強いんですか？聞く限りではあんまり使い道なさそうなんですけど……………」

投げやりかんいっぱいな声でトウヤの自画自賛を流すロビンとリ力。ロレンは普通に心にグツサリとくる言葉を吐いてくれた。

「……………いや、まあいいが」

若干のため息をつきながら煙草に火をつけるトウヤ。その背中は若干すすけていたという……………。

まあ、今はそんなことはどうでもいい。今の本題はアマゾン・リリーに居座っている災害級の傍迷惑能力者だ。

「それで……………クマ。そのガス野郎の情報は何かはあったのか？」

先ほどまで船に積んであった電伝虫から海軍調査の経過報告を聞いていたクマが戻ってくるのを見てトウヤは体を起してそう尋ねた。

クマは本来違う船で行く予定だったらしいのだが、一緒に派遣される七武海（裏）がトウヤだと知ったとたん同乗を申し出てきた。

だがそのことに関してはトウヤは予想済みだった。

アクセルから革命軍のことを聞いていたトウヤは世界政府が隠している歴史の情報を革命軍に流していた。大方その情報の真偽が確かめたいんだろうというのがトウヤの予想である。

革命軍にたいしては《イササギ・トウヤは現在急速に勢力を伸ばしてきている『ハンターズ』のリーダーを知っている》という情報も一緒に流しているからなあ。こんなに早く接触する機会が訪れる

とは思わなかったが……。すぐにその話を切り出さないと
ところをみるとバカではないらしい。今のところはおれが本当にリ
ーダーの情報を握っているのか様子見というところか……。トウヤ
トウヤはそんなことを考えながら、クマの表情の読めない顔を見つ
める。

「男の名前はわからなかったそうだが、情報は出てきた。この男は
先月モモンガ中將が壊滅させた反政府組織の研究所にいた被研体だ
ったそうだ。モモンガ中將が回収した実験資料に名前が出てきてい
た。撤退時に回収し忘れたそれが暴れているのだろうというのが海
軍の見解だ」

「なるほど……。まったく、モモンガのやつ。後始末ぐらいち
やんとしておけ。それで、どんな実験をされていたんだ」

「初期の段階では悪魔の実を食べさせたあと海楼石を使いその能力
を封殺。能力者の体を解剖して悪魔の実の秘密に迫ろうとしていた
らしい。しかし、その結果はあえなく頓挫。研究は《王下七武海》
の攻略を行うための人体兵器の製造へと移って行ったそうだ。やつ
が扱う覇気はその過程で目覚めたらしい。自然系の体に傷を残せる
ほどの高密度の覇気を使いこなすと書かれている」

「ハンコックの能力が効かないのは？」

バフォーム・フェムル

芳香脚がきかないのは、覇気でハンコックの覇気を散らしてロギ
アの能力で蹴り自体がきかないようにしているんだろうが……

……。あいつの石化攻撃は効くはずだろう？

「王下七武海の攻略にあたって最も最初にぶつかった難関がボアハ
ンコックの石化攻撃だったそうだ。そのため研究所の研究者たちは

ある薬品を投与し、研体の精神を遠隔で一時的に崩壊させることで石化を防ごうとしたらしい。結果それは成功したみたいだな。だが、その遠隔装置はモモンガ中將が研究所壊滅の時すでに破壊してしまったらしいので正気に戻すのはほぼ絶望的だそうだ」

クマの説明を聞いて、トウヤは思考を巡らせる。

薬品か……………。だったらなんとかできるかもな。

「クマ。ちょっと頼みがあるんだが」

「なんだ？」

「もう一度海軍に連絡とって使われた薬品について詳細な情報を送ってくれるように頼んでくれ。それで今後の対応を決める」

「……………。わかった」

クマはしばらくじっとトウヤの顔を見つめていたが最後に何か納得したのか、素直に電伝虫が置いてある場所に向かってくれた。

「ほんと何考えているのか分からないなあ……………。世界政府じゃなくて同格どころかそれ以下かも知れない裏・七武海に命令されているのに何も言わないし……………」

正直やりにく。苦手な人間である……………。だが!!

「トウヤ!! 島が見えたぞ!!」

物見台から聞こえてきたヴァイの言葉にトウヤは頭を抱えた。

「これから会う人間に比べればまだ相性はいいほうだよな……」

トウヤはそう言って、見えてきた特徴的な島を見てため息をつくのだった。

……
+……+……
+……+……

「トウヤさん……………なんで上陸しないんですか？」

「ここは協定で海岸線から三キロ以内に許可なく立ち入ることは許されていないんだ。下手に男が上陸したら死罪にされても文句は言えないらしいしな……………。今回の王下七武会の上陸許可も特例中の特例なんだぞ？いま電伝虫で連絡を取っているからしばらくここでまってだよ」

「向こうから呼んだんじゃないですか！？」

そう。アマゾン・リリーについたトウヤたちは見事のな待ちぼうけをくらってしまっていた。

大方連絡ミスでもあったのか、ハンコックが待つのに飽きてしまったか、もともとで迎える気がないのかのどれかだろうが、それにしたって腹の立つ事態である。しかし、怒っているのはロレンぐらいでトウヤはむしろほっとした表情をしており、ロビンに至っては苦笑い。クマとリリカはどうでもいいとばかりにヴァイをいじったり、読書をしたりしている。

「ああ……………むしろこのまま帰りたいなあ……………。でもガスガスの実の能力者にはちょっといい考え浮かんだし……………このまま帰るのはなんかもったいないなあ」

トウヤはそんなことを言いながら先ほど海軍から送られてきた資

料に目を通す。先ほど上がった薬はどうかやら血中に潜伏するタイプのものらしく、能力者の血管に触れることさえできればトウヤの能力で何とかみだせる。そうすれば正気の戻ったこの男を仲間にする事ができるかもしれないとトウヤは考えているのだ。

「もともと奴隷マーケットで買われた奴みたいだし……………そこそこの条件提示さえしてやれば仲間になってくれるとは思うんだよなあ……………。ロギアはもうほとんど数がないしここで一人ぐらいはうちの勢力に入れておきたいんだが……………」

トウヤがそんなことを考えながら、思考を巡らしているとリリカが興味深そうな声とともに、甲板の淵へ向かって走り出した。

「へえ……………カームベルトを渡るために蛇を動力源に使っているようだ。あの蛇解剖してみたい」

「やめてくれよ……………あいつらのご主人さまと喧嘩したら多分勝てないぞ？」

物騒なことをつぶやくリリカに釘をさしながら、トウヤは心底嫌そうに眼を細めた。どうやら九蛇の海賊船が出迎えに来たらしい。

その船首には一人の女が立っており甲板から海賊船を見ていたトウヤたちを確認すると大きな声で話しかけてきた。

「海軍の軍艦……………王下七武海か!？」

「おれは番外だがな。あんたらは九蛇の海賊で間違いないな?中に入れるとは言わないからとりあえず停泊できる場所を紹介してほしいんだが……………」

「なるほど。お前は身の程を知っているようだな……………裏の入り江に案内してやる。そこに停泊して指示を待て」

海賊船から顔を出した女の指示を聞きトウヤはほっと息を吐き出す。

どうやら海賊女帝にはまだ会わなくていいらしい。どうせ会うにしても心の準備ができるとできないとではいふんと取れる対応が違うからな……………。海賊団のクルーたちから容姿や身体的特徴を聞いてイメトレしておくか……………。

トウヤがそんなことを考えながら船を動かすようにドラム缶口ポットたちに船を動かすように指示を出そうとした……………。
その時！！

「ほう。おぬしがわらわのために働く者か？」

そんな声が真後ろから聞こえてきてしまい、トウヤはよせばいいのに振り向いてしまった……………。

そしてそこにいた絶世の美女を見て……………トウヤは……………

……………！！

24話（後書き）

ロビン改造計画を実施します。

そこで少しアンケートを取りたいのですが、ロビンを強くするには………

《？順当に覇気を覚えさせる

？ハナハナの実に新しい能力を付け加える

？もう腕をいっぱい生やして物量で押し切らせる》

のどれがいいでしょうか？よかったら投票お願いします。

あのトウヤがー！

「こ、こちらこそ……よ、よろしくお願い……あ、いや……」
「よ、よろしく頼む……」
「……」

なんとあのトウヤが……顔を真っ赤にした挙句、まるで初恋を体験している乙女のように（正直かなりキモイ）もじもじしながら帽子を脱ぎ蛇姫に一礼したのだ。

え、なにこれ？

クルーどころかあの無表情人間のクマでさえ、口をポカンとあけてしまっている（きがする）。

え、なにがおきているの！？

クルーたちが蛇姫の攻撃を喰らったかのように固まっている中、話はどんどん進んでいく。

「ふん。ずいぶんとよわっちそうな男ではないか？本当に大丈夫なのか？」

「実力は折り紙つきだボア・ハンコック。海軍中将程度なら軽くあしらう腕前はあるようだ」

「信じられんな。あと気安く話しかける出ないはデカブツがー！」

七武海の中では間違いなくミホークに並ぶ別格中の別格にいるクマに対して信じられない暴言を吐きながら、ハンコックはその身を

ひるがえした。

「まあよい。盾ぐらいには使えるじゃろう。せいぜいその程度の役には立てよ」

ハンコックはそういうと首をのばしてきていた蛇の頭に乗る自分の海賊船へと帰って行った。トウヤはいつまでもその背中を見つめており、ロビンたちの顔には『ズドーン』という効果音がぴったりな縦線が入ったのだった……………。

…十…十……………十…十…

「殺してくれ……………」

「……………」

その夜、将来的にルフィーがトラファルガー・ローの船に乗って治療を受けるはずの入り江にやってきたロビンたちは、もう死にたいと言わんばかりの表情で落ち込むトウヤに閉口していた。

「あなたがあんな醜態見せるなんて珍しいじゃない」

とりあえず、他のクルーでは何ともできないと判断したロビンはそうトウヤに切り出してみる。今はとにかく会話をして精神を落ち着けようと考えたのだ。

「……………言っただろう天敵だと」

「天敵って、どうしてだ？お前の能力的には相性は悪くはない相手だろうに」

続いて発言をしたのはリリカである。こちらもさすがにあの異常事態には驚いているのか珍しいことに積極的にトウヤに話しかけていた。

「俺の能力は関係ない……………」

「あ、わかった！！実はハンコックさんがタイプだったとか！？」

「見た目で女を選ぶような男だったらハンコックよりもロビンに先に惚れるよ。両方とも黒髪美人だしな」

トウヤのさらつとした返しに、ロビンはややめんをくらいロレンは残念そうにした。

「俺は体質的に《精神操作》系の能力が効きやすい体質みたいだなあ……………。故郷では《精神感応》テレパスや《洗脳》ブレインウォッシュャーによく手玉に取られてた……………」

「異世界最強じゃなかったの？」

「何事ごとにも苦手分野はある」

さらつとそうかえしながらも、トウヤは頭を抱えていた。どうやら相当まいっているようだ。

「だからあいつに会うのは嫌だったんだ……………。あつてみてわかったんだが、あの能力はまず間違いなく洗脳系だ。おそらく特殊な力場を作って他者の脳に働きかけて精神操作しているんだろう。理性の強い人間や、痛みで邪心が消せる人間に能力が効かないのはそのためだ。それに、人には異性に対する好みがあったり、同性に惚れることは絶対はないという人間も多いというのに、あいつには必ず惚れてしまう処もこの仮説を強化しているし……………。石化にもその力場を使っているんだろう。メロメロ甘風はその力場を収

束して強力にしたものなんだろう……………」

一通りの考察を終えたトウヤは、額を抑えながら立ち上がる。

「つまり……………俺にはあいつの攻略は不可能だ!!」

「ちょっとは頑張ろうとか思わないのか？」

さすがにこの宣言にはリリカも半眼になった。仮にもすべてを託した相手があっさり全面降伏してしまったのだ。気分のいいものははいだろう。

「はつきりと言わせてもらうが、俺はメロメロ甘風をくらったら完全に石になる自信がある!!」

「そんなこと自信満々に言われましても……………」

トウヤの宣言にロレンは苦笑を浮かべる。その右手には周囲の空気を巻き込みながら乱回転する透明な空気の球が握られている。トウヤが提案した必殺技の完成形である。名前は……………《螺旋丸》。そう、あの某忍者漫画の主人公の必殺技である。ただ、この技はあのマンガのような便利エネルギー体を使っていないためあくまで《周囲の空気をため込みながら圧縮し乱回転をする手のひら大の嵐》となっている。そのため取り込める空気の限界が来たら《熊^{ウル}の衝撃^{スラッシュ}》級の破壊をまきちらしながら破裂するし、発展型の《螺旋手裏剣》のように投げることもできない。タイミングをうまく計らないと使用者に対しても凶悪な被害をもたらす上に、オリジナルよりも完成までかかる時間が大幅に伸びてしまっている。使い勝手の悪い技である。

ヒットすれば原作ではリトル・オーズにクマが使ったウルススシヨック《熊の衝撃》のような効果を及ぼすことができるが（というか人間に使ったらくらった人間が風船のように破裂してしまうというかなりグロテスクな事態になるのだが……………）トウヤはそんなことは知らないので『作らせたのは失敗だったかな？』と考えながら違う技を口レイン教えていたりする。

閑話休題。

「まあ、何とかできないこともないんだよ」

「……………ああ、何となくはわかるが、やめておけ。下手したら死ぬ」

「どうしてですか、リリカさん？ 何とかできるんならそれに越したことはないんじゃない？」

「どうせ神経に手を触れさせて性的感情の高まりの電磁パルスをつかみとっておこうとしているんだろう。下手のつかむパルスをつかみ間違えると命にかかわるし、何より神経に直接接触られるようにしようとしたらそれなりの外科的処置がひつようだ。だからやめておけ」

「「?」?」

ロビンとロレンには何を言っているのか全く分からなかったが、とりあえず危険ということは理解したのかそれ以上は何も言おうとはしなかった。

「そうだろうなあ……………。やっぱりあいつに会う前に鎮静剤でも売

「つておくか？」

「自己暗示は使えないのか？暗示をかけて精神を抑制することは確かできたはずだが？」

リリカの提案にトウヤは首を振った。それは真つ先に考えついた………というか元の世界ではそれに頼りつきりだったといつても過言ではない。だが………

「あいにく俺は催眠術の才能がなくてなあ。元の世界では俺の副官をしてくれていたやつにそれ専門の能力だったから、頼んでいたんだけど………あんたか、ヴァイのどっちかが使えたりするのか？」

「ああ………ヴァイの吸血鬼のスキルは戦闘寄りになっているから『魅了』は使えないなあ………私も職業柄、外科手術は得意だが、内科や精神科は専門外だし………。すまん。忘れてくれ」

万策尽きた感じで手を挙げるリリカを見てトウヤはため息をついた。

「はあ………やっぱりイメトレしかないかあ。またあんなバカみたいな状態になるの嫌なんだけどなあ………」

がっかりと肩を落としながら瞑想に入るトウヤを見て、クルーたちは肩をすくめて自分たちの仕事に戻る。

リリカは明日の作戦会議のためにガスの具合を調べに森の中へ。無論吸血鬼のヴァイを伴ってだ。この二人はハンターズ最強の手ごまだ。高々ロギア系ごときにどうこうされることはないだろう。

ロビンとロレンは新技の開発。ロビンは順当に《武装色の覇気》を覚えることと《能力が使える規模と距離を増やす》ことに訓練の重点を置いている。これらに成功すれば、たった一人で海軍の兵たちを制圧することができるはずだ。

ロレンは螺旋丸に代わってもっと使いまわしのいい小規模な技を開発していた。《嵐の鎧》や《蛮風》という小技もあると言えばあるが、やはり海軍の三大将や世界最強の《地震人間》と渡り合うには弱い。なにかもう少しまともな威力をもった小技を模索しているのだ。それに嵐の鎧はもうすでに用なしになっていたし……………。

会議までの時間はのこり数時間。それまでのトウヤはハンコックのメロメロを攻略できるのだろうか？

そして……………。

「ガチャ」

そんな声をあげて眠りに就く電伝虫を見つめながら、のっそりと海軍の船を出ていく人影があった。

「イササギ・トウヤ。今回の戦いでお前の力、みきわめさせてもらう」

そう言って、瞬間移動で森の中に消えたクマは、いったい何を考えているのだろうか？

複雑な思惑が交錯する中、戦いへの時間は刻一刻と近づいていた。

26話

深夜……………月明かりが森を照らすなか、桃色の煙の中から飛び出した人物が一人、リリカである。そのあとを追って肉球状の透明な空気砲が煙を切り裂く。

「なんのつもりだ……………？あの化け物がどうして私のことを……………」

「あるじ！！きますす！！」

その人物に寄り添うように陰から出現したヴァイは……………巨体を揺らしながら現れた男の一なでによって消失した。

「どういつつもりだ暴君？事と次第によってはただではおかない……………」

それを見て眉一つ動かさないリリカによつて、殺気が放たれる。しかし、巨体を人物は一向に気にした様子もなく手を振りかぶった。

「旅行へ行くなら……………どこへ行きたい？」

「なめんな、ガキが！！」

リリカのごぶしが振るわれ男の手を迎撃する。辺り一帯に衝撃波がまき散らされた後、リリカの姿はその島から消失していた。

翌夕。

入り江にやってきたハンコックを交えてガス人間に対する対策を
考える会議が開かれた。

いや……………正確にはまだ開かれていない。

ハンコックが本来の待ち合わせの時間の早朝に大幅に遅れてきた
こともその原因だが、一番の理由は謎の失踪をした《暴君クマ》と
偵察に行っただけで帰ってこないリリ力だった。

「あいつに限って殺されたってことはないと思うんだが……………。
クマにしても一応は王下七武海だ。何かがあったということとは考え
にくい」

「私もそう思うわ。でもそうになると、彼らは自主的に姿を隠したこ
とになるわね……………」

「ああ……………ただでさえ俺は調子悪いのに何をしているんだあい
つらは？」

もはや、待つことはできない時間である。本来なら朝に会議を終わらせて昼ごろには襲撃を仕掛ける予定だったのだ。今会議を開いたとしても襲撃は明日のなだれ込むだろうがしないよりかはましだろう。

「しかたがない。おれたちだけでガス人間を攻略する。いいなハンコック？」

「気安く話しかけるでないわ」

にべもない返事を返すハンコックに眉をしかめながらトウヤはため息をついた。

昨日徹夜でイメトレをしたことによってトウヤは何とかハンコックの能力を表面的に克服することができた。

とはいっても、あくまで表面的なだけであるため、いまだに心臓はバクバクしているし気を抜けばどもってしまうが……。まあ、少なくとも会議や会話に支障が出ない程度には回復していた。

「じゃ、はじめるか……………」

「始める？なにをじゃ」

不思議そうにするハンコックに、トウヤは少し驚きながら海軍が集めたガス人間の資料を掲げた。

「なにつて……………ガス人間に対する作戦会議だ」

「そのようなものはいらぬ……………わらわの一撃で倒してくれよう」

「はあ……………」

ある程度予想していたとはいえ、あまりにお粗末すぎるその答えに当夜はため息をつきながらハンコックに話しかけた。

「あんたが一回負けちまったから俺らが援軍としてきたんだろう？
何の策も持たず突っ込んでもまた負けるだけだぞ」

「ふん。わらわはそなたらのような弱者とは違うのじゃ。つぎはし
そんじたりはせぬわ！！」

「……………」

頭痛でもするのか額を抑えて呻くトウヤにロビンとロレンは同情の眼を向けた。気分的には融通の利かない駄々っ子の子供を相手取っている気分である。蛇姫ってここまで考えなしかったのか？

若干失礼なことを考えながらも、トウヤは資料を片手に食い下が
る。当然だ。このままでは何のためにここに来たのか分からないし、
トウヤがガス人間を捕獲することなどできなくなってしまう。しか
し、トウヤが単体で挑んで勝てる相手かと問われれば微妙なところ
だった。

可視のガスならともかく、トウヤは不可視のガスというものをつ
かんだことがなかった。そんな危険地帯にはできるだけ近づかない
ようにしていたし、毒ガス対策は常に彼の部下の一人がやっていた
からだ。

それゆえに今回の戦闘は、黒ひげ戦のように未知数との戦いとなる。保険であれ気休めであれ、蛇姫の援護がほしいところなのだ……。

「じゃあ、おれたちはいつたい何のためによばれたんだ？」

「あれは………わらわが負けて帰った時によん婆が勝手によんだのじゃ。勝手に来て勝手に戦ってくれるならまいよいかと思つておつたが、男と共同戦線を張るなど虫唾が走るわー！」

ああ、そういえばこいつ男嫌いだったか？基本的にアマゾン・リリーは男と会話することすら禁じられているとかセンゴクが言っていたなあ……。

今更ながら、そんな設定を思い出したトウヤは少し困った顔をしながら、ハンコックを説き伏せようとするが……。

「いや、でも実際あんた負けたわけだし………」

「ええい、くどいー！」

瞬間、なぜかハンコックは立ち上がりおおきくのけ反りながらトウヤを指差したー！

「戦うならお主一人で戦えー！やそれで奴を弱らせることができればよし。できないならできないでわらわにはまだ色々策があるー！お主などはなからお呼びではないわー！」

「はあ………」

なんかもう色々と疲れてしまったトウヤは大きくため息をつくと同時に、腰を上げた。千年も恋も冷めるとはこのことだろうか？心拍数もいつの間にか元に戻っているし、舌がもつれることもなくなっている。

何よりトウヤは見た目ではなく性格で女を選ぶ派だった。その観点からみればハンコックは間違いなく落第点とっていいだろう。

「オーケイ。いいだろう。そんだけ言うなら一人で戦おう。ただし何が起きてても文句を言うなよ」

トウヤはそういつて踵を返した時、唐突にアクセルが言っていたハンコックの情報を一つ思い出してしまった。

『海賊女帝の情報はいらない？いやいや一応もっておいたほうがいいですって。何かに使えるかもしれないんですから。彼女は背中《跡》をトラウマにしている誰にも見れないようにしているんですよ。もし彼女のことに困ったことがあつたらそれを消してあげるといえばゆつこと聞いてくれるかもしれないよ？』

どんな理由があるのかは知らないが、傷を消してやる程度のこと聞いてくれるなら越したことはないかなあ……………。

そんな軽い気持ちで、トウヤはこの言葉を紡いでしまう。

彼はこの後、詳しい原作知識を持っていなかったことを激しく後悔することになるのだが、今の彼はそのことを知らない。

ただ分かっていることは……………。

「なあハンコック」

「なんじゃ、なれなれしい」

「お前の背中傷あと……………なおしてやるからゆじ」と聞いてくれないか？」

「……………」

トウヤがハンコックの逆鱗に触れてしまつたといふことだった。

26話(後書き)

ハンコックの性格とか話し方に間違いはないですか？作者的にはかなり不安です……

27話

ボア・ハンコックは驚愕していた。

そうしてそのことを知っている？

背中
背中の傷跡とは間違いなく天竜人達に刻まれた《天駆ける竜の蹄》のことだろう。それを直せるかどうかはこの際問題ではない。そんなことはできないと分かっている。だからこそ太陽の海賊団たちはその刻印の上から太陽のマークを重ね書きしたのだ。

だから、今はそんなことは問題ではない。問題なのはどうやって彼女の背中にその跡があるということとトウヤが知ったかということだ!!

「なぜじゃ……………なぜそのことを知っている!!」

「え、いや……………教えてもらったんだが？」

「そうか……………」

ハンコックは最後にそういうと、ハート形にした両手をトウヤに向かって伸ばした!!

「な!?!」

「メロメロ甘風!!」
メロウ

ハンコックの声とともにその手からは桃色のハート形光線が発射

される!!

「くそ!!なんだいったい!!」

トウヤはそうつぶやきながら、右手を掲げる。

そしてその光線がトウヤの右手を直撃すると同時に、その形状は変形圧縮されピンク色の球体となってトウヤの手の中に納まった。

「能力!?ならば……!!」

ハンコックはそういつて長い脚には気をまとわせながら回転。その足をトウヤに向かって叩きつける!!

「バファームフラエルム芳香脚!!」

「くそ!!」

トウヤはそのけりを、体の重心を移しながら回避。流れるような動きでハンコックの首に手を伸ばす!!

「ワンバイト握りつぶし!!」

しかし、ハンコックも王下七武海。即座に身をのけぞらせ、バク転。そしてトウヤから距離をとるためにその勢いをたもったまま後ろへと下がった。

「おいおい!!いったいなんだ!?傷なおしてやるって言ったただけだろうが!!」

ハンコックが距離をとったことで膠着状態になったのを見計らい、トウヤが怒声を上げる。しかし、ハンコックの怒りはそれ以上でけりの構えをとりながらトウヤを怒鳴りつけた。

「黙れ！！そのようなことは今の技術できぬことはわかっておる！！ほらを吹くのもたいがいにせよ！！何より許せぬのは、わらわたちの秘密を吹聴して回っておるものがあるということじゃ！！どこで知ったのかは知らぬが、それを知られてはわらわたちはおしまいじゃ！！だから貴様にはここで死んでもらうぞ！！」

「吹聴されたら困る傷なのか……………」

いったい何にそれほどいきり立っているのか分からないトウヤは、首をかしげながら迎撃の構えをとる。

「とぼけるな！！おぬしはわらわたちが天竜人の奴隷だったということを知っておるから、先ほどのような脅迫を口にしたのだろう！！」

「な！！」

「！？」

「え、天竜人って何ですか？」

グランドラインに入って日の浅いロレンは首をかしげたがトウヤとロビンはその話を聞いて顔をひきつらせた。

天竜人の奴隷。それは人以下の存在に貶められた証。誰にとっても等しくおぞましい烙印である。この世界のやばい歴史を調べるに

当たって、トウヤもこの天竜人の悪逆無道さは熟知しており、できるだけシャボンディには近づかないようにしているほどであった。

解放されて海賊女帝なんてやっているところをみると、どうやら彼女はフィツシャー・タイガーの襲撃によって解放された奴隷なのだろう。トウヤはそう予測を立てながら、考察を進めていく。その間にも右手はポシエットの中を探っており、ある球を取り出していた。

ということは背中に刻まれている傷痕というのは……………。

「《天駆ける竜の蹄》か！？知られたら激怒するのはあたりまえか……………。アクセルのやつ、話すのならもう少し詳しく話せ！」

中途半端にしか情報を聞かなかったのはトウヤ自身なのだが、今はそんなことにまで考えが至らないほどテンパっていた。

トウヤは、自分自身がかなり後ろ暗い過去を持っているため、人の過去を使って交渉することをひどく嫌っている。それはサンジの《女は死んでも蹴らない》と同格の強固な信念だ。

それを中途半端な情報を頼りに破ってしまった自分に心底呆れながら、トウヤはロビンとロレンを圧縮保存した。自分のポシエットに入れた。この状況で二人を守りながら海賊女帝の攻撃を防ぎきる自信はトウヤにはなかった。

今回ばかりは自分が全面的に悪いため、一応誠意あふれる謝罪を試みってみるが……………。

「ハンコック……………信じてもらえないかもしれないが、俺はお前の背中に刻まれている傷痕が《天駆ける竜の蹄》とは知らなかったんだ。正直ガス人間との戦いの間だけでも連携とればいいと軽い気持ちで言ったにすぎない。それがお前の心を深くえぐったって言うなら俺は誠心誠意謝罪するし、殺されるのもやぶさかじゃあない。だが、俺にはまだやることがある。殺す殺さないの判断はそれが終わってからにしてくれないか？」

「ふざけるな！！貴様にそのような猶予を与えられたのか！！」

「だろっなあ……………」

なんかもう、怒りのあまり周りが良く見えていないハンコックにトウヤはひきつった笑みを浮かべるしかなかった。

はあ、ほんと調子悪いなあ俺……………普段なら交渉の段階でこんなへまを踏まないのに……………だからこいつには会いたくなかったんだ。

軽い現実逃避をしながら、トウヤは構えをとりながらポシエツトから一つの玉を取り出し地面に転がす。

「!？」

「だったらすまない……………ガス人間をどうにかしたら、正式な謝罪に行くから今だけは逃げさせてもらっぞぞ？」

瞬間！！

その球はすさまじい光をはしながら爆発！辺り一帯を光で埋めつ

くした!!

「く!!?おのれ!!」

ハンコックが目を開けた時にはそこにはトウヤたちの姿はなく、
風がむなしく吹いているだけだった。

…+…+…+…+…+…+…+…+…+…

「姉様？どうしたのそんなにあわてて」

「何か男たちにされたの！？」

宮殿にいきり立った様子で戻ったハンコックに、二人の巨体を持つ女たちが話かける。

マリーゴールドとサンダーソニア。ハンコックの妹たちである。

昔一緒に奴隷となってしまうていた二人はハンコックと秘密を共有している。そのため、他のアマゾン・リリーの住人たちと比べてハンコックに近い位置にいる二人である。ハンコックもこの二人には心を許しているのか、よく相談ごとをしている。

「背中秘密を知っている男に会った」

「！？」

ハンコックの言葉に二人の顔が恐怖でひきつる。それほど天竜人の奴隷というは辛いものだったのだ。彼らの奴隷となってしまうたものは人として扱われず、どのようなことをされても文句を言えない。

もしも、奴隷のマークのことが外にばれてしまえば、王下七武海といえども天竜人のもとに送られてしまうかもしれない。それほど

天竜人の権力は絶大なのだ。

「誰そいつは!?!」

「姉様!! 誰なのか教えて、私たちが殺してくる!!」

「やめておけ、サンダーソニア、マリーゴールド。相手は裏・王下七武海のイササギ・トウヤじゃ。おぬしらが勝てる相手ではない」

先ほどの戦いでトウヤの底知れなさを実感したハンコックはそう言いながら、ガスマスクをとってくるように、侍従に命じへビ用のマスクをペットのサロメにつけさせる。

「わらわは直々に殺しに行く。幸いあの男はガス人間を退治しに行くといっておった。そこで事故に見せかけて殺せば世界政府にも言い訳がつくはずじゃ……………」

あ奴を、生かしてこの島から出すわけにはいかない。あ奴が乗ってきた軍艦は沈めておけ。

サンダーソニアたちにそう命じた後、ハンコックはサロメを伴い桃色の煙があふれる島の一角へと足を向けるのだった。

…十…十……………十…十…

「どっすの？」

「どっしたもんだろっなあ……………？」

ロビンとロレンの圧縮をといて、ため息をつくながらたばこを吸うトウヤにロビンはそう尋ねた。

目前には桃色のガス。トウヤが先ほどつかみ取って検査薬にかけてみたが、見事に毒ガス反応が出た。普通の人間なら活動すること

すら難しい環境であるということだ。

「一応ガスマスクは持ってきているが………そんなものより俺のつかみ取り使ったほうが早いかつ安全だ………」

「そんな事を聞いているんじゃないで、海賊女帝を怒らせた件をどうするのかと聞いているの!?!」

攻略法を考えるふりをしてちゃっかり現実逃避をしているトウヤにため息をつきながらロビンはそう続けた。

あれから何とか逃走に成功したトウヤは、どうやってハンコックに許してもらうか、うんうん唸りながらここへとやってきたのだが、結局いい案は思いつかなかった。

トウヤ自身があんなことを他人にされたらと考えると到底許せる気が起きなかったのだ。ましてや、彼女たちの場合は呪縛はしっかりと分かりやすい形で残ってしまったている。過去の恐怖がばれることに対する恐怖は異世界に来てすべてのしがらみが切れてしまったトウヤ以上だろう。

まったく………何やっているんだ。俺のバカ。あの陰陽師に知られたらまた爆笑されそうだなあ………。自分を異世界に送り込んだ悪友のかをお思い出しながら、トウヤは苦笑を浮かべる。

「キズ直したら許してくれないだろうか?」

「かなり難しいわね………とりあえず殺されることはないでしょうけど、和解まではいかないと思うわ」

「だろうな」

過去のトラウマとはそれほど強固なものである。高々目に見える原因を消したぐらいで許してもらえとは思えないし、相手はだれかが吹聴していると考えるのはいささか楽観的すぎるだろう。

「やっぱりもう一つ許してもらおうファクターが必要か……………これがそうならないか？」

「ガス人間退治？」

「ああ」

「無理じゃないかしら？対策あるって言っていたし……………」

「だよなあ……………」

まあ、その対策とやらはかなり胡散臭いとトウヤは思っているのだが、今はそんなことはどうでもいい。いまはどうやってあの怒り狂った海賊女帝と対話をするかが問題なのだ。

そのとき……！

「銃ピストルキス……！」

その技名を聞いたとき、即座にトウヤたちは散開し、ガスマスクを装着する。

「もう来たか……………はやいな」

「どうするの?」

「とにかくガスの中に入る。ハンコックの相手はおれがするからお前たちはガス人間のほうを頼む。ロビンは覇気を使えるようになったよな?」

「まだ密度が低いから決定打にはならないでしょうけど、足止めくらいなら……………」

「それでいまはいい。ハンコックとけりをつけられたら俺がそつちへ行く。ロレンは今回は観戦だ。能力を発動してガスを拡散させてしまったらシヤレにならないからな」

「わ、わかりました!!」

三人はそう言って、ガスの中に紛れ込む。本当ならリリカにガス人間退治を任せてトウヤがハンコック交渉にあたりたいところだが、残念なことに彼女は絶賛行方不明中だ。頼ることはできない。

「じゃ、おまえら、死ぬんじゃないぞ」

「ええ」

「わかっています」

三人は最後にそう言いあつとそれぞれの持ち場へと向かうのだった。

ロビンはガスマスクを着けて視界が悪くなった状態のまま桃色の煙の中を歩いて行く。

正直目がちかちかして勘弁してほしいところなのだが、最高戦力のリリカは行方不明。トウヤ至っては王下七武海と戦闘中である。ガスによる被害をなんとかしに来たのだから、竜巻を起こしてしまおうロレンの能力は使用厳禁。

実質戦えるのはロビンだけだ。だったら個の配役も仕方ないと、ロビンはため息をつきながら煙の中を歩いて行く。

「まだロギアに勝てるほど覇気を使いこないしてはいないのだけれど……………」

ロビンはそう言いながら、うすーく掌に覇気をまとわせてみる。それによってガスに触れてみるが何の手ごたえもなかった。覇気が薄すぎて能力に干渉できないのだ。

しかし、それも当然と言えば当然だろう。あのルフィですら覇気の習得には二年近くの時間がかかったのだ。シルバー・レイリー以上の覇気の専門家たるリリカの指導があるとはいえそんなに早く覇気を完全に習得できるわけがない。

「トウヤの無茶ぶりにも困ったものね……………」

ロビンがそんな埒もないことを考えていた、その時!!

「おおおおおおおおおおおおおおお！！」

すさまじい音とともに、ガスたちが一気に流れ始める。おそらくトウヤがガスの回収を始めたのだろう。有色の煙というものはかなり厄介で、立ち込められてしまうと白い煙よりも視界を奪う。完全に雲のようになってしまえば辺り一帯に暗黒をもたらすこともあるほどののだ。

それにこの煙の色は桃色。ハンコツクの攻撃とほとんど同色だ。ハンコツクの攻撃をさばくには環境が悪すぎると判断したのだろう。

その時、ロビンの足が何かにぶつかり、それを蹴り飛ばす。

「なにかしら？」

ロビンが不思議に思い下を見てみると、流れを作って薄れている煙の隙間から黒い鉄の塊が姿をのぞかせた！

「これ！？」

ロビンがそれをあわてて拾い上げると、それはいつもリリカが使っていたオートマチック型の拳銃だった。

「リリカさん、ここまで来たのね？でもこれが落ちているということは……………」

まさか……………負けたの！？

ロビンがそんな不吉な思考に行き着いた時だった。

「しししししししんんんんんんんにゅっしゅかかか
っかかかかかかかかかかかかかかか？」

不気味な声とともに、桃色の煙の中から一人の男が姿を現した！！

「……………殺す。命令遵守……………」

「タイミングが悪いわね……………」

ロビンがそう呟きながら、銃をそこらへんにほったらかして構えを
とる。

こうしてガス人間との最初の戦いが始まった。

…†…†……………†…†…

男の姿ははっきりいって異様だった。

ぼろぼろに擦り切れところどころ泥で汚れてしまっている真っ白な囚人服。その肩口から腕にかけてはもはや腕の形をしておらず桃色の煙へと変化していた。

目は落ちくぼんで血走っており、おそらく何一も眠っていないことが見て取れる。薬のよって眠気が完全に消えている証拠だ。その額には番号の刺青が施されており、彼が何かの実験体だということを如実に語っている。

「これは………かなりひどいわね」

あまりに悲惨な男の姿にロビンは思わず顔をしかめた。体もやせ細っている。どうも食料を口にしていないようだ。この状態で動けるのは果たして薬のせいなのか、ロギアの頑丈さが原因なのか。

どちらにせよこのままではあまり長くは持たない。彼の餓死という形でこの事件は幕を閉じるだろう。

本来ならそのことをアマゾン・リリーの人々に伝えるだけでこの任務は終わったかもしれないが………。

「今回の私たちの目的はあなたを元に戻して仲間にすることみたいなよ」

「ころころころすころすrkplおいるかうdtねいわ、あいあw
!」

もはや完全に壊れてしまった声をあげて飛びかかってくる男の肩に、ロビンは二本の腕を咲かせる。

「だからトウヤがくるまでは……………私と遊んでもらうわよ?」

ロビンがそう言うてにこやかにほほ笑むと同時に、覇気をまとった腕の花が容赦なく男の首を殴りつけた!!

多少の手ごたえとともに、腕は男の首を貫通する。やはりロビンの覇気では男をとらえることはできなかった。しかし、多少の痛みを与えることはできたのか、男は悲鳴上げて、ガスになって消えロビンとは遠く離れたところに再出現する。

「ロギアの唯一の弱点をついているかしら?」

「kjfmしやうrかいえるま!??」

「服や装飾品もロギアは身にまとったまま自然化して再生するわ」

ロビンはそう言いながら、男の肩をさす。

「私の咲かせたものは……………装飾品に分類されるのよ?」

男の肩にはいまだにロビンの腕が咲き誇ったまま。それに気付い

たのか男はあわててそれを払い落そうとするが、ロビンはそのまま容赦なく首に向かって腕を伸ばす。

「二本樹クラッチー!!」
ドスノーマ

ロビンがそういつと同時に、二本の腕は覇気をまとい男の首の関節を決める。

「がらちえう y なかうげ y こつあのぜう k j j j s j d f は j h f k j は k j h ふあ d ! ? ?」

しかし、男も覇気が使われていることに気付いたのだろう。即座に自分も覇気を発してロビンの覇気を相殺する!!

「っ!! もつきかなくなるなんて……………」

ロビンはそう言って、男の胸辺りに腕の花を四輪咲かせ、それを高速で振りビンタを加えようとした。

しかし、男は腕が完全に咲き終わる前に全身をガスに変えロビンの襲いかかった!!

「ペ……………イ、ン。ガス!!」

「!?!」

その煙は今までのモモ色ではなく、毒々しい紫色。その煙となった状態のままロビンへと襲いかかる。

「くっ!?!」

何かまずい攻撃が来ると察知したロビンはあわてて身を伏せてそのガスをやり過ごした。

そしてそのガスはロビンの後ろに立っていた、木を包み込むと……

……！

「うそ！？そんなガス存在しないはずよ！？」

その木を見る見るうちにぼろぼろにして崩壊させてしまったのだ
！！

「あれが、ガスガスの実の真骨頂というわけね……………」

トウヤに説明された《存在しないはずのガスを作成する》という特殊能力の実演に、若干冷や汗を流しながら、ロビンはおそらくは再び肩に再生されるであろう自分の腕を事前に散らしておく。

飛び散る花びらが見る見るうち紫色に染まり、崩壊するのを見て、ロビンは思わず顔をひきつらせた。

ロビンの《ハナハナの実》の欠点は咲かせたからだの一部がダメージを受けると、フィードバックが本体たるロビン本人にも来ることだ。

あのガスに腕がふれてしまったら、一体どれほどの苦痛が来るのかわからない。そんな事態は何としてでも避けたかった。

「これは……………お手上げね」

早々にそう諦めたロビンは煙があつめられている方向へ駆けだす。

勝てない戦いはするな。お前が死んだらふつうに悲しいぞ？

《黒ひげ海賊団戦》が終わった直後にトウヤが言った言葉だ。その言葉にロビンは従った。

正直トウヤがハンコックに勝っているかどうかは微妙なところだったが、このまま戦い続ければ確実に自分は殺されるだろう。だったらトウヤと合流して、共闘して法がまだ勝算がある。あわよくばハンコックとの戦いの際にあの男を連れ込みハンコックに無理やりあの男の撃退を手伝わせることができるかもしれない。

「ロレン。撤退よ。トウヤのところに行くわ」

「何があったのかわかりませんが、わかりました!!」

やはりトウヤに指示通り、近くで観戦していた（しかし煙のせいで見えなかったようだ）ロレンの返事を聞きながら、ロビンは桃色の煙の集約点へとひた走るのだった。

28話（後書き）

ロビン改造………もとい、強化計画についてのご連絡です。

皆さん、ご意見をいただきありがとうございました。けっきょく一と三で意見が同数になってしまったため、一と三をロボビンの強化方法にしました。

まだまだ発展途上ですが、優しく見守ってあげてください。

ところで書いていて気になったんですが、ロボビンのキャラってこれよかったですか？激しくキャラずれしている気がしないでもない今日この頃です。

「ハンコック……………こんな毒だらけの状況で喧嘩するのは、危険かつ不毛なことだとはもわないか？だから今はいったん休戦して俺と一緒にガス人間を……………」

「銃キス!!」

「はぁ……………」

トウヤはそんなヘタレたことを言いながら、煙を切り裂き飛んでくるハートを掴み取り圧縮。足元に転がした。

ハンコックと戦い始めてから、大体五分ぐらいがたっただろうか？トウヤは一方的な攻撃を受けてそれを掴み取るという作業に没頭していた。

本来なら近寄って殴りに行きたいところなのだが、あいにくと現在は煙のせいでかなり視界が悪くトウヤはハンコックの姿を確認することができなかった。

しかし、相手は見聞色の覇気も使えるようで、まるで精密射撃のように狙い撃ちをしてくるからたちが悪い。

おまけに、桃色の煙の中ではハンコックの攻撃を視認することは難しく、トウヤは技発動の時にここの世界の人間が必ずあげる声を頼りに、その攻撃を回避しているのだ。

それがなければまず間違いなくトウヤは一瞬のうちに石にされて

しまっていたらどう。

「言い訳ぐらい聞いてもらおうぞハンコック……。俺は女の嫌な過去いちいちばらすようなまねはしない。俺もいるいろと脛に傷もっている男だし、あんたの気持ちはよくわかる。だから、今回のことはもつと穏便に……」

そんなトウヤの必死の交渉（の割にはかなりだるそうだが………）にかえってきたのは容赦のない石化の矢だった。

スレイファロー
「虜の矢！！」

「くそ！！」

トウヤはあわててその場を離れるが、《虜の矢》は広範囲攻撃だ。走っただけで回避できるわけもなく、煙を切り裂き飛び出してきた無数の矢をトウヤはつかみ取ることによって何とか迎撃する。

しかし、それだけでかわしきれはるはずもなく、トウヤの服をかすった矢は容赦なく衣服を石化させトウヤの動きを阻害してくる。

「ああ！！くそっ」

そう悪態をつきながら、石化してしまった服をたたき砕きちぎり取る。そんなトウヤに煙の向こうから怒りに満ちた黒い声が響き渡ってきた。

「わらわの気持ちはわかるだ？何も知らない貴様が知ったような口をきくでないわ！！」

その声とともに飛んでくるハート形の弾丸を交わしながら、トウヤはハンコックの言葉を聞くことに撤することにした。このままではらちが明かない。いったん相手の心情を正確に把握するべきだという判断に基づいての行動だった。

「わらわたちは12のところに天竜人の奴隷になった。その中で生活は凄惨じゃった。毎日たわむれに傷つけられ粗相をすれば鞭でうたれた。悪魔の実を食べさせられたのもこの時じゃ。あ奴らは気分のままにわらわたちを犯し、能力者になった妹たちを見せものにし、おぞましい薬をいくつもわらわたちに無理やり飲ませた……………」。逆らう気力も心も壊され、フィッシュヤータータイガーが奴隷を解放するまで、わらわたちはまさしく生きた屍じゃった……………」

煙の向こうから聞こえてくるのはすさまじい怒気。そして、恐怖。彼女たちが幼いころに天竜人たちにされた所行は王下七武海とまで呼ばれた実力者であるハンコックの心にすらこれほどのトラウマを植え付けていた。

その話を聞きながら、トウヤハ自分の頭の中がみるみるひていくのを感じた。

別におぞげが走る昔話を聞いて恐怖したわけではない。見る見るうちにクリアになっていく思考の中、トウヤが抱いているのは天竜人に対する静かな怒り。そして、彼女を慰める方法どころか、怒りを鎮めるための、まとも方法すら見つけられない自分に対する多きな苛立ちだった。

「お主に何がわかるというのじゃ！！何も知らない癖に……………」

…知ったような口をきくな！！」

「知っているよ……………」

確かにトウヤがいた世界の闇とはベクトルが違う、粘着質で悪質な闇であった。聞くだけで鳥肌が立つほどおぞましいものであった……………。だがしかし、トウヤは闇を知っている。たった一人の保身のために、数百人近い人間が殺される世界を知っている。命がたった300円で取引される世界を知っている。仲間を実験動物のように殺され、命がごみのように捨てられる世界を知っている。

だからこそ、トウヤは声をあげてハンコックに伝えたかった。苦しんでいるのはお前だけではないと。おまえは鏡の中の俺だと……………。

「戦闘中に不幸自慢かよ……………」

自然とトウヤはそう呟いていた。

「なに？」

「苦しんでいるのがお前だけだと思っているのかボア・ハンコック。悲劇のヒロインきどんのも大概にしるよ。何も知らない癖にだ……………。あっちのクラス5の中では最も闇の中心部にいた俺に向かって大した口のききかたじゃないか？え、ボア・ハンコック」

相手の怒りを納める方法はいくつがある。命がけの説得を試み、何とか落ち着かせる。これは美談で終わるだろうが、最終的のそれをしている奴はいくらかの同情を含んでいるからこそできる所行だ。だから、ハンコックと同じ位置にいて、同情なんてみじんもわかな

いトウヤにこの行為はできない。

トウヤに傷をなめあう趣味はないのだ。だったら取れる手段はたった一つ。

「おまえに格の違いを見せてやるボア・ハンコック。闇から逃れた癖に過去を振り切ることすらできていないド三流が……………。自分の身の程を思い知れよ」

相手よりも密度が濃い怒気をもって、相手の怒りを徹底的にたたきつぶすこと。

冷静に怒りを納める方法を取捨選択している時点で、あまりうまくいく気がしない方法ではあったが、今のトウヤにはこれしかできないから……………今の彼女の怒りを納める方法がこれしか思いつかないから。

「いっぺん死んでこい。ハンコック」

演技の怒気を放出しながら、トウヤは辺りに立ち込めた桃色の煙を一気につかみ取り始めた！

…
寸…寸…
…
寸…寸…

見る見るうちに桃色の煙は辺りから姿を消し、クリアな視界をトウヤたちに提供する。

ハンコックの姿は大体二十メートルほど先にあつた。意外と近かつたんだなと思いつながらトウヤは口元に凶悪な笑みを浮かべながらガスマスクを取り外す。いい加減これをつけながらハンコックと戦うのは無理だと判断したのだ。

視覚と嗅覚が奪われてしまうことは、五感をフルに使って相手の攻撃をすべて察知するトウヤの格闘術にはひどいハンデになってし

まう。

正直これが取れば、かなりこの戦いは楽な方向へ進むはずなのだ。まあ、まだガスが残っているかもしれないし、ガス人間がどれだけの速度でガスを放出できるのかも不明。下手をすればガスがすさまじい速さで再び辺り一帯に立ち込めるかもしれないため、かなり危険な賭けではあったが、それでもトウヤはガスマスクを外した。全力で相手をしないとハンコックには届かないからだ。

「はあ。美人が台無しだぜ。ハンコック。これから殺さないといけないとなると結構きついもんがあるな」

「ならば貴様が死ね!!」

ハンコックのその言葉とともに、無数のハートの弾丸が飛んでくる。

「^{ガトリング}弾幕キス!!」

「どこかのゴム野郎とおんなじような技使ってんじゃねえぞ!!」

トウヤはそう叫ぶながら地面に手のひらを押し付けた。そして…

……………!

「圧縮!!」

その言葉と同時に、ハンコックの立っていた地面が巨大な穴へと姿を変えた!!

「な!!」

一瞬驚いて技の発動を止めてしまうハンコックに向かって、トウヤはその手に握りしめていた土色の球を投げつける。

「はじける!!」

トウヤのその言葉とともに、それは今まで地面だった土の塊となり、ハンコックを押しつぶすために土石流となり襲いかかる!!

トウヤがやったことは簡単である。トウヤは地面に手をつけることで地面をつかみ取り手のひら大になるまで圧縮したのだ。当然つかみとられた地面は跡形もなく消滅した形でトウヤの手へと収まり、地面に大きな穴をあける。

トウヤは人間や生物は直接圧縮は不可能である。空間ごと封じ込めてしまうことはできるが、それも大きさと制限時間がある限定的なものだ。

しかし、土や鉄、植物といったものにはそれらの制限はない。どれほど巨大なものであると、直接触ることができれば手のひら大に圧縮することができつのだ。

「くっ!!サロメ!!」

ハンコックの声を聞き、脇に控えておりなんとか穴に落ちることを免れた大蛇が素早く体を伸ばし落下するハンコックを救出。土石流を回避した。

「貴様!!」

「よそみをしている暇があるのかよ!!」

「!?!」

何とか助かったハンコックが怒りもあらわにトウヤをにらみつけようとするが、トウヤはいつの間にかハンコックの目の前に出現しており、その手を伸ばそうとしていた!! パワードスーツによる高速移動だ。

バファームフェルム
「芳香脚!!」

しかし、ハンコックも王下七武海。そうそう何度もやられはしない。鋭いけりを放ち、トウヤの頭部を狙う。

トウヤは仕方なく、足の迎撃のために手の軌道を変え、蹴りを受け止める。

「サロメ!!」

ハンコックの指示を聞き、大蛇が鎌首を持ち上げトウヤに対して噛みつきを発動しようとするが、

エリアクロース
「空間握り」

トウヤはそれを空間をつかみ取ることで封じ込めた。

ピストル
「銃キス!!」

ハンコックが再びハートの弾丸を飛ばそうとするが、トウヤはそ

の手をけりて払いながら怒声を上げた。

「俺もお前と同じところにいた！！天竜人ではなかったが、おれも仲間を、家族を人質に取られてとある組織の暗殺を請け負わされていた！！」

「!?!」

「ひどいもんだったよ。殺せと言われれば殺すしかない。ガキだろ。うがばあだろ。うが、仲間や家族を守るために殺すしかなかった。手を抜いて見逃せば、家族が最初に殺された。首だけにされた母親の死体が俺の家の玄関の前に包装されて送り届けられたときの俺の気持ち、おまえにわかるか!!」

すべて事実である。トウヤが裏に入った理由はそれだった。初めての暗殺に失敗したときに味わったことも事実だ。

珍しいことに彼は今回の交渉でうそをつくことをやめた。なぜかはわからないが、心のどこかで、ここでうそをつくのはやってはいけないと理解していたのだろう。

「やっと助かったと思ったときに、仲間が実はもうすでに殺されていたとわかった時の俺の気持ち、わかるか!! やつと平穩を見つけたと思つたら、昔暗殺した人間の仇打ちに十歳のガキが俺の胸にナイフを突き立ててきた時の気持ち、わかるか!!? 殺したくなかった人間の怨嗟を一生背負い続けなければならない俺の気持ち、わかるか!!」

トウヤはいつの間にか泣いていた。思い出すだけで深く心をえぐられる、心の傷たち。魂が泣いている。もう思い出すなど。必死に

なって忘れようとしたじゃないかと。しかし、トウヤは続けた。自分と同じように心の傷に苦しむ女性を助けるために。情け容赦なく自分の傷をえぐり続ける。

「ハンコック……………わかるはずだ。俺らはいさつき会ったばかりの他人で、味わってきた苦痛も違うけど、しんどいと思ったことは一緒だろう」

トウヤの言葉を聞き、ハンコックはトウヤの攻撃をいなしながら目を見開いていた。今まで自分を馬鹿にするような態度をとってきた男に、そこまでの過去があるとは思っていなかったのだ。

そして、彼女は思った。泣きながらだが……………つらそうにながらだが……………なぜこの男は、自分のトラウマをこつも簡単に話すのかと？

「簡単な話だ。俺がもう過去を飲み下したのに対し、おまえがいつまでもその過去を引きずっているからだ!!!」

「!!!」

トウヤの言葉に、ハンコックは息をのみ動きを止める。その隙を見逃すトウヤではない。

鋭いけりを放ちハンコックの鳩尾をけり上げる。

一瞬だけ無理やり止められた呼吸に、せき込むハンコックの首をつかみトウヤは彼女の体を近くに近づけた木に叩きつけた。

「があ!!!」

「わかるかハンコック。どれほど傷を負っても、どれだけ恐れても、過去は変わってくれはしないし。追うことをやめてはくれないんだ！！」

トウヤはそう言いながら間違っつてハンコックを殺してしまわないように能力を切る。

喉を締め付ける力が弱まったのを感じて、ハンコックは薄眼を開いてトウヤを見た。

そこには、すべての過去の罪を背負いながら、それを下して乗り越えてきた大きな男の姿があった。

「俺はないも救えなかった。すべてを奪われて壊された男だ。残ったのは己の命と、無数の罪だけ……………そんな俺から見たらおまえの過去なんてものはまだまだ幸せだ」

これは嘘である。他人のトラウマに貴賤をつけるようなまねはトウヤはしない。しかし、いまだけはこう言っておく必要がある。そう考えてトウヤは初めてこの場でうそをついた。

「天竜人？わらわせんな。世界政府に守られているだけの老害どもが、一体どれほどの脅威になる？背中烙印？失笑だな。高々傷跡ぐらいでびくびくすんな。俺がねこそぎ消してやる。だからポア・ハンコック過去におびえるな。過去につぶされるな。俺だつて乗り越えられたんだ。お前のトラウマごとき俺がつかみ取って握りつぶしてやるよ」

そう言つて、最後に笑うトウヤを見てハンコックは涙を流す。こ

の男ならそれができるかもしれないと……過去にとらわれた自分たちを助けてくれるかもしれないと。

「ほ……………本当に、そんなことができるのじゃろうか？」

「できる。いや。俺がやってやる。俺はすべてをつかみ取る皇になる男だ！！」

こうして、海賊女帝対万有掌握の戦いは幕を下ろしたのであった。

30話

「戦いの途中で女を口説くとは……………最低じゃなおぬし」

「ふん。それでお前の悩みが解決したんだから別にいいだろう」

それから数分後、涙を収めサロメに座り込むハンコックにハンカチを渡しながら、トウヤは眉をしかめた。らしくなく熱血してしまつた。俺の目指す場所はハードボイルドなのに……………。若干ずれ始めている自分の理想像とのすり合わせに苦労しながら、トウヤは言葉をつなげていく。

能力によつて作られたまやかしの感情といつても、やはりトウヤはハンコックに惚れているのだ。先ほど泣かしてしまったことや、弱みを見てしまったことでその感情はさらに強化されてしまつていた。先ほど一気に冷めた後でもあつたので、その心情変化はトウヤにとつてかなりきついものとなつてしまつていた。

憎さ余つてかわいさ百倍といつたところだろうか？

正直顔を見ることすらきつい。

「さつきはあいつだが、実際お前の焼印を消すのは俺の仲間だ。そいつにも背中傷のことはばれるが構わないか？」

「……………あれだけ大言壮語したわりには、意外と使えんのじゃなおぬしの能力」

「俺の能力はきちんとした一般化学に基づいて発動しているんだ。」

ビームで人を石化することができるトンでも能力と一緒にするな」

そんな軽口を交わしながら、トウヤは肩をすくめた。そうでもい
わなかったら話聞いてくれなかっただろうが。内心そう悪態をつき
ながら、ハンコツクの返事を待つトウヤ。

ハンコツクはその様子にため息をつきつつ、サロメから立ち上が
りトウヤの手を取った。

「一度信頼した者には誠意をもって接する。おぬしがたとえ背中
の後ろを消せなくても失望したりはせんよ。この蛇姫に二言はない」

ハンコツクのその言葉を聞き、内心安堵の息をもらすトウヤ。こ
こでキレられたりしたらさすがにもう手札はない。おとなしくハン
コツクに殺されるしかなかったため本気で安心したトウヤである。

「あとそうじゃ。ひとつ願いを聞いてほしいのじゃが？」

「なんだよ？」

そんなトウヤを見て、ハンコツクは少しだけ笑いながら握った手
を持ち替え握手のようにした。

「わらわの初めての友人になってくれぬか？おぬしとなら末永くや
って行けそうじゃ」

「何だお前？友人いないのか？」

「し、仕方がないじゃろう！妹ですらわらわの性格は悪いと言っ
てくるのじゃから………ついでこれるものなどだれ一人おらん

わ

「自覚があるなら治しておけ、馬鹿……………」

トウヤはそう悪態をつきながら、しばらく何かを考え込んだ後、若干顔を赤らめながらハンコックに冗談半分にこう申しこんだ。

「なんなら、友人じゃなくて恋人から始めてやってもいいぞ？」

「ああ、それはない。おぬしのような卑怯者を夫にするなど考えただけでおぞけが走るわ」

「……………」

一応友人にはなれたが、トウヤがその時号泣していたことはここには記さないでおこう……………。

「んじゃ、あとはガス人間退治だな。殺害じゃなくて撃退、後気絶させた後はうちで預かりたいんだけど大丈夫か？」

そ入れからしばらくして、トウヤはハンコツクの見聞色の覇気を頼りにガス人間を追っていた。どうやらロビンはうまく足止めをしたらしいのだが、現在は敗北して逃走しているようで、かなりの速さで移動をしている。

大方こっちに連れてこようとして失敗しただろう。そう当たりをつけながらパワードスーツの補助を受けたトウヤは密林の木々を飛び移りながらとんでもない速さでその二人を追いかけている。

「問題ない。今のところ被害にあった者はおらんし、討伐の理由も迷惑だからに尽きるからの。わざわざ殺す必要はない」

「言質はとったぞ？後お前たちは何かあいつの攻略法を考えていた

みたいだが、どんな策だったんだ？」

「……………わらわたちは秘宝を使う気じゃったのじゃ」

「秘宝？」

その言葉にトレジャーハンターのトウヤの耳がぴくぴくと動く。最近本業はご無沙汰だったので結構ストレスがたまっているトウヤである。

「九蛇一族には代々に伝わる秘宝があつてな。名を《魔王色の覇気矢》というのじゃが、これを食らった能力者は一定時間能力の使用を禁止されるのじゃ」

「……………」

思いつきりどこかで聞いたような効果に、若干眉をひそめながらトウヤは黙り込んだ。作った人物に思いつきり心当たりがあるが、今は何も言うまい、と口を閉ざしたのだ。

「で、その矢は持ってきたのか？」

「無論じゃ。後はこれをガス人間にたたきこめばいい」

ハンコックがとりだした禍々しい黒い煙を吐き出す矢に、トウヤはため息をついた。

思いつきりリリカの魔法式が刻まれていた。桃源郷作る前は世界各国をうるついで、いろいろな道具を作り出したと聞いてはいたが……………こんな物騒なもの残していくなよと言いたい。

これがあつたのが文明レベルの低い九蛇だからよかつたものの、海軍に渡つたらしたらドクター・ベガパンクあたりに全部技術盗まれるぞあの女……………。

トウヤとしてはこの技術を、数に限りがあり、必ずいつかはなくなつてしまふであろう悪魔の実に代わる次代の技術としてハンターズの独占技術として受け継がせる予定なので、正直こういつた遺物があるのは困る。

あとでどの辺にいつてどういふ道具を落としたのか聞かないと……………。新たな課題の浮上に頭痛を感じながら、トウヤがため息をついたときだった。

「見えたぞ！！あやつじゃ！！」

ハンコックの言葉を聞き、トウヤ八顔を引き締めハンコックが指さした方向に目を向ける。

そこには必死に逃げるロビンと、それを追いかける紫色の煙の渦が確認できた。

その渦のふれた木が触れられた場所からドロドロと溶けていくのを見てトウヤは不敵な笑みを浮かべる。

「ふん……………なかなか面倒なことになっているみたいじゃないか」

だが、可視の煙なら俺の敵じゃない。

そう確信したトウヤは手を煙に向け能力を発動した。

「エリアクロース
空間握り」

トウヤがそう言って空間を握りこもうとするが、煙はそれに気付いたのか一気に拡散！トウヤがつかみ取った空間の外に実態を出現させる。

「おおっと……………まさかあいつの見聞色使うのか!？」

かなりめんどろな戦いになりそうだな……………。そう考えながらも、トウヤは不敵な笑みを崩さずに煙草に火をつけた。

「さあて、ようやく本当の戦いに入るか。すぐに正気にもどしてやるからな仲間候補君」

トウヤの言葉が聞こえたのか、聞こえなかったのか……………。ガス人間は怒声を上げてトウヤに襲いかかった!!

30話（後書き）

性格修正が若干入ります。

初期のキャラに再び近づけるように頑張ります。

あと、このシリーズが終わったら大幅改定したいと思います。ト
ウヤの性格は作者的にも統一したかったので、いい機会かなと思っ
て……………。

反対意見があるやつ……………出てこいや!!（笑）

31話

いきなり出現したトウヤに、ロビンは少しだけ驚いたがそれがトウヤだとわかると安心したかのように吐息を漏らす。

「ロビン。おまえにはこいつの相手は荷が重いだらう。代わってやる」

「はじめからそのつもりで逃げていたのよ。それより海賊女帝はどうなったの?」

「もう大丈夫だ。俺のハーレム要員なってくれるらしい」

「ばれる嘘はつかないの」

「前にも言ったが、俺はばれる嘘は見方にしかつかない」

そんな風に軽口を交わしながら、立ち居を交わした後ロビンは能力を使い再び逃走。その背中を守るようにトウヤがガス人間の前に立ちふさがる。

「さあて、おまえの不幸はこの俺が握りつぶしてやる」

「kamjauwoa!?! faoklloalkgal?oia,e
ioa!?!」

人としての言語を失っているガス人間の返事に、煙草の火を消しながらトウヤは戦いの構え取った。

それを見た男は全身を紫色のガスに変化させ、辺り一帯のそのガスをまき散らしてきたのだ！！

…十…十…十…十…十…十…

「なるほど……あれがハンターズ総帥の真の能力か？」

森の一角で爆発的に増えかけた紫色のガスが、一気に一点に集まって行くのを見て崖の上で戦いを観戦していた巨体の男はそうつぶ

やく。

やつの本気を見るために桃源郷の主と交戦し、かなりの損害を被ってしまった彼は今の今まで体を休めて修復を行っていたのだ。

そして数分前にハンコックをうまく説得したトウヤを見つけて彼の戦いがよく見える崖へと瞬間移動したのだが。なかなかどうしてかなりのやり手だ。

「だが真に恐ろしいのは世界政府の五老星を手玉に取ったその頭脳。そしてハンコックすら説得するそのカリスマか。ドラゴンが注目するわけがわかった……………」

クマはそれだけ言うと瞬間移動を開始する。もはや彼の脳裏にはハンコックへの援軍という政府の命令は消えていた。そちらはトウヤがいれば大丈夫だろう。今彼がするべきことは……………。

海軍の船に突如出現したクマに、船を沈めに来ていたマリーゴールドとサンダーソニアは驚愕の表情を浮かべる。

「な!?!」

「貴様どこから!?!」

しかし、巨体の男は二人のことは歯牙にもかけず腕の一振りですぐ女たちを船の上から退場させる。

そして彼が止まっていた船室にかくしておいた特殊な電伝虫を手に取りろうとした時だ。

「どこへ連絡するつもりなんだ？なあ、クマ公」

「？」

突如聞こえてきた声に不思議に思った巨体の男………《暴君クマ》
《》が振り返ったとき、すさまじい速さで振りぬかれたこぶしがクマ
の顔面を直撃し、その巨体を吹き飛ばす！！

「吸血鬼なめんなくそガキ！！」

そこには額に膨大な数の血管を浮かべたヴァイがいた。

「どんな事情があつてあんなことをしたのかはしらねえが、主にあんなことをしやがつて万死に値いする。主が事情を聴きたいからと言っていたから殺しはしねえが、九分の八殺しにしてやる！！覚悟しろよクマ公おおおおおおおお！！」

怒り狂った吸血鬼のこぶしの雨がクマに襲いかかる。クマは仕方なく電伝虫を手放し吸血鬼を迎撃するのだった。

…：…：…：…：…：…：…：…：…：…：…

逃走を始めたロビンは先ほど拾ったリリカの拳銃が突如うごめき始めているのに気づいた。

「なに!?!」

ロビンがあわててそれを手放すと同時に、拳銃は赤黒い血液に変身をとげ、その中から青白い腕が飛び出す。

「……………」

もう完全にホラーとしか言えないその光景に愕然とするロビンを尻目に、腕はどんどん血の池から伸びだし、肩と顔を出現させる。

「って、リリカさん!?!」

「まったくクマのやつ……………よくも私をノースブルーまで飛ばしてくれたな……………。とっさに拳銃手放していなかったら戻ってくるのにどれくらい時間がかかったと思っっている」

ちなみにヴァイが戻ってきた方法もこれなのだが、彼の場合は拳銃ではなく血痕である。

「今帰ったぞロビン。ロビン。ガス人間はどうなった？」

ハンターズ最高戦力リリカ帰還。これによりガス人間騒動は一気に終息に向かい始めた。

ちなみのに、ロレンは？

「えっと……どうすればいいんでしょうか？」

逃走中にロビンとはぐれてしまった上に、すさまじい衝撃とともに肉球型のクレータが彼の前に出現。明らかに体格がおかしい二人の女性が目の前に出現してしまい途方に暮れていたりする……。

「と、とりあえず介抱ですかね？」

常識人の彼はとりあえずその二人を助け起こし、応急処置を施すのだった。

31話（後書き）

短めです。

一回かなりのところまで書き進んだのですが、操作ミスで消えてしまい気力がなくなりました……。……。

32話

ガス人間がガスを飛ばしトウヤがそれを受け止める。

覇気をまとったガスは岩をも砕く物理的攻撃力を持ってトウヤに襲い掛かるのだが、トウヤの能力は手にふれさえすればあらゆる攻撃は無効化されるためピンチというほどのことはなかった。

「ガスマスクがうつとおしいな……おまけにこのマスクがいつまで効くのかもわからないし」

ガスマスクというものはマスクの口元についている毒をろ過する缶によって、安全な空気をマスク内に送り込んでいる。そのため、ろ過できる毒には限界があることや、濾過できる毒以外の毒ガスを使われたらろ過できずに毒を食らうという弱点をいくつか持っている。

おまけに相手は存在しない毒すら作り出してくる相手だ。正直ガスマスクごときでは心もとなかった。

そのためトウヤはハンコックにこの戦いに参加しないように言うておいたのだ。いや、正確にはトウヤがお取りを務めるからハンコックは不意を衝いて矢を打ち込めといったのである。

ガスマスクしか毒ガスにたいする予防線を持っていないハンコックでは、この相手の戦いは少し骨が折れるだろう。だが、トウヤは違う。ガスが口元に入る前にすべてを掴み取ることができ吸収することができるとウヤにとって、可視のガスなどさほど脅威ではない。

ではなぜトウヤはガスマスクをつけているのか？答えは簡単。

ピピピピピピピピピピピピピピ……！

「!?」

ガスマスク内部につけられた機械がけたたましい警告音を鳴らす。

トウヤが慌ててガス人間のほうを振り向くと、そこでは紫色の煙が掻き消え透明になっていくという不思議な光景が見て取れた！！

「やっぱり……不可視ガスに切り替えてきたか!？」

空気の中から突如出現したガス人間の両手は透明人間になったかのように掻き消えている。

そう、トウヤはこれを警戒してガスマスクを着けていたのだ。

可視煙はトウヤの能力が二番目につかみにくいとするものに分類されている。しかし、それは取り込むのが物質と違い、たまに吸い込まれるようになってしまうため多少物質より掴み取る時間が長くなってしまっただけで、それほど脅威になる原因にはならない。むしろ先ほどまでのガスもそうだ。

しかし不可視ガスは特別な可能性がある。同じガスとはいえトウヤが最もつかみにくいとする《不可視》の攻撃だ。理論上それを掴み取るためには三十秒以上のタイムラグがあり、戦闘では致命的な隙となる。

もしかしたら、普通のガスと同じように掴み取ることができるの

かもしれないが、あいにくと不可視のガスを使う相手は今までのことがないためデータがない。クマにでも頼めばどうにかしてもらえたのかもしれないがあいにくと彼は行方不明だ。ハンコックも一度破れてしまっているため頼りにはならないし、トウヤがどうにかするしかない。

「まったく……めんどくさい奴」

当夜のつぶやきが聞こえたのか「kanaf d goa!!」と相変わらず意味不明な怒声を上げて肩から先がない腕を向けてくる!!

「ちっ!!」

まずは実験。果たして不可視のガスはつかみ取るのにどれほど時間がかかるのか？

覇気をまとっているため異様な気配を持って襲いかかってくる透明なガスの拳。

トウヤはポシエットからいくつか玉を転がしながら、それを何とか手で受け止めることに成功した。しかしつかみ取るのに若干のタイムラグ。

ガキの頃から寸分もくるとたことのない体内時計を持って計測した結果、つかみ取るのに大体二十秒の時間がかかることが判明した。

多少のスキになるだろうが、その間に攻撃を入れるにはかなり厳しい時間。高速戦闘に特化した人間でない限り大きなスキにはならない。だがしかし、スキはスキである。

「くっ!!」

トウヤの首が強靱な力を持ってつかみ取られ、上空に持ち上げられる。

「おいおい。スモーカーでもこんな反則じみた攻撃はしないぞ?」

作り出したガスはまるで体の一部のように使える。海軍からの情報を思い出しながら、トウヤは足元に転がしておいた球体に指示を出し破裂させる!!

「knaksdfgoia;lnma::awopek:a!!」

《光弾》……………いわゆる閃光玉。

そこから発せられた強烈な閃光がガス人間の目を焼く!!ガス人間が悲鳴を上げて手を出現させ目を覆う。当然トウヤは解放されそのまま地面に落ちたが、素早く受け身をとることで大事には至らなかった。

「いまだ!!ハンコック!!」

「ようやくか。あまり待たせるでないわ!!」

ようやく発せられたトウヤの指示に、ハンコックは森の奥から矢を投擲しようとする。しかし、相手はハンコックすら圧倒したガス人間だ。

「:ae@pagva/lem::ga::a::a::,vgga@ea::

「!!」

「な!?!」

「しまった。見聞色か!!」

目から多量の涙をこぼしながらガス人間はあわてて森の中を走りだした。おそらく目の代わりの見聞色を使いハンコックの攻撃を察知。自分の能力を封じる投擲武器と分かったため素早く動くことで狙いをつけさせないようにするつもりなのだろう。

彼はロギアのため通常の人間では捕まえることはできないし、覇気は相殺されてしまう。通常の人間では捕まえることはできないため、ガス人間は目が元に戻るまで逃げ切ることは簡単なことのはずだった。

しかし、トウヤは通常の人間ではなく例外的存在だったことがガス人間の命運を決めた!!

「逃がすかよ、ガス人間」

パワードスーツを使い高速移動をしたトウヤがガス人間の目前に出現。矢が刺さるはずのところの手で握り締め無理やり実態化させる。

「トウヤ!!」

「いいからやれハンコック!!手の一つや二つぐらい気にするな!!」

トウヤの言葉を聞いたハンコックは、しばらく迷うようなそぶりを見せたが今度は全身から青いガスを漏らし、トウヤを毒そうとし始めたガス人間を見て覚悟を決めた。

容赦なく右手に持った黒い矢を投擲するハンコック。その矢は狙いたがわずトウヤの手を貫きガス人間のわき腹に突き刺さった！！

…
十
…
十
…
十
…
十
…

海軍軍艦。その中では巨体の男の肉球と吸血鬼のこぶしが交錯していた。

肉球が直撃するとその部分を霧に変え回避するヴァイ。

吸血鬼のこぶしをドクターベガパンクに改造された鋼の体で弾き飛ばすクマ。

戦いは膠着状態に陥り、戦闘は千日手と化していた。

「しっこい……………」

「こっちのセリフだデカブツ!!」

クマの感情のない声にいらつきがたつぷり込められた声で返す吸血鬼。長生きしている割に沸点の低い男だった。

「ちっ!! 改造人間ねえ。噂では聞いていたけどほんと化け物だな。腰にベルトが現れて変身とかはしないのかよ!!」

「あいにくとそんな機能は搭載されていない」

「冗談にきまってるだろうがバカ!!」

そんな軽口をたたきながらふるわれるこぶしは本来レッドライン

の壁すら砕く大威力のものだ。それを何発も受けてなお耐えきるクマにうすら寒いものをヴァイは感じていた。

技術の進歩っていうのはおぞましいな。たった一人の人間にここまで力を搭載しちまうとは。

ヴァイはそんなことを考えながら軍艦の甲板に飛び出す。そろそろあちらも準備ができたころだろう。

「逃げるのか？」

「冗談！！船ごとめえを吹き飛ばすのさ！！」

ヴァイはそう言いながら呪文を詠唱。吸血鬼特有の膨大な魔力によつて編まれた魔術式は深紅の光をまよって破壊をまき散らす準備を始める。

「そうか……………」

しかし、クマはそれに一切あわてた様子も見せず瞬間移動。ヴァイの後ろに手を振りかぶった状態で出現した。

「迷惑だ。よそでやれ」

そしてそれが振るわれ、ヴァイの体にぶつかる瞬間、ヴァイは後ろを振り向き凶悪な笑みを浮かべた。

「かかったな！！」

「！？？」

瞬間。クマの視界がブラックアウトし意識が刈り取られる。

「ベストフレット《黒死弾丸》デカフツ感染しろ。改造人間」

意識を失う寸前、クマの脳裏にはそんな言葉が響き渡っていた。

…
十
…
十
…
十
…
十
…

「撃墜完了……………」

そうやって人の体ではとうてい担ぎあげられないような長い銃身を持つ巨大な銃を持ちあげ、大きく伸びをするリリカにロビンは冷や汗を流していた。

「いったい……………それは？」

「ああ、この世界にはなかったか？狙撃専用の銃で《ライフル》という。これはその中でも最も強大な威力を誇る《対戦車ライフル》。モデルはバレットM82っていう銃なんだが……………知らないよな？」

一気にまくし立てたはいいが、全くわけがわからないといったロビンの表情にリリカはため息をついた。この世界は彼女のような銃マニアにとってはかなりいづらい世界だ。

「要するにああいった、かたい怪物を殺すために作られた貫通力と精密射撃性を上げられた大砲みたいなものだ」

「わかったわ。でもそれはあんまり触りたくないわね……………」

「まあ、作り方が作り方だしなあ。大半の女はビビる」

ロビンの言葉に苦笑を浮かべつつリリカはその銃にかけていた能

力を開放。それを元の血液に戻し自分の体に取り込む。

この能力こそがヴァイの固有スキルだった。彼は血中の鉄分（モケロビン）を使い自由に武器を作り出すことができるのだ。彼が《鉄血の吸血鬼》と呼ばれるゆえんである。リリカは彼に自身の血を吸わせることによってその能力を借りてあの対戦車ライフルを作ったのである。

「クマさん、しんでないといいけど」

「安心しろ。《呪詛弾》と同時に《蘇生弾》もうち込んでおいた。ヴァイが捕縛の作業を終えるころには息を吹き返すだろう」

スコープから見えた全身に漆黒の発疹が浮かんだクマの様子に戦慄を覚えるロビンの背中をバンと叩き、リリカは歩くことを促す。

「さて、次はトウヤのところだ。あっちもそろそろ終わっているだろう」

リリカの言葉につながきながらロビンは能力を行使。船が停泊している入江が見える崖から姿を消したのだった。

「これでよし……。これでこいつが暴走することはもうないだろう」

そしてロビンとリリカがトウヤのところに着いたときには、薬が抜かれたガス人間が穏やかな寝息を立てて寝ており、掌に薬を球体上にとどめたトウヤとどういうわけか矢を投げた瞬間すさまじい勢いで生気を奪われ疲労困憊しているハンコックがお互いの背中にもたれかかっているところだった。

この後トウヤはさんざんリリカにからかわれることになり、若干機嫌の悪いまま船に帰ることになるのだが、それは詳細に記す必要はないだろうからここでは割愛させてもらう。

32話(後書き)

ようやくと一区切り。ハンコック編バトルターンは終了です。

次回は後日談と今後の展望。最終的にハンコックとはどうなるのかを書きます。

33話

「ここは……………」

男はそつつぶやき目を覚ました。

「知らない……………天井だ」

…
十…
十……………
十…
十…

ガス人間退治を終えたハンコックとハンターズ御一行は九蛇の街へと凱旋を果たした。ヴァイに限っては彼の血液によって作られた頑丈な鎖で縛りあげられたクマを引きずってのものものしい凱旋であったためかなりひかれたが、まあこれはどうでもいいだろう。

いったん船に帰って戦闘によってしまった汚れを落としたトウヤたちはかなりきれいな格好で九蛇の街へと入り、宮殿へと案内された。例外中の例外として町に入ることを認めてもらったのだ、この上宮殿内を汚すわけにはいかないというトウヤの判断だ。

そして、そのしばらく後にマリーゴールドとサンダーソニアを伴いロレンが九蛇の街を訪れた。何故か二人とかなり仲が良くなっているロレンに、天然ジゴロの臭い感じ取ったトウヤは苦笑をうかべたとかいないとか……。本人が言うには空から降ってきたのを手当したらなんだか仲良くなったらしい。

ちなみにその時にハンコックがトウヤたちが乗ってきた軍艦を燃やそうとしたことが判明し、リリカと一悶着があったのだがそれはいまは関係ないだろう。

「なんじゃ食べんのか？」

「おれは小食でな。夕飯は一皿だけだと決めている」

食える時に食つとけという船乗りの理念に反した言葉ではあるが、トウヤの格闘術は少し体形が変化しただけでその強さを大幅に減衰させる。そのためトウヤは食事には気を使っているのだ。

「ふん。おなごのようにみみっちいことを言いよって。これだから

外の人間は」

「そういうなよハンコック。これにもいろいろと事情があるんだぞ？」

そんな風にじゃれあう二人を驚きながらも、九蛇の人々は遠巻きに見ていた。それも仕方がないだろう。今まで誰に対しても傲慢で最悪な態度をとってきた蛇姫だ。その強さや美しさには尊敬を覚えるが、こういった席で粗相を働けば間違いなく石にされてしまう。たとえ今が上機嫌に見えろとはいえ油断は禁物だ。

だが……………。

「ずいぶん仲良くなつたんだな？」

トウヤの一味にそんなことは関係ない。

「友達になつたからな」

「その見た目では友達はない……………」

軽い口調で話しかけてきたのはリリカだ。その隣には限りなく生に近い焼き加減で焼かれた牛肉をむさぼるヴァイがたっていた。

「仮にも四十代のおっさんがキモいことを言うんじゃない。殺したくなるだろうが」

「船長に対する尊敬が足りないなりり力。少しは敬ってくれてもいいだろう」

「お前はまだ私の契約を完全に果たしていない。だから尊敬する価値はない」

「てきびしいな……………」

「なかなかのじゃじゃ馬を買飼っているようじゃな」

苦笑を浮かべて頭をかくトウヤにハンコックはニヤニヤ笑いながらそうからかう。

「そついうお前はどつなんだ？」

「わらわは見事なカリスマをもって船員たちを統治しておる。おぬしのような三下と一緒にするでないわ！！」

「所詮能力頼りのくせに……………」

「よほど石になりたいらしいなおぬしは？」

「ハンコック。お前の能力はシャレにならない。俺はガチデ食らうからな？」

そんな風に蛇姫に軽口をたたくトウヤに、九蛇の人々は戦慄を覚え、畏敬の念を覚えた。

そんな時だった。

突如、宴会の会場につながっている一つのドアが吹き飛びトウヤのほうへと飛んできた！！

「ん？」

トウヤは即座に皿を手放しその扉を受け止め圧縮保存する！！

「何事じゃ！！」

トウヤとの雑談を邪魔され若干不機嫌な蛇姫の怒声に九蛇の人々は一斉に身をすくませる。だが……………。

「ああ、そう怒らないでくれると嬉しいでござるよ」

そういつて、扉を吹き飛ばし宴会の中に入ってきた一人の男はやつれた顔にはかない笑みを浮かべながら、カリカリと頭をかいた。

「少々すきつ腹が大変なことになっておってな。できれば食事を分けてくれると嬉しいでござる」

そういつて現れたのは、トウヤが用意していた浴衣にそでを通しその上から白と黒の羽織をまとったガス人間だった。

…
…
…
…
…
…
…
…
…
…

「ロギアってのは何でもアリだな……。ふつう今まで何も食べていない人間がそんな勢いで飯食ったら即死するぞ」

「いやはや。この力だけは感謝してもいいかもしれんなあ。暴走状態の時もなかなか使い勝手がよくて重宝したでござるよ」

大事な話があるという蛇姫とトウヤの言葉に、九蛇の人々とトウヤの一味が去った静かな宴会会場。そこには二人の人間が座っており、大きな皿を傾け、まるで呑み込むように料理を食い尽くす男に若干呆れの視線を向けていた。むろんその人物はトウヤとハンコック。食事をとっているのはガス人間だ。

先ほどまでの衰えようはどこへやら。やたらと血色がいいガス人間の傍らには、無数の大皿の山が積み上げられている。大体千枚ぐらいあるのだろうか？この人間はどうしてこんな規格外な胃袋をもっているんだ。と若干の呆れを含みながらトウヤは煙草をふかせる。

「つまりおぬしは暴れていた記憶があるということじゃな？」

食事を終えたガス人間の言葉にハンコックは若干眉をしかめる。

ガス人間のあまりの柔軟な戦い方に、もしかしたら自分の意志で自分たちのこと襲っていたのではないかと疑っていたのだ。しかし、

「まっこと申し訳なかったでござる。意識はあるのに体が言うことを聞かないとは……………なかなか貴重かつ気持ち悪い体験でござった。おまけに腹は減るわ、言葉はしゃべれないわ、蛇姫さんな攻撃されるはさんざんでござった」

そういつてほけほけと笑う男にハンコックは見聞色の覇気を飛ばし探ってみるが、どうやら嘘はないようであるため息をつき覇気を引っ込めた。

この男の名前は『ミサキザキ・エイゼン』。新世界ワの国からやってきた賞金稼ぎらしい。

新世界でも中堅の海賊なら軽くあしらえる實力を持っていたらしいが、『樂園』^{パラダイス}と呼び声高い（別にそういうわけではないのだが）グランドライン前半の海に興味を持ち、観光がてらにカームベルトを航行し、前半の海に侵入したところ反世界政府組織の艦隊に補足捕縛されたらしい。

新世界からやってきた彼の体はかなりの高スペックだったらしく、新政府が開発していた《パシフィスタ》や《王下七武海》に対抗するための生態兵器として人体実験されていたらしい。

「この辺りは海軍の情報通りだな」

モモンガから渡された調査報告書に目を通しながらトウヤは情報の齟齬がないか確認を取る。どうやら嘘はないようだ。海軍がほんくらでこの情報が間違っている可能性がないでもないが、そんなことを気にしては話が進まないのだからこの際無視する方向で話を進めていく。

「ああ。あの海軍中将は強かったでござるなあ。なんであれが中将なのかわけがわからなくてござるよ」

「あれ以上の怪物のお前が言うか……………」

毒ガスをばらまいて甚大な被害を辺りに与えていた人物の呑気な言に、トウヤはぼそりとつぶやいた。その言葉を聞いたのか若干の苦笑をうかべて頭をかくエイゼンの表情に多少の影があることをトウヤは確認する。どうやら罪の意識も覚えているようだ。合格だな。

人格的に仲間にするには合格という判定を出したトウヤは、あとの判断ハンコックに任せるとばかりにフィルターだけになってしまった煙草を灰皿に押し付け、新たな煙草に火をつける。

「それで、拙者はどうなるでござる？やはり打ち首獄門かな？どうせ処刑されるなら切腹がいいのでござるが……………」

覚悟はしていたのか、懐から小刀を出して目の前に置くエイゼン

にトウヤは苦笑をうかべた。なかなか用意周到な人物のようだ。先ほどの大食いも思い残すことがないようにと考えてんことだったよ。うだし………………。トウヤとは気が合いそうである。

「安心せよ。今回は人的被害はさほど出ておらんし、残存ガスはトウヤの能力のおかげで全くない。ガスによる環境の悪影響もリリカ殿がどうにかしてくれるそうじゃ。そこでおぬしには国外追放を命じこの島から出て行ってもらうことにする」

海賊女帝から下された意外なほど甘い判決に若干驚きながら、エイゼンはため息をついた。まさか生かして帰してくれるとは思っていなかったのだらう。いい意味で予想を裏切られて安心したのか、若干表情に柔らかさが宿っている。

「ふむ。だが拙者は船を持っておらんから……………」

しかし、そのあとにまた渋い顔になった。彼の長年の相棒の船は反世界政府組織に沈まされてしまっている。それを思い出すだけで腸が煮えくり返りそうなほどのどぎつい怒気が湧き上がってくるのだが、彼らはエイゼンの目の前でモモンガに殺されているので、今おこつても仕方がないと自重。今の問題は彼がこの島を出るための船である。

「だったら俺のところに乗ればいい。というか俺は腕に覚えがある奴を募集していてな。できれば俺の船のクルーになってほしい」

「拙者を？クルーに？」

この言葉には心底驚いたのか、エイゼンはしばらく考え込むようにうでを組む。

その瞳には明らかに疑念の色が浮かんでおり、トウヤの真意を探っている。

まあ、仕方がないだろう。今まで他人に好き勝手体をいじられてきたのだ。多少疑い深くなっても不思議ではない。

「ふむ。考えさせてもらうでござるよ。助けてもらった恩義があるとはいえ、おぬしは王下七武海。つまりは元海賊でござる。そうそう簡単に信じるわけにはいかないでござるよ。とりあえずしばらくは航海に同行させてもらいおぬしの器を図りたいでござるよ」

「了解。すぐに信じられては逆に信じられないからな。そういった玉虫色の答えは大好きだ」

こうしてトウヤの船に新たなクルーが乗り込むことになった。

とだ。

「消えろ」

最後に無造作に呟き、リリカはハンコックの背中に指を走らせた。

その直後、妹たちから聞こえてきた感嘆と歓喜の声に、ハンコックは思わず涙を流した。

「消えた！！姉様！！ほんとに消えたよ！！」

「わかっておる……………サンダーソニア。鏡を持ってきておくれ」

「はい姉様！！」

「では、次はマリーゴールドさんを治す……………。サンダーソニアさんも鏡運び終わったら向こうの部屋にこい。ハンコックさんは扉の向こうでそわそわしているうちの船長を呼んでやってくれ。結構小心者だから失敗したらどうしようって気が気ではないようだな」

そういつて別室に移動する二人を見送り、鏡を二枚持ってきて合わせ鏡になるように配置してくれたサンダーソニアにハンコックは頭を下げた。

「ありがとう。サンダーソニア」

「……………いえ。姉様」

嬉しそうなハンコックの顔を見て滂沱しながらマリーゴールドと

同じ部屋に引っ込むサンダーソニアを見送りハンコックは人の気配がするもう一つの扉のほうへ声をかけた。

「入っていいぞ」

「そうか」

そう答えてはいつてきたトウヤは、少しだけ目を見開き固まってしまう。

「ふふ。あとすら残っておらん。まるで今までここに烙印があったのがウソのようじゃ」

「あ、いや。俺お前の背中見たことないしなあ……………どんな模様があったのかは知らないし。あと、お前半裸姿で俺の前に立っていることになるんだがいいのか？」

「問題ない。友人じゃからな」

「友人……………ね」

一瞬見とれてしまった自分に、女々しい奴めと自嘲を浮かべつつトウヤは自分の上着をハンコックにかけてやった。

「ほらこれでも着ている。お前のそんな姿は男にも女にも毒だ」

「そうじゃな。だってわらわは美しいから!!」

「はいはい」

「むう」

そんな軽口をたたいた後、じぶんにも背を向けるように座ったトウヤの背中に自分の背中を預けるハンコック。さすがになれたのか自制心を総動員して動揺を外に出さないように無理やり押さえつけながら、煙草を取り出すトウヤ。そんな彼の心の動きはしつかりとハンコックに筒抜けだったりするが、言わぬが花だろうとハンコックはクスクス笑うだけにとどめた。

そして……………。

「礼を言うイササギ・トウヤ。おぬしが来なかったらわらわたちは一生背中の烙印におびえながら生きていくことになったじゃろう」

「別に。能力によるまやかしとはいえ一度は惚れちまった女だ。そいつの幸せのために全力を尽くすのが男の仕事だからな」

「ふふ。なるほどおぬしのような男を男前というのじゃな。一つ学んだ」

ひとしきり笑った後ハンコックはしばらく黙りこんでしまう。

トウヤはそれに黙って付き合い、紫煙を吐き出した。

その煙の臭いに後押しされたのかハンコックはようやく口を開いた。

「ほ、本当に感謝しておる……………感謝しておる。感謝しておる……………わらわたちを天竜人の鎖から解放ってくれて。わらわに過去に負けるなど言ってくれて」

その声は震えていた。おそらく泣いているのだろう。

トウヤは無言でハンコツクの心からの礼を聞きながら、トウヤは悔しそうに目を伏せた。

「ハンコツク。礼なんか言うな。俺がやったのはしよせんただの言葉遊びだ。ただの形も実態もない無責任な励ました……………今の俺にはそれしかできないから。お前を根本的に救うことなんてできないから。お前が天竜人から与えられたトラウマを消すことなんてできないから。だから、礼なんて言わないでくれ……………」

天竜人の中にはもしかしたらハンコツクのことを覚えている人間がいるかもしれない。何せ彼女たちは悪魔の実の能力者なのだ。そんな隠しようもない特徴を知っていれば、彼女たちの能力を頼りに天竜人が圧力をかけてくるかもしれない。そうなれば海軍は戦争覚悟でゴルゴン三姉妹の捕獲に乗り出さなければならぬ。

そんな最悪な未来な可能性にトウヤは唇をかみしめる。烙印を消したのは本当にただの応急処置。まだハンコツクの脅威は消滅していないのだ。

だが……………。

「それでもじゃ。わらわはおぬしに礼を言いたいのじゃ」

本当に、ありがとう。

そして、鏡に映ったハンコツクの笑顔に、初めて見たハンコツク

の笑顔に、トウヤは一つの決意を胸に刻み込むのだった。

…
十…
十…
…
十…
十…

トウヤたちがアマゾンリリーを離れる時、船を停泊していた入り江にはゴルゴンさん姉妹が見送りに来てくれていた。

ルフィならアマゾンリリーの住人総出で見送ってくれたらしいが、そこらへんは主人公との格の違い。たった一日でアマゾンリリーの人々と仲良くなれなかったトウヤの責任だろう。

「まあ、べつにいいけどな」

「やせ我慢？」

「くだらないことを聞くなロビン」

いつものようにからかい気味にそう聞いてくるロビンに、自分の帽子をかぶせてその視界を奪う。

「煙臭いわよこれ」

「だったらなおさらつけておけ。船長をからかった罰だ」

「大人げないわね」

そういいながら帽子を離さないロビンに苦笑をつかべながら、トウヤは入り江でサンダーソニアとマリーゴールドにつかまっているロレンに声をかけた。

「そろそろでるぞ」

「あ、はい！！それじゃお二人とも、ちゃんと手紙出しますからお返事くださいね」

「もちろん!！」

二人はそう同時に答えてしまい、お互いに殺気交じりの視線を向ける二人。

「天然たらしのようだな。ロレンは……………」

「あの男の敵め!！」

「いやあ、青春でござるなあ」

無表情で評価を下すリリカに、血の涙を流して悔しがるヴァイ。そしてジジ臭いことを言う新しい仲間エイゼンに苦笑をうかべながらトウヤは入り江で仁王立ちしていたハンコックに声をかけた。

「そろそろいく」

「うむ。また来い。次きたときは九蛇特製の酒をふるまってる」

「フツ。期待している」

ひどく短い別れの言葉。しかし、二人にとってはそれで十分だった。何も今生の別れではないのだから。また会えると確信しているから。

そうしてトウヤは再び海へと旅立ったのだった。

…
十…
十…
十…
十…
十…

「蛇姫よ。あの男の恋をしておったのか？」

「わからぬよ、ニヨン婆。あやつに対するわらわの心はソナタが言うような熱く激しい心ではなかった」

水平線上に消える軍艦をいつまでも見ながら迎えに来たニヨン婆にハンコックはそう答えた。

「じゃが、なんだか近くにいたらとても落ち着くやつじゃった。隣にいてくれればつい甘えてしまいそうなほど懐の深い男じゃった」

だからハンコックは最初に予防線を張ったのだ。恋人になんかなってしまえば自分はその男に甘えてしまうことが目に見えていた。だがそれはハンコックの望むところではない。あの男の隣に立つていられるように。

「わらわはあ奴の友達でいい。いや、友達がいいのじゃ」

「そうか」

一皮むけたかの？そういつて笑うハンコックを見てニヨン婆は娘の成長を見守るような優しい笑みを浮かべるのだった。

そしてトウヤの乗った軍艦の上では、

「イササギ・トウヤ。はなしが……………」

「いい。クマ。話さなくていい。お前の用件は大体わかっている」

ヴァイの尋問に始めて答えたクマがトウヤになら事情を話すと甲板に連れてこられたところだった。

肝心のトウヤはクマの言葉をさえぎり、じっとアマゾン・リリーがあつた方向を見つめている。

「目標がまた増えてしまったな。まあ、何とかついでの範囲内か？」

「……………」

最後にそうつぶやきクマのほうを向き直るトウヤにクルーたちとクマは首をかしげる。

そしてトウヤはとんでもないことをその全員の前で宣言した。

「頂上戦争のどさくさに紛れて天竜人を殺す。クマ、お前たち革命軍の力が必要だ。ドラゴンにあわせろ」

万有掌握の悪巧みはまだまだ増えていく……………。その策によって世界をひっくり返してしまうその時まで。

33話（後書き）

というわけで、ハンコック編終了です。

結局ハンコックはトウヤと恋仲になりませんでした。不満のある方申し訳ありません。

ですがハンコックはこれからもちよつとずつ出すことに決定しました。こえだけとか、短編にちよつとだけみたいな感じになりそうですが……………。

さて、ここで今後のことについて……………。

いい加減トウヤのキャラずれっぷりが作者も気になり始めました。しばらく真ん中あたりのトウヤのキャラを『修正してやる!!』

というわけでちよつとだけ更新が滞るかもしれません。すぐに終わらせますので勘弁してください。

とある砂漠での事件簿

ここは、サウスブルーのとある王国にあるメツカカワクー砂漠。

夜と昼の温度差が激しく、一部の動物たちしか住めないような過酷な環境のこの砂漠には、ポツリポツリとテントが張ってあった。

一見タダの放浪民のテントに見えなくもないが、実は革命軍簡易前線基地テント。強度や耐久度はかなり高めに作られており、耐寒耐熱に優れた逸品である。

「本当に来るのでしょうか？あのミシャーナ・Ｔ・ソウルは………めったなことでは表に顔を出さないと言っていましたか」

「しらんよ。ただドラゴンとはハンターズは信用できると言っていた。海軍に嗅ぎつけられたため会談は途中で終わっただけだが、とりあえずはハンターズとの同盟は結べたらしい。さらに彼らの手引きによって一気に三つの国の革命が終了したのは事実。天竜人殺す機会をくれてやると言ったのはあながち嘘ではないのかもしれない」

そんな事を話しながら冷たい水を飲んでるのはこのテントの管理人たる革命軍の幹部とその右腕である。彼らの目的はハンターズの同盟との正式締結。そのために彼らはこんな辺境くんだりまで来てハンターズの代表の到着を待っているのだ。

ではなぜドラゴンではないのか？そんな大事に会議ならドラゴンが来てしかるべきではないのか？

それは簡単な話で、この締結が形ばかりのもので、実際には革命

軍とハンターズはすでになし崩し的にもに行動をしているのだ。

ハンターズは表側から国民たちの王国に対する不満を助長させ、革命軍がそのかし革命を起こす。彼らはその手法を使いすでに三つの国の革命を成功させている。

だから本来ならこの会議の現場は不必要なのだ。それなのに設けられたのはひとえにトウヤの我儘が原因だった。

基本的にトウヤは臆病ものである。組織同士の契約には必ず書類を通し言質を取らないと気が済まない細かい性格の持ち主である。そのため、途中で会談が終わってしまい、自分のサインが書かれた書類を革命軍に預けっぱなしの状態では落ち着かなかつたのだ。

そこで革命軍から彼らが遣わされてこうしてハンターズ代表の到着を待っているのである。

「だが、裏の頭領が来ることはないだろうな」

「ああ……………ドラゴンさんしか知らないあと影のボスさんですか。いったい何者なんでしょうね？」

「かなりの大物だとドラゴンは言っていたがなあ……………。だとするとどこかの国の国王か、三大勢力のどれかか……………。まさか四皇ということはないはずだが」

二人の話題が、正体不明のハンターズ頭領の話へとシフトする。これはかなり重要なことなので革命軍内でも様々な憶測が飛び交っている。本当なら直接会談したドラゴンが明かすべきなのだろうが彼はこのことに関しては黙したままだった。

よほどやばい相手なのか、ばれたら計画が破綻しかねない相手なのかはわからないが、このまま情報規制されたままでは正直言っていると困る。

ハンターズとの協力の際にも多少のぎこちなさが出てしまっているし、何よりトップが謎だらけでは心の底からその組織を信用できない。

いい加減正体を教えてくれと迫る革命軍幹部も続出しており、革命軍は今若干ながらの緊張状態に置かれていた。

「あ、そうだ！いいこと考えましたよ隊長！！」

「なんだ？」

「この契約書を見ればいいんじゃないですか？」

部下が差し出した封筒に幹部は若干の動揺を見せた。

先ほど言ったトウヤの名前が書かれた書類。当然ドラゴンから渡された際は決してみるなど嚴重注意されていたが、男にとっては組織壊滅の危機かもしれないのだ。

正直命令違反をしても見る価値は十分にあった。

「はあ……………仕方がない。開ける」

「了解しました！！」

部下はそう言いながら封筒のトメを外しそろそろと封筒の中をのぞき込もうとした。

その時!!

「ネルネル子守唄ララバイ!!」

テントの布を貫通して緑色のZ型の光線が幹部と部下を貫いた!!

「な!?!」

「なに!?!」

瞬間、すさまじい眠気に襲われた幹部と部下はそのまま眠りこけてしまい書類の入った封筒は彼らの手を離れる。

「よおし。てめえら金目のもん全部もらっていけ!!」

「いえっさー!!」

その中に入ってきたのはぼろい服をまとった盗賊たち。彼らの腕には毒々しい眠ったコブラの刺青が施されており、彼らが砂漠の盗賊であることを如実に示していた。

「ふん。俺らの縄張りにテントなんて張っているから悪いんだぜ。

悪く思うなよ……………」

そう言ってテントに入ってきたのは、男たちと同じようにぼろ布をまとった3メートル弱はあろうかと思われる巨大な女。ぼろ布の下は大きく胸元があいた貴族が着るような豪華な服を着ており、そ

の巨大な送球を見せつけている。さすがにハンコックにはかなわな
いが比較的に関女に分類される褐色の肌をもった女性だ。

彼女は眠った彼らに向かって剣をふるい、両足を貫き彼らが起き
ても追撃できないようにした。

「さて、おれもいいものがないか調べさせてもらうか」

女頭目の名前は『デビル・プーラン』。サウスブルー最凶の盗賊
団『キングゴブラ団』の頭目にして悪魔の実の能力者。

陸上では最高額を誇る懸賞金4億ベリーの賞金首である。

とある砂漠での事件簿（後書き）

久しぶりに更新！！

話を全体的に編集するとなると結構時間がかかりますね……………
…次からはために編集します。

さて、本当なら革命軍との交渉を書きたかったのですがドラゴン
やほかの革命軍キャラのキャラがいまいちつかみ切れなかったので
その案は没にしました。

代わりにオリジナルストーリーを作りますのでそれで勘弁してく
ださい。

というか、この小説ほとんど全部オリジナルですが……………。

34話(前書き)

主人公はまた違うところで活躍中。

その話は次回かきます……………

34話

砂嵐吹きすさぶ砂漠の中。ラクダのような珍妙な背物に乗った五人の人影がその中を歩いていった。

「まさかりリリカ様たちがこちらに来られるとは…………… 今回の任務は余裕ということでしょうか？」

「さあな。ただあいつらがいったほうは何やらヤバそうな雰囲気か漂っていたぞ。空あから黄金の船が落ちてきたらしい」

「トウヤが好きそうな話ですね……………」

「あまり乗り気ではなさそうだったからな。神様気取りがどうかこうとか言っていた」

フードをかぶった人物の二人が発言する。リリカとミシヤーナである。表の代表たる彼女と最高戦力であるリリカを送り込むということは、トウヤは彼女たちを送り出す際に話していたただの書類引き渡し……………が主目的ではないのだろう。いや、主目的ではあるのだろうがこれくらいの戦力を投下しないとやばい相手がいる可能性が高い。

「それだというのに……………セロの小僧は全く……………」

「あれはセロのせいではないのだから多めに見てあげてくださいよ……………」

リリカが後ろを振り向きながら舌打ちするのと同時にミシヤーナ

はクシユお交じりの彼女をなだめた。そこには、自分が乗っていたラクダが疲れ切った様子で砂漠に伏せるのを見て困ったように頭をかく鬼の姿があった。

「まいったのう。またじゃ……………」

「てめえがおもすぎんだよハゲ。人型になれって何度言えばわかる!?!」

「そうそう簡単にできたら苦労はしておらんよヴァイ殿」

今回彼らに同行してきたのはミシャーナだけではない。酒呑童子たるセロ。吸血鬼たるヴァイ。そして……………。

「かなり体力があるラクダ(?)を選んだんですが……………
やっぱりそんなに持ちませんねえ。セロさんおつきい上に重いし」

社会科学見学ということでロレンが同行していた!!

「ああ、テメエはわるくねえよ。悪いのはでかいまま人間に戻れていないこいつだ!!」

「のう……………いい加減キレていいかの?」

しつこく自分を責め立ててくるヴァイにいい加減イラついてきたのか、セロがラクダから降りその三メートル近い巨体を砂漠に立たせ、さらに巨大になっていく。どうやらあれでも加減していたらしい。

オニオニの実の中で最も大きな体をもつことが特徴であるフォル

ム酒呑童子。その本来の全長は海軍本部と同等。かの巨大艦隊とたたかったのだの、国引き伝説のあるオーズを氷の国に放り込んだのだの、逸話には事欠かない人物である。

「デカけりやつええつてわけじゃねえぞ！！今んところ俺はお前に負けて事がねえつて事を忘れたか！！」

「勝ったこともないじゃろうがこの若づくりがあああああああああああああああああ！！」

尋常ではない質量と暴力が激突をはじめかけたとき、

「はいはい……………ラクダが怯えますからやめてくださーい」

ロレンの暴風による横やりが入り、二人が天高く吹き飛んだ！！

「ぎゃああああああああああああああああああああああああああ……………」

若干の間ドップラー効果を残したあと、きれいなお星様になった二人を見届けた後リリカはさつとラクダの首を前に向け前進を始める。

「よし」

「なにが！？あの二人が戻ってくるのまたないんですか！？」

「ロレンの能力は本当に強くなったなあ。海軍中将ぐらいなら単体で倒せそうな勢いだぞ」

「聞いていますかりり力様！？さすがにあの二人でも砂漠の中に放置するのはシャレにならないと思うんですけど！？」

そんな無駄話をしながら意外と平和に一行は砂漠の旅を続けた。

…
…
…
…
…
…
…
…

「どついうことこれは？」

ミシャーナが茫然とした様子でそうつぶやいた。その視線の先には真っ赤に染まった放浪民のテントの群れが整然と並んでいる。ここが革命軍との落合場所だったのだが……………。

「あれって……………ペイントですか？」

「チゲエよ。血の匂いだ。血液の専門家の俺があの匂いをかぎ間違えるわけがねえ」

ロレンの若干の望みを込めた言葉をヴァイが否定すると同時に、リリカはラクダから素早くおりセロとミシャーナに指示を出した。

「ミシャーナ！！即座にテントの中をのぞいて助けられそうなやつらを連れてこい。ヴァイ！！大規模水系魔法の用意。清潔な水できるだけ多く集める。セロ！！ロレン！！しばらくあたりを巡回している襲撃犯がまだ近くにいるかもしれない。見つけ次第捕縛して連れてこい。いいな？」

「は、はい！！」

リリカの指示を聞きあわてて突風をその身にまとい、天へと登っていくロレンと、地面をかけていくセロ。ヴァイはその場で胡坐をかき懐から取り出した手帳に無数の記号と方陣を書き出して出していく。

それを確認したミシャーナは、影のようにひそやかに、しかし素早くテントに近づきその中を確認していく。まだ敵が近くにいるかもしれないのであまり派手に動くわけにはいかないのだ。

そしてリリカは最も派手な装飾がなされたテントへと近づく。そしてそこで脚の腱と両腕の筋を切られた二人の男を発見した。

その二人に静かに近づき首筋に手を当てる。脈拍は少し弱いが命に別状はないようだ。だが、手足の駆動に必要な重要な筋肉繊維が断絶している。魔法使いのリリカが来ていなければおそらくは一生寝たきりの生活になっていただろう。

「お……………おまえは？」

リリカが術式を刻み回復魔法を起動する。それと同時にリリカの気配に気づいたのか、男が薄目を開けてリリカを見た。

「ハンターズから来た、最高戦力リリカ・T・ソウルだ。いったい何があった？」

回復魔法を使いながらリリカは男にそう尋ねる。男は少し苦しそうに眉をしかめた後、苦しそうな声でこうつぶやいた。

「すまない……………契約書を奪われた……………」

「!？」

リリカの目が一瞬細められる。あそこにはトウヤのサインが書かれていたのだ。あれが海軍の手に渡ってしまえばトウヤは七武海から一転、世界政府の敵として指名手配されることになる。

「奪ったのは誰だ！？答える！！」

珍しく切羽詰まった声を出すリリカに男は、乱れた呼吸でなんとかその名前を告げる。

「やつらの名前は砂漠の盗賊……………キングゴブラ団……………」

男はそこで意識を失い、再び深い眠りに就いた。

「リリカ様。幸い死者はいません。ただ体のいくつかが欠損している患者が……………リリカ様？どうなされましたか」

「面倒なことになった……………」

苦虫をかみつぶしたかのような表情でそうつぶやくリリカは、ミシャーナに患者たちを派遣で来るように指示した後大きくため息をつくのだった。

35話

「今回はなかなかの収穫でしたね、兄貴」

「姉さんって呼べって何度言ったらわかるんだよ？」

女性でありながら男らしい言葉づかいをしつつ、巨大なトカゲ……この砂漠特有の生物である《砂蛇》を乗りこなすプーランに、盗賊団たちは苦笑を浮かべる。

「だったら言葉づかい治してくださいよ兄貴」

「ばか。盗賊のお頭が女らしい言葉なんて使えるか！！」

そんなことを言いながら和気あいあいと砂漠を駆け抜けていく盗賊団たち。とても懸賞金4億の凶悪犯罪者が作り上げた盗賊団とは思えない。

「さてと………問題はこれだな」

「何すかそれ？」

「おれが押し入ったテントの中に転がっていたんだ。やたら豪華な筒に入っていたから金目のものかと思って持ってきたんだが………カギが開かなくてな」

「あ、だったら次の休憩のときにあけましようか？」

「ああ。よろしく頼む。と言いたところだが、今回は獲物が見つ

からなくてかなり長い間村を開けてしまったからな。早急に帰って様子を見て起きたい。カギあけはそのあとだ」

「わかりました。お前らスピード上げろ!! できるだけ早くに村に帰るぞ!!」

「……………応っ!!」

威勢よくそう答える男たちを頼もしそうに見ながらプーランは砂漠をかけていく。

…十…十……………十…十…

「面倒くさすぎる……………」

「そんなこと言っている場合じゃないですけどね……………」

革命軍が用意していた競走用に訓練されたラクダたちに揺られながら、ヴァイはぼそりと呟きロレンは苦笑を浮かべた。

現在、革命軍の治療を続けているリリカを残して、ヴァイ、ロレン、セロ、ミシャーナの四人が盗賊の追撃をしていた。

「まさか契約書が奪われるとはなあ。革命軍も意外に使えない」

「この場合は相手のほうが上手じゃったと考えるべきじゃろうな。何せ相手は四億の賞金首。あそこにいた戦力でははむかうことすらできなかつたじゃろう」

「うっせえなあ。わかっているよそんなことは！でも八つ当たりしないとやっていけないだろうが……………」

ぐちぐち文句をこぼしながらラクダを操作するヴァイに若干のあきれをにじませながら、セロとロレンは肩をすくめた。

「それで、そのキングゴブラ団って一体何者なんですか？」

今までまともな人間としての生活を送ったことがないロレンは、ヴァイにそう尋ねた。どうも彼はヴァイのことを兄のように慕っているようである。

リリカは真剣にやめてくれと頼んでいたが、今のところその効果は表れていない。

「キングゴブラ団て言うのはこの界限を荒らしている盗賊のことだ。世界政府の陸軍からは目の敵にされているらしいぜ」

「ちなみにその力は陸上の悪党の中で最強。うちのギルドにも何度か討伐依頼が来ているんだけど今のところ成功させた人はいないわ」
「賞金も四億と破格の数値じゃしろう。『陸軍大将を一蹴した』とか『陸軍三万人を蹴散らした』とか『四皇の一人と渡り合ったことがある』とか、噂には事欠かん有名人じゃよ」

三者三様の説明を聞きいたロレンは思わず顔を青くした。当り前である。彼の戦闘経験はほとんど皆無とあっていい。村を襲撃した時もほとんどが自分より弱い人間との戦いだったし、唯一知っている自分より強い人間も『赫足のゼフ』。グランドラインではルーキーと言われても仕方がない強さしか持たない、衰えた老人である。

現役バリバリの怪物級の犯罪者と出会うのはこれが初めてなのだ。おびえるのも無理はない。ヴァイはそう考えながら面倒に思いながらもフォローを入れる。

「まあ、大丈夫だろう。陸上の犯罪者っていうのは基本的に海賊よりも弱めだ」

「え？そうなんですか！？」

「知っている世界の広さが違うからねえ。陸上の懸賞金は海上では半分になると考えたほうがいいわよ？」

「あの、それでも二億あるんですけど……………」

「それにしたって強さ云々以前に凶悪性が加算されておるときがあるからのお。例えば一般人からん略奪や、町の破壊行為など……………それらも加算して今の懸賞金になるのじゃ。実際の強さはその懸賞金から三割引きして考えるのが妥当じゃろう」

「一億代ですか……………」

海軍本部の中将以上の将官が出てこないとどうにもならないランク。多少危機感は薄れたがやはり戦いたくはない相手である。

「でもそういうわけのもいかないんですよねえ？」

「当たり前だ。あの契約書を世界政府に渡されたらおれたちはアウトだ。あつという間に世界中のお尋ねものになっちまう」

「ハンターズの権力もそれほど大きくはないし、今の段階で世界政府のやつらに目をつけられるのはまずいわ」

ロレンはミシャーナ達の話聞いて気を引き締める。ハンターズノ将来は自分たちにかかっているといっても過言ではないのだ。怖

いだのなんだの言っていられないのだ。

「おお、いい顔になったなルーキー。まだ顔色悪いけど……………」

そう、引き締まった顔をしたロレンの顔色はいまだに悪いままだった。とうかさつきよりも悪くなっている。さつきまで青かった顔がまるで紙のように真っ白だ。

「ああ、これは別におびえているとかではなく……………」

「……………ではなく?」「……………」

瞬間…………… ロレンは下を向きものすごい勢いで吐瀉物を砂漠にぶちまけた。

「乗り物酔いです……………」

「……………もっと早くにいえ!?!」「……………」

レスター・D・ロレン。乗り物酔いになりやすい体質の少年である……………。

………

「船は大丈夫だったろうが………」

「陸上の乗り物がだめなんです………」

「行きは大丈夫だったろうが」

「あれはゆっくり歩いていたじゃないですか」

「都合のいいよい方だなコラっ！！」

「ヴァイ！！大きな声出さない！！」

結局、酔った状態で戦闘ののぞまれては困るということで、小休止をとることになった追撃隊一行はロレンを持ってきたシートに寝かせ、ヴァイの魔法で冷風を送るを。

その方法が凍結地獄から呼んだ風であたりを冷やすというものなのだが、突如吹いてきた冷たい風の正体がそれだということを知っているのはヴァイだけなので、ロレンは特に文句も言わずのその風を浴びていた。

「そのにしても、この餓鬼を追撃隊に組み込んでよかったのか？どう考えても足手まといだろう？」

「いやいや。最近ではかなり強くなったのよ、彼。トウヤがドラゴンと交渉している間は私たちが彼の訓練を見ていたから実力に関しては私が保証するわ」

「うむ。その通りじゃ」

「どうだか……………お前ら俺より弱いしなあ……………」

おまけに今思いっきり足手まといになっているし……………。そう言わんばかりの視線をこちらに向けてくるヴァイに、ロレンは寝ころびながら首をすくめるといふ高等技術を披露する。

「あなたより私達が弱いですって？」

「いきがけのときも行っておったがあまり調子に乗るなよ吸血鬼？」

しかし、その言葉には予想外のところから反論があった。何と幻獣種の二人からである……。この二人、実はリリカと常に一緒にいるヴァイとはかなり折り合いが悪く子供のころからいろいろと揉めてきた仲だった。さすがに成人になってからはそういうことはいなくなつたが(したら桃源郷が半壊してしまい、リリカにこつぴどく叱られたから)、ここは何もない砂漠である。手加減を考えずに暴れられる格好の条件だった。こんなところでこの三人が喧嘩をしないわけがなかった。

「そうですねえ。最近調子に乗っているみたいだし、すこしお仕置が必要ですかねえ？」

びりびりと殺気を垂れ流し始める幻獣種二人に、ヴァイは凶悪な笑みを浮かべて立ち上がる。

「いいぜえ!! 久々に稽古つけてやるよバカ餓鬼ども!!」

「師匠はいずれ越えられるものです!! といつても私は二百年前ぐらいに超えましたが!!」

「わしは三百年ぐらい前に超えたがなあ!!」

「ちようしこいたことぬかしてんじゃねえええええええええええええええええええ!!」

「なんだろう?.....幻獣種の人つて喧嘩癖でもあるんだろうか?」

このくそ熱い砂漠の中。すさまじい速さで激突し始める三人にため息をつきながら、だるい体に鞭打ちながらロレンは能力を行使し

て三人を止めようとした！！

その時！？

「へ！？」

「「「んあ！？」「」」

突如として砂の濁流が三人を襲いその姿を押し流した！！

「な、なにが！？」

そしてロレンは、あわててあたりを見回し、その原因を見つけた

.....。

「うわあ.....」

そこには、すさまじい力で砂を引き連れ電動鑢のように振動させながらながらづごめく巨大な竜巻が立ち上がっていて.....。

「あ、詞にましたねえ.....これ」

ロレンはあきらめたかのような声を残して、その砂嵐ならぬ砂竜巻に飲み込まれた.....。

36話

ロレンが目を開くと、そこは灼熱の砂漠……………。

「サムっ!？」

ではなく、冷たい空気が満ちた洞窟の中だった。

「どこだ、ここは？」

「あ、目が覚めましたか？」

ロレンが不思議そうにあたりを見回しながら起き上った時、突如後ろから声が掛けられた。ロレンがあわててその場を飛びのき、その声の発生源をにらみつけると、そこには……!

「あう!？け、警戒しないでください!!怪しいものではありません!?!」

なぜか滅茶苦茶おどしている一人の少女が座っていた。

砂漠の民特有の褐色の肌に黒い髪。体には砂漠の日光を防ぐための厚手の服が着こまれている。

「あの……………」

「は、はい!!なんですか!？」

「その服装……………暑くないんですか？」

「……………警戒しているわりに初めに聞く質問がそれなんですわね」

少女の視線に若干のあきれが混じった。

「なるほど、砂漠で行き倒れているところを助けていただいたのですか……………。ありがとうございます。砂嵐に巻き込まれた時は正直死んだと思ったんですけどね……………」

「あきらめるの早っ!?!」

そんな風にのんびりと会話をしながら、ロレンと少女は砂漠を徒歩で横断していた。しょっちゅう柔らかい砂に足を取られて動けなくなるロレンとは対照的に少女はすたすたとす砂漠を歩いて行く。

これが地元と異邦人の違いですかねえ……………。自分を捉えよ

うと襲いかかってくる砂たちに閉口しながらロレンは何とか少女について歩いていった。

どうやらこの少女はこの近くにある、砂漠の中に隠れた小さな寒村（砂漠なのに）の住人らしく、ロレンをそこに連れて行ってくれるそうなのだ。

「砂嵐に巻き込まれた程度でビビリすぎですよ。確かに一番風の強いところに飲み込まれると砂で体がやすりにかけられたかのように削られますが、それだってめったなことじゃ起きないですから……」

……」

「やっぱり僕危なかったんですね……………」

どつりで肌がひりひりすると思った。出血するまでには至っていないがおそらく肌はかなり削られてしまっている。

「ところでロレンさんはどうしてこんなさびれた砂漠にいたんですか？ここめったに人が来ないんですよ？」

「ああ、まあ。ちょっと野暮用がありました」

少女に純粋な疑問にロレンは思わず言葉を濁した。まさか、盗賊を追ってこんなところに来たなんて言えない。この少女を巻き込むかもしれないし……………。

「まあ、僕のことはいいいじゃないですか。それに、それを聞くならあなただってどうしてあんなところに？聞いた話じゃ村の中で自給自足で来ているみたいですし、わざわざ砂漠に出る必要なんてないでしょう。こうして帰るところをみると村の外に出ようとしていた

わけでもなさそうですし……………」

「思いつきりごまかしましたね……………。まあいいですけど。私は護衛団の方を待っていたんですよ」

「護衛団？」

ロレンガ首をかしげると、少女はうれしそうに笑った。

「うちの村少し前に砂漠の盗賊団に襲われたんですよ。うちはちいさな村ですし、抵抗もできなくて。たくさん人が殺されて、それはそれはひどいものでした。そんな時に助けてくれたのが護衛団の方なんですよ。村を襲ってきた盗賊を不思議なビームであつという間に眠らせて、あつさり捕まえちゃったんですよ！」

不思議なビーム……………悪魔の実ですかねえ。ハンコックという実例や、《銀狐のフォクシー》という存在を聞いていたため、そういう能力者もいるんだろうとあつさり納得するロレンに、少女にこにこ笑いながら話を続けた。

「ほんと、すごいかっこいいんですから！！強くて〜きれいで〜やさしくて〜」

「きれい？」

「ああ、護衛団のリーダーさん女の人なんですよ」

「それはまた珍しい」

ハンコックという実例がいるためさほど不思議ではないが、それ

でも荒事をこなせる女性というのはこの世界では少ない。しかも、戦闘を生業とする集団のリーダーに収まっているのだ。珍しいどころか人間天然記念物級である。

「あ、噂をすれば！！おーい！！おかえりなさあああああああああああああい！！」

ロレンが心底感心しながら、その護衛団に興味を沸かせていた時少女が突然手を振りだし、す投げ無理が上がっている方向に大声を出し始めた！！

「どうしたんですか？」

「さっき話した護衛団の方たちですよ！！」

そして、少女が手を振ってからしばらくが経ち、その砂煙を上げていた存在の姿がはつきりと見えるようになる。

「！？」

「どうしたんですかロレンさん？」

ロレンは見事に固まった。あの顔……………あの旗。間違いない。

ロレンはさつきセロに見せてもらった手配書を思い出しながら、全身から冷や汗をたらだら流す。

まさか、仲間と分断されている時に出会っなんて！！なんて運が悪いなだ！！

自分の運命を呪いながらロレンは必死に表情を作りかえる。

「べ、別に？なんでもないよー!!」

「ものすごい汗かいてるけど……………」

「砂漠で汗かかないほうがおかしいでしょ？」

「私かかないよ？」

「いつぺんどんな身体構造しているのか調べていい？」

一瞬だけ和む空気。しかし、長くは続かない。ロレンが恐れた人物が話しかけてきたからだ。

「アリサあああああ！？村はどうだ？大事ねえか？」

「はい！！大丈夫です！！アリサたちはしっかりと留守を守りましたー!!」

「よっしゃー!!えらいぞ」

少女の頭をぐしゃぐしゃとかき回す、巨大な身長を持つ女性。

「で、そっちの子はなんだ？うちの国の人間じゃあなさそうだけども？」

「ちょっと旅行に来ていたところを砂嵐に巻き込まれてしまいました……………。アリサさんに助けてもらったところです」

「それは大変な目にあっちまったな。よかつたらうちに泊まっていきな。明日部下の人間に近くの町まで送らせるからよ」

男らしく話すその言葉に、冷や汗をかきながらロレンは平然と嘘をつく。この辺はトウヤの影響である。明らかに悪影響ではあるが……。

「私の名前はデビル・プーランだよろしくな!!」

今はその悪影響に感謝したいロレンであった。

…十…十………十…十…

「ったく。腐れ自然が、破壊してやる!!」

「本当にやりそうね……………やめておきなさい。大体、こんなにもない砂漠で何を壊すっていうのよ」

「しかり、全く単細胞はこれだから困る」

「てめえらの体をぶち壊してやろうか!!」

砂嵐に巻き込まれてしまったヴァイたちであったが、さすがは桃源郷の住人というべきか特に何のダメージを受けた様子もなく再び砂漠を歩き始めていた。

しかし、その背中や口調には若干の焦りが見える。当たり前だ。一番の年少であるロレンを見失ってしまったのだ。彼らの心配はひとしおである。

「それにしても、ヴァイあなたがロレンの心配をするだなんてねえ。足手まといとか言っていなかったかしら？」

「うっせ。ガキ心配するのは大人として当然だろうが」

「うわ、にあわなあーい」

「うを鳥肌が……………」

「テメエら……………。ブチコロシテやるよ化け物ども!」

「テメエのが化け物だろうが!」

仲がいいのか悪いのか……………再び掴み合いを始める三人。しかし、その三人の喧嘩はすぐに中断されることになった。

「!」

「んあ?」

「なんじゃ?」

いち早く察知したのは、弓矢の名手であるミシャーナ。彼女の耳は伊達にとがっているわけではなく、三キロ先の音まで拾う。

その能力によって何かの接近をいち早く察知したミシャーナはあわててヴァイとセロを伏せさせる。

「いったいなんだ?」

「動物の足音と、金具がこすれあう音。たぶん誰かが騎乗しているラクダか馬。かなりの数。武装訓練が施されているみたい。かなり整然とした陣形で西の方向からこっちにやってくる」

「軍隊？盗賊団か？」

「盗賊団ではないみたいじゃな……………」

地面に耳を付けて足音から相手を類推するミシャーナに負けじと、セロは瞳だけ半分ほど鬼の姿となりその視力を底上げして、その進撃してくる集団を視認する。

「あれは……………世界政府の陸軍じゃのう……………」

「はあ！？なんでそんな奴らがこんなところに！！」

「盗賊退治には物々しいわね……………狙いはキングゴブラ団かしら？将官もいるみたいだし……………」

その時、ミシャーナは目を見開き、固まった。

「ああ？どうしたミシャーナ」

「信じられない……………どうしてあいつがこんなところに！？」

ミシャーナはあわてて身をひるがえし、自分に加速と飛行の魔法をかける。

「グアイ、セロー！あいつらの足止めをお願い！！私はリリカさまを呼んでくるわー！！」

「お、おい！！まで！！何を見たんだお前……………」

「あれは！？」

話についていけないヴァイの耳に、今度はセロの驚きの声が聞こえた。

「あ、お前も見えたの？誰がいるんだよ」

「.....」

セロは少し引きつった表情で黙り込んだ後、丸で口を開くのを嫌がるかのようにゆっくりは言葉を発した。

「大将じゃ.....」

「は？」

「海軍三大将の一人.....あの《黄猿》ボルサリーノが来ているんじゃない?!」

「なあっ!?!」

事態が急変した.....。

37話

「うーん。少し暑いね」

砂漠行軍用のラクダに乗りつつ海軍大将黄猿はつぶやく。本職の陸軍ですら辛いこの環境の中、黄猿は平然と行軍しているように見えだが、やはり人並みには熱いようだ。

「おい……………どうして海軍の大将がこんなところに来ているんだよ？」

「どうしてもこうしても、世界政府の命令なんだから仕方がないだろう」

「ただの遺跡調査だって聞いたけど……………どうにも胡散臭いよなあ今回の仕事」

「ああ、それは俺も思っていたところだ。なんか上がかなり騒いでいたみたいだったからな」

「前回調査に行った斥候軍もまだ帰ってきてねえし……………一体この先に何があるって言うんだよ……………」

ブツブツつぶやく陸軍の兵隊たちを後ろ目にみて、黄猿は小さな声で呟いた。

「うーん。どうにも怪しまれているみたいだねえ……………。その寒村とやらが沿岸部に位置していれば海軍が勝手に調査して殲滅も独断で行えたんだけど……………。すまないねえ。サキザキ中将」

黄猿の間延びした声に苦笑を浮かべながら、正義の文字が書かれたコートをはひるがえしながら黄猿の少し後ろにラクダを走らせていた男……………陸軍中将サキザキは苦笑を浮かべた。

「いえ……………こちらこそ。監督不行き届きで不快な思いをさせてしまい申し訳ありません。後できつく言い聞かせておきます。ところで本当なのでしょうか？あの村でポーネグリフの解読が行われたというのは……………」

「サイファーボールCPが言うには間違いないそうだけどねえ。あそこ最近いい加減な情報が多いからあんまり信用はできないんだけどねえ」

そんな情報が入ったなら動かないわけにはいかないでしょう？

間延びした声音でそんなことをいう黄猿に、サキザキはため息をつく。

本来彼らのテリトリーである陸上に黄猿がやってきたのはある理由があつてのことだった。

ポーネグリフの解読。その可能性のある村の調査と……………場合によつてはその肅清という任務が。

世界政府直属の陸軍というものは元海軍元帥コングが『今のままでは海軍の負担が大きすぎる』という理由のもと設立した新興組織である。

そのため世界の裏側にかかわっている人間は海軍に比べればひどく少なく、兵隊の練度もかなり低い。陸軍の大將が、海軍本部中將

に傷一つ付けることができないと言えばその強さの差はわかっていただけるだろうか？そのためこのような裏の世界がかかわってくる事態には対処が出来ていないというのが残念なことに陸軍の現状なのだ。

一応今回は斥候隊を出して自力で調査をしようとしたのだが、結果は正体不明の敵に急襲されてしまい惨敗。そこで、こうして海軍大将の黄猿が招聘されたということだ。

「こわいねえ。正体不明の敵だつてえ。何が起きるかわかったものじゃないよ」

何考えているのかわからないくせによく言う……。

間延びした口調で何を考えているのかわからないような反応をする黄猿にいいよ言うもない不安を感じながら、陸軍は進軍を続ける。

………

「妨害しろって言われても困るっての………」

「勝率はどのくらいのお？」

「わかんね。あいつがどの程度早いのかにもよるが………まあ、殺されることはないだろう。おれは不死身だしな!!！」

「はあ。すっごい不安じゃ」

へらへら笑いながら、黄猿を見つめるヴァイに、セロはため息をつきながら頭を抱えた。

現在彼らは陸軍の進行を止めるためにいろいろとトラップを仕掛けてきたところだった。

別に普段ならわざわざ交戦の意思を示すことはない。というか、頂上戦争に参加する予定のヴァイが世界政府の関係者と交戦するのはかなりまずいし、セロと一緒にいられるところを見られるのもまずい。ハンターズとトウヤの関係は今隠されているのだ。こんなところで不用意な情報を与えてしまうのはかなり望ましくなかった。

だが、今はそんなこと言っていられない。何せ彼らが向かっていく先にはトウヤの名前が書かれた革命軍との同盟書があるのだ。

もしかしたら、彼らの目的は盗賊退治ではないのかも知れないが、そんな楽観的意見を信じて放置していられるほど軽い問題ではなかった。

「さあて……………まずは下を減らすか？」

凶悪に笑いながらヴァイは手元のスイッチを押す。

なんやかんや言ってみたが、ヴァイは結構いたずら好きなので結構楽しんでいたりするが、それは言わないほうがいいだろう。

ヴァイがスイッチを押した瞬間。砂漠の砂が一気に天へと跳ね上がった！

「な？」

「おや？こんなこと砂漠で起きたっけなあ？」

ノックアップストリームもかくやと言わんばかりにはねあがった砂の柱が、陸軍と黄猿の進軍を止める。

「どうしますか？迂回しますか？」

砂の柱はかなりの幅を持っており、端から端までが見えなかった。ヴァイの魔法を使った特別製の罫なので、これが人為的に引き起こされたことに気づかれる確立はかなり低い。これで足止めできればわざわざ危険な橋を渡って姿を現す必要がないので二人にとってはかなりありがたい方法だった。

これだけ大規模な罫ならいくら黄猿でも超えるのはそれなりに時間がかかるだろうと、ヴァイはそう考えながらほくそ笑む。

しかし、海軍大將はかなりの規格外であった……………。

「うん。時間もないし。このまままっすぐ行くこうじゃないの」

「は？」

サキザキが驚いたようにそう尋ねると同時に、黄猿がつきだした指先からレーザーが飛び出し砂の柱に直撃、爆発！！ヴァイが張った魔法式ごとその柱を消し飛ばした！！

「は！？」「

愕然とするヴァイとセロ。魔法であれと同じような破壊力を生み出そうとすればそれなりの時間と手間がかかるのだ。その反応も当然だろう。

「なんだよ今の聞いてねえぞ！？」

「ああ、レーザー。ピカピカの実の光人間といったところかのお？なかなかにしてあげつない……………」

「どうする？今のがあんな調子だとほかの罫はあんまりききそうもないぞ！！」

ヴァイの言葉に、セロはため息をつきながら外套をまとった。

「仕方があるまい。直々に出てあ奴らを撃退するしかなかるう？」

「畜生……………楽できるかと思ったのに！！」

苛立ち交じりに外套をまといフードを下す、ヴァイにセロは肩をすくめる。

その時！！

「あゝ。一つ聞きたいんだけど」

突如背後から聞こえてきた間延びした声に、外套をまとった二人はぎりぎり振り返りその発生源を見た。

「正体不明の襲撃者っていうのは……………君たちかな？」

そこには、指先をまぶしいぐらいに光らせた黄色いスーツを着た怪物がたたずんでいた。

…
…
…
…
…
…
…
…

「なるほど……悪い時は悪いことが重なるな」

革命軍のテントにて革命軍たちの治療をしていたリリカは、ため息をつく。ミシャーナはその隣で荒い息をしており、座り込んでしまっていた。この炎天下の中フルスピードで飛行魔術を行使していたのだ。集中力と体力の同時消費はさすがの彼女にもきつかったらしい。

「どう………しまししょう………か？」

「治療は大体終わったから私も出よう。海軍大將は私とヴァイ達でどうにかする。おまえはロレンの搜索だ。見つけ次第やつを伴って盗賊のアジトに行け」

「ですが………そのアジトの場所がまだ……！」

「安心しろ。それならこいつが教えてくれる」

そういって、リリカが手のひらサイズの黒い箱のようなものをミシャーナに投げ渡す。

「な、なんですかこれ？」

「うん？……秘密兵器、だな……」

「はあ！？」

ミシャーナが驚いたようにそう返した時、

『さてと………さつさと空を飛んで砂漠の状況を教えてくれ。
今は一分一秒でも時間が惜しい』

「！？」

聞きなれた声はその箱から漏れ出し、ミシャーナは思わず飛び上がるのだった。

スキル説明

いい加減に説明しないとついでこれない人がいるのではと作成しました。

リリカ

クラス・魔法使い

ネクロマンシード
死霊呪術の使い手。主に死体を復活させ生前の姿（全盛期）に戻し使役すること、呪文を刻み込んだ場所を起点に様々な虚無を発生させそれに飲み込ませたものを消滅させることができる。

・魔王色の覇気　いわゆる魔力のこと。基本的にこれを使って魔法を発動させるが訓練されていない人間が使うと酷い疲労感に見舞われる。打ち込んだ人物の悪魔の実の能力を一定時間使えなくなる特典あり。

・黒死^{ベスト}　呪い。本人いわく本職の術式ではないらしい。そのため使える術は弾丸^{フレット}のみ。相手の呪い体を麻痺させたのち、数分で死に至らしめることができる。

・固有スキル委譲　事前にヴァイに血を吸わせることでその能力である《血中の鉄分操作》が可能。これによって拳銃や弾丸を作り出している。出血多量に要注意。

ヴァイ

クラス・吸血鬼

怪力無双。基本的に不死。霧になることができる。血中の鉄分操作ができる。変身ができる（めつたにやらない）。目からビーム（眼光）。など多彩なスキルを持っている。そのためここでは割愛。リリカの使い魔にして実験動物（リリカ談）。モルモット。どのようなことを言われてもリリカの忠誠を失うことはない忠義の騎士。

ロレン

クラス・能力者

『グルグルの実』の『回転人間』。自分にふれたもののベクトルを回転状に変換して操ることができる。

・突風飛行 自身の周りに竜巻を発生させることによって飛行する。中心がもろく貫かれることがある。

・螺旋の鎧 自分に対する攻撃のベクトルを螺旋状に変換していなすことができる。(例：剣士や格闘家は回転しながら跳ね上がり、拳銃は大きく半円状に旋回し地面に埋まる)

・螺旋脚 足に竜巻をまわせ蹴りの威力を上げたり、高速で移動することができるようになる。ヴァイ的には竜巻の方向は横から見て渦巻になるようにしてほしかったらしいが、トウヤの手によって棄却。

・螺旋掌 螺旋丸の劣化版。触れた相手を高速回転させながら吹き飛ばし、壁などに叩き付ける。

・螺旋丸 某忍者漫画に主人公の必殺技。ただ、原作のような便利エネルギー体は使っていないので見た目とは違いかなりの差異がある。周囲の空気を材料に使っているため暴君クマの『熊の衝撃』ウルススシヨック級の空気をため込むことになるが、ため込んだ空気が飽和してしまつたため完成からわずか数秒で破裂して使用者味方関係なく当たりに破壊をまき散らす。ヒットすれば相手を内側から破裂させるえげつない技だが、使うタイミングは慎重にはからないといけない。

ロビン（魔改造後）

クラス・能力者

説明省略

・覇気 武装色を重点的に伸ばした。これによりどのような能力者にも関節が決められるように！？

・億仙花 ハナハナの実の能力強化。一億近い手を咲かせることによって色々する予定……。

エイゼン

クラス・能力者

いわゆるつきの（作者主観）『ガスガスの実』の能力者。同じ名前の能力者が映画でいたらしいがこの作品では完全無視！！様々なガスを操り、現実には存在しないようなガスも作り出すことができるらしい。ガスは手足のように使いこなすことができ、ガスの手で物をつかんだり殴りつけたりすることも可能。自然系^{ロキア}。技のほとんどは未定だが今は出てきたものだけ解説。

ペインガス 見た目紫のガス。物体を溶かすほどの有毒性を持つガスで汚染されると骨も残さず解かされる。意識がない状態だから使ったが、正気の今はあまりに非人道的すぎるため使うことはない。

透明化 不可視のガスを生成し、自身もそうなることによって発動する。見えない分スモーカーのモクモクの実よりも厄介。透明なガスの大半が有毒ガスなのでこうなった瞬間逃げるべき。

可燃ガスフィールド 可燃ガスを辺りに充満させる。こうすることにより銃火器や火花が飛び散る戦闘を禁止させ相手の攻撃手段の幅を大きく狭めることができる。ただし、起爆すると自身も致命傷を負うためめったに使えない。はったり専用の技。

ミシャーナ

クラス・能力者

ヒトヒトの実・モデルエルフの動物系^{ソオン}能力者。魔法と呼称される《言葉通りの現象を起こす》力が使える（全部が全部そうではないらしいが……）。弓術も人間離れしており十キロ先の的中させ

ることが可能。聴覚がするどく真剣に耳を澄ませばに二十キロの音すら聞き取る

。ただし視力は人並み。そのため狙撃の時はほとんど聴覚使い。

メテオインパクト　　いわずと知れた大規模破壊魔法。あたり一帯に隕石を売らせて敵を殲滅する。一個だけ降らせて敵を狙撃するという加減もできる。

フリーズ・ファイアアロー　　弓矢に炎や冷気をまとわせてうつこ
とができる。当然燃焼・氷結の効果つきだが本職の能力者には劣る。
(メラメラ・ヒエヒエなど)

セロ

クラス・能力者

『オニオニの実・フォルム酒呑童子』の動物系^{ソオン}能力者。人の姿に戻ることが苦手でいまだに人間離れした特徴を持つ。(角・真紅の肌など)

巨大化　　酒呑童子はオニオニの実の中でも最大の全長を誇る。大

きさは最大で海軍本部と同じ。オーズとガチンコ勝負して氷の国に放り込んだという逸話あり。

超回復 手足がもがれようが何をされようが首を切り離されない限りたいていの傷は治るといふ回復力。毒にも効果はあるらしいが病気にはないらしい。ヴァイとキャラが被るといふことで抗争中。

半鬼人化 体の一部を鬼にすることによって性能を飛躍的にあげることができる。主にあげたことがあるのは『腕力』『視力』『消化力(食べ物)』『解毒力^{アルコール}』。大食い、酒飲み大会には負けなしだが反則との声あり。ほかの能力向上はやったことがないがたぶんできるとのこと。

メフィストフェレス クラス・能力者

『アクアクの実・タイプ・メフィストフェレス』の『悪魔』(自称)。一応今後も出す予定。

結んだ契約を強制的に順守させることができる。ミシャーナの親友。見た目病的白い肌を持った美女だが、本性は漆黒の毛皮を持ち骨ばった翼をもつ絵にかいたような悪魔の姿。人間に戻ることは完

全に体得しているが趣味に合わないとのことでもっぱら肌の色を戻さずに羽をはやした姿を取っている。

悪魔^{ゲッシュ}のささやき 特殊な契約書をつくりだしそこに名前尾を書いた人間に契約を強制的に順守させる。

ロレンは困っていた。

「ところであなた、どこの出身だ？あんなみたいな小さな子供が一人で旅行なんて危ないじゃないか」

「え、えっと……………りよ、両親が一緒についてきていたんですが、砂嵐ではぐれちゃって」

「なんだって！？じゃあ、早く助けにいかねえと！！どんな容姿の人たちだ？」

「いえ！！そんな気にしていただけるほどの人たちじゃないです！！ほんと、頑丈だけが取り柄の人たちなんですから！！」

「……………いや、親に対してそれはないんじゃないか？」

本当に困っていた。

…
十…
十…
…
十…
十…
…

現在ロレンはキングゴブラ弾が拠点にしている村の中を歩いていた。

寒村といいながらも村自体は結構潤っているらしく、水も食料も商店には豊富にそろえられていた。少々外よりも高めなのが気にかかるが、ここは砂漠である。むしろこの程度の値段の上昇で止まっている方が異常であった。

おそらくは盗賊団が設けた利益を村に還元しているのだろう。

あの少女が言っていた村がましな生活できるようになった時期と、盗賊団がこの村を拠点にするようになってからの時期がちょうど重なるからこれは間違いない。

だが、気になるのはなぜ盗賊がそんなことをしているのかだ。

盗賊の襲撃からこの村を守ったというのも気になる。

成果を横取りするわけでもなくかといって、この村の人たちをだまして何かをしているようにも見えない。

何かあるな……………。

ロレンはそう結論付けて村中の搜索をこっそりとやることにしたのだが……………。

「あ？こんなところで何してんだ？」

あっさりと見つかった。それもあのデビル・プランに……………。

「あんまうるちよろすんなよ？この村の人たち基本的に人はいいけど中には気性の荒い奴らもいるしな。知り合いもない状況でふらつくのはあんまりお勧めできねえぞ？」

「そ、そうですか。わかりました！！では僕は部屋に戻っていますね！……」

ロレンはそう答えて踵を返し自分の部屋へと戻るために歩き始めたのだが……。

「あの……どうしてついてこられるの？」

「ん？迷ったらいけねえだろ。だから念のためついて行ってやるよ。あと聞きたいこともあったし」

「き、ききたいことは？」

「ああん？いつまでも身元不明じゃうちの仲間たちがうるさくてなあ。お前みたいながキが何かするとは思えねえが、とりあえず事情聴取しろとよ」

「……………」

というわけで冒頭に戻るわけだが……。

現在ロレンとデビルはロレンにあてがわれた部屋で事情聴取をしていた。

「ん？なんか隠してたりするの？」

「そ、そんなわけないじゃないですかあ！…！」

「……………」

今のところばれていないのは一重の彼女の鈍さのおかげである。ぶっちゃけ子どもということで油断してくれているのも理由の一つ

だろうか……。

だが、さすがにここまで胡散臭い対応をしていると、視線に乗せられる疑いの色がどんどん強くなっていく。

ああ、ゼフ船長。先立つ不孝をお許しください……。

ロレンが心の父にそういつて十字を切った時、とうとうその時はやってきた。

「ところで気になっていたんだけど……」

「はい……なんでしょう？」

「お前の服の襟についている徽章……どっかで見たことが？」

瞬間、ロレンは彼の部屋に設置された机を蹴り上げ能力を発動。能力を使い部屋の中に瞬間最大風速85.3異常の突風を発生させ小屋ごとデビルを吹き飛ばした！！

「んば？」

「ええつと……すんません。捕まるわけにはいかないですし拷問とかも簡便なので逃げさせてもらいます」

「て、てめえ！？」

そういつてぺこりと一礼をかました後、ロレンはたったかかと逃亡。吹き飛ばされがれきに埋もれたデビルは顔だけ出して怒声を上げる。

懸賞金は実際の半分などといわれていた彼女だが、それでも二億越えには違いない。ダメージが与えられたとは思えないし、実際彼女の怒鳴り声にはすさまじい怒気は込められていたが苦痛の色はなかった。

これは、螺旋丸しかないですかね。でもあれ使つと殺すか不発かのどっちかしかないんですよえ。

ロレンはそんなことを考えながら足に竜巻をまとい荒まじい速さで村の中をかけていく。そんなロレンを見た盗賊たちは何が起こったのか大体把握したのか即座に武器を持って襲い掛かってくるが、ロレンの能力には自分にふれたものベクトルを回転するように変換していなすという特典をトウヤの能力開発によって手に入れていた。

その鉄壁とっていいほどの防御力をいかになく発揮し、ロレンに切りかかってきた剣士の盗賊はまるでコマのように回転しながら宙に浮き、撃たれた拳銃は大きく半円を描きながら地面に埋まる。

そんな無双っぷりを無意識のうちに行っているロレンは、更に思考を進めながら一般人が住んでいるエリアに足を踏み入れた。

まだ彼らの目的がわかっていない段階で、誰かを殺害するのはリスクが高いしロレン自身殺人をしたことがないのでかなりの抵抗がある。いまさら善人ぶるつもりは毛頭ないがそれでも一戦というものはるものだ。

「今はとにかくこの村からの脱出が最優先ですかね。契約書だけでも見つけておきたかったです。欲をはるとデビルさんが出てきそうですし……。さっさと撤退してほかの人たちに合流しますか。そのためには砂漠をガイドしてくれる人物が必要ですが……」

その時、ロレンの目に入ったのは水をかめいっぱい憎んだ自分を助けてくれた少女……。

「あ！ロレン……さん？どうしたんですか、そんなに慌てて」

その時ロレンの脳裏には『ライフカード』が……。

『愛しているという』『無言で抱きしめる』『じゅわん』

「選択肢に明らかな作意が！？」

「？」

突然わけのわからないことを言って泊まるロレンに不思議そうな顔をする少女……アリサ。

まあ、とりあえず……。

「さらいますか」

「は？」

ロレンがそうつぶやいた時……！

「ネルネル子守唄ララバイ……！！」

ゼットがたの光線がロレンを直撃するが、それも弾丸のように大きく円をえがきいなされる。

「くっ！？能力者かよ！！アリサ！！そいつから離れる！！」

「え！？団長さんそれはいつたい……」

「もう遅いですよ」

ロレンはそういうと、アリサを肩に抱え自分の周りに竜巻を発生させる……

「な！？」

「きゃあ……」

啞然とするデビルと、いきなり抱えられて悲鳴を上げるアリサをしり目に、突風の盾で自分を守ったロレンはぺこりと頭を下げてデビルに詫びた。

「ホントすいません！！彼女は後でお返ししますから！！運が良ければ事情もきちんとお話しますから！！今回はかりは見逃してください……」

「てめえ、フザケンナ！！」

デビルはそう怒声を上げて右手を天に掲げる！！

「スリープガルド
幻想郷……」

その右手に発生し始めた《Z》が渦巻く球体に、異常なまでのエネルギーの高まりを感じたロレンは即座に竜巻を解放して天高く飛びあがった……

「なあ!!」

「す、すごい!!飛んでいる!?!」

啞然としたデビルの顔は即座に遠ざかり、肩に担がれたアリサは歡声を上げた。

「本当にすいません」

ロレンはそれだけ言い残すと、竜巻を身にまといながら砂漠のかなたへと飛んで行った。

…ナ…ナ….:….:ナ….:ナ….

砂漠に走る一条の閃光。セロは半鬼人化してあげた動体視力で見切った黄猿の指の動かし方で閃光が飛ぶ位置を予測。なんとか紙一重で回避することに成功する。

しかし、そう何度もよけることはできない。何せ攻撃速度は光速だ。気が付いたら死んでいたなんてことになりかねない。

そして、ヴァイは……………。

「一回しばおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおお！？」

どうやら見切りに失敗して粉碎されてしまったようだ。

「あれえ？以外と口ほどにもないねえ……………見立て違いだったかな？」

「そうじゃよ。わしらはただの無垢な一般市民じゃ。じゃからこれ以上の攻撃は控えてほしいのじゃが？」

「いやあ。無垢な一般市民が仲間殺されて冷静でいられるわけないでしょう。それにあの鬱陶しい、わけのわからない罫を張ったのきみたちみたいだしねえ。両手両足吹き飛ばしたあと事情ぐらいは聞かせてもらおうよあ」

いまいち緊張感に欠ける間延びした口調でありながらそこに掛けられた重圧は一級品。びりびりと肌を震わせるすさまじい重圧に耐えながらセロは口を開く。

「まあ、確かに今さら一般市民というのは語弊があるかものお。何せわしらは……」

瞬間！先ほど黄猿がヴァイごと地面を吹き飛ばし小さなクレーターができた場所から白い霧が黄猿の背後に伸び、その中からフードをきちんとかぶったヴァイが姿を現した！！

「不死身じゃからな」

一撃！

振りぬかれたこぶしによって後頭部をぶんなぐられた黄猿は数キロほどの距離を吹き飛び頭から砂漠に埋まった。

「やったか？」

「まだまだ！！全身を半鬼人化しておけ！！ロギアの異常性はこの程

度じゃねえぞ!!」

正解いゝ。

どこからともなく声が聞こえたかと思うと、黄猿の体が瞬時に掻き消え外の目の前に出現。光で構成された剣が振るわれる。

「あまのむらぐせ天叢雲剣おゝ」

「いいネーミングセンスしてんじゃねえか!!」

ヴァイも負けじと反応し自分の指を引きちぎり大量に出血。その血を持ってランスを生成し覇気をまとわせ黄猿の光の剣を迎撃する。

「覇気使いかいゝ?このあたりじゃ珍しいねえ?新世界帰りかなあ?」

「はあっ!!グランドラインにいる奴だけが最強とか笑える勘違いしてんじゃねえよ!!」

本来騎乗して操らなければならない超重量の突撃槍ランスを片手で軽々と操りながら、黄猿の剣をはじき神速の突きを黄猿の体に叩き込むヴァイ。しかし、黄猿はそれに光速移動を使うことで対応し軽々とその突きをよける。

「君はなかなか厄介そうだねえ……だつたら……」

「わしなら軽々といなせるとでも思つたか?」

黄猿がそう言って標的を変えようとしたとき、砂漠の巨大な影が

落ち辺り一帯に闇をもたらした！！

「おやあ？」

瞬間、砂漠に激震が走り、天から降り注いだ覇気付きの拳が黄猿の体をたたきつぶす！！

「おぬしの名言に『早さは……重さ』というのがあろうじゃない？
じゃったらワシはこつ答えさせてもらおう。でかさは力じゃ。覚え
ておけ」

酒吞童子の真の姿。完全鬼人化。海軍本部と同等の巨体が黄猿との戦いと闘いに参戦した瞬間だった。

38話（後書き）

ゼロのでかさが半端ない……。

でかくしすぎたかなあ……。でも戦力としては巨人族と同等程度
じゃ頼りないんだよなあ……。

意見があったらどうぞ。

39話

じっ……………!!

砂漠に激震が走る。

ピカアツ……………!!

閃光が走る!

ゴパアツ……………!!

衝撃が走る!!

黄猿vsヴァイ&セロの戦いはまさしく地獄の様相を呈していた。

黄猿は攻撃の際必ず実体化して人の形をとる上に、光になって移動するときに若干のタイムラグがあるようでそこがスキになっていく。原作ではレイリーと白ひげが攻撃をあてら得たのがその証拠だ。

当然ヴァイとセロもそこを狙っており覇気をまとった武装とこぶしを巧みに操り、何とか拮抗し戦いを演じていた。

しかし、黄猿も負けてはいない。

彼のレーザーは一撃一撃が大規模破壊攻撃だ。おまけに赤犬のような攻撃速度に難があるものではなく、文字通り光速の連射。ヴァイとセロが無事でいられる道理はなくその攻撃によってセロは四肢

を、ヴァイは全身を消し飛ばされてしまったことも一度や二度では効かない。

「か、海軍大将ってこんなに強かったんすか!？」

「いずれお前たちも追いつかないといけない領域だ。しつかり目に焼き付けておけ!！」

黄猿に巻き込まれないように遠くに退避した陸軍の兵隊たちはそう言っつて、この怪獣大戦争を観戦していた。

「まったく……おいこら化け物!！お前の仲間がビビッて退避してんぞ!！呼びに行かなくていいのかよ!！」

「ジョーダン。いても足手まといになるだけだよ。それに君に化け物といわれるのは心外だなあ」

「お前も言う権利はないがの!！」

黄猿の閃光を体で受け止め腹に巨大な穴が開くセロ。しかし、その傷は瞬時に再生し見る見るうちに元の姿に戻った。

セロはその間にもまるで痛みを感じないかのように豪腕をふるい黄猿の体を殴り飛ばす!！

「くうう。きくねえ」

「嘘ついてんじゃねえよ!！」

しかし、閃光になって衝撃を逃した黄猿には大したダメージは入

っていない。だが、ヴァイもそれを見越しておりすさまじい脚力を
利用し黄猿の着弾点に先回りし、その腹に剛力を込めたランスを叩
き込んだ!!

「おお〜これはすごいねえ」

「くうっ!!」

大地を揺るがし砂を含んだ衝撃波が飛び散りあたり一帯を蹂躪す
る!!

しかし、黄猿のその着弾点の隣に何事もなかったかのように立っ
ていた。おそらくは能力を使い回避を行ったのだろう。先ほどの攻
撃は威力が高い分モーションも大きかった。よける際は十二分にあ
ったといえる。

「空中ならわっしの動きを封じられるとでも思ったんだろうけど、
あいにくとわっしの能力は飛行能力にも優れていってねえ」

「くそったれが!!」

ヴァイはそう叫ぶと跳躍。黄猿から距離を取り、セロの足元に着
地した。

「どうする?正直千日手じゃぞ」

「どうするもこうするも現状維持しかねえだろうよ。俺らにいいつ
は倒せねえ」

「倒す必要はないということがなぜわからんのだバカどもが……」

その時、突如後ろから聞こえてきた声に射すくめられ、二人はまるで石像のように固まった。

「まったく。お前達が大将と交戦していると聞いたから見に来てみれば……ここまで手の内を明かすバカがどこにいる戯けども」

「あ、主!?!」

「盟主!?!」

そこにはフード付きの外套を被った不機嫌そうなりリカが立っていた。

「ど、どうしてここに!?!」

「どうしてもこうしても無い、馬鹿者ども。お前たちでは少し荷が重い相手だと思ったから助太刀に来てやったんだろうが」

「おや〜。新しい人だねえ。しかも口ぶりからしてまだほかに仲間がいると……。君たちの正体は小規模な組織か何かなのかなあ?」

しかし、黄猿にとってそんなことは関係ない。仲間が増えようがどうなるうが捕まえて話を聞くだけだ。そんな言葉を体現するかのようは無駄話を始めた三人の後ろに現れた黄猿は高速のけりを新たに現れたりリカに向かって解き放った!!

「天岩戸あまのいわとお〜」

しかしリリカは、至って平然とした表情でそれを見つめながらこ

うつぶやいた。

「海軍大將殿。ひとつ面白い事を教えてやるう」

「ん〜？」

瞬間、リリカに着弾するはずだったレーザー光線は途中で進路をグニヤリと曲げなにもない砂漠の大地につきたち爆発した！！

「あれ〜。おかしいなあ。きちんと狙ったんだけどなあ〜？なにをしたのかなあ〜。きいみい〜」

「なあに。ほんの少し……」

不思議そうに、しかし大してあわてた様子もなく首をひねる黄猿にリリカは不機嫌な声音のまま手で手のひらを見せた。

「砂漠に細工をさせてもらっただけさ」

そこにあつたのは小さな弾丸。その周りには無数の文字が刻まれている。

「光というものは何があつてもまっすぐ飛ぶものなんて勘違いされているけど、実際は簡単に曲がる。鏡もそうだしプリズムもそうだ。そして、砂漠の代表的な光学現象には蜃気楼というものがある。これは空気の密度の違いによって光が屈折し違う場所に像を作り出す現象だ。今回のトリックはそれを利用した」

リリカはそう語りながら弾丸を転がし黄猿に背を向ける。

「私の弾丸は特注品でな。あたりの空気の温度を吸い取って気温を下げることができる」

「ああ、道理で寒いと思った」

「なるほど、われわれの周囲の空気の温度を下げることによって違う密度の空気を作り出し、光が屈折するように仕向けたと……」

「おお。そいつはすごい。今までよけられたり回復されたりすることはあつたけど、そんな小細工でよけられたことはなかったよ
お」

「そうか、それは良かったな。ヴァイ帰るぞそろそろひき時だ。セロ元に戻っておけ。お前がそのままだと逃げにくい」

黄猿は本気で感心している様子でつぶやいたが、あいにくとリリカは聞いていない。これ以上手の内を見せるのはまずいと判断したのだ。

即座にセロに元に戻るように命令し、ヴァイについてくるように指示を出す。

しかし、黄猿もそれをやすやすと許すような馬鹿ではなかった。

「にいぐげられるかと思っっているのかい。だとしたらかなり楽観的な子だねえ」

指先に光をためて構えをとる黄猿。しかし、リリカは仮にもハンターズ最高戦力。

「そつちこそ。逃げられないとでも思ったのか？」

フードから唯一覗いている口元に不敵な笑みを張り付けリリ力はパチンと指を鳴らす。

瞬間！！深紅の文字の大群が膜のように三人を包み込み、一気に縮んだ！！

「おお〜？何かの能力かなあ？」

黄猿が少し驚いたように目を見開くのを無視して、針の穴程度の大きさまで縮んだそれは最後にプチツと言う小さな音ともに完全に姿を消した。

「逃走用の能力かあ。結構厄介な能力者だねえ〜」

そんな言葉とは裏腹に微塵も不安をにじませない声音のまま黄猿は陸軍たちのほうへと向き直り歩き出した。

彼の目的はあくまでポーネグリフ解読の有無の調査だ。あの三人のことは正直気になるがそちらは陸軍の調査部に任せるとしよう。

彼はそう自己完結し、先へと進むため陸軍に指示を出していくのだった。

∴
†
∴
†
∴
∴
∴
∴
∴
†
∴
†
∴

砂漠の夜は冷え込む。

砂漠が最も生物がすみにくい場所の一例に挙げられる原因がこれだ。昼と夜との急激な温度変化。これの変化についてこれる生物はそうそういない。

そう、それがたとえ悪魔のような力を持った人間であっても……。

「何考えているのよ……。夜の砂漠に防寒具なしで飛び出すなんて自殺行為よ？」

「うっ……すいません」

寒さでガタガタ震えるロレンのためにたき火を起こしたアリサは三白眼で日ににじり寄ってくるロレンを見つめた。

「まったく。悪者なら悪者らしくしなさいよ。そうしたら思いっきり嫌ってやったのに」

「あはははは……。し、しまらなくてすみません……」

ぐすつと鼻を鳴らしながら苦笑を浮かべるロレンに、アリサは深い深いため息をついた。

アリサをさらって逃走をしてしまったロレン。そんな彼がさらったはずのアリサに世話をされているのには事情がある。

時はしばらくさかのぼり……。

「離して。離さない！離せっ！！」

「そっちが素なんですわ……。驚きの新事実です」

「黙りなさい！！のご搔き切るわよ！！！」

「って、どこからそんなナイフ取り出したんですか！？きちんと身体検査したはずなのに！！！」

「女の身体検査をするなら胸の谷間まできちんと見ることね！！！」

「そんな！？そんな悪辣な真似できるわけがないでしょう！？？」

「あんた、悪党の自覚あるの！？？」

空中を逃げるロレンの肩ではじたばたと四肢を振り回し抵抗をするアリサの姿があった。どうやらようやく自分がさらわれたことに気づいたらしい。その右手にはいつの間にかナイフが握られており隙あらばロレンを突き刺そうと凶悪な目つきで睨みつけてくる。

「はあ……。とにかく事情を聴いてください。こんなことをするのはそれなりのわけがあるんです」

「わけって何よ！？」

「それは……」

ロレンがそこまでくいいかけた時だった!! ゆっくりと沈んでいた太陽がとうとう完全に姿をけしあたりが夜の色の染められる。そして!!

「え!?!」

「うわっ!?! さむっ!! 夜になったじゃないの!?!」

ロレン達に寒波が訪れた。一気なさがる竜巻内の気温にアリサは厚着をしていた服の裾をくつつけそれをしのぐ。

どうやらロレンがまとっていた竜巻が下にたまっていった極寒の空気を吸い上げてしまい竜巻の中に送り込んでしまったらしい。

「ふう。危なかったわ。ところで事情って何よ?」

そういつてアリサはロレンを睨みつけ……。

「へ?」

彼が白目をむいて気絶していることに気づいた。

「う、うそでしょ!?!」

慌ててロレンの様子を確認するアリサ。おそらく突然冷たい場所に放り込まれた体が驚き意識を飛ばしてしまったのだらう。こんなところで経験不足がたたったロレンである。

とうぜん、意識を失った彼に能力の制御などできるわけがなく、彼はあっけなく砂漠へと落下を開始する。

「きゃあああああああああああああああああ!？」

ドゥプラー効果を伴いながら落下を開始した二人は、そのまま砂漠へと墜落。

やわらかい砂でなかったら死んでたであろうと思えるほどの速度で地面へと突っ込み、人型の深い穴を二つ作り上げたのであった……。

「あんたの事情は分かったわ」

そして現在。適当に捕まえてきた砂漠の虫を租借するアリサに若干引きながら、ロレンは常に携帯をするように言われていた。『トウヤ作・携帯レーション』をもぐもぐと食べていた。

そんな得体のしれないものを食べるくらいなら虫のほうがましだとアリサに断られたのだ。

おいしいのに……。と若干残念な子を見るような目でアリサを見つめながらロレンはとりあえず自分がどこに所属し、何をしに来たのかをアリサに教えた。同時にあの村を守っている存在が陸上最高額を誇る賞金首であることも。

「でも、やっぱり信じることはできないわね」

「でしょうね。デビルさんと僕とでは積んできたものが違いますし

……」

まあ、早々に信じてもらえとは思っていません。苦笑交じりにそう考えながらロレンは肩をすくめた。寒さにもだいが慣れてきた。これならしばらくしたらまた飛べるだろう。

そんな楽観的な予想をつけながら、ロレンは一応説得を試みる。飛んでいる最中にブスリというのはいささかぞつとしないからだ。

「いちおう手配書も持っていますよ。それにあんな寒村の景気がいきなりよくなったのはどうしてだと思えますか？どう考えてもあの人たちが何かしらの方法でお金を稼いできたに決まっているじゃないですか？」

「だからって盗賊ってことにはならないでしょう！！ほら、他人の空似とか」

「世界政府は優秀ですよ。他人の空似をしてしまうような手配書を配るわけがないでしょう」

《鉄仮面のデュバル》の存在をロレンは知らない……。

「で、でも……それでもあの人たちはいい人よ！！大体、本当に盗賊団だったらどうして私たちのことを守ってくれたの？」

「それがわかれば苦労しませんよ。僕は頭が悪いですからね……」

「威張るな……」

最後の最後でしまらなかったロレン。自分の交渉の才能のなさに嘆きながらお茶らけた様子でごまかそうとするロレンを、ぞっとするような低い声でアリサが威圧した。

「はい……」

思わずロレンが絶句してしまうなか、アリサは深くため息をつき首を振った。

「もう……仕方ないわね。私をあなたのリーダーのところに連れて行きなさい！！わたしがデビルさんたちは悪い人じゃないって教えてあげるわー！！」

「まあ、そうしていただけるならありがたいですけどね。交渉と悪

だくみをさせれば右に出る人はいませんし……」

「それはそれで不安になる人ね……」

盗賊よりも悪党じゃない……。そうしてロレンのつたない交渉はひと段落。一応の決着を見た。

最後の、アリサのつぶやきに苦笑を浮かべながらロレンは回復までにかかる時間の暇つぶしのために古代語が書かれた辞典を広げた。

この辞典はロビンが監修したものでハンターズに所属した傭兵全員に渡されるものだ。一応トレジャーハンター互助組織の形をとっているハンターズには必需品といってもいいものである。

ロレンはその辞書を使いながら古代語の勉強をするのが最近の日課だった。長年一人でいたため勉強なんてものはしたことがなく目につくすべてが新しく感じられる彼は、何かを知るために勉強をすることが好きだった。だから時たまこうして勉強しているのである。

そんなロレンの横から辞典を覗いたアリサは一言つぶやいた。

「あ、その訳間違っているわよ？」

「はい？」

「間違っているのは大げさね。その文字は確かに『鳥』っていう意味もあるけど、『自由』って意味や、そこから派生した『レジスタンス』『抵抗』っていう意味もあるの」

「ちょっと待ってください？どうしてそんなことしているんですか？」

ここに載っている文字は世界政府が解読を禁止しているポーネグリフにしか使われていない失われた歴史の古代文字だ。ハンターズでさえ、トウヤの解読術とロビンの考古学知識がなければ辞典どころか解読すらできなかったものである。普通の人が知っているはずのない。

「なんでって……私のお母さんが教えてくれたんだもん」

「お母さん？」

「お母さんすごい考古学者さんだったんだって。村長が言うには……オハラの出身って……」

「オハラ!？」

この事件のピースがはまり全貌が姿を現し始めた瞬間だった。

「くそ……。部下たちの言う通りもつと警戒しておくべきだった！」

「いまさら過ぎてしまったことを後悔しても仕方がない。いまはどうやってアリサを奪還し保護をするのかを考えるほうが先決だ」

砂漠の名もない寒村の村長の家にて、村の代表とっていい存在達が顔をそろえていた。

村長は言わずもがなこの村の最高責任者。オハラからの逃走者と知りつつも昔馴染みのアリサの母親を助けかくまい、世界政府の調査の手からこの村の地下に眠る遺跡に設置された『ポーングリフ』の管理をと隠ぺいを行っていた一族の末裔である。

次の一人はこの村唯一の商人。こつそりとこの村を拠点に働いていたキングゴブラ団が強奪してきた物品を世界政府に知られないように売却する闇商人である。

最後にこの村を拠点に盗賊行為を働いていたキングゴブラ団の統領^ン。デビル・プーラン。

本当はアリサの母親がオハラから逃げる際に、彼女から受けた恩を返すために彼女の護衛をしていた傭兵団だった彼女たちだったが、この村にたどり着いた途端その守るべき人はあっさりと逝ってしまった。いまはそんな彼女に知識を受け継いだアリサを守るため。また、そのアリサを守ってくれている村に恩を返すために盗賊行為を働き村の生活を援助している。

ちなみに……突然村の景気が良くなったのは、普通に彼女たちの獲物が最近この砂漠をよくとおるようになったからなのだが、そのことをロレンは知らなかったりする。

閑話休題。

本当はアリサにだけは罪に汚れてしまった自分たちの存在そのものを隠し通すつもりだったのだが、数年前に、村がポーネグリフの調査に来ていた陸軍の襲撃を受けてしまいやむなく撃退。アリサに存在が露見してしまい、さらにウソを重ね塗りすることによって危うい関係を保っていた。

しかし、運命はそんな優柔不断で卑怯な彼女たちに厳しかった。今日の夕方、彼女たちが命がけで守ってきたアリサが、身元不明のたった一人の少年の手によって強奪されてしまったのだ！

ただの詐欺師兼誘拐犯ならいい。だが、もし彼が政府機関の関係者ならば……。

「して、どうするつもりじゃ？」

「左様。あの少女が世界政府に渡ったならばもはや我々の命は風前の灯。あの少女も……あきらめたほうが賢明だろう」

闇商人の言葉にギリツと、歯が軋るほどかみしめながらデビルは立ち上がった。

「あきらめるのはまだ早えよ。とにかくおれたちはあの餓鬼を全力で探し出す。それでも見つからなかったときは、村長……イセキ……

…覚悟は決めておいてくれ」

「……覚悟など、あの子の母親をかくまったときからしておるわ」

「はあ、墓前には何かかつこいい言葉を添えてくれよ」

ちよつとだけ悲観的なことを軽々しくいいながら、それでも『アリサをあきらめてここに残り戦いの準備をしろ』といってこない二人にデビルは少しだけ感謝の笑みを浮かべる。

しかし……。

ビリビリッ!?

そんな雰囲気を取り裂くように、テントの天井を引き裂きながら一人の人物が天空から降り立った!!

「うわあ……ほんとにいた。どうやって予想をつけたの?」

「っ!?!……何者だ!!!」

テントの天井を引き裂き現れた人物は、独り言をつぶやくように黒い箱に話しかけた。

気でもふれているのか?そう思いながら能力を使うために手を突き出すデビル。その声音には警戒の色が多分に含まれており、尋常ではない殺気が練りこまれている。

しかし、テントの屋根を破って侵入してきた人物は特にそれを気にした様子もなく黒い箱にじっと耳を傾けていた。そして……。

『あたり前だ。砂漠なんて住みにくい環境に住んでいるんだ。環境操作ができる能力者でもない限り村をつくれる場所は限られてくる。砂漠をしらみつぶしにやるよりは効果的だっただろう?』

「「「!」「」」」

突如その黒い箱が話はじめ、侵入者の疑問に答えたではないか! そんなありえない光景に愕然としつつ警戒心をさらに強化するデビルたちをみて、侵入者……ミシャーナ・T・ソウルは大きくため息をついて、箱を前へと突き出した。

「どうも私ではどうにもできそうにないわ。あなたの口先で丸め込みなさい」

『無論だ。そのつもりで俺はこうして《電話》をかけている』

黒い箱からはそんな言葉が漏れた後、明らかに挑発するような、それでいて圧倒的存在感が醸し出される言葉の群れがデビルたちに向かつて解き放たれた。

『やあ。偉大なる歴史の番人たちよ。このような形での初お目見えを失礼。こちらにもいろいろと事情があつてな。姿を見せるわけにはいかんのだ』

そして、

『俺の名前は……そうだな《リーダー》とでも呼んでいてくれ。近頃勢力を伸ばし始めた《ハンターズ》を裏で操っている総司令官だ』

イササギ・トウヤはこうして間接的に、しかし圧倒的な影響力を
もってこの戦いに参戦した。

…
十…
十…
…
十…
十…
…

翌日の朝。

「あ、熱い……」

「我慢なさいよ……。今日はまだ涼しいほうなのよ？」

「まじですか……」

覇気にかける声を出しながら天空を飛ぶロレンにしがみついて彼の感じる熱さを追加しているアリサはあきれた声を出した。

空を飛ぶという性質上。遮蔽物はとてつもなく少ない……というかない。もろに太陽光線を浴びるロレンはさながら太陽に翼を焼かれた以下ロスの気分を味わっているところだろう。

まあ、そんなことはともかく。

昨夜発覚した、アリサの新事実がロレンは隠し通すことにした。

それは一重に彼の甘さと優しさがそうさせたのだ。

ロレンは仲間にして先輩のロビンから歴史を学ぶに当たり様々な障害があると聞いていた。その例として彼女は自分の故郷であり地図から抹殺された島オハラについて話してくれたのだ。

その凄惨かつ最悪な過去は、ロレンは初めて聞いた時は思わず涙を流してしまっただけだった。

しかし、アリサはそんなこと知らなかった。母親がオハラから逃

げたときは彼女はまだ赤ん坊で故郷が海軍のバスターコールによって焼かれたことなど全く知らなかった。そして、母親もあえてそのことを教えてはいなかった。

おそらくはアリサに怨念にまみれた生涯を歩んでほしくなかったのだろう。

その母親の優しさを尊重し、なにより彼自身もアリサには明るい生涯を送ってほしいと思い、ロレンは彼女に特に何も言わずその話を流したのだ。

だが、彼はこのしばらく後にこの判断を猛烈に後悔することになる。

その災厄は……一刻と彼らに迫っていた。

だが……。

「あついあついあついあついあついあついあついあつい……」

「熱いっていうから熱いのよ。新党滅却したら火もまた涼しって聞いたこのないの？」

「字が違う!? 何処の党を破壊するつもりですか!? あと誰ですかそんないい加減なこと言ったの!」

今は果てしなく緊張感のない会話が続けていたが……。

「ん。ちょっとあやしいなあ」

「??？」

「ぜんぐーん。少し離れているようにい」

砂漠を走っていた黄色い閃光は再びの暴虐を働くため天を切り裂く暴風に指先を向けた。

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

それは一条の閃光だった。

「な!？」

「!?!？」

突如としてロレンの暴風の盾を貫き、まぶしい閃光が竜巻内に侵入。爆発してロレンの体を襲ったのだ!!

「くうっ!?!?なんですか!?!？」

だが、ロレンには絶対防御の螺旋の鎧がある。能力を使用し爆風をアリサに被害が出ないように完全にいなしたロレンはいきなりの攻撃の正体を探るために下に降りた。

ここで彼は降下などという手段を取るべきではなかった。彼はこの場から全速力で逃げるべきだったのだ。たとえ、それが無駄のことであったとしても……。

砂漠におりたつとロレンは、砂漠に仁王立ちしていた黄色いスーツに白いコートを羽織った男を睨みつけた。

「いきなり何をするんですか？こっちは女の子を運んでいるところだったのに……当たったら危ないでしょう！！」

憤然とした様子で食って掛かってくるロレンを少し驚いたような顔で見た黄猿は、苦笑交じりに頭をかいた。

「いやあすまないねえ。まさかこんな子供だとは思わなかったんだよお〜。昨日この砂漠で妙な技を使う人たちに襲われてねえ。てつきり君が操っていた嵐がそれだと思ったんだよお〜。すまんかったねえ〜」

そういつて黄猿は素直に頭を下げた。

そう。実は先ほどの攻撃、黄猿の勘違いだった。ヴァイたちの襲撃から半日たった今でも彼はヴァイたちの襲撃を警戒していた。表情には出ていなかったがそれほどヴァイたちが厄介かつ面倒な相手だったのだろう。

「でも君凄いなえ。いまのは殺す気で撃ったんだけどねえ……。何かの能力者かなあ？」

「相手の正体も断定できていないくせに殺す気の攻撃を撃ったんですかあなたは……」

そんな感じに二人がのんびりと会話を始めた時だった、ロレンの服の袖をアリサがぎゅっと握りしめガタガタと震え始めたのだ。

「ん？どうしましたかアリサ」

「ろ、ロレン……この人……」

アリサは震えながら黄猿を指差し震える声でとんでもないことを口走り始めた。

「この人……私の村を襲った盗賊と同じコートを着ている……」

「なっ!？」

「ん？村を襲った盗賊？」

そこでロレンはようやく気付いた。男の背中に翻る純白のコート。その背中には『正義』の二文字が刻まれていることに……

「……!!」

マズイマズイマズイマズイ!!こんなところで世界政府軍に会うなんて!!僕の予想だと彼女の村を襲った盗賊っていうのは世界政府軍の可能性が高かった。多分外の世界に出たことがない彼女が彼

女を守るために村人が戦っている人たちを見て盗賊だと思ったんだろう。でも、何もこんなタイミングで！！

ロレンの脳裏のそんな言葉が巡って一時的にショートしてしまう。基本的に経験不足の彼にはこういった不測の事態に対処する力が無い。そのため、次に交わされるやり取りを止めることができなかつた……。

「村を襲った……きみいゝ。もしかしてポーネグリフって知っているかなあ？」

「ぼ、ポーネグリフならうちの村の地下にあったお母さんが解読しようとしていたけど……」

瞬間、黄猿の足に閃光が集まるのを見てロレンはようやく意識を取り戻し、抱きかかえるようにアリサに飛びつき砂に伏せさせた！！

瞬間！！アリサの足があった場所を閃光が走り抜け、天空にて大爆発を起こした！！

「うゝん。子供を襲うのは気が引けるけどおゝ、少しお話を聞かせてもらおうか？」

「逃げますよ！！」

「！？！？！？！？！？！？！？」

混乱するアリサを引きずり嵐をまとったロレンは暴風を置き土産にその場からの命がけの逃走を開始した！！

40話(後書き)

黄猿VSロレン!!

この章のクライマックスです!!

41話

空中に無数に咲く爆風の花。その風を螺旋状に変換していなしながらロレンは大声で悲鳴を上げながら空を逃げ回った。

「ぎゃあああああああああああああああああ！！思い出した！思い出しましたあああああ！！あれ、海軍大将の黄猿じゃないですかあああああああ！！」

そんなロレンの悲鳴を聞きながらアリサは目を大きく見開いた！！

「海軍大賞！なにそのすごそうな賞！！」

「こんな状況でくだんねえポケぬかしてんじゃねえぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

そんな風にキャラズれを起こしてしまうほど今のロレンはテンパっていた。だって大将である。元帥を除けば海軍最強の戦闘能力を誇る怪物たちである。トウヤから出会ったら絶対に逃げると言われた怪物たちである。覇気も覚え能力による攻撃のバリエーションも増えたとはいえロレンがもともと勝てるような相手ではないのだ。

そんな相手が全力かどうかはわからないがこちらを狙って攻撃を仕掛けてきているのだ。ビビるなというほうが無理な相談だろう。

しかし……

「く、くだらないポケとは何よ！！私はあなたの緊張を解きほぐしてあげよう……」

「余計なお世話……」

何やら反論してきたアリサに向かってどなり声をあげかけたロレンは気づいた。彼の服を握りしめて必死にしがみついているアリサの体が小刻みに震えていることに。

「……………」

そうだった。彼女は一度世界政府軍に襲われているのだ。無事に撃退できたとはいえ被害がなかったわけではないだろう。

大切な人が傷つくところを見たはずだ。大切な人が倒れるところを見たはずだ。大切な場所が焼かれるところを見たはずだ。そんな彼女が、その組織に所属する、自分ですらおびえるような怪物に、殺すつもりがなかったとはいえ攻撃を受けたのだ。アリサの恐怖はひとしおだろう。

「……………ああ、もう!!」

情けない自分に叱咤しながらロレンは能力の出力をさらに上げ砂漠に向かっていくつかの竜巻を解き放つ。

これは盗賊に村に案内してもらった際に彼が考えた砂漠限定の超攻撃技。

「『砂漠の暴風』!!」

そして立ち上がった七つの竜巻は砂漠の砂を吸い上げあたりにつき散らすように回転しながら黄猿と彼が率いる陸軍へと襲い掛かっ

た。

前にも説明したと思うが、砂漠の砂を含んだ竜巻は異常なまでに凶悪である。風によって高速で流動する砂は、まるで空中に巨大な鑢を作り出したかのような攻撃性を持ち、かなりの硬度があるものまで残虐に削り滅ぼすのだ。

当然それは人間とて例外ではない！

…
ナ…
ナ…
……………
ナ…
ナ…

「っ！！黄猿殿！！あの竜巻はまずい！！巻き込まれればわが軍が全滅します！！」

突如出現した七つの竜巻に動揺した声を上げる陸軍中将の声を聴きながら黄猿は頭をかいた。

「うん。足止めのつもりかなあ？僕がいることを見越しているのか遠慮ない攻撃を売ってくるねえ……でも」

通常の人間なら十分脅威になる攻撃だろう。だが、先ほどのレーザー攻撃を見たにはあまりにお粗末の攻撃だ。おそらくは黄猿が防ぐことができるだろうが、完全に防ぎ切るには少し手間がかかる攻撃を選択したのだろう。つまりは、殺す気のない攻撃。と、あたりをつけた黄猿は足に光を収束しながら感心したように笑う。

「やさしくねえ。でもお」

そして、彼は光り輝く足を蹴り上げるように古いレーザーを解き放った！！

あまのいわと
天岩戸。

巨大な直径を持つシャボンディの《ヤルキマンマングローブ》を

へし折るほどの凶悪な極光が七つの竜巻の直撃して爆発した！！

「「！！！」」

爆風によって竜巻がきれいに消し飛び、砂漠の砂が溶けるどころか跡形もなく消し飛ぶのを見て陸軍軍人たちはあんどりと口を開けたまま硬直する。

そんな彼らを見無視して黄猿は手元に光を集めてサークル状に固定した。

「戦闘でそんな甘い覚悟しかできないようじゃあ……誰かを守るなんて到底不可能だよ」

やたのかがみ
八咫鏡。

黄猿が高速で長距離を移動する際に使われるそれは普段のそれとは違い反射されないまま、まっすぐにロレン達の進路を阻むように伸びていく。

そして、黄猿はその場から姿をけし……。

…寸…寸…………寸…寸…

「だ、大丈夫なのあの人たち？」

「安心してください。手加減はきちんをしました。こつ見えても相手を殺さない程度に痛めつけるの得意なんですよ」

「一気に安心できなくなっただわ」

「ははは。そうですね？僕は安心しましたよ。あなたの震えが止まってみたいで」

「！！！」

竜巻に運ばれながらそんな軽口をたたくロレンにアリサは目を見開いた。

とても今までテンパっていた全物と一緒に人物とは思えないと……。

「アリサさん」

「なに？」

「申し訳ありませんでした……。僕があなたをさらったりしなかったらこんな怖い思いをさせることもなかったのに……」

「……いえ。今回は私も悪かったわ……。なんだか知らないけどあの人の言葉に反応したみたいだし……」

そこも含めて謝っているのだが、今は言っても仕方ないだろう。ただでさえかくまわれて育った彼女は世間知らずなのだ。ポーネグリフに関しては少しぐらい教えておくべきだった……。そんな後悔の念を押し隠しながらロレンは口元に不敵な笑みを浮かべた。

トウヤのまねをしているつもりなのだがうまく笑えているだろうか？

「でも安心してください。僕がいる限りあなたには指一本触れさせません！！！」

「ロレン……？」「

かなり似合わない表情でそんなことを言ってくるロレンにアリサは不思議そうな顔を向ける。しかし、ロレンはちよつとシヨックを受けてしまった自分を強靱な精神力で抑え込み、決め台詞を言った。

「僕は結構強いですから、あの程度の敵物の数ではありませんよ！」

「……嘘言いなさい。思いっきり逃げているじゃない」

「……」

トウヤさん。僕はあなたみたいにきれいに嘘をつくことはできないみたいです……。

別にいいことだとは思いますが今は嘘をつけない自分がにくい……。そんな風に落ち込むロレンに、アリサはクスリと笑い声をあげて、さらに強く、ロレンにしがみついた。

「でも……頼りにしている」

「……ありがとうございます」

アリサの言葉を聞きロレンは嬉しそうに笑い気を引き締めた。

なにも無理に戦う必要はない。このまま逃げ切れば僕たちの勝ちだ。いくら大将といえこの広大な砂漠の中から自分たちを探し出すことは不可能なはず。足止めの竜巻も配置した。これで逃げ切るこ
とができるはずだ……。

ロレンはそう思っていた……だが!!

ゴッ!!

到底自然界では鳴り響かないような轟音と共に、すさまじい衝撃波がロレン達を襲った!!

「!!」

「なんだ!？」

バランスが少し崩れ大きく揺れるロレンの体に悲鳴を上げてしがみつくとアリサ。しかし、飛行に慣れているロレンはそのこと自体には大して慌てた様子を見せず、その衝撃波の原因を見るために後ろを振り返った。

そして、彼は見てしまった。足止めのために配置しておいた竜巻がまるで、ミサイルの直撃でも食らったかのように爆発粉碎されているところを……。

「はあ!？」

思わずまの抜けた声音を上げるロレンの目の前に一条の光が横ぎ

った。そして！！

「ロレン！！」

「！？」

アリサの警告に慌てて前を向いたロレンに目に、空中で足を振り上げた怪物が入る！

「速さは重さ……光の速さでけられたことあるかい？」

瞬間！！光速で振り下ろされた蹴りがロレンの腹部を的確にとらえ、ロレンの体を砂漠へと叩き落とした！！

…
十…十…
………
十…十…

「ロレン！？ロレン！！」

ロレンが目を覚ました時、そこには涙でぐちゃぐちゃになった顔で彼の顔を覗き込んでいるアリサの顔があった。

「くっ……あいつは！？」

「動かないで！！さっきまですごい血を吐いていたのよ！！」

そういつてアリサはロレンを抑え込むために両肩に手を置いてくるが、ロレンはそれをはねのけ、太陽の位置を確認し時間を確かめようとす。しかし、そんな必要もなく……。

「なかなか根性あるねえきみい」

その言葉とともに黄猿が砂漠に降り立つのを見てとりあえず手遅れになる前に起きられたことは確認できた。

「無駄です……僕にあなたの攻撃はききません……」

こんな体たらくで大きくよなはったりではないが、今は少しでも時間がほしい。ロレンは血反吐を吐きながら不敵な笑みを浮かべ何とか砂漠に立ち上がり、右手に能力を使いこつそりと小さな渦を形成しとどめる。それを見ても眉一つ動かさず、間の抜けた声音で黄猿は右手に光を集めそれを剣のような形に整える。

「そうかなあ？確かに君の能力は鉄壁みたいだけどさっき覇気入りの蹴りを放つたら結構ダメージはいつたみたいだねえ。現に君は立ち上がるのでやつとでしょ？」

「なめてんじゃねえよボケザルが……」

ロレンはヴァイを手本に悪態を吐きながら、足に能力を行使しその周りに竜巻をまとわせる。

「覇気が使えろがお前だけだと思っな！！」

瞬間、竜巻によって加速された蹴りが黄猿の体をとらえ吹き飛ばす！！

「おおー！？」

「やっぱり！！」

黄猿の能力は全能力最速の攻撃速度を持つ《光速》。しかし、彼は常に光速で動けるわけではなさそうだ。トウヤもそこは予想していたように光になって移動するのに若干のタイムラグがある。

そのタイムラグを狙えば……。

「時間稼ぎぐらいはできますかねえ……」

ロレンはそうつぶやき左手に新しい竜巻を発生させそれをアリサに向かって放った！！

「なっ！？何をしてるのロレン！！」

「すみませんねえアリサさん……さっきのあのセリフ……反故にさせていただきます」

ロレンの言葉と同時に、竜巻はアリサを拾い上げ彼女を天体天空へと運び上げた。

「三十分ほどしたら砂漠のどこかに落ちますから、そしたら自分で逃げてください……僕はここまでみたいですので」

先ほどから腹部と胸がが焼けるように痛い。おそらく腹部のどこかの臓器と肺を損傷している。失血も多いのか若干体がふらついてしまうのがわかった。意識は……おそらく十数分もてばいいところだろう。光速の速さでけられてこの程度で済んだんだからむしろ行幸だろう。しかし、彼女を守ることは出来そうもなかった。

「ばっ！……ロレ……」

そんな怒声がかから聞こえてくるがやがてそれも遠のき、戦場にはロレンと黄猿だけが残った。

「おや」。彼女を逃がしたんだねえ。ずいぶんとがんばるねえ」

「当然だろうがクソツタレ。女を守るのが男の仕事だ」

気合を入れるためにヴァイのまねを続けながら、ロレンはゼフにもらった髪留めを使い髪をまとめ後ろに流。最近散髪をしていなかったため髪が伸びてしまっていた。ゼフは散髪嫌いの彼がゼフの手元から離れたら必ずこうなることを見越していたのだろう。まったく、あの人には頭が上がらない。

そんなことを考えながら、おそらくは自分の最初で最後の大勝負の相手になるであろう黄猿に向かって、ゼフ直伝の蹴りの構えを取りながら、ロレンは覚悟の宣言した。

「悪いがバカ猿……ここから先は行き止まりだ。通りたきや俺を殺して通りやがれ」

「いいよ。たいした壁じゃないからねえ。すぐにとおってあげるよ」

「やってみるよ……バカ猿がああああああああああああああああああああ
ああああ!」

気の抜けた声音で平然とロレンの覚悟を切って捨てた黄猿にむかい、竜巻をまとったロレンの蹴りが飛ぶ。

海軍最高戦力の閃光と暴風少年の竜巻が今激突した!!

41話（後書き）

いつの間にか1、009、121アクセス……。

評価はそんな変わっていないですけど^^；

この話が終わった時に記念の話をするかどうか迷っているんですが……どうでしょうか？ご意見いただけたら嬉しいです^^

42話

「螺旋脚^{トルネード}羊肉^{羊肉}ショット!」

竜巻によつて加速され、霸気によつて威力が底上げされた蹴りが、黄猿へと襲いかかる。しかし、

「八尺瓊勾玉^{やさかにのまがたま}」

黄猿の手から放たれた光の弾幕がロレンの体を貫き、彼を吹き飛ばす!」

「があ!」

ロレンは砂漠に着弾し、巨大な砂煙を上げ、あたりの視界を奪い取る。しかし、黄猿は攻撃の手を止めない。常人では考えられないほどの跳躍を行った黄猿は光の弾幕をさらに放ち続け砂煙が発生している部分全域を攻撃しロレンを抹殺しようとした。

「……頑張るねえ」

「当たり前だろうが……」

しかし、ロレンの能力は防御特化したベクトル変換。霸気を込めた螺旋の鎧でその攻撃をしのぎ切ったロレンは左手に竜巻を発生させ、砂煙を吹き飛ばす。

しかし、その体の各所からは大量の血が流れており、ロレンに服を真っ赤に染めていた。アリサがこの場から離れてから約数分。黄

猿をその間、自分ひきつけていた代償がこれだった。砂漠に飛び散る血の量は、ロレンの体が危険な状態にあることを如実に示している。そして、ロレン自身もそのことについてはよく理解していた。

あ、足が……これは本当に死んでしまいかもしれませんねえ……。

ふらつく足に気づいたロレンは苦笑をうかべながら自分の右手に意識を向ける。

ソロソロですか……。

「でも、次で最後だ……」

「ああ……そうみたいですな……」

今まで決してひかなかったロレンが、そういつて屈みこむのを見て黄猿は少し首をかしげた。

「おや〜？もうあの口調はいいのかい？」

「時間は十分に稼げましたから……。あとは……」

ロレンはそういつと、足に竜巻を発生させ、その力によってロケットのよう飛び出し黄猿へと一直線へ飛び出した！！

「あなたを殺して終わりです！！」

「お〜」

少し驚いたような顔で、黄猿はのんびりと回避をしようとする。

時間的にはぎりぎり間に合う。何より攻撃の動きが一直線すぎる。海軍大将にとってはよけることは造作ない攻撃……。

しかし!!!

「はあ!!！」

「!!！」

ロレンは自分の体の隣に巨大な竜巻を作成。飛行のルートを、黄猿が体をそらした方向に進路を捻じ曲げた!!!

「あいにくと、僕の能力は飛行能力にも優れているんですよ!!！」

「おや〜。そのセリフにはすごいびっくりだよ〜」

「？」

そんなわけのわからないことを言う黄猿に、ロレンの右手は突き刺さった!!!

あの螺旋丸には現在ロレンが込めることができる武装色覇気を限界ギリギリの密度になるまで詰め込んでいる。流石の黄猿でも無事ではないはずだ。

しかし、ロレンの意識は最後の最後を見届けることができるほど余裕があるわけではなかった。

「あ………れ？」

勝手に落ちようとするまぶたに、必死に抵抗を試みるロレンだったがもう彼の体は出血多量、臓器破損などで限界だった。これ以上意識を保つことは医学的にも生物学的にも無理な話だった。

まあ、いつか……。アリスさんは逃げる事ができたみたいだし………もう少しぐらい休憩してもいいですよね。

ロレンは最後にそう思って笑みを浮かべた後、意識を手放し死んだように眠りにつくのだった。

…
…
…
…
…
…
…
…

死んだように倒れ秘したロレンを見下ろし、黄猿は特に何の感慨も見せずにロレンに背を向けた。

「いやゝ。少し驚いたねえ……。わっちがロギアじゃなかったらま
ず間違いなく死んでいたよゝ」

そういう黄猿の額からは若干の血が流れ出ていた。

……被害はたったのそれだけだった。覇気の練りこみが甘かったのか、ロギアの耐久性が異常だったのかはわからないがロレンの攻撃は黄猿に届かなかったのだ。

42話(後書き)

リアルサイドが忙しくなったのでしばらく更新が止まりそうです。

八月になったら復帰しますので気長にお待ちください^^;

43話

砂漠に大爆発が起きてから数十秒後。ピクリとも動かないロレンを見下ろしながら、黄色いスーツを着た人物……海軍大將は黄猿はぽつりとつぶやいた。

「いや〜。なかなか骨のある奴だったね〜。でも〜あまり賢くはなかったみたいだ〜。麦羹の一味だって逃げることを選択したっていうのに〜」

惜しいね〜。

そんなことをつぶやきながら黄猿は踵を返した。まだロレンの息はあったがあいにくと、死に体の人間にさらに追い打ちをかけるほど、彼は人間をやめてはいはない。赤犬辺りだったら殺したのかもしれないが……。

「まあ、どっちにしる助かるすべはないでしょう〜。内臓破裂数か所に出血多量って……今まで生きて立っていたほうが不思議なくらいだよ〜」

少なくとも現代医療で助かるすべなど存在しない。あのドクターベガパンクや、天才医ドクトル・ホグバツク……そして、奇跡の人エンポリオ・イワンコフですら治すことは不可能だろう。

「まあ、そういうわけだから……さようなら少年」

黄猿はそう言って、手首に巻いた小型電伝虫に話しかけた。

「もしも〜し。こちら黄猿〜。そっちは女の子みつかった〜?」

そう、黄猿はロレンと戦っている間陸軍たちに少女の搜索を命じていたのだ。

彼には悪いけど……これも仕事でねえ〜。

そんなことを内心でうそぶきながら、能力を使い手元に光を集めていく黄猿。とりあえず適当に飛んで陸軍たちを探す予定なのだが……。

『そんなことはこっちが聞きたいんだけど……大将殿?』

「おや〜?」

聞いたことがない女性の声が伝電虫から響き渡り、黄猿は思わず首をかしげた。

「だれだいきみは〜?」

『陸上最強の賞金首とだけ言っておこうか?』

…十…十…十…十…十…十…

同時刻……名もなき寒村にて。

『これがこの国にあるポーネグリフか……。ロビンなんて書いてあるかわかるか？』

『ちょっとまって……。このテレビ電話ってみにくいのね……。詳細なデータがほしいわ。手間をかけるけど写真を撮ってこっちに送ってくれないかしら？』

「わかったわ」

そういつてポーネグリフを調べていくサーシャと電話の向こう側の人物たちに、村長はいら立ちの声を上げた。

「あんたたち！！この村に攻めてくる海軍をどうにかしてくれるんじゃないのか！！」

『ああ、それに関しては違う布石を打ってあるから安心しろ。その効果が表れるまでしばらく暇だからこっちの調査に来ているんだ……』

そんなことを嘯きながらトウヤは電話の向こうで頭脳を高速回転させていた。

今のところ海軍に身分を明かしているのはリリカ・ヴァイ・ロレンの三人。この三人はいずれ頂上戦争でトウヤの仲間として紹介する予定なので、今の段階ではばれてしまったとしてもたいした痛手にはならないのだ。しかし、それ以外の仲間が身分を明かしてしまうとハンターズとのつながりが白日の下にさらされてしまう可能性がある。今の段階でそれがばれてしまうと世界政府がうるさく何か言ってくる可能性があるし、革命軍とのつながりがばれてしまえばその時点でゲームオーバー。トウヤの今までの苦労はあっさりと水泡に帰すだろう。だから今の段階ではセロとサーシャはまだごまかしがきく遺跡内へと退避させ、リリカとヴァイを砂漠へと向かわせ、トウヤが黄猿との交渉のために最近開発した『テレパシー能力者を使った通信機械』を持たせた。つまり、今は黄猿発見の連絡待ちなのだ。

（幸い今回の援助の申し出で契約書の回収は完了した。セロについては……かなり苦しい言い訳だが突如用事ができて帰ったというこ

とにしておくか。幸い、あいつはちゃんとハンターズとして活動するのは今回が初めてだし……まだなんとかごまかせるはずだ。問題はロレンのほうだな。行方不明だって聞いたがそっちに人員をさく余裕はない……セロー一人で捜索させて黄猿にばったりなんてことになったら目も当てられないし……。黄猿を探すついでに捜索するようにリリカ達に言っておくか？)

トウヤが内心でそんなことを考え、もう一つの携帯電話(仮)の電源を入れようとした時だ。

「た、大変です!!」

そんなことを言いながら村の青年が一人遺跡の中に転がり込んできた。

「どうしたのじゃ!？」

「で、デビルさんが……」

息を切らしながら必死に何かを伝えようとする青年に、トウヤはなんだか嫌な予感を感じ即座に携帯電話の電源を入れてリリカに渡した電話の番号をプッシュする。

「デビルさんが……もう待てないといって、砂漠に!!」

『リリカ、バカが一人そっちに行った!!黄猿と交戦始める前になんとしてでも見つけ出してぶん殴ってでもとめる!!』

遺跡の中がにわかに騒がしくなり、トウヤは苛立たしげにリリカとの通話を切るのだった。

44話

灼熱の砂漠の中を一人の少女がひた走っていた。

その衣服は乱れ、ぼろぼろになってしまっている。まるで砂嵐に巻き込まれたかのようだ。

「あの、バカ！！バカ！！バカ！！バカッ！！どうして、会ってそんなに経っていない私なんかのために……あんな危険な真似してるのよ！！！」

目元に浮かぶ涙をぬぐい、砂漠に取られそうになる足を必死に動かし、少女は激震が走る砂漠の一角へとひた走る。

「はあはあはあ……待ってなさいよロレン。あなたには言いたいことが山ほどあるんだから……死んでたりしたら承知しないんだから！！！」

しかし、少女言葉は無残にも、命がけで自分を守ってくれた少年には届かなかった。なぜなら……。

「おい！！あれ、あの餓鬼が飛ばした少女じゃないか？」

「！！！」

突然予想だにしていなかったところから聞こえてきた声に、少女は慌ててその方向を向く。そして、少女は見つかってしまった。ラクダに乗った二人の陸軍軍人に……。

「やっぱりそうだ！！捕まえる！！」

「ひっ！？」

砂漠の風になびく正義の白いコート……。それを見て少女は明らかにおびえた態度を見せその場から足をもつれさせながら逃げ出す。しかし、人の足が砂漠を移動することに特化したラクダの足にかなうわけもなく……。

「捕まえた！！」

「もう逃がさんぞ小娘！！」

「いや、離してっ！離してっ！！」

ラクダの上から軍人に捕まえられた少女は必死になって暴れるが相手は腐っても軍人。その程度で離すような柔な鍛え方はしていなかった。

「おい……さつさといくぞ。ボルサリーノ大将に報告だ……電伝虫は中將殿が持つて行ったからな」

「ったく。下っ端は足で働けってか。人使いが荒いぜ……」

ギヤーギヤーわめく少女をぐるぐる巻きに縛った後、二人の軍人はラクダの首を激戦区へと向け、黄猿に報告をするために急いで走り出すのだった。

…
十…
十…
十…
十…
十…
十…
十…

「………………。陸上最強の賞金首い〜？ああ、《睡魔》のデビルか〜。こ〜んなところにな〜にしてるの〜？」

電伝虫から聞こえてきた声に黄猿は少し、沈黙した後、即座にい

つもの口調に戻した。内心はどうか知らないが、少なくとも今の黄猿には慌てた様子は見受けられない。陸上最強では海軍大将を揺るがすにはいささか威力不足だったのだろう。

しかし、電伝虫越しに黄猿に話しかけるデビルは一切ひるんだ様子もなく、黄猿を笑う。

『ここは俺たちの縄張りだけ黄猿さんよお。勝手に土足で踏み込んできたのはあんただ』

「おやく。そうだったのかい？これはすまないことをしたねえ。おわびにいますぐつかまえにいつてあげようか？」

間延びした口調のまま、黄猿はおつくうそうに身をひるがえした。相手が犯罪者の場合、電伝虫を奪われた連中が無事かどうか確かめる必要がある。十中八九命を取られているだろうが、死亡したならあとで上に報告しないといけないのだ。そのため、死体が砂漠の砂に埋もれられたりしたら確認がかなり厄介だ。

そんなことを考えながら、黄猿は能力を発動しその場から離れようとした。その時！！

「どこ行く気だよクサレザル！！」

「ん？」

光になりかけていた黄猿の体をかすめるようにZ型の光線が、砂漠を走り抜けた！！

「光線系……パラミシアだねえ？」

「くそ……外したか!!」

瞬間、砂漠に紛れるような保護色が使われていた布がはねのけられ、中から大量の盗賊たちが姿を現した!!

「野郎ども、あの小僧をこっちに連れてこい!!聞きたいことや言いたい文句は山ほどあるんだ、絶対に死なせるな!!」

それだけ指示を出したデビルは大きく跳躍。空中でバク天をかました後黄猿の目の前に降り立った!!

「さあてクサレザル。疲れているだろうが第二ラウンドだ。俺はあの小僧みたいにはいかないぞ?」

「弱い奴は大半そういうんだよ?」

「抜かせ!!」

デビルは怒声を上げると同時に、手元に力をため込みロレンに放とうとしていたあのエネルギー球を発生させた!!

「スリープガルド
幻想郷!!」

突如、砂漠は緑色の閃光に包まれあたり一帯を包み込んだ!!その光の中心には、まるで卵のような球形になり薄緑色に輝く膜がある。

「俺の能力は光線系パラミシアの中で最も高い干渉力を持つ『ネルネルの実』。俺の光線に貫かれたものはみんな強烈な眠気に襲われ

スリープガルド
て眠っちまうんだよ。幻想郷はその強化版だ。ネルネルエネルギーを球体状に発生させて相手を捕まえる。そして捕まえた相手を永久の眠りにいざなう……」

「あくまで当たればだろ？あいにくとそんなに遅くつちやわつちに充てることはとうてい無理だよ」

「どっかな？」

手元に緑の光をためるデビルと、指先を光らせる黄猿。海軍大將との三度目のたたきが今切って落とされた。

…
+
…
+
…
+
…
+
…
+
…

北の海海上のハンターズ本船。つまりはトウヤの私有船にて……。

「トウヤ……八つ当たりしても事態は好転しないわ」

いらだち交じりに電話を床に叩き付けるトウヤを見てロビンはうるさそうに眉をしかめて、電話を拾う。この電話という機械……頂上戦争であることをするために、ハンターズが極秘裏に行った超能力開発で《念話》^{テレパシー}に目覚めた能力者たちの能力を解析して作り上げた電伝虫に代わる通信手段だ。電伝虫よりも遠距離の会話が可能で、黒電伝虫（盗聴用）に盗聴される可能性も低く、そしてなにより《編集》《電伝虫の念話への割り込み》ができる利便性の高いものである。頂上戦争がひと段落したら一般市場にも流す予定らしい。

「わかってる……。だが俺だって人間だ。ほんの少しぐらいのやつあたりぐらい目を瞑れ」

不機嫌な表情のまま椅子に座り込み、頭を高速回転させていくトウヤを見知らぬ美女（40代後半ぐらいの）が鼻を鳴らし一蹴する。

「ふん。ガキがガタガタ抜かしてるんじゃないよ。高々ボルサリーノ一匹ぐらいでそんなに騒ぐんじゃない」

「もと《黄猿》だったあなただから言えるセリフでござるなあ……。というか年齢的にはあっちのほうが先輩でござるつ」

「残念なことに年功序列じゃないんだよ海軍は……。階級絶対主義の縦社会なのさ。まあ、それが嫌になったから脱走したんだけどね」

エイゼンの言葉に肩をすくめる美女に、ため息をつきながらトウヤは頭を抱える。

「そんな話はどうでもいい。俺が苛立っているのは戦力的不利にじゃない。あっちにはリリカが行っている。あいつが向こうにいる限り敗北は絶対にある。たとえ白ひげを相手取ってもあっさり勝ちを拾ってくる女だ、あいつは……」

「それはなんて化け物なんだい？」

「話の腰をいちいちおるな、ヘイゼル。問題なのは二回目の戦闘行為を行うことだ！一回目ならまだ勘違いで惜しいとおせたかもしれないが二回目ともなるとかばいきれん。リリカに連絡して交渉を行う前にデビルのバカが戦闘を行った理由をこっちに上げさせる……」。

もしかばいきれないような理由だったらあの盗賊団は切り捨てるぞ」

最後に冷たく言い放ち、トウヤは煙草に火をつけ大きく息を吐くのだった。そして、彼は今朝届けられた朝刊の記事に目を通しさらにため息をつく。

『火拳のエース捕まる！？公開処刑まであとわずか！！』

「頂上戦争が近いっていうのに……こんなところで躓いているわけにはいかないんだよ」

…
十…
十…

向かい合う二人の最強。陸上最強の賞金首……デビル・プーラン。海軍最強戦力……海軍大将黄猿。無言でにらみ合う二人の間には不可視の圧力がギリギリと掛けられており、見ている者たちには、空気そのものが威圧感をもってビリビリと震えているような錯覚を覚えさせる。

「あまのいわと
天岩戸！」

戦端を切り開いたのは黄猿だった。光速で振り抜かれた蹴りがレーザーを放ち一直線にデビルに向かっていく！！

しかし、デビルは仮にも陸上最強の賞金首だ。その程度の攻撃はよんでいたのか、即座にその場から飛びのきながら右手からZ型のエネルギーを作り出す！！

「食らいやがれ！！エネルギー散弾！！」

バックショット

瞬間、右手にたまったエネルギー塊が破裂し、中から数千にも上る小さなZ型の光線が飛び出し黄猿のレーザーを迎撃した！！

黄猿のレーザーを穴だらけにし無効化した後、残った散弾たちは、砂漠を直撃し衝撃をまき散らす。それによって巻き上がった砂煙があたり一面を覆い隠してしまった。

「なかなかいい攻撃だね。でも、それじゃあわつちには届かないよ？」

砂煙から聞こえてくる声に、デビルは額に汗を浮かべながら不敵な笑みを返す。

「はっ！！そんなことは、はなから承知しているぜ。だがこれならどうだ？」

デビルはそういうと、今度は両手にエネルギーを作り出しそれを手を合わせるようにして合体させる。そして作り上げられたのは巨大なZ型の何か……。

「ネルネル^{フイメラン}回歸刃……麻酔効果が付与された俺の近接戦闘用に武器だ」

砂漠にそれをつけ、ズルズルと引きずりながら砂煙へと歩みを進めるデビルに砂煙に隠れて姿が見えない黄猿は返事をしない。しかし、デビルは余裕をもって言葉を続ける。なぜなら、彼女の持つ光線系の超人は、通常の超人系にはない特典を持っているからだ。

「ロギアにも毒は効くらしいな？つまりお前たちロギアは状態異常系の攻撃を無効化することはできないということだ。ボアハンコックが七武海に名を連ねているのもそこらへんが大きな理由なんだろう？」

そういいながら、まるで砂煙の中が見えているかのようにある一点に向かって手に持っていたブーメランを投げつけた!!

「つまり……俺の攻撃が当たればあんたはきちんと眠ってくれるというわけだ!!」

「あまのむらぐせ天叢雲剣!!」

その時、黄猿の声に若干の揺れが生じ彼は積極的に自身から迎撃態勢を取った。

ゼット型の飛ぶ刃を自分の光の剣で迎撃しそれを弾き返したのだ!!

ロレンの攻撃を受けても平然としていた男が初めて、攻撃を喰らうことを回避した。その行動はロギアにはあるまじき行為……つまり、デビルの仮説が正しかったという証明に他ならない。

「驚いたねえ。海以外にも化け物はあるものだ」

「海水につかっている奴だけが最強だなんて、愉快的勘違いしてんじやねえぞ……」

黄猿に弾き飛ばされ空中をクルクルと回転しながら戻ってきた、飛ぶ刃を片手で受け止め、デビルは再び構えとる。

「そのセリフどこかで聞いた気がするよ」

砂煙を能力でふきとばしながら、黄猿が再び攻撃を開始しようと

指を突き出したその時だった！！

「「黄猿殿おおおおおおおおおおお！」「」

突然、戦場に二人の男の音が響き渡った。

……十……十……十……十……十……

黄猿は少し驚いた表情になりながらラクダに乗って駆け寄ってくる二人の軍人を見つめた。その方にはぐるぐる巻きにされながらもなお逃れるために暴れている一人の少女の姿……。

まさかほんとに見つけてくるとはねえ。この広い砂漠のどこに飛ばされたのかもわからないんだから正直期待していなかったんだけどね。

思わぬ収穫に、肩をすくめながら黄猿は今の相手に向き直る。とにかく今は戦闘中……しかもかなり油断のならない能力者である少女が見つかったからといって注意力を乱していい敵ではなかった。

「ん？」

しかし、相手のほうは違ったようだ。デビルは愕然とした表情で少女を見つめたまま固まってしまっていた。

「まさか……そんな！？あの餓鬼が命がけで守ったんじゃないのか！？」

「おーい？」

間延びした口調で黄猿はそう呼びかけてみるが、返事がない……。黄猿はしばらく待ってみたが、微動だにしないデビルに頭をかいた後、両手の指を輪の形にして天高く飛びあがる！

「!!！」

そこでようやく正気に戻った、デビルが慌てて手にエネルギーをためるが……。

「遅いよ。八尺瓊勾玉」やさかにのまがたま

その手から放出された光の連弾が、デビルが立っていた砂漠につきたち無数の爆発を引き起こした!!

「コッコッコッ、あ、あにきいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!」

「だ、団長さん!？」

爆風にのまれるデビルを見て悲鳴を上げる、盗賊団たちとアリサ。それを見て黄猿はようやく合点がいったとばかりに手をポンとたたいた。

「ああ。なるほど。御嬢さんと《睡魔》知り合いだったんだ。惜しいことをしかもね。捕まえた尋問すれば何か聞き出せたかもしれないのに」

「あんたつ!!」

憎しみがこもった視線を向けてくるアリサに、苦笑をうかべながら黄猿は盗賊団たちに背中を向けた。爆炎が上がる中にツッコんでいた彼らは無数の爆風にのまれて重傷を負ってしまったデビルを引きずり何とかロレンを治療しているところまで彼女の体を運んでいた。

「うん。あれじゃ死亡は確定でしょう。あとで報告しておかないとねえ」

黄猿の言葉にありさの顔がさつと青ざめた。そしてぼろぼろになったロレンを見つけて、さらに顔色は悪くなる。

「そんな……うそ……いやあああああああああ！！」

顔色は青を通り越して真っ白になり、悲鳴を上げるアリサを見ても黄猿はいつもの雰囲気のまま揺るがぬ態度で、歩き出す。

「さうて。早く訊問しないと。火拳の処刑に間に合わなくなっちゃうよ」

黄猿のその言葉を聞き、軍人二人は悲鳴を上げるアリサを手刀で気絶させた後、抱え直し黄猿の後に続いた。

こうして、砂漠の戦闘は黄猿の圧倒的勝利で幕を閉じた……。

…
寸…寸…
寸…寸…
寸…寸…
寸…寸…
寸…寸…

「右三十二度・下四度です」
「間違っていないだろうな？」

「ええ。間違っていますよ……。ですが本当にいいのですか？よみがえらせるのはあいつで……」

「ふん。私がロレンにかけるといついった？」

「じゃあどうして……」

「私は《D》の名前にかけるんだよ……」

黄猿が二人の敵と戦った激戦地から少し離れた場所で、ぼこぼこにされた陸軍軍人たちが積み上げられ小高い丘を作っている。

その上には、腹這いになりライフルを構える美女と、めんどくさそうに双眼鏡のを覗く男が立っていた。

「さあて……第二ラウンドだ。クソガキ」

美女は凶悪に笑った後ライフルの引き金を引き弾丸を送り出した。銃口から飛び出した弾丸は二発。

その二発は狙いたがわず一人の人物につき立った。その人物とは、虫の息で盗賊たちから治療を受けているロレン。

一発は脳天をぶち抜き顔の原型が残らないくらいに倒れていたロレンの頭を粉碎し、もう一発はロレンの心臓に打ち込まれ術式を発動。ロレンの体を見る見るうちに復活させていく！！

「私たちがつくまでの時間稼ぎぐらいはしてみせるよ……最弱」

美女……リリカはそういったあと、いつものように男……ヴァイの背中を平手でたたき自分を抱えるように促した。

ヴァイはちよつとだけ嬉しそうに笑いながらリリカをお姫様抱っこし（問答無用で一発ぶん殴られたが……）黄猿たちが立っている戦場に一分一秒でも早く着くために全力疾走を開始した。

44話（後書き）

難産……。

この対黄猿連はここまで長く予定ではなかったのだから、書きにくいです。ノリで何でもかんでも話ツッコむものじゃないです……。收拾がつかなくなってきた感じがします。

次回で終わらせます。

あと、頂上戦争のフラグを立てましたが、実はトウヤがこの黄猿戦の時に何をしていたかという話もなく予定なので、まだまだ行くには時間がかかりそうです。

その話には《ヤハヤハ》笑う人に登場してもらおう予定ですので、よかったら温かい目で見守ってください。

45話

眠るロレンの頭の中で声が響き渡る。

よく知っている……しかし、本当はあまり知らないそんな知り合
いの声。

彼女について持っている情報は……仲間であること。基本的に傍
観に徹していること。お供の自称吸血鬼が大嫌いだということ。そ
して……魔法使いだということ。

「まったく。これほど雑魚だとは……。大将ぐらい一人で退けるぐ
らいのことはして見せる」

『無茶を言わないでください……』

頭の中に響き渡る声に、ロレンは苦笑をつかべながらそういいか
えした。しかし、声は聞いてはくれない。どうやら一方的にメッセ
ージを送ってきているだけのようだ。

「まあ、お前は私たちの中で最も力が弱い存在だからな。仕方ない
といえば仕方ないのだが……」

『そう思うのなら、文句を言わないでくださいよ……』

「だから……」

『はい?』

「少し甘やかしてやる」

『どっぴいっぴみでっ』

「そういう意味だ。察しろバカ。お前に再びのチャンスをやるといつているのだ。だから……今度は……きっちりと守って見せる」

そして、ロレンは目を覚ました。

…ナ…ナ…ナ…ナ…ナ…ナ…ナ…

一発の弾丸で一瞬に頭を吹き飛ばされ、そしてもう一発の弾丸で見る見るうちに傷口が回復していくロレンを見て、盗賊団たちは啞然とした。

ネクロマンシード
死霊呪術を極めたりリカは死んだ人間を五秒以内ならよみがえらせることができる。だからリカは虫の息が残っていたロレンの命をいったん刈り取り、間髪入れずに蘇生弾を撃ち込んだ。そうすることによってロレンの瀕死の傷を癒したのだ。

しかし、今回リカが撃ち込んだ弾丸はただの弾丸ではない。

「……………」

ムクリと起き上がった、ロレンは虚ろな目で周りを見つめ、そして見つけた。気絶したアリサを担ぎ戦場から去ろうとしている、三人の人影を……………」

「……………」

ロレンは無言のまま立ち上がった後、すつと息を吸い込み、そして……………」

「その女に……………さわるなああああああああああああああ

あああああああああ！！」

すさまじい怒声を上げ、そして覇気をまき散らした！！

「!?!」

それに反応できたのはその場にいた人間では黄猿だけ。ほかの人間は……。

「……………!!」

圧倒的は覇気にのまれてしまい次々と気絶してしまった。

自分の隣を歩いていた軍人たちが気絶し倒れるのを見て、黄猿は目を細めた。

まぎれもなく……霸王色の覇気。

「これは驚いた……いったいなものかい？」

黄猿はそういいながら、指先に貯めた光をロレンに向かって解き放った。

どうしてよみがえった？なぜ動ける？疑問は尽きないが、そんなことを考察するよりもまず最初に、黄猿はロレンを殺害することを選択した。霸王色の覇気を使う人物は、それが敵方にいるというだけでかなりの危険度を持っていることになる。それを持っているだけで懸賞金がかけられるほどだ。何せあれは王の資質。世界の頂点に立つ可能性がある人物が持つ、覇気の最高峰なのだから……。

政府に対する危険度は計り知れない。

しかし、ロレンはその光に……反応し迎撃した！！

武装色覇気を極限まで練りこみ変色した右腕を使い、黄猿のレーザーを殴り飛ばしその進路をそらしたのだ！！

「おゝ？なんだいまの？」

少なくとも今までのロレンが使えた戦闘法ではない。よみがえってつよくなつたとかあゝ？

そんな埒もないことを考える自分を、笑いながら黄猿は指で輪をつくり、無数の光の弾丸を撃ち込もうと天高く飛び上がった。

しかし、

「シネ……」

次の瞬間、黄猿はわけのわからないまま殴りつけられ砂漠に叩き付けられていた。

「な！？」

初めて動揺を浮かべる黄猿。そして、彼が見上げた先にいたのは……長い牙を口から除かせ、瞳を真紅に変色させた、変わり果てたロレンの姿……。綺麗にまとめられた銀髪をなびかせながら彼は天空から落下を開始しているところだった。どうやら、先ほど立っていたところから脚力のみで、飛び上がった黄猿まで弾丸のように飛来して、黄猿を殴り落としたようだ。その右手はいまだに覇気に

「ぐああああああああああああああああああああ！！」

「くう〜。きくねえ〜」

咆哮を上げるロレンと、減らず口をたたき黄猿。彼らの激突はそれだけで衝撃をつみ、天をかち割った！！

…十…十…十…十…十…十…

「あいつに、何打ち込んだんですかマスター……」

まるで四皇同士の激突が起こったかのようにかち割れる天空を見上げながら爆走するヴァイはリリカに尋ねた。

戦場までの距離は狙撃地点から大体十キロといつかかなりの長距離。いくら吸血鬼真祖のヴァイとはいえ到着するにはそれなりの時間がかかるのだ。

「なに。あの大将に勝てるように作り上げた新しい弾丸だ。《リビングデット》という弾丸でな。殺した人間に、お前の能力の一部と覇氣の操作能力の向上、魔王色覇氣を一度だけ使える……といった特典を与えて操る弾丸だ。正直安全性の実験は一切していないうえに、発動している間は悪魔の実の能力者は悪魔の実の能力を一切使えなくなるというデメリットがあるのだが……うまく働いてくれているようだ」

おそろくロレンが黄猿を殴りつけたのだろう。津波のように天高く跳ね上がる砂漠の砂を見てヴァイは眉をしかめた。

「人間が使っていい力じゃないですよあれ……」

「知らんな、そんなことは。それに……最弱が大将に勝つためにはあれくらいやらないと勝てないだろう？」

「何らかの副作用があるのでは？」

「あるのだろうか……使ったのは今回が初めてだ。何が起こっているのかは私にもわからん。だからさっさと走れ愚図が。黄猿……もしくはロレンの死亡なんてことになったらもはや收拾がつかない。あの小僧と黄猿が真剣な殺し合いを始める前に間に入って仲裁をする必要がある」

そんな会話を交わしながら、ハンターズ最強は戦場へとひた走る。

…
十…
十…
十…
十…
十…
十…
十…
十…
十…

巻き上がる砂煙の中から二人の人物が飛び出してくる。

一人は光になりながらの光速移動。もう一人は衝撃波をまき散らしながらの音速移動。片方は黄猿で、もう一人はロレンである。

ロレンは与えられた吸血鬼のバカみたいな脚力を利用し力任せにこの速度を出しているのだ。当然そんな無茶をして人体が持つはずもなかったが、それも与えられた吸血鬼の再生能力がカバーしており、壊れた人体を瞬時に回復させていく。

しかし、所詮はそれでも音速。黄猿の速さにはかなうべくもなく、次々と放たれる光の弾丸をロレンは無防備に受け続けていた。

「これは少し驚いたねえ……この状態になったのは久しぶりだよ」
そういつて人の形になった黄猿はうつすらと輝いている。常時光化……技の名前を《素^す襲^{しゆ}鳴^{めい}》という。

エースや赤犬が常に炎やマグマをまとっているように、黄猿もその気になればこのくらいのことではできる。特典としてはためなしでの光速移動。つまり黄猿はこの世界最速の速さを完全に手に入れることができたのだ。

「GYA!？」

「塵気楼って言葉を知っているかな？」

瞬間、いつの間にか実体に戻っていた黄猿がロレンの隣に出現し光速の蹴りをロレンの頭に叩き込んだ！！

「!?!」

悲鳴も上げられず吹き飛ばすロレンをしり目に、黄猿はのんびりと笑いながら説明を開始する。

「ちょっと前に、光についての復習をしてねえ。自分でもできないかと思つてやってみただけど……案外うまくいくものだね。」

いわく光の屈折。リリカに教えられたそのことを黄猿は応用した。自分が発する光を屈折させロレンに砂漠特有の光学現象《塵気楼》を見せ、自分のいる位置を誤認させたのだ！

「まゝたべガパンクに実験に協力しろつていわれそうだね。まあ、べつにいいけど。」

自ら発した光すら捻じ曲げることに成功した黄猿。

まさかこんなところで自分の能力を強化できるとは思わなかったよ。

そんなことを考えながら黄猿は、ロレンにとどめを刺すべく近づいていく。しかし、彼はこの時うっかりと失念していることがあった。

それは……。

「UGYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!」

「!?!」

今のロレンは吸血鬼並みの回復力を誇っているということである。

「おゝこれはしまった」

砂煙の中から飛び出してきて、ロレンの変色した拳を顔に受けてしまう黄猿!!

しかし、ロレンのこぶしはそのまま光となった黄猿を貫通し、黄猿はそのまま何事もなかったかのように元の姿に戻った。

「あれ?」

何事もないことを不思議に思った黄猿だったが、何かの失敗と考え光になってロレンから距離を取ろうとした。しかし、

「!?!」

その時彼は気づいてしまった。彼の体の中から悪魔の実の力が消えていつているのを!!

「!?!」

今まで感じたことがない異常事態に愕然とする黄猿。しかし、理

性を失ってまで黄猿を倒そうとしていたロレンがそんな隙を見逃すはずがなく、黄猿は再び振るわれたロレンの拳を腹に受け、大量の血を吐き出しながら吹き飛んだ！！

実は、ロレンは黄猿を殴りつける瞬間手に込めていた覇気を、《武装色》から《魔王色》《魔力》に切り替えたのだ。それによって、リリカによって蹴撃を受けた黒ひげと同じように、黄猿は能力を一定時間失った。そして、ただの人間になった彼はロレンのこぶしをもろに受ける結果となったのだ。

「これは……まいったねえ」

普通の人間のようにダメージを受けた自分に少し驚きながらも、黄猿はそれでも態度を変えることはなかった。しかし、さすがに白ひげと同威力のこぶしを喰らって無事なはずもなく、立ち上がることもできないまま黄猿はこちらに近づいてくるロレンを見つめた。

「こんなところで死ぬなんてね。いやはや油断大敵だね」

黄猿はそんなことを言いながら、懐から拳銃を取り出した。彼は仮にも海軍大将なのだ。死ぬにしてもせめてロレンだけは道連れにしよう。

そう覚悟を決めて黄猿が銃の照準をロレンの頭に合わせた時だった。

「はい、そこまで」

「この戦いは終了だ」

突如、黄猿とロレンの間に二人の人影が飛来し砂漠の砂を巻き上げた。

…
…
…
…
…
…
…
…
…
…
…

そこからはまさしく神速とっていいほどの素早さで事態は収束していった。二人の人影は男女のペア。そして男のほうは黄猿から拳銃を取り上げその首筋に手刀を打ち込み彼の意識を刈り取り、女のほうは暴走気味にとびかかってくるロレンを、両手に持った拳銃でいなし、転ばせた後三発の弾丸を叩き込みロレンの吸血鬼化を解き気絶させる。

「まさか理性を失うとは……《リビングデット》と《蘇生弾》の組み合わせはしてはいけないな」

新しく試した術式の考察をメモに書き記しながらロレンを担ぎ上げる女性……リリカ。

「そんなことよりもこの後どうするんですか？」

そういいながら、黄猿から血をすいとり、万が一にも運んでいる最中に目覚めないようにする男……ヴァイ。ようやく戦場に到着した彼らにはあっさりと漁夫の利を奪いこの戦争を終結させた。

「あの盗賊団たちからも話を聞きたい。黄猿たちにもようがあるしな。軍人たちはポロポロにしたから村で暴れることはないだろうから村に連れて行くぞ。話と交渉はそこでしてもらおう。さっき拾った女の子も村で保護してもらえらるだろう」

「それ全部おれにやれと？」

「私は革命軍の様子も見に行かないといけないから……。なんだ？不服か」

「いいえ。承りました、マイマスター」

こうして、砂漠を舞台に行われた両者ともに命を懸けた真剣勝負は、あっさりと、あっけなく、無残なほど造作なく二人の怪物によって終結させられた。

45話(後書き)

おわんなかったーT T

つ、次の交渉編で最後です!!

46話

砂漠の大戦闘から二時間後。

黄猿は目を覚ました……。

「ここはどこだろうね」

間延びした声で、そんなことを呟く黄猿に彼の傍らに置かれていた薄い板状の何かが光る。

『お目覚めかな？黄猿殿』

「こんなところで君の声を聴くとはねえ。少し驚いたよ」

『そんなに驚くことではないと思うが？仮にも俺は裏王下七武海だ。ポーネグリフのあるところにその影があるといっても過言ではない』

板の光は像を結び映像を映し出す。そして、その映像は人の顔となり、黄猿に話しかけた。黄猿はこの人物を知っている。というか、しばらく前に世界政府を手玉に取ったことで海軍本部から警戒するように厳戒令が出された人物だ。

裏王下七武海。イササギ・トウヤ。この世界唯一ポーネグリフの解読を許された人物。

そんなことを考えながら警戒する黄猿を観察したトウヤは、黄猿に聞こえないように小さく舌打ちした。折れた右腕をギブスで覆った黄猿。……目立った外傷はそれだけの彼に、トウヤは少しだけ眉

をしかめた。

海軍大将……どこまで規格外だ。これは頂上戦争のときはかなり苦勞しそうだ……。

内心でそんなことを考えながら、トウヤは一切の表情を動かさず交渉を続ける。

「それにしてもこれはいったいなんだい？映像を附属して通信を行うなんて聞いたことのない技術だよ」

『俺の故郷では映像付属はすいぶん古い技術なんだがな。まあ、企業秘密とだけ答えさせてもらおうか。こつみても秘密が多くてね。それに……今はそんな話はどうでもいいだろう？今重要なのはこの戦いをどこで手打ちにするかだ』

それもそうだね。あいかわらず内心を映さない間延びした声音で黄猿はその言葉に賛同した。先ほどの戦闘では状況が見えなかつたためとりあえず世界政府の視点で敵を撃退してきたが、七武海（裏）がかかわってくると話は違ってくる。

仮にも彼らはポーネグリフの解読を公的に認められた権力なのだ。それを力づくでつぶしたとなれば世界政府の信用は地に落ちる。幸い世界政府側には相手が先に攻撃を仕掛けてきたという攻撃の口実がある。

それを盾に今回の件を不問にするようにこちらに話しかけてくるはずだと、トウヤは読んでいた。

ポーネグリフの解読をしている村があると聞いたから、ロビンの

部下にでもできないかと思ってついでに説得してくるようリリカ達に頼もうと思っていたのだが、ずいぶんとめんどくさいことになってしまった。

トウヤはそんなことを考えながら黄猿のとの交渉に臨んだ。

「まずはつきりさせて起きたんだけどこの村のポーネグリフは君たちが解読していたということとで相違ないんだね？」

『ああ、そのとおりだ。その村の住人達は俺が雇い入れた考古学者とその親族たちだ』

まず最初に先端を切り開いたのは黄猿だった。

まずはお互いの立場の確認。交渉でいうところの軽いジャブのようなもの。これに少しでも矛盾が見られれば、後々の交渉に支障をきたしてしまうことになる。

だからトウヤはポーカーフェイスに。あくまで不敵な笑みを浮かべたまま黄猿にいけしゃあしゃあと答えて見せた。本当は仲間に引き入れたのはごく最近、しかも相手には自分が裏王下七武海だとばらしていないのだ……。

「うん。べつに問題はないよ。君に与えられたポーネグリフの解読権は君の部下にまで及んでいるからねえ。でも世界政府に報告しなかったのはいただけないな」

『まあ、それに関しては申し訳なかったと思っているが……確か報告は、解読が終わった後でよかったのではなかったか？』

「そんなわけないでしょう？げんにこうしてわっちが派遣されているんだよ？」

『ふむ。だが黄猿殿……私は『ポーングリフを解読したらその内容を送れ』とは契約したが『ポーングリフの解読に着手した時も報告しろ』とはいわれていないのだがな？』

「……………」

トウヤの言葉に、若干苦虫をかみつぶした表情をする黄猿にトウヤは、あくまで表情を動かさない。ここらへんに交渉力の違いが出ていた。何せ黄猿は謀略の後始末などによく使われる人物ではあるが、残念なことに彼はどこまで行っても軍人なのだ。虚実を操り、裏をかくことが得意なトウヤに交渉で勝てるわけがない。

「どうやらお互い認識の齟齬があったようだね？」

『ああ、まったくだ。すまなかつたな黄猿殿。今度からは気を付けるよ』

まったく悪びれた様子のない人物の謝罪の言葉に、黄猿は少しだけため息をついた。

「こんなのわっちの仕事じゃないんだけどね。内心そう考えながら、黄猿はなおも交渉を続けるしかない。この場にいる世界政府側の最高権力者は黄猿なのだ。世界政府に戻る前にある程度決着をつけておく義務が彼にはあった。」

「でね、ちょっととききたいことがあるんだけど、わっちがこの村に来る際に襲ってきたひとたち。あれもきみの部下なのかな？」

「俺の部下は、少年が一人と女が一人。あとはその女のおつきの男が一人だけだが？」

トウヤはそういつて、セロとミシャーナを切り捨てたが、今の黄猿に彼らを追うことはできない。黄猿をこの村に搬入した後、トウヤはすでにこの二人を砂漠から逃がしていたのだ。

ゆえに、彼らを切り捨てたところでもはや何ら問題はない。むしろこの場にいられるほうが問題だった。あの二人は今までもな交渉などしたことがなく、ひどく口が滑りやすい。せっかくうまく取り繕ったのに、そんなことで尻尾を掴まれてしまっただけのものではない。

「あれ〜？おかしいな〜。あと一人いたはずなんだけど〜？」

「さあ、しら……ああ、ちょっとまで。今リリカから報告が入った。なんでも砂漠は危険だからその土地に詳しい奴をとある組織から雇い入れたそうだ」

「とある組織？」

「最近外海そんちじゃ有名だろう？《ハンターズ》だよ、黄猿殿」

トウヤの言葉に、黄猿はさらに眉をしかめる。地元の……だったらまだ何とかできたがハンターズが相手では確認に時間がかかりすぎる。

最近かなりの速度で勢力の拡大を始めたハンターズ。外海での人氣はもはや世界政府を上回っており、外海の治安維持は実質彼らが

担っているといっても過言ではなくなっている。

グランドラインに強者を配置しすぎた海軍の弊害をうまく突いた見事な営業戦略。海軍の体たらくをあげつらって民衆をあおる情報操作技術。そして、なにより……CPが全力を挙げて調査を行っているのに、まだに正体が不明なままの『統轄統帥』。それはつまり、この組織の情報防衛力がすでに海軍を上回っていることを指している。そんな彼らは海軍にいい印象を持っていないためか、調査には限りなく非協力的だ。『しばらく前に砂漠にだれか派遣しなかったか?』ときいても絶対に返事を返してくれることはないだろう。

自力での調査も調査協力も不能となると……最後の一人の調査はあきらめたほうがいいね。

そんなことを考えながら、黄猿はさらに交渉を進める。

「いきなり攻撃を仕掛けられたんだけどそれはどうしてかな」

「俺の部下は海軍大将の顔を知らなくてな……。それで遺跡を荒らしに来た海軍を語った盗賊だと思っただと。しばらく前まで東の海で活躍していた『統領』クリークの例もあるしな」

「わっちは正義のコートを着ていたよ」

「そんなもの、支部の海軍将校からならいくらでも奪い取ることができるだろう?」

「……」

否定できない黄猿は、再び黙り込んでしまった。実際海軍コート

の紛失は年間数百件を超える。そのほとんどが支部の海兵たちからであり、おそらくは戦闘中に海賊に奪われたのだらうと思われた。

つまり、海軍コートごときでは全く信用に値しないのだ。

『おまけに黄猿殿が連れていた部隊のやつらはずいぶん弱かったそうじゃないか？』海軍大將が連れてくる部隊があんなに弱いわけがない』というのが奴らの言い分だ』

「そこをついてくるかい」

それもやはり黄猿の落ち度だった。まさかこんな砂漠であんな化け物に出会うなどと思っていなかった黄猿はいつも連れてくる部隊を港町に残してこの砂漠の地理に詳しい陸軍を率いて砂漠にやってきていた。

そんな状態じゃあ、海軍大將名乗られても納得できないかもね。と黄猿は思わず納得してしまう。

『それに……話し合いをしようにも、黄猿殿は両手を両足を引きちぎってから話を聞こうとしていたみたいだから。それはそれなりの抵抗にあっても仕方ないだらう』

「それをいわれるといたいねえ」

『これも痛み分けだな……』

「みたいだね」

予想していた黄猿の攻勢に何とか耐えきった、トウヤはひとまず

休憩とばかりに傍らに置かれたビンを取出し、グラスに中身を注ぐ。

「うらやましいねえ。お酒かい？」

『ホームにいる者の特権だ』

「交渉中にのものはどうかと思うけどね。」

『細かいことは気にするな』

そんな無駄話を交えつつ、黄猿とトウヤは今回の事件の落としてどこについてさらに細かく話しあっていく。最後の議題は盗賊団とロレンについてだ。

「あの盗賊団は……どう説明するきだい？」

『あいつはらもとよりおまえがいる村の廃墟を拠点に働いていた盗賊団らしくてな。考古学者たちを送る際に邪魔だったから俺がボコボコにして配下に下した』

「そんな報告効いてないよ。」

『いっていないしな。何より、あいつら、奪った金を全部自分たちのために使っていたせいかほとんど奪える財宝がなかったんだ。そんな状況で世界政府から上納金をせびられるのもうっとおしかったからな』

「いうね。あの少女を守っていた少年は？ 思いつきり殺されかけたんだけど？」

『お前が？海軍大将殿を半殺しか。ロレンも随分と強くなったものだな』

「ああ、やっぱり君の部下だったんだ」

『まあ、あいつが動いた理由は簡単だ。愛だよ……黄猿殿』

「あい？」

『あいつは調査団の下働きをしていたあの少女に一目ぼれをしてしまったのさ。だから、お前に殺されかけた少女を俺の損得抜きで助けようとしたんだろう』

なんだか、ロレンのあずかり知らないところでもない話が進められているが、今までの交渉の中でトウヤが一番楽しそうにほらを吹いているので、黄猿に見抜くことはできなかった。イササギ・トウヤ楽しい嘘は、全力で、ばれないように、つく主義の男である。

「あの子、古代文字を読めたみたいだけど？」

『母親がロビンだからなそれは読めるだろう』

再び爆弾投下を行うトウヤ。ちなみにロビンは映像にうつってはいないが、実はトウヤの後ろに待機しており、その言葉を聞いた瞬間ものすごい顔をしてトウヤの首を絞めようとしていたのだが、黄猿はそんなことは知らない。

「あのニコ・ロビンが母親？それにしてもずいぶんと大きかったけど？」

『不規則な海賊生活を送っていたうえに、美人だからなあいつは…
…子供の一人や二人ぐらいいるだろ』

骨よ砕けよと言わんばかりにロピンはトウヤに関節技を決めよう
としていたが、それはエイゼンによって何とか実行されないでいる。

ちなみに……。

「離して！！あのばかを殺すの！！邪魔しないで！！」

「落ち着くでござる！！交渉が終わればいくらでもしていいでござるから、今は手を出さないでほしいでござる！？」

そんな会話が交わされているところを見ると、トウヤの命はあと
数分しかないのだろうか……。

まあ、しかし、オハラ生き残りがもう一人いるというよりかは
まだ都合がよかった。もしそんなことがバレれば海軍は総力を挙げ
てほかに生き残りがいないかと探し始めるだろう。そんなことをさ
れてもし本当に生き残りがいた場合、それはそれは凄惨なことにな
ってしまう。だからこそこの嘘である。まあ、トウヤ自身の趣味
もだいぶ入っているだろうが、それは言わない方向で……。

『ご理解いただけたかな黄猿殿？』

「ああ。今回はお互いの悲しい勘違いが交錯した故の事故というこ
とだね。いいよ。こっちとしても書類仕事が楽になって助かる
し。報告書はそっちからあげてよ」

『わかっているよ。おれの報告不足がこの事件が発生した理由の大

半を占めているからな。その程度で手打ちにしてくれるならありがたいものだ』

まるで、自分が損しかしていない、といわんばかりにセリフで黄猿のある程度の好印象を与えてトウヤは交渉を締めくくる。こうすることで、幾分か海軍との軋轢を緩和することができただろう。

こうして、砂漠での対戦は本当の意味で幕を下ろしたのだった。

…
ナ…
ナ…
……………
ナ…
ナ…

黄猿との戦いから二日たったある日。砂漠の村の入り口ではトウヤの映像通信をまえに多数の人間が集まっていた。盗賊団メンバーに村長と闇商人。見送りに来たアリサに今日ここを出立する、ロレン、リリカ、ヴァイである。

『ということで、お前とアリサ嬢は世界政府公認のカップルになったから、そういう風にふるまうこと』

「何してんですかあなた!？」

トウヤからの報告を聞いたロレンは盛大に悲鳴を上げ、アリサは顔を真っ赤にするが、トウヤはそれを完全に無視して彼の傍らに立っていた村長に目を向ける。

『というわけで、あなた方は俺……イササギ・トウヤの管理下に入ってもらいます。よろしいですね?』

「よろしいものにも、生活の保障に砂漠での交通機関の整備などしていただける上に守っていただけるならこれほどうれしいことはありません。謹んでお受けいたしますぞ。イササギ殿」

そういって、頭を下げる村長。そして、デビルと闇商人にはトウヤの正体をすべて明かしてある。黄猿との交渉が終わった今、尋問

尋問を受けた三人がトウヤの正体をばらしてしまう可能性がなくなり隠す必要がなくなったのだ明かした理由である。

これから彼らにはポーネグリフの解読をしてもらいロビンの手助けをしてもらう予定なのだ。正体を明かしておいたほうが何かと都合がいいだろう。

「しかし、デビルたちを連れて行かれるというのは……」

『安心してください。悪いようにはしないので。ハンターズに加入してもらっただけですから……』

「まあ、俺らは元傭兵団だしな。指名手配つけちまったせいでもな傭兵団には戻れなくなっちゃったが、ギルドに入れてくれるっていうなら願ったりかなったりだぜ」

そんなデビルのセリフに、ほかのメンバーたちも大きくうなづく。なんやかんやでやはり盗賊をすることはかなり気が咎めていたようだ。もう盗賊をしなくていいと聞いた彼らの顔はかなりはれやかに見えた。

『じゃロレン。俺たちは海軍本部で待っているから、お前たちも早くいっしょ』

「とうとう……始まるんですね」

『ああ、俺たちの一世一代の大勝負だ』

引き締まった表情をする二人に、リリカとヴァイはあくびをかます。

「ふん。そう意気込むことはない」

「白ひげの爺に年寄りの冷や水って言葉を教えてやって、海軍のバカどもをぶん殴って目を覚まさせてやるんだろ？簡単じゃねーか」

『そんなこと言えるのは世界中でお前たちだけだろうよ……』

あきれた声音でそんなことを言いつつ、トウヤは不敵に笑う。

『いくぞ……目指すは頂上戦争。俺たちはここから……世界を変え
る』

「」「おつ！」「」

トウヤの言葉に不敵に笑う三人。そして、ラクダを出そうとした三人に歩み寄ったアリサはロレンを呼びよせた。

「ロレン！！ちょっといい？」

「なんですか？」

そういつて、ラクダから降りてくるロレンにアリサは耳打ちをする。

「また来てね。あなたには言えていない文句がまだたくさんあるんだから……」

「はい……。わかってますよ」

「そう……じゃー！」

最後に彼女は、スッと目を閉じてロレンの頬に唇をふれさせた。

「へ？」

いきなりの事態に何が起こったのかわからないロレンに、トウヤは苦笑を浮かべ、ヴァイは『リア充は死ね』とひがみ、リリカはどうでもいいといわんばかりに無視する。

「また会えるように……おまじない。そう……おまじないだから！
勘違いしないでよね……！」

そんなことを言いながら真っ赤になって村に帰るアリサに村長たちはほほえましげに目を細めたのだという。

ちなみにその後ろでは……。

「落ち着いてください兄貴……！」

「そうですよ……いいカップルじゃないですか……！」

「ふざけんなああああああああ……ま、まだアリサには……恋人なんて早いんだよ……おおおおおお……！」

ちょっと取り乱したデビルがいたのだが、それはまあ知らないほうがいいことだろう。

46話（後書き）

とうとう終わりました……。砂漠の戦闘編。今までの戦いはいたいなんだったんだ！？という感じでリリカが勝負をかつさらったり、敵方の強化しかできなかつたり（黄猿に原作では出なかつた二ユースキルが！？）……。いろいろと間違っている感じがする仕上がりにありますが……。

本当は海軍と盗賊を交えた三つ巴の契約書争奪戦を行う予定だったんですが、海軍大將が強すぎたんです……。ええ、マジで。だらが勝てんのかなと言わんばかりに。ということでもこんな感じになってしまいました。

最後はもはや空気になってい革命軍。あの後どうなったのかは作者も知りません。おそらくドラゴンあたりが回収していったのでしよう。

新しい秘密兵器も増やして、トウヤの策はより盤石となりつつあります。ハンターズもいつの間にか能力者開発に成功していますね……。頂上戦争編を楽しみにしててください。

まあ、その前にもう一つ長編と、短編をに三本はさむ予定ですが……。

次回！！

神降臨！！

神、降臨！！

北の海、^{イヌリ}最南端北極島。どっちだよと言わんばかりのこの名前の島には北の海にありながら、まったく人が住んでいない。住んでいるのはボツキヨクグマ（体長十メートル）や、ミニペンギン（体長十センチ）などといった野生動物のみ。

そんな大自然の氷に包まれた島に一つの異常が存在した。

それは、氷の城。永遠に解けない透明な城。

そんな異常な建築物には一人に人物が住んでいた。

「今日の獲物は微妙だったね」

そんなことを言いながら海王類のクジラアザラシを引きずりながら現れたのは、両手にごつい手甲をはめた四十代後半ぐらいの美女。羽織っているのは正義のコート。しかし後ろの正義には（笑）がついている。

明らかに海軍の正義をバカにした文字。しかし、彼女は特に気にした様子もなくそのコートを着こなしている。

彼女の名前はミユラー・D・ヘイゼル。史上初の女性海軍大将《黄猿》の地位にいた怪物である。ガープを師事し鍛えたこぶしは万の軍勢を殴り飛ばすなどといわれた格闘術の達人だったが、天竜人にこびへつらうのが嫌になり海軍を脱走。現在指名手配中ではあるが、今の海軍戦力で彼女に勝てるのは元帥かガープぐらいだといわれているため、実質放置された賞金首である。

そんな彼女の大将との関係は、後輩のクザンと旧交があるらしく、よく年賀状を送ってくる彼との仲は結構良好らしい。(仕事サボって逃げてきたときは喜んで出迎えているとか……)。ただ、そのいい加減さから、同時期に赤犬となったサカズキとは、文字通り犬猿の仲。ボルサリーノに至っては年上の元部下ということでもかなりの苦手意識を持っている。

まあ、彼女のパーソナルデータは大体こんなものである。そんな隠居も同然な生活をこの島で送っていた彼女だが、そんな彼女の生活はある一人の来訪者によって破壊された。

彼女が氷の城に戻り、クジラアザラシの解体に移ろうとした時だった。

突如、島全体に轟音が響き渡り激震を与えたのだ!!

「ああん？」

氷同士を積み上げただけの城はあっさりと崩壊してしまい、氷の瓦礫がヘイゼルを埋めようと襲い掛かってくる!そんな中、ヘイゼルはいたって平然とした表情で、

「ふん!!」

と、鼻を鳴らし拳をふるう。そして、覇気によって強化され、高速で打ち出された拳は容赦なくその氷の雪崩をブチにぬいた!!

「ガープ流拳闘術!!《愛ある拳は貫けぬものなし!!》」

愛もくそもなさそうな表情で、とんでもない技名をつけられたその拳だったが、その威力は甚大。なんと、彼女の頭上にあつた瓦礫どころか、城の上部を根こそぎ吹き飛ばしてしまった！！

「あゝ。やっちまったよ。この城つくるのにどれだけかかったと思っっているんだい」

といつても作ったのは、仕事をさぼって遊びに来ていたクザンだが……。まあそんなことは彼女にとってはどうでもいい。今問題なのは彼女の住居を壊した不屈きものを見つけることだ。

「まったくいつたいなんだっていうのさ？こんなにもない島に爆撃でもきたのかい？」

ぶちぶち文句を言いながら、ヘイゼルはコートを羽織り震源地へとのおんびりと歩いていくのだった。

…：…：…：…：…：…：…：…：…：…：…：…

「これはいったいどういうことだい？」

震源地にやってきたヘイゼル。そこで彼女は、巨大なクレーターを作って、粉碎されてしまった黄金の船。

「こんな金ぴかな船なんて作って……ずいぶん悪趣味な奴がいたものだねえ」

クレーターを滑り降りながらそんなことを呟くヘイゼル。しかし、その眼は鋭く細まっており船をくまなく観察していた。

空から来たってことはシキの爺か、空島の船かねえ？あの陰謀好きの爺が海軍から脱退したとはいえまだつながりが強固な私に接触してくるとは思えないし、後者のほうが可能性が高そうだね……。

そんなことを考えながら、彼女がクレーターの底にたどり着いた時、一人の男が船から降りてきた！！

「うあ……」

「ちょ、あんた！？大丈夫かい！？」

その男はなぜか血だらけで、やせ細っていた。まるで数か月間海をさまよった漂流者のような姿だ。

しかし、彼が着ている服（？）はかなり上等なもののように見える。薄手のズボンに背中から生えた雷太鼓。頭にはバンダナのような布が巻かれており、耳はかなり長い。

「おい、大丈夫かい！？意識はあるのかい！！」

「うっ……」

ヘイゼルに揺らされ、うめき声を上げる男。その男は少しだけ意識を取り戻し、ヘイゼルにこの言葉を告げる。

「ここはどこ？私は誰？」

「は？」

空島で神を名乗っていた男は……どういっわけか記憶を失っていた。

神、降臨！！（後書き）

訂正……神、降臨？

47話

「黄金の船？」

嫌な予感しか感じないそのフレーズを聞き、トウヤは少し眉をかめた。

現在トウヤがいる場所は海軍本部。相も変わらずやたら豪勢な出迎えに、「ご苦勞なことだな……と呆れながら海軍本部にやってきたトウヤは、再び七武海用の円卓に通されそこでモモンガから今回の指令を受け取った。

それが黄金の船落下事件だ。

「そつだ。なんでも空から黄金の船が降ってきたらしい。お前の得意分野だろう？調査に行ってくれ」

そういいながら、紅茶を入れてやってきたモモンガからカップを受け取り、トウヤはそれに口をつける。

「俺は酒のほうがよかつたんだが？」

「仕事中だ。がまんしろ」

トウヤの身勝手な要望を一言で切り捨てながらモモンガはトウヤが座っている円卓の体面へと腰を下ろした。

黄金の船ね……。

明らかにあの神様気取りの船である。トウヤとしてはめんどくさすぎていきたくなかった。彼にとってエネルギーは天敵なのだ。

エリアクロース
空間握り。前の世界でトウヤの常勝無敗を支えたこの能力には実は欠点があった。この能力は空間を圧縮し手に収めるのに若干の時間がかかるのだ。

まあ、時間がかかるといっても音速の二倍という十二分に規格外の速さなのだが、あいにくとエネルギーにはそれが効かない可能性が高い。

彼が食べたロギア系悪魔の実は《ゴロゴロの実》。つまりは雷人間だ。雷の速度は150km/秒〜200km/秒。対する音速はたったの360m/秒その二倍といってもせいぜい秒速720m/秒だ。格が違いすぎる。捕まえようとしても悠々と逃げられてしまっただろう。

だからこそ、トウヤはハンコックと並び原則キャラの中では一番エネルギーを苦手としていた。しかし、そんなことも言っていられないのが現状で……。

「断つたらどうなる？」

「さあな。ろくなことにはならんとは思っが……」

モモンガの言葉に若干の嘆息を吐くトウヤ。ほかの七武海のように武力をもって七武海入りしたのならある程度の仕事の無視など簡

単にできる。しかし、トウヤは交渉をもって七武海に参入した。つまり、彼の参入にはいくつかの不便な契約が世界政府となされているのだ。すこしでもその契約に違反するような行為をすれば世界政府がトウヤにとって有利な契約を破棄する可能性がある。破るにしても最低限ばれないようにする必要があるのだ。

そこらへんがトウヤとほかの七武海との違いだ。世界政府から回された仕事は一定量こなさないといけない。

それが、前回の女ヶ島毒ガス事件であり、今回の黄金の船落下事件なのだ。

「返事はどうする？」

「やるしかないんだろ？まったくこっちも暇というわけじゃないんだぞ？お前たちのせいで最近めつきり宝探しできていないしな」

「それを選んだのはお前だろう？」

「いつか潰してやる」

「冗談に聞こえない」

軽口の応酬を交わした後、トウヤはコートを手に取り立ち上がった。すると、その右手から小さな剣のキーホルダーが落ちてきた。

「おっと……。袖口に隠しておいたのに」

「ん？なんだそれは？」

それを見たモモンガは不思議そうに首をかしげた。いま窓トウヤはそんなものもっていなかった。なにより、手のひらサイズのそれではミホークが持っている十字架型の小刀よりも役に立ちそうもない。計算高いトウヤがまさか、オシヤレのためにそんなものを持ち歩くとは思えないし……。

「ああ。大したものじゃないよ」

そういつて、にやりと笑うトウヤ。その笑みに言い知れない悪寒を感じたモモンガは、またろくでもないものを手に入れたなど考え大きいため息をつくのだった。

…
ナ…
ナ…
……………
ナ…
ナ…

カームヘルト
凧の海海上。海楼石をその敷詰め、船尾にはスクリューを取り付けたトウヤの船がその上をのんびりと航行していた。

「なるほど……。それでロレン君たちをわけて砂漠へと向かわせたわけね」

人工芝が埋められた甲板でのんびりとデッキチェアに座りながら、ロビンはそう話しかける。その両手にはペンと開かれた古代語辞書が持たれており、メガネをかけた彼女は時々辞書にペンを走らせ添削をしていく。どうやら最近つくられたこの辞書の間違いを捜しているようだ。

ロビンも女ヶ島での戦闘で自分の力不足を実感したのか、最近ではかなり真剣に覇気の制御と能力の開発を行っている。咲かせられる花は一億を超え、覇気も込めた体の一部が変色する程度には込められるようにはなっていた。

「まあ、どちらも急を要する事態だからな。政府の仕事はどうなってもいいがあの契約書だけはばれるとまずい。早急に回収する必要

があるが、あいにくと俺は仕事でいけないしな……」

そういつてトウヤは、煙草に火をつけ、煙をリング状に吐き出した。リングはふわふわと空中をただよいそして……。

「ガスランス」

槍型に圧縮されたガスの攻撃によって雲散霧消する。

「しかし、なぜっ拙者がこっちなのでござる？それほど重要ならば拙者も向こうに振り分けたほうがよかったでござるうに」

そういつて現れたのは、この前仲間になったエイゼンだ。かれはハンターズではなく裏王は七武海に加わることになった。頂上戦争である役割を担ってもらう予定だ。

「お前は俺の器をはかりたいんだろう？だったら俺の近くにいないでどつするんだ」

「ああ……そうでござったな！！」

いまさら思い出したのか、とても納得した様子でポンと手を鳴らすエイゼンにロビンは若干顔をひきつらせた。

もしかしてこの人……すごいバカなんじゃ？

ロビンが若干そんな失礼なことを考えてしまったとき、エイゼンは苦笑交じりにロビンのほうに視線を向け、肩をすくめる。

「ロビン殿。いくらなんでもそれはないでござるよ。親しき仲

にも礼儀あり。我が故郷の格言でござる。」

「勝手に心を読まないでくれるかしら!？」

言葉とは裏腹に礼儀もくそもなっていないエイゼンの見聞色覇氣乱用に激怒しながら、ロビンは体の周りには気を巡らし、見聞色覇氣をシャットアウトする。

「おや? ざんねん」

「そのぐらいにしておけよエイゼン。ロビンのことなら好きなものからスリーサイズまですべて俺が教えてやるといったらどう?」

「ではバストを重点的に」

「死にたいようねあなたたち?」

悪ふざけ気味ににやりと笑うトウヤに乗っかるエイゼン。それにこりとした笑顔で（しかし額には青筋付き）彼らの全身に花を咲かせるロビン。

そんな賑やかな航海をしながら彼らの旅は進んでいく……。

ちなみにトウヤとエイゼンは、ロビンにあっさり船から海へと突き落とされてしまい大型海王類に襲われることになるのだが……。まあ、そんなことはどうでもいいことだろう。

…
十…
十…
……………
十…
十…
…

北の海・北極島にて……。一人の青年が海が一望できる岬にて薪
割りにいそしんでいた。

「よいしょつと。ふー。これで全部かな？」

いい汗かいたぜ！！といわんばかりに汗をぬぐう青年。その時、海とは反対側に広がる氷の大地から大きな声が響いてきた。

「おい。ネルー！飯、とってきたよ」

「ああ。ありがとうございます。ヘイゼルさん」

またまた海王類を引きずって帰ってきたヘイゼルの姿に苦笑しながら青年は薪割りの手を止めて彼女を迎え入れる。

黄金の船からはぎ取られてつくられた木製のしっかりとした家が建っている。しばらく前に、記憶を失ってしまった青年が何に使うかもわからないんだから持っていてもしようがないといって解体して、ヘイゼルの新しい家にしてしまったのだ。

「それにしても遅いね……調査団とかいう連中は」

「そうですね。早く私の素性を調べてほしいのですが……」

そんなほのぼのとした会話を交わしつつ、二人は海王類を解体するためにそれぞれの力をふるうのだった。

48話

見る見るうちに寒くなる気温。降りしきる粉雪。あたりを漂い始める流氷。

「北の海っていうのは大体こんなエリアが多いな」

「北の海だからね。基本的に寒いところが多いのよ」

「そうなのでござるか？外海は見たことがないゆえよくわからんでいじわる」

極寒の海の中の上を氷を踏み砕きながら進む船。トウヤが搭載した技術によってこの船は先ほど砕氷用に船底が変化したところである。

某豪華客船のごとく、流氷によって沈没する可能性を未然に防ぐための設備はフルに活躍し、トウヤたちに安全な道を提供してくれていた。

「ところで……この海って海王類が多すぎないかしら？」

しかし、危険はどうやら流氷だけではないようだ。ロビンの言葉と同時に、海面から飛び出してきたカムベルトの海にしかないなさそうな大型海王類！それは、トウヤたちの船を今日の昼食と定めたのか、大きな咆哮を上げて襲い掛かってくる。

「武装色覇気・威力強化・億千花。シエカツヨル本丸ツイスト！！」

しかし、その海王類の攻撃は巨大な肌色のうねりによって抑えられた。飛び出してきた海王類の体から咲き出した億単位の腕達が巨大なうねりとなり、海王類の細長い体をうねり絞り上げいく。

「ぎゃあああああああああああああ！！」

わけもわからず、全身の骨をバラバラ方向に180度回転させられた、海王類は最後の断末魔とともに、口から泡を吹き出しながら海へと崩れ落ちていく。

「こんな大型な海王類が何度も襲ってくるなんて……聞いたことないわよ？」

「この海底には海楼石の巨大鉱床が眠っているらしくてな……この海王類は普通の海より育ちがいいんだと。しかも、生まれたときから海楼石に慣れ親しんでいるせいか海楼石による気配消去が効かないらしい」

そんな解説をしながら、絶命した海王類がみるみる小魚にむさぼられていく光景を見て「ピラニアみたいだな……」とつぶやくトウヤ。この海の生態系は北の海にありながらグランドライン級とモモンガが言っていた意味をようやく理解する。

「それにしてもこんなところに本当に誰かが住んでいるのでござるか？どう考えても人が住める環境ではないでござる。話では黄金の船が落下したことを報告した御仁がいるのでござろう？」

「ああ。確かにいるが……モモンガが言うにはそいつは」

トウヤはそこで言葉を切り、船をもう少し早く進めるように、掃

除にやってきたドラム缶ロボットに指示を下す。さすがにあんな光景を見た後でのんびりと航行する気は起きなかったようだ。

「化物らしいぞ？」

「ほお……モモンガの小僧も随分というようになったじゃないか？」

トウヤがそういつてふりむいた時、ロビンの後ろにいつの間にか知らない女が立っていた！！

…十…十…十…十…十…十…

「!？」

「なんで!？」

鋭く目を細めながらポーチに手を伸ばすトウヤ。腕をガスに変えるエイゼン。しかし、女は特に慌てた様子もなくいまだに気づいていなかったロビンの意識を手刀で刈り取り、瞬時にエイゼンの前へと移動する!!

「!？」

「六式の《剗》だ!!ビビるな!!」

いきなり起こったわけのわからない光景に、若干驚くエイゼンにトウヤは鋭い声を飛ばす。だが

「必殺!!愛ある拳に防ぐすべなし!!」

エイゼンが作ってしまった若干のすきを突くかのように、振り抜かれたアッパーカットが容赦なくエイゼンの脳髓を揺らししばらく行動不能にする。

「まったく……。調査に来たのは最近噂の裏七武海だと聞いたから
実力を試しに来たのに、案外たいしたことないんだね……。がつか
りだよ。ミホークのほうはまだ強かった」

「あんな、純粋な最強種と一緒にしないでもらえるかな？こっちは
凡人なりに色々必死こいてやっているんだよ」

ひらひらと手をふるいながらとんでもないことを言ってくる美女
に顔をひきつらせながらトウヤは煙草に火をつけた。

「戦闘中に喫煙かい？余裕だね」

「これがないと落ち着かないんだ。勘弁してくれ」

「喫煙は反射神経を侵すんだよ。このど素人が！」

喫煙に何か嫌な思い出でもあるのか、真っ先にたばこを狙って
くる女。トウヤはそれに若干驚きつつも、体を少し回転させて相手の
こぶしの軌道から体を逃がす。

「うん？」

これに女は少し驚き、今度は先ほどのこぶしよりも若干早く拳打
が打ち出される。

しかし、トウヤはそれにもきっちり反応する。素早く上体を回
転させ拳をよけた上に、女の伸びきった肘を取り、その関節部分に
強烈な掌底を叩き込んだ！！

明らかに折ることを目的とした痛烈な一撃。しかし、細いように

見える女の腕はそれにびくともせず、逆に掌底を弾き返した！！

「人体構造的に今のは折れるべきなんだぞ……」

元の世界では確実に腕一本を御臨終させることができた技を簡単にはじかれ、トウヤは再びため息をつく。本当にこの世界の人間の体はどうなっているんだ？と。

「はあ！！なかなかやるみたいだね」

女はちよつとだけ笑い、拳を引いた。どうやら腕試しは終了したようだ。

「ようこそ北極島へ。私がこの島唯一の住人、ミユラー・D・ヘイゼルだよ」

「裏王下七武海筆頭。イササギ・トウヤだ。ここに落ちた黄金の船について調べに来た」

またDの一族……。ガープがこいつの師匠になったのはいろいろと裏がありそうだな……。

元海軍大将と、ないしんで余計なことに考えを巡らせる現裏王下七武海が固く握手を交わす。こうして黄金の船落下事件は幕を開けた。

49話

真っ白な大地。跳ね回る小さなペンギン。この船に向かってかけてくる巨大な（もともと巨大ではあるがさらに巨大な）白熊。そして、何故か浜辺に打ち上げられた巨大な海王類たち……。

「これ、全部あんたがやったのか？」

「何を言っているんだい？当然じゃないか」

「……」

あのピラニアのような小魚が大量にいる海に潜って海王類を捕まえているのか？本当に怪物だな……。元の世界の最強格でも、できる奴はいるかどうか……。

元海軍大将の規格外つぷりに若干呆れつつトウヤは、船を係留し気絶させられた船員たちを揺り起こす。

現在の彼らがいるのは北極島海岸。ハイゼルの案内で意外と早く着いた彼らは昼間のうちに島へと上陸。さっそく黄金の船の調査に移る予定だった。

「それで、黄金の船が落ちた場所だが……いったいどこだ？現物は動かしていないんだらう？」

「ああ……それなんだけどねえ……」

「？」

ちよつとだけ口をこもるヘイゼルにトウヤは若干首をかしげる。
しかし、この後すぐにトウヤは彼女が言いにくそうにしたのかを理
解することになるのだった……。

…
十…
十…
…
十…
十…
…

「おい……」

「なんだい？」

「なんでそんなに堂々とできるのかわからないんだが……。とりあえず聞くが、これはいつたいなんだ？」

「黄金の船……。だったものだよ」

トウヤたちが案内された場所にあったのは、無残に木材をはぎ取られてしまった船だったもの。何故か黄金だけはきれいに残っているのが印象的である。

「トウヤ……。これじゃ調べられないわ。一応黄金の調査はしてみるけど、明らかに加工の跡があるし……」

「まあ、空を飛ぶものだとすることは確かそうでござるな？プロペラがついているでござるし」

そんなものは見ればわかる。内心でそう答えつつ、トウヤは若干疲れ切った表情でヘイゼルを睨みつけた。

「俺も暇というわけではないんだよ。なのにこんな北の海の辺境くんだりまで来たのは世界政府が調査してくれった頼んできたからで、その世界政府に調査を依頼したのがあんたなわけだ」

「まあ、理解はしているけども……。やむにやまれぬ事情があったんだよ」

だったらそのバタフライしかねない勢いでおよんでいる目はなんだ？と、トウヤは思いつき目をそらして言い訳をするヘイゼルにツッコミを入れかけたが……。

「はあ……。まあ、いつか」

結局あきらめた。どちらにせよ細かいことにチマチマかかずらうのは男らしくない。どちらにせよこれが来た場所はすでに分かっているのだ。(原作知識で)。いちいち文句を言うのも、俺らしくない。

そう自己完結したトウヤは、さっと踵を返し顔の形をした巨大な黄金にふれる。

「とりあえず迷惑料……」

そういつて、トウヤが掌に力を込めると黄金が見る見るうちに手のひらサイズに圧縮されていく。久しぶりの収入に若干機嫌が直るトウヤ。

それを見ていた、ヘイゼルは少し感心したように口笛を吹いた。

「悪魔の実の能力かい？ずいぶんと便利そうな能力だね」

「ああ……。重宝しているよ」

悪魔の実の能力じゃないがな。心の中でそう断りながら舌を出すトウヤ。これで完璧に機嫌が直る。彼は意外と単純な性格をしているのである。

「黄金を保存されたら調べられないんだけど？」

「虫メガネでも使って調べる。でかい塊に張り付いて調べるよりは早く済むと思うが？」

「はいはい……」

文句を言ってくるロビンを軽くいなし、エイゼンに残りの金塊の回収を頼むトウヤ……。そして、

「海軍の報告ではこの船には男が一人乗っていたはずだが？」

「ああ。そうだよ。ついてきな。いまは私の家にいるから」

ヘイゼルの言葉に、トウヤは若干気を引き締める。

これから会いに行くのはまず間違いなく、あのエネルギーだ。神を名乗り、月をめざし、スカイピアにおいて大量虐殺をもくろんだ狂気の男。

今のところ島に被害が出ていないところを見ると、ヘイゼルがうまく対処しているらしいが、こちらが下手を打つとスカイピアの二の舞になりかねない。相手は最強の能力……災害級能力グラグラ・マグマグなどの一角を保有しているのだ。慎重に対処するに越したことはない。

「いいかロビン、エイゼン。今回の相手は真剣にやばい可能性がある。気を引き締める」

「わかったわ」

「わかったでいよね……」

そして、四人はヘイゼル先導の元彼女の家へと急ぐのだった。

「あ、ハイゼルさんお帰りなさい。昼食はもうできてますよ。」

…
…
…
…
…
…
…
…
…
…

「おお！そうかい！！あんたが来てくれて本当に助かっているよ」
「……………」

そして、木製のヘイゼルの家にたどり着いたトウヤは思わず絶句してしまった。

あまりにらしくない反応。トウヤにしては珍しい反応。しかし、それも仕方がないだろう。なぜなら……………そこにいたエネルギーだったものは……………。

「また海に潜ってきたんですか？そんなにとつてきても食べきれないといつも言っているでしょう？」

「いやあ……………。体動かしておかないと落ち着かなくてね」

「まったく。ん？そちらの方々はいったい？」

露出の少ない冬島の服装。背中に刺さった太鼓を揺らしながら、
にこにこ笑うその顔はまさしく仏。傲岸不遜な雰囲気は鳴りを潜め、
今はただただ人のよさそうな笑みを浮かべて笑っている。

特徴的な耳の好青年……………。

「誰だよこいつ！？」

キャラに合わないセリフであったが、原作を知る人間が見たら、
十人中十人がそういうであろうセリフだった。

元スカイピアの神……………エネルギー。未来の海賊王によって脱落したは

ずの彼は、どついつわけが変わり果てた姿で再登場を果たしてしま
った。

…
十…
十…
……………
十…
十…
…

「記憶喪失？」

「ああ。私が保護した時は今までの記憶のすべてを失っていたんだよ」

「そこから人格が再構成されたわけか……」

もうこのまま放置していてもいいんじゃないだろうか？そんなことを考えながら、おそらくキッチンと思われる場所で、コトコト歓迎のソープを作るエネルギーを見てトウヤはため息交じりに煙草を吹かす。

先ほど簡単な問診を済ませて、エネルギーは大体三つのことを忘れていることが判明した。

一つ目は空島で自分がやったこと。空島での虐殺。神として自分がやってきたこと。そのすべてを彼は忘れていた。

まあ、このことはトウヤとしてはありがたい忘れ物である。こんなところで空島と同じようにふるまわれたらさすがに戦闘をしなければならぬ。そうなると倒せないことはないだろうが、それでもかなり苦戦することは必至だっただろう。しかも、それを忘れてしまったせいも、性格もあんな風に穏やかになっている。このことに関しては何ら問題はない。

二つ目は、自分の能力の運用方法を忘れていたことだった。自己的能力が《自然系・ゴロゴロの実》だということの完全忘却。ただ、無意識のうちに使ってしまうことはままあるようで、時々体から電気がほとばしったりすることはあるらしい。

自分が最強の能力者の一角であることを完璧に忘却した彼は、今のところその能力をヘイゼルの漁の手伝いにしか使っていない。また、制御の方法も忘れてしまっているため、日常生活に支障をきたしてしまっておりかなり不便だと愚痴っていた。トウヤにとってはありがたい話である。雷速移動は不可能。大電力による火力攻撃もできないようで、トウヤにとってはかなり御しやすい相手になっていた。

おまけとして心綱マントラの制御法も忘れていたようで、心を読まれることもなかった。

最後の一つは……忘却というよりトラウマといったほうがいいのかもしれない。

トウヤは尋問をしている時にあることをふと思い出していた。そういうえば、アクセルのやつ空島でどんなふうに入介したんだろうか？

そんな考えに至ったトウヤはエネルギーについてとばかりにこう尋ねてみた。

「じゃあ、最後に一つだけ聞きたいことがある」

「なんででしょう？」

「アクセラレータ一方通行……」

瞬間、エネルギーは問診に使っていた机の下に雷速でもぐりこみがたがたと震え始めた……。

「……ど、どうした？」

「はっ！！す、すみません。なんか今すぐ隠れないといけないような気がして……」

「いったいあいつは空島で何をしたんだ……。トウヤの顔が思いつきりひきつってしまったが、まあ、今の彼にははてしなく関係のないことなのでスルーしておいた。」

「まあ、エネルギーの状態は大体こんな感じである。きわめて無害な好青年。それがトウヤ下した結論だった。」

「ちょっといいか？ヘイゼル……」

「初対面で呼び捨てとはなれなれしい奴だね？」

「礼儀にうるさいタイプか？」

「まさか！！だったらこんなところに隠居なんてしていないよ！」

「ケラケラ笑いながら、結局はおとなしく着いて来るヘイゼル。そんな彼女に肩をすくめてトウヤは彼女とともに外へ出た。」

「一応エネルギーに対して知っていることを伝えておく。どんな情報が出てても情報ソースは絶対に聞くな？聞いたらそこで話は終わりだ」

「承諾できないね……と、海軍時代なら言ったんだろうけど……いいよ。私も厄介ごととはうんざりだ。今はただの隠居お姉さんだからね。いちいち細かいことは聞かないよ」

「お姉さんはおこがましいんじゃないか？」

「女が自分のことをそう呼んだ時は黙って流してやるのがいい男の条件だよ、唐変木」

ずいぶんと話しやすい奴だ。トウヤがヘイゼルにたいして感じた第一印象がそれだった。へらへら笑いながらもきちんとした芯を持つており、歳も近いせいかな自然な会話ができる。口が多少悪いのが難点だが、パツとみ、性格的にはそれ以外の欠点が見つからなかった。

これが元海軍大将……。赤犬との仲は悪かったただろうな。

裏七武海就任の時に出会ったあの苛烈な正義を信じる男を思い出して、トウヤは若干顔をしかめた。

「ん？なんだい。人のことじろじろ見て」

「いや。ハンコックに会う前だったらあんたに惚れたかもな、と思つてな」

「なんだい？あの子にあつたのなら私なんかじゃ物足りないだろう？」

「まっただくだ」

「そこは嘘でも『そんなことないよ』って、いうのが男の甲斐性だよ、唐変木」

トウヤが断言しながら煙草を吹かすので、ヘイゼルはトウヤのす

ねを蹴り飛ばした。本気の一撃ではないが地味に痛いその攻撃に眉をしかめながらトウヤは煙を吐き出す。

訂正。口が悪いほかにも手が早いという欠点があった。

「さて、エネルギーのことだが……」

「ああ、そうだったね。あいつはいったい何者なんだい？あの放電現象。あれは明らかに《自然系^{ロキア}》の《ゴロゴロの実》だろう？あんな強力な能力を持っている人間がどうして今まで見つからなかったんだい？」

「その前に一つ聞きたいことがあるんだが……お前は空島について知っているか？」

そして、首を縦に振ったヘイゼルにトウヤは自分の知っていることを洗いざらい話すのだった。

50話

「神……ねえ？」

自称するにはいささか痛すぎる名前だね。

そんな、ヘイゼルのつぶやきに若干の苦笑を浮かべながら、トウヤは肩をすくめた。

「まあ。いまは記憶を失ってその当時の考え方を忘れているみたいだがな」

「それは何より。もし記憶があつたら出会ったときに抹殺しておかないといけないところだったよ」

さらつととんでもないところを吐くところはさすが元海軍大将と行ったところだろうか？もつとも、言った後すぐに嫌そうな顔をして額を抑えたが。

「元黄猿つてことは……」

「ご存知の通り天竜人の護衛をしていたよ。ろくでもない屑どもだった」

「ちょうどフィッシャータイガーの襲撃があつた時代に大将だったんだろう？少しはスカツとしたんじゃないか」

「まあね。まあ、追撃を穩便に断るためにまたストレスがたまつちまっただけだね」

それはそれは……なんともはや苦勞人なことである。トウヤはそう考えながらフィルターまで吸いきった煙草を携帯灰皿にツツコミ新たな煙草に火をつける。家の中ではエネルギーの話を聞きながらロビンたちが談笑していた。

「それで、一体あんたはあの神様気取りをどうするつもりだ？」

「能力の使い方ぐらいは教えておいてやりたいね。今のままじゃ何かと不便だろうし……」

ずいぶんと優しいセリフである。博愛主義者が喜びそうな優しさ。しかし、それを行ってすべてが丸く収まるかといわれればそうではない。

「いいのか？もし記憶が戻ったら」

スカイピアの悲劇の再来になってしまうぞ？

案にそのことを匂わせながらトウヤはポシエットに手を入れる。もし、そのことについて何も考えていないのなら、トウヤはいまここでこの女と拳を交わすことも辞さないきでいた。

しかし、

「なめんじゃないよ同い年」

ヘイゼルは少しだけ笑いながら拳をトウヤに向け真剣な瞳でトウヤを睨みつけた。

「もしあいつが記憶を取り戻して、空島の時と同じようなことをしようというのなら……私があいつを殺してやるよ。元海軍大将の名に懸けて」

圧倒的な迫力と覇気を放ちながら、ヘイゼルはそう語る。そこには寸分も揺るがない決意と、堅固なまでの覚悟が見て取れた。海軍大将の名は伊達ではないことをトウヤはここで初めて知ったのだ。

「油断していたよ海軍大将殿。やればできるじゃないか？」

トウヤが内心では冷や汗をかきながら……しかし、表情は全く動かさず、そういうとヘイゼルは若干嫌そうな顔をした後、覇気を引っ込め軽口をたたいた。

「元をつけな。今はただのしがない隠居お姉さんだよ」

「まだどうか？」

「何度でもね」

「歳を考えろおばさん」

「うっさいよ唐変木」

元の世界にいた銀色の陰陽師のような気やすい雰囲気を持つヘイゼル。そんな彼女の裏表ある態度に、最大限の警戒心を抱きつつも、どこか憎むことができない彼女の雰囲気にとウヤ少しだけ苦笑を浮かべつつ、まるで十年來の友人と会話をするように、その夜の談笑を楽しむのだった。

グランドライン。北の海に隣接するカームベルト目前。

…
十…
十…
…
…
…
十…
十…
…

一艘の小船がカームベルトをボロボロになりながら超えた海賊船を見送っていた。

その船の上には、巨大な十字架のようなものを背負った騎士風の格好をした男の姿。

目はタカのように鋭く、その眼光は物理的圧力でも持っているんじゃないかと思えるほど強力だった。

王下七武海……世界最強の剣士。《鷹の目》ミホーク。彼は先ほど一隻の海賊船を襲撃し、とり逃してしまったところだった。

彼にしては珍しい失態……というわけでもなく、実は彼、七武海の中では一番海賊船の拿捕率が低かったりする。なにせ海賊船を襲う動機が……『暇つぶし』の彼。そのため、彼は別段敵を取り逃がしたところで、気にも留めない。相手の運命がまだ死ぬなどといったのだろうと、あっさりとあきらめるのだ。

まあ、時々《首領》クリークのように外海に出てまで追い詰めることもあるにはあるのだが、それはよっぽどのレアケースといっても過言ではないだろう。

とうぜんそんな彼がカームベルトを超えてまで逃げ延びるような海賊たちを追うはずもなく……。

「これも運命か……」

とって、飛ぶ斬撃を放つために抜き放っていた黒刀《夜》を鞘に納める。

「しかし、この先にもまだ難関はあるぞ？」

確か彼らのいく先の島には……元海軍最高戦力で彼の友人だった女と、とある事件を解決しに行っていた裏王下七武海がいたはずだ。

「運命よ……私から逃がしたあの命。はたしてどのようにあの者たちから逃がすつもりだ？」

意味深なつぶやきを残した後、ミホークは船を反転させ再びグランドライン中央へと帰還を始めるのだった。

50話（後書き）

とうとうやってきました五十話目！！

まあ、といっても寄り道がかなり多いので実際はもっと言ってるのですが……。

この世界でのミホークはこんな感じですよ。もしかしたらとことんまで海賊を追い詰めるキャラなのかもしれませんが、それではお話が進まないの、彼はこんな感じになりました。

次回、彼から逃げ延びた海賊たちが何かを起こす！？

51話

トウヤたちが船の残骸を回収し、一晩ヘイゼルたちと楽しい時間を過ごした次の朝。

トウヤたちはさっさと荷物を引き払い自分たちの船に乗ろうとしていた。調査のためにやってきたとはいえ船はもう調査するところがないうえに、正体は大体知ってしまったているトウヤ。そんな彼がもうこれ以上この土地にとどまる理由などなかった。

「なんだい？もういつちまうのかい」

「昨日も言ったはずだ。俺は忙しいと」

見送りに来てくれたヘイゼルとエネルギーにそんな言葉をぶつけながらトウヤは船が出港しても大丈夫がドラム缶たちに調査させている。なにせあのピラニアみたいな魚たちは船の底すら食うそつだ。船底に海棲石が敷き詰めてあるからおそらくは大丈夫だろうが、念には念を入れたほうがいい。

そんな風に別れを惜しむ様子もないトウヤに苦笑をうかべながらヘイゼルは肩をすくめた。

「どうせ、ドフラミンゴと同じようならくでもない事業でもしているんだろ？だったらここに残ってのんびりしているほうが世のため人のためだと思うけどな」

「あんな変態と一緒にするな。俺はいま世界を救うために働いているところだ」

「またずいぶんと大きく出たね」

大言壮語のくせでもあるのかい？そんなヘイゼルの辛辣な言葉にトウヤは肩をすくめて答えるしかなかった。まさか、これから先に起こる頂上戦争の結果を変えるための下準備をしているというわけにもいかないため、トウヤはそんな曖昧な返事をするしかなかったのだ。

だが……。

「トウヤー!!」

「どうしたロビン？いまドラム缶たちから送られてきている船の破損状況を見ているところなんだが……」

「それどころじゃないわ!!今すぐ甲板に上がってきて!!」

ロビンの切羽詰まった声に、さすがのトウヤもただ事ではないことを感じ取ったのかヘイゼルと軽口を交わしていた時の表情を引っ込め、船から下がった縄梯子を荒まじい速度で上り甲板に上がった。

「なにがあつた？」

甲板に降り立ったトウヤは鋭い瞳で、先に乗っていたエイゼンとロビンを観察する。二人は硬い表情で机に広げられた新聞を見てる。

「とうとう……始まったわ」

ロビンのその言葉で、トウヤは大体何が起こったのかを理解した。

彼はゆったりとした足取りで新聞のほうへ歩み寄り、それを手に取る。

『《火拳》のエアス捕まる！？公開処刑決定。新たな王下七武海に《黒ひげ》マーシャル・D・ティーチ就任』

新聞の一面を大きく飾っていたその文章に、トウヤは……。

「はっ！！」

凶悪な笑みを浮かべて、新聞を握りつぶした。

なるほどなるほど……。ようやくか。

いまさら慌てるようなまねはトウヤはしなかった。すべてはこの時のために準備を進めてきたのだ。本来なら完成させるためには三年はかかる組織の設立をたった三か月ですまし、この世界に無かった概念、超能力を洗脳じみた技術で強制的に覚醒させ、こっそりとひっそりと……世界政府にばれないように水面下で戦力を集めておいた。

準備はもうすでにほとんど完了している。頂上戦争に参戦する戦力がもう一人ほしかったところだったのだが、まあなくても十分いけるだろうと、トウヤは自分たちの仲間を見て確信している。

そう準備はすでに終わっていたのだ。あとはことが始まるのを待つばかりだった。その時がようやくやってきた！だからトウヤは不敵に笑ったのだ。

「ロビン。ロレン達に撤収の連絡を入れておけ。ことが始まった以上、世界政府も俺が革命軍と同盟を行っているとしても頂上戦争が終わるまで俺には手を出さないはずだ。だから、あの契約書の回収はそこまで急ぐ必要はなかった」

「了解。集合場所はどつする？」

「海軍本部でいいだろう？いまさら集まって秘密会議もくそもないからな。エイゼン。器が凧れていない段階でこんなことを頼みむのは心苦しいが、悪いが一緒に戦争に参加してもらつぞ」

「あいわかった。武人として戦う場が与えられることは名誉なことどつぞ」

またハンコック殿に会えるどござろうしな。

へらへら笑いながらあの絶世の美女との再会を楽しみにするエイゼンを見てトウヤは苦笑をうかべた。戦争に参加すると言ったのにまったく気負いが見えなかった。しかも、無理をしてそんな風にふるまっているようには見えない。この戦争で自分が死ぬことなど、微塵も考えていない。そうなるだけの絶対的な自信を持っているのだろう。

まったく、頼もしい男だ。

トウヤはそう思いながら、袖口から取り出した剣の形をしたキーホルダーに話しかける。

「お前にも久しぶりに働いてもらつぞ。お前を使うのはあの陰陽師と喧嘩をした時以来だったか？なまっていないだろうな？」

トウヤのその言葉に、キーホルダーは何も言わない。しかし……
どろいうわけか、そのキーホルダーはトウヤに話しかけられると同
時に圧倒的存在感を放ち始めた。

すべてをたたきつぶすという意思があるといわんばかりに、凶悪
な存在感を発するキーホルダーにトウヤは肩をすくめた。

「愚問だったみたいだな」

そして、トウヤたちは出向の準備を早急に終え海軍本部に向かい
出港しようとした。

しかし、

「ちよいと待ちな!! 私もつれていけ!!」

見送りに来ていたヘイゼルから発せられた大声に、トウヤたちは
少し驚きながら船の出向を止めてしまうのだった。

…
…
…
…
…
…
…
…
…
…

北極島。ヘイゼルの家付近の海岸。

普段は静かにペンギンたちが子育てをする場所なのだが、今日はずいぶん騒がしい声とその海岸に響き渡っていた。

まるで嵐の直撃を受けたかのようなボロボロの船がこの海岸に漂着していたからだ。

そのマストに掲げられているものは漆黒の旗に髑髏のしるし。海賊旗だ。

「クソツタレ……いきなりあんな怪物に出会うなんて」

「あ、あれは悪魔の実の能力でしょうか？」

「あたりまえだろうが！！あんな化け物じみたまねが普通の人間にできてたまるか……！」

そんな風に疲れ切った声音で、ささくれ立った雰囲気醸し出しながら船から降りてきた海賊たちは、海岸にテントを立てあたりを物色し始めた。

ぼろぼろにされてしまった船の修繕に使えるものはないか？逃げる際に少しでも速度を上げるため、投げ捨てた食料や荷物の代替品はないか？それらを探すために、男たちは血眼になってあたりの捜索を始める。

なぜこんな危険な海域を男たちが超えることができたのか？それは普段のヘイゼルの行いが関係している。

実はこの島にやってきた当時、ヘイゼルは建てた家に近い海から海王類を取ってきていた。しかし、そんな怪物が常駐する海に生物たちが住むわけもなく、命の危機を本能的に察知したヘイゼル家近海の生物たちはみなほかのエリアに逃げ出しているのだ。

そのため、ヘイゼル家近海はカームベルト級の生態系を持つこの海の中で、凶悪な生物がない唯一の安全地帯となっている。ヘイゼルがわざわざ遠くの海岸まで足を延ばして漁をしているのはこれが理由だったりする。

閑話休題。とにかく男たちは特になんら被害を受けることもなく北極島近海を超えることができた。

そして、彼らは発見してしまう。絶対にふれてはいけない人物の家を……。

「船長！！あそこの崖の上に家があります！！！」

「はっ。運が向いているみたいだな。よし……この島にはだれかすんでいるみたいだからあの家の門全部盗み出した後、搜索を行うぞ！……とつつ構えて搾り取れるだけ搾り取ってやる……！」

「……へい……！」

海賊たちはようやく見つけた希望にすぎないように家に向かって駆け出していく。このあと、すさまじい地獄が訪れることも知らずに……。

……十……十……十……十……十……十……

「何のつもりだ？ヘイゼル」

「私は元海軍大将だよ！！助けに行くに決まっているじゃないか！！」

冗談じゃない。トウヤはそう思いながら眉をしかめる。

海軍の戦力がこれ以上増えるのは望ましくない。いまでさえ若干（一名だけだが）人数不足なのだ。元海軍大将なんてものが参戦してきたらおそらく一方通行と一緒でもどうなるかわからない。

しかし、ここで断るのもまずかった。今の段階ではトウヤは世界政府側……。その手伝いをしてくれるといってきたヘイゼルの申し出を断るのは明らかに不自然だった。

戦争中にへんなやつかみを受けるのもまずい。戦争の協力を疑われてしまったら……。俺の計画は破たんする。少なくともやりづらくなることは必至だ。

さてどうしたものか……。

トウヤが、そんなことを考えながらなんとかヘイゼルを口先三寸

で丸め込もうとした時だった。

「白ひげとの戦争なんて何考えてんだい、あのぼんくらどもは!!
そんなことをしたらろくでもないことになるのは必至に決まってい
るじゃないか!!」

「……ん？」

今、頂上戦争を全否定する言葉が聞こえた気がする……。

トウヤは若干首をかしげながら、ヘイゼルにもう一度話を聞くこ
とにしてみる。

「ヘイゼル。お前どっちの味方だ？」

「海軍」

「何のためにたたかう？」

「世界平和のために決まっているじゃないか？」

「じゃあこの戦争で何をする気だ？」

「火拳のエースの救出」

「……？」

何やら目的と行動がかみ合っていない気がするの俺だけか？ト
ウヤがそんなことを考えながら固まっているのを見かねて、ロビン
が助け舟を出してくれた。

「要するに、あなたと同じことを考えたということじゃないかしら？」

「は？同じこと？」

ヘイゼルはそういつて首をかしげたが、トウヤはようやく納得したのかポンと手をたたいた。

「ああ、なるほど……。つまり、ヘイゼルは俺と同じように『現段階で白ひげのという抑止力を失うくらいだったら、火拳を逃がしたほうが世界平和のためになる』と考えたと？」

「え、つてことはあんたもかい？」

「まあな」

まさかこんなところで俺たち転生者組と同じ考えをする奴がいるとは思わなかった。この世界も捨てたものではないところだろうか？トウヤはそう思いながら、にやりと笑った。もしかしたらこれはチャンスかもしれないと。

「ヘイゼル。お前は本気でたった一人でエースを救えると思っているのか？」

「うっ……。そりゃあ、まあむずかしいだろうけど……。なんとかするぞー！」

なるほど。現段階では無理ということとは理解しているということ、勢いだけのバカというわけでもなさそうだし……。条件としては

ぴったりだ。なにより、元海軍大将というネームバリヤーがあるがたい。まず間違いなく何人かの七武海を超える実力を持っているはずだ。

「なあヘイゼル。だったら……」

「なんだい？」

「俺と一緒に来い。時代が変わる瞬間を見せてやる」

不敵に笑いながら、凶悪に笑いながら、トウヤはヘイゼルに向かって手を差し出した……。

…
ナ…
ナ…
…
ナ…
ナ…
…

「まったく……ヘイゼルさんにも困ったものだ」

カモメから新聞をもらったと思ったら突然トウヤさんたちの船に登っちゃうし、そんで出てきたと思ったらちょっと海軍本部まで行ってくるなんて言うってくるし……。

ちょっと荷物を取ってきてくれ！とヘイゼルに頼まれたエネルギーはそんなことを考えながら、家への道をのんびりと歩いていった。本来の彼なら雷速で移動でもするのだろうが、あいにくと彼は能力の使用法を忘れてしまっている。だからこそその徒歩であった。

「それにしてもちすぎでしょう、この荷物は……。トウヤさんに迷惑をかけなければいいんですが……」

ヘイゼルから渡された荷物一覽に書かれているとんでもない量の物品に、エネルギーが顔をひきつらせた時だった。

突如として突風が吹き、エネルギーが持っていたメモが吹き飛んだ！！

「あ、まって!!」

エネルギーがそういって、かなり焦った顔でメモを追いかけてようとした時だった!

「船長!!人間が見つかりました」

「よっしゃ!!殴りつけてふんじばれ!!」

突然背後から異声が聞こえ、エネルギーが振り返ろうとした時だった。

とんでもない速さで振るわれた棍棒がエネルギーの頭を強打、彼の意識を刈り取りその頭を雪原に強かに打ち付けた!!

「よっしゃ!!身ぐるみはいで拷問しろ!!何か情報を持っているかもしれないねえ!!」

「へい!!」

当然エネルギーを襲撃したのは漂流してきた海賊たちだった。しかし、彼らはどうしようもなく不幸だった。まるでミホークから逃げられたことですべての運を使い切ったかのように……不幸だった。

彼らの不幸その一は……あのエネルギーの攻撃が有効に決まってしまうことだろう。

ロギアであるエネルギーに攻撃が有効に決まってしまうのはある理由がある。エネルギーが記憶を失い能力の制御法と種類を忘れてしまった状態で、初めて接触した人間はあのヘイゼルだった。彼女はロギアだろうがなんであろうが、覇気を使い平然と攻撃をバンバン当て

てくる。そんな彼女と出会ってすぐに一緒に過ごしてしまったエネルギーは自分が、実体がない自然ロギアではなく実体のある超人パラミシアだと思い込んでしまったのだ。そのため、エネルギーは自然現象になつて物理攻撃をいなくすという機能に致命的障害をきたしてしまい、そういったことができなくなつてしまつていたので。

不幸その二は……殴りつけた場所。せめて肩や腕だったら、まだ違う結果になつたはずだ。

そう。彼らはよりもよつて頭を殴りつけてしまった。記憶喪失者の頭に強かな衝撃を与えてしまつたのだ！！

そして……悲劇は起こつた。

「さあて……この男の目を覚まさせる！！俺たちにはもう後がねえんだ……！」

「へい……！」

男たちはそういいながら、縄でぐるぐる巻きにしたエネルギーの頬をたたき目を覚まさせようとした。しかし、

「そう、騒がなくなるとも起きている」

傲然と、あっさり……まるですべてを見下すかのような声音で、目を覚ましたエネルギーは男たちにそういった。

「はあ……！だつたら話が早くて助かるぜ……おいこら……！これがわかるな……！」

そういつて海賊の船長は自分が持った刀を得ネルに見せつけるようにかざす。しかし、エネルギーはさもつまらないものを見るような視線で船長を見つめ……嘲笑を浮かべた。

「で？」

「で？じゃねえぞ、こら！！命が惜しかったらためえが知っているこの島の情報すべてよこせつつつてんだよ！！」

船長の言葉に、エネルギーはクククと笑いながら縄に縛られた状態で立ち上がった。

「神をおどすというのか？」

「神？なにをいって……」

エネルギーが最後にそうつぶやき、船長がえも言われぬ悪寒を感じた時だった！

「不届き」

突如エネルギーについていた太鼓が雷のトリへと変化し、船長を貫き黒こげにした！！

「せ、船長！？」

「3000万V雷鳥ヒノ！！」

黒こげになって倒れる船長に駆け寄る男たちを睥睨し、エネルギーは自分を縛っていた縄を雷で焼き切る。それを見て男たちは剣に手を

かけ、がたがたと震えながら必死にエネルギーを牽制しようとした。しかし、今のエネルギーにはそんなものは見戯にも等しい行為だった。

「エル・トール神の裁き」

腕を極太の閃光に変化させたエネルギーは、その光をもって海賊たちを跡形もなく消し飛ばす。

海賊たちは悲鳴を上げることができず、その命に幕を下ろした。

そして……。

「ふむ……ここは青海か？とりあえず近くに、人間が四人いるようだ。そいつらに話を聞くとしよう」

ヘイゼルとの日常を忘れ、そして神としての自分を思い出したエネルギーは、傲慢な笑みを浮かべて心綱マントラが感じ取った人々のもとへと雷となって移動を開始するのだった。

この島に……本当に意味で神が降臨した瞬間だった。

51話(後書き)

眠れる獅子……もとい神、目覚める!!

52話

しばらく前にあネルを送り出した船の上では、トウヤがジトツとした目になってヘイゼルを見つめていた。

「……なにさ？」

「いや。神を顎で使うお前に愕然としていただけだ」

あと付け足すとするならエネルギーの変わりように。少なくとも誰かのお願いを聞くようなやつではなかったのだが……。

原作キャラがあれだけギャップを持って現れるとこんなに気持ち悪いものなんだな。などと、結構ひどいことを考えながらトウヤはドラム缶が集めてきた船の破損状況をまとめて、治してほしいところに修復プログラムを張っていく。それに従いドラム缶たちはごろごろと足元についたローラーが何かを転がしながら、船尾や甲板にかけていった。

「それにしても一体なんだい？あの円筒状の動くものは」

「企業秘密」

「へ〜」

トウヤのしれっとした答えに三白眼になるヘイゼル。こいつなめてんのかといわんばかりの視線をトウヤに向けてきていた。

「話さないとドクターベガパンクにこのこと話すよ」

「シヤレにならない脅しだな。あんな天才に知られたらなにされるかわかったものじゃない」

正直トウヤはあの科学者が苦手だった。人体改造とか平然とするマッドサイエンティスト……かと思えば、故郷では自分の発明によって人々が救えないと嘆いていたようだし……。いまいちキャラが掴みにくいのである。

ヘイゼルの脅迫を受けトウヤがそんな風に冷や汗をかいていた時だった。

ゴロゴロゴロ……。

雲一つない晴天の空に、どういうわけだか遠雷が聞こえてきたのだ……。

「雷？」

「雲もないのにそんなものが落ちてくるわけいだろ？」

「でも今のは雷の音だったよ？」

「そっぴわれてもな……」

ありえないことはありえない。ここはグランドラインではないのだから……。

「だとすると……」

「エネルギー……か？」

トウヤとヘイゼルが顔を見合せた時だった。

「プルプルプル……プルプルプル」

「トウヤ。電話よ？」

船のマストに取り付けられていた電伝虫が突如声を上げ、それに気づいたロビンがトウヤを呼んだ。

「わかった。いまいく」

「いったいなんだ？といわんばかりにめんどくさそうな表情で電伝虫に出るトウヤ。

「はいはい。こちら裏王下七武海」

『トウヤか？』

「モモンガか？いったい何の用だ？火拳のエースの公開処刑についてなら公文書を送って……」

『無事だったか……まあ、海賊ごときにお前がやられているとは思わなかったが、念のためと思ってな』

「は？」

予想していた話題ではなく少しだけ驚くトウヤ。そんな彼を無視してモモンガの言葉が続いていく。

『なんでも鷹の目が逃してしまつた海賊団がお前のいる島に向かっているそうなんだ。報告書に記載された時刻から見てちよつと今日あたりに漂流するところなんだが……』

「なんだ？そんな大した奴らなのか？」

『超新星ほどではないが……賞金額は全盛期のクロコダイルと同じく8100万ベリー。新進気鋭の若手海賊団だという話だ』

そこそこの実力者というわけか……。

「まあ、だが安心しろよモモンガ。この海に入って無事でいられるわけがない。ここに来るためにはドクターベガパンクが作った船と海軍中将与同等の力量が必要だからな」

トウヤがそういつて電伝虫との通信を切りかけた時、ヘイゼルが『あつ……』といつて、冷や汗をだらだらと流しながら固まつてしまった。

「どうしたヘイゼル？」

「えつと……入れるところ実はあるんだよ……」

「……」

トウヤはその言葉を聞きしばらくの間無言のまま固まつたが……。

「はあ……。モモンガ……。悪い。ちよつと用事ができたからきるぞ？」

『あ、おい!?!』

すぐに復活し、苦りきった顔で電伝虫との通信を切った。そして

.....

「詳しく、聞かせる?」

ちょっとした怒気を声音のはらませながら、トウヤはハハハと目をバタフライさせながらそらすヘイゼルを睨みつけた。

.....
+.....
+.....
+.....
+.....

それからしばらく経ち、ヘイゼルの家へと向かう進路上。そこをヘイゼルは《荊》を連続使用してとんでもない速さで移動していた。トウヤたちはそれぞれ違うルートを使ってヘイゼルの家へと向かう道すがら、海賊団たちが上陸していないか調べるらしい。

『とにかく……お前の話が本当ならさつきモモンガが言っていた海賊団がこの島に上陸している可能性がある。だとするとエネルギーが危険だ。あいつはいま能力のほとんどを使えなんだからな』

脳裏に響き渡るトウヤの言葉を思い出しながらヘイゼルは、唇をかみしめた。もしそんなことになっていれば、完全な失態だ。悔やんでも悔やみきれない。

本当なら真つ先に安全地帯を思い出しトウヤたちに教えるべきだったヘイゼル。しかし、彼女の頭は残念なことに残念な感じだった。つまりはバカだった。

ガープの教え子ということからもわかるように、正直彼女はあまり細かいことは覚えられない性分で、大半のことは忘れてしまう。現役時代では『赤犬に本名なんてあったのかい!?』なんて本気で言ってしまった、サカズキと殺し合いをしたぐらい、記憶力が悪いの

だ。

だが、しかし……今回のことは忘れるべきではなかった。忘れてはいけなかった。居候の命がかかっているというのになんてさまだ。元海軍大将の名が泣く……。

深い自責の念に駆られながらそれでもヘイゼルは足を止めない。もしかしたら、まだエネルギーが無事かもしれないから。

海賊団なんてもとから上陸していない可能性だってある。むしろそちらのほうが可能性としては低いのだ。エネルギーが使ったからといって何か緊急自他が起きたと決まったわけでもないのだから……。そうだ、何事もハッピーに考えよう。そうしなくては……。救えるものも救えない。

現役時代の経験からそのことを知っているヘイゼルは必死に自分そう言い聞かせた。

そして……。

「なんだいこれは？」

彼女は黒こげになった死体と、とんでもない熱量で溶かされたと思われる、氷原にできた強大な水たまりを発見した。

「こいつは……よかった。エネルギーじゃないみたいだね」

ヘイゼルは一応死体を確認してみたが、エネルギーにしては身長が低すぎるしあの特徴的に耳や雷太鼓が見当たらない。だが、逆に言えばヘイゼルが知らない人間がこの島に上陸している証拠に他ならな

かった。

「やはり来ていたみたいだね……海賊団。エネルギーは無事だといいいんだけど……」

ヘイゼルはそういいながら検視が終わった死体をペイッと地面に捨てた。あいにくと彼女には死者を弔うという感性が無かった。海軍に所属している間に人死にを見すぎていたし、何より相手は海賊だ。どこでのたれじのうが本人たちにとっては承知の上だろう。

そんなことよりも、問題なのはこの海賊だどうして死んだのかということだ。黒こげになっていてわかりにくいがおそらく死因は火傷の痛みによるショック死。つまり、炎熱系のなんらかの攻撃を受けた可能性が高い。

この島にはそんな能力を使う動物はいないし……トウヤたちもそんな攻撃手段は持ってないだろう。というか、氷原で人を殺そうと思うのなら、トウヤはそんな面倒なことはしないだろう（あくまでもヘイゼルの勘ではあるが）。水をぶっかけてやれば勝手に凍死してくれるのだから……。

「仲間われ……。かな？」

だとしたらどうして？

首をかしげながら、無い知恵をしばらくながらヘイゼルは考え込んだ。しかし、彼女はもう一つの可能性に至らない。普段のエネルギーを知っているため……神のエネルギーを知らないため……彼女はもう一つの結論に至ることができなかった。

そして……。

「ヤハハハハ。人間……少し聞きたいことがあるのだが？」

彼女は神に出会った。

…
十…
十…
…
十…
十…
…

突如虚空から出現したエネルギーに、ヘイゼルは少し驚いたような表情になり……。

「なんだい……。無事だったのかい」

ほっと安堵の息をついた。

それもそうだろう。危険にさらされていると思っていた居候が五体満足で現れたのだ。目の前で起こった不思議な現象よりもまずはその無事を喜んでしまった彼女を誰が責められようか……。

しかし、エネルギーはそんなヘイゼルの態度を見てスッと目を細めた。

「きさま……」

不届き……。そういおうとしたエネルギーに背を向け、ヘイゼルはエネルギーの手を取り引っ張った。

「まあ、話は後で聞くよ。いまはトウヤのところについていな。この島に海賊が来ているらしくてね……」

「海賊？」

エネルギーはその言葉を聞き、自分の雷撃が効かなかったあの忌々しい青海人の顔を思い出した。

『何一つ・・・！！！！救わねエ神が、どこにいるんだア！！！！！！』

『テメエが神？そいつはすげえな、おい。だがよお、テメエがどんな理由を並べたところで、それでスカイピアの人々が殺されて良い事になんかならねエだろオがよ！！エええネルくウウウウウウウウン！？』

「あの忌々しい男達の同族か！？」

「はい？なにをいって……」

ヘイゼルがエネルギーが突然つぶやいた言葉に不思議そうにふりむいた時だった。

「サンゴ稲妻」

雷となったエネルギーの右腕が、ヘイゼルの体を貫いた！！

「え？」

信じられないとばかりに、見開かれたヘイゼルの目を、エネルギーは絶対零度の瞳でねめつけた。

「忌々しい青海人め。神におぞましくも腹立たしい記憶を呼び起こさせたこと……万死に値する」

「あなた……記憶が!？」

ヘイゼルの言葉はそこまでだった。

「2000万V放電^{ヴァレリー}!！」

「がああああああああああああああああああ!？」

体を貫いた雷撃からさらに大量の電気が流し込まれ、ヘイゼルは苦悶の表情のまま倒れこむ。

「神を裁きを受けよ……」

「この……恩知らずが……」

ヘイゼルが最後に怒りの言葉を呟いた瞬間……天から降り注いだ雷の柱が、ヘイゼルを直撃!彼女がいた場所に巨穴を作り出し氷の下の海まで貫いた!!

「ふむ……。この島で動いている人間の残りは海賊だな?ならば少

々……私のいらだちをぶつけるとしよう
「

エネルギーは最後までヘイゼルのこと振り返ることなくその場を去った。まるで北極島での日々がなかったかのように……。。

52話（後書き）

一方通行くれたあああああああ！？

というわけで原作よりにキャラを変えてみました。

いったい彼の旅路に何があったのか！？

それは……神のみぞ知る！！

ヘイゼルは生きているのかって？それは次回のお楽しみ。

53話

ゴロゴロゴロゴロ……。

はるか彼方から響き渡ってきた遠雷の音に、トウヤは思わず眉をしかめた。

「これほど連続して能力を使用するとは……まさか、エネルギーが復活したのか？」

その時!!

「!？」

背中に氷を突っ込まれたかのような寒気が走ったトウヤは、即座にその場所から飛びのいた!!そして、そのことがトウヤの命を救った。

虚空から電気をまといながら現れた男が、右手をトウヤに向かって突出し電撃を放ってきた!

「2000万V放電!!」
ヴァリー

ほとばしる電撃を片手で受け止め圧縮保存するトウヤ。突如現れた襲撃者はそれを見ながらも余裕の態度を崩さず片手にもった黄金の槍をトウヤに突き付け、傲然と言い放った。

「神!!降臨!!」

「やっぱりかよ……」

考える限り最悪の事態に、トウヤは思わず顔をしかめ、煙草に火をつけた。

……
……
……
……
……
……
……
……

突如現れたエネルギー。トウヤはそれを煙草の煙をくすぶらせながらじつと睨みつけた。いや……その一挙手一投足を見逃さないように丹念に観察していたというほうが正しいだろう。

相手は雷速で動く怪物だ。一瞬のスキが命を落とす原因となりかねない。

「おいおい……おねんねの時間はおしまいか？神様」

まずは状況確認。エネルギーが一体何を覚えて何を忘れているのか調べる必要がある。

そう考えたトウヤは、槍を構えてにやにや笑っているエネルギーに軽い言葉のジャブを放った。

「……何を言っている貴様？」

トウヤの言葉に意味が分からず首をかしげるエネルギーを見て、トウヤは大まかな仮説を立て思考する。

さっきの反応からすると記憶がなくなった時の記憶はないようだ。神の記憶と入れ替わったか？ということはヘイゼルの技や俺たちの技に関しても忘却しているはず。

「とまあ……ここまでは読めるだろう？自称神様」

「きさま……心綱シマツナを知っているのか？何者だ」

先ほどのような傲然とした様子は完全になりを潜め、警戒心もあらわにトウヤを睨みつけてくるエネルに、トウヤは不敵に笑いながらこういった。

「なあに。通りすがりのトレジャーハンターだ」

…
…
…
…
…
…
…
…
…
…

「さて……自己紹介が終わったところで、神様。どうしていきなり俺にケンカを吹っ掛ける？俺は何もした覚えがないんだが？」

トウヤはくわえ煙草のままエネルギーにそう問いかけた。

本来ならば……エネルギーを見た瞬間すぐに抹殺行動に移らなければならなかったのだろうが、トウヤはそこまで沸点が低くなかった。

戦わないならそれに越したことはない。何せ相手は青海に入りれば五億はくだらない怪物だ。戦闘になればそれ相応の被害を被ることになる。

おまけに此処でトウヤが討たないといけない理由も希薄だ。青海には空島と違い『王下七武海』という単体で軍隊を相手取れる怪物たちや、『海軍本部』という圧倒的兵力組織、『四皇』という生ける伝説までいるのだ。ここで討たなければそれなりの被害は出るだろうがあくまでそれなり。ここでトウヤが負傷し、頂上戦争に参戦できなくなりよりかは被害は低いだろう。

何より……ここには『元海軍大将』がいるのだ。トウヤが無理をして戦う必要は皆無といってもいいだろう。

だからトウヤは、まず話し合いの席を設けようとした。時間稼ぎするにしても不干渉を貫くにしてもまずは対話からだ……。

しかし……。

「神と交渉をしよういうのか？」

エネルギーの傲岸不遜な言葉が耳に入った瞬間、

「あ……オーケー。わかった。もういい。俺がバカだった……」

トウヤは即座に諦めた。

せめて狙われる理由ぐらいは知りたかったんだがな……。

トウヤはちよつとだけ遠い目をしつつポシエットからいくつかの球体を取り出した。

「某もののけの姫みたいだ……。神は神でも崇り神だな」

トウヤはそついいながら戦端を切り開く！

先手必勝などという考えなしな行動を支持するわけではないが、一撃で決められるならそれに越したことはない。こいつとはあまり長い時間戦うのは不利だからな。トウヤのように必勝の手順を考えながら試行して戦う人物にとって思考を読まれているというのは致命的だが……。

「ゴムの小僧でも勝ったんだ。攻略法は必ずある、そうだろ？ エネル……！」

「!？」

そして、トウヤのポシエットから投げ捨てられた土色の球の圧縮が解放され、エネルギーに土石流となって襲い掛かった！！

「これは！？ ヴァス 大地か！！」

「土に電気は通電しにくい。これを喰らえばいくらおまえでも無事では済まないだろう！！」

トウヤがそついうと同時に、土石流はエネルギーを飲み込みすさまじい轟音を響き渡らせる。だが……。

「貴様はどうやら私の能力を知っているようだな？ だったらわかっているだろう？ 雷を捕まえることはできない……」

「はったりも大概にしろよ。麦わら帽子の小僧に負けたくせに」

「……不屈き！！」

いつの間にか後ろに回っていたエネルギーは、さげすむような笑みをトウヤに向ける。しかし、その程度はトウヤも織り込み済み。逆に不敵な笑みを浮かべたままエネルギーを挑発しかえした。結果、エネルギーは明らかに怒りをむき出しにして背中 of 太鼓を一つたたき電撃をトウヤに向かって解き放つ！！ 精神強度がかなり低い。プライドが高すぎるため激しやすいタイプか？

エネルギーの行動から思考パターンを推察し、次の攻撃を予測するトウヤ。そして、エネルギーは予想通りそれなりに威力の高い雷撃をトウヤに向かって放ってきた！

「3000万V雷獣^{キテン}」

しかし、

「なるほど……」

トウヤはそれをあっさりを受け止め圧縮保存。まるで電撃などなかったかのように平然とそこに立っていた。

本来人間には到底反応できない速度の攻撃である電撃をトウヤが防ぐことができたのは、理由がある。エネルギーの攻撃が本当に雷速ならばトウヤは到底反応することはできずにあっさりと黒こげにされていただろう。しかし、いくらとてつもない速度を持つ雷を操るとはいえ、操っているのは人間だ。しかも、エネルギーが操る雷は彼の意思によって統制され変形されている。そうすることによって本来、雷が持つはずの速度をエネルギーは殺してしまったのだ。それこそ、トウヤが反応できる程度に……。

これなら黄猿のレーザーのほうはまだ怖い。

「ほう？超人系能力者か……」

「ニギニギの実という」

いつものような嘘をつきながら、トウヤは即座に精神の一部に口ツクをかける。まあ、大仰に言ってみたが要するに軽い自己催眠のようなものである。

マントラ……見聞色覇気は完全に心が読めるわけではない。それは悪魔の実の能力ほど力の強くないからだ。神官たちしかり、エ

ネルしかり……トウヤが知る原作で見聞色覇気を使える人間たちはすべてのことが読めていたわけではなかった。そのことは女ヶ島でもきちん確認を取っており、心の奥深くに秘めてしまえば、いくら見聞色の使い手だろうとその考えを読むことはできないそうだ。

そうでなければあのゴルゴン三姉妹が、島の住人全員が覇気を使いこなす女ヶ島で秘密を隠し通すことはできなかつただろう。

もつとも、見聞色が使える人物は自分の覇気を使って相手の見聞色をジャミングできるようだが……。

それにしてもやりにくい……。知られたくない秘密にはいちいちこんな風にロックをかけなくてはいけないのだから……。

トウヤもロビンのように覇気を使つてのジャミングができたら話は違ってきたのだろうが、あいにくと超能力者は覇気を含めあらゆる異能の使用を封じられる。専門分野での圧倒的高出力を目指したための弊害だ。

「む？貴様……マントラを防ぐ手立てを持っているのか？」

トウヤの思考を覗き、その一部が読み取れないことに気づいたのだろう。少し眉をしかめながらトウヤを睨みつけ、数本の電撃を放つエネルギー。

「わざわざ『はい』って、答えると思つていいのか？」

エネルギーのおそい雷撃を、まるで踊るようなステップでかわしながらトウヤはパワードスーツのスイッチを入れ一気に加速。エネルギーの後ろのまわりこんだ！！

「な!?!」

「雷速で動けるといっても反応速度は人並みか……。まあ、麦わらの小僧との戦いで大体予想はしていたが……」

でなければ、こいつがルフィの攻撃を喰らうわけもないし戦闘でマントラを使う必要もない。雷のような反応速度を持っているのならあらゆる攻撃など止まって見えるはずだからだ。

「きさま……なんだいまのは!? ジェットダイヤルを使ったわけでもないのに、なぜそのような速さで動ける!?!」

「自慢の心綱マントラとやらで、読んでみたらどうだ神様?」

トウヤはそれだけ言うと、再びポシエットから球を取出し、エネルギーに向かって投げつけた。

「吹き飛ばべ!?!」

「!?!?」

トウヤの言葉とともに、圧縮から解放され放たれる爆炎。それは桃源郷で黒ひげと戦ったときに使った水素と炎の結合爆弾。

「な!?!?」

エネルギーは絶叫を残すことすら許されず、その炎にのまれる。

しかし……。

「2億ボルト・雷神^{アマムル}」

エネルはその爆炎の中央から荒まじい放電を行い、その炎をはねのけた！！

炎の中から現れたエネルは全身を雷へと変換し、巨大化している。その姿はまるで神話に出てくる雷神のようだ。

「私に炎はきかん。ロギアをなめるな……」

「参ったな……。あいつの攻撃は決め手にならないが……。俺にも決め手がない」

これは膠着した戦いになるか……。

この戦いの先を考えながらも、トウヤはポシエットから次なる手札を取り出し、戦いの構えとるのだった。

…十…十………十…十…

北極島。 エネルにあけられた海まで続く大穴。

そこからひよっこりと海王類が顔をだし、地面に向かって何かをペツと吐き出した。

吐き出されたそれはムクリと立ち上がり、自分についた唾液を普段から防水加工をして仕舞ってあるタオルを使いぬぐいとる。濡れたまま氷原を歩くのは自殺行為だからだ。

「ありがとう。助かったよポチ。あんたを殺さずに飼いならして置いて本当によかった」

『ガウ………』

53話(後書き)

初期投稿より多少修正しました。

54話

天空を走る数条の雷。

我は神なり！！その言葉を体現するかのごとく、巨大化したエネルの雷撃をトウヤはパワードスーツと、長年鍛え上げた格闘術のステップで何とか回避していた。

「まったく……。神様がこんな小蠅相手にずいぶんと奮発してくれる。感謝の涙が流れてきそうだ」

「減らず口を……。ならばさっさと神の裁きを受けるといい！！」

攻撃が全く当たらないトウヤにいら立ちが募ったのか、エネルギーは右手を上げ、天空に巨大な雷の柱を召喚する。

「エル・トール神の裁き！！」

しかし、それも雷速には到底及ばない制御された雷。トウヤにとつては何ら脅威にもならない。

トウヤは上から降り注ぐそれに片手を向け、それをあつさり掴み取り圧縮保存。自分の新たな切り札としてポシエットに放り込んでおく。

頂上戦争で使える手札が増えるのはうれしいが……。やっぱりこいつの相手は面倒だ。

内心でそんなことを考えながらトウヤは無言のまま、巨大化した

エネルギーに手を向けた。

「なんのまねだ？」

「いや……。でかくなつた分動きが遅くなつていないかと……」

そして、トウヤは無言で、素早く能力を発動し空間を握りこんだ
！！

「エリアクローズ空間握り！！」

瞬間、トウヤの右手に今までエネルギーが立っていた空間が握りこまれ圧縮保存される！！

しかし、残念なことその中にエネルギーの姿はなかった。

「それがきさまの奥の手か？」

「ああ……雷のあなたには通じないだろうから使いたくはなかったんだが……」

何事も希望を捨ててはいけないだろう？

そんな軽口をたたくトウヤの後ろに、いつの間にか移動していたエネルギーは、その拳を振りかぶりトウヤに向かって神の裁きを解き放とうとしていた！

「いい加減学べよ小僧……。その攻撃は俺にはきかない」

しかし、その程度なら予想の範疇。トウヤは無言のまま左手を天

に上げ降り注いだ雷の柱をあっさりと掴み取り圧縮保存した。

「忌々しい両腕だ!!」

「失礼な奴だな。これほど主思いの両腕は世界中探してもどこにもないぞ?」

トウヤに攻撃を再び防がれるのを見て、毒を吐くエネルギー。それを笑いながら切り捨てるトウヤ。

雷の巨人と、異世界の超能力者は異常なまでの正反対な態度で戦いに臨んでいた。

しかし、トウヤの笑みは余裕から生まれるものではない。やせ我慢から生まれるものであった。

『やっぱり……。こいつ俺の苦手な攻撃に少しずつ気づいてきている。ルフィにとの戦い時も空島にはないゴムの特性を数分で見抜いたやつだ。頭は悪くないだろうと思っただけ……。早すぎる』

雷の狙いが甘くなっている。枝分かれがいくつもするようになってきた。そして何より……。速度が違う!!

『おそらく黄猿と同じように、能力は出すだけにして出した後の制御を捨てている。ランダムに降り注いでくるっただけでも厄介なのに、制御から外れてしまったら完全にエネルギーの雷撃は……』

「雷速を取り戻す……か?」

「!?!」

読まれた!?

エネルギーの攻撃がどんどん鋭くなってきていることに、気づかない間に焦っていたらしい。絶対に読まれてはいけない思考を読まれてしまいトウヤは思わず顔をゆがめ舌打ちをした。

「ヤハハハハハ! ! どうやら正解らしいな。お前が苦手なのは火力の高い攻撃ではなく……尋常ではない速度で襲ってくる攻撃か! !」

「つぶれる! !」

トウヤが苦手としている攻撃をつかんだことがよほどうれしかったのか、エネルギーは完全にトウヤから目をはなし、天に向かって高笑いを響かせた。

当然トウヤがそれを見逃すはずもなく、ポシエットから取り出した小石を天高く投げつけ、その圧縮を解く! !

すると小石は見る見るうちに巨大化し、巨人化したエネルギーと大体同じ大きさになったではないか! !

「ある島で見つけたただの石……。純度の高い絶縁体の雲母で構成された岩石だ。お前の雷撃もこれには効かないだろ?」

「そうかな?」

まるで隕石のように頭上から降ってくる巨岩を見つめながらも、エネルギーは傲慢な笑みを浮かべたままその石に電撃を放つ。

「知っているぞ？ たとえどれだけ純度の高い絶縁体で構成されている大地の固まりであつても、そこには必ず微量の伝導体が含まれている。そこに重点的に電気を流し込んでやれば……」

そして、エネルギーの言葉が終わる前に……何本もの雷をその身に受けていた石は真っ赤に灼熱しドロドロとその姿を崩しはずめた！

「電熱によつて石は解けてしまう」

戦いに拮抗が今崩れた！！

「クソッ！！」

溶岩の雨をその身に受けながらもへらへら笑っているエネルギーを見て、トウヤはそう毒付き、サツと踵を返して逃げの体勢に移った。これ以上の抵抗は無意味と悟つたのだろう。

それに……こいつに真剣に勝とうとするなら、頂上戦争まで温存しておくつもりだった《武器》を出さなければならなくなる。

エネルギーが相手とはいえ、こんなところで切つていいほど安い切り札ではないのだ。

しかし、

「逃がすと思つたか！！」

エネルギーは、当然それを許すことをしない。右手を巨大な雷に変換し、放出。制御もなにも受けていないその雷は本来の速度……雷速を持ってトウヤに襲い掛かった！！

「がああああああああ!？」

まるで網のように広がる雷の嵐。トウヤはそのうち一本を体に食らい、すさまじい衝撃と熱量……そして激痛に悲鳴を上げた!!

「ふむ……分散したとはいえ威力は落ちていないだろう。二億V放電^{ウツ}と名付けよう」

ぱたりと表現に倒れるトウヤ。エネルギーはその様子を見て満足げに笑い、その姿を人に戻した。

「死んだか？」

そうしてエネルギーはトウヤに、心綱^{マントラ}を飛ばし意識の有無を確認してみるが、意識はない。どうやら本気で死んだようだ。

「ヤハハハハ!やはり私は最強の力を持っている。あの麦わら帽子め……なにが下には私以上の力の持ち主がいるだ。やはり私こそが最強ではないか!！」

エネルギーはそういいながら一人悦に浸り、手に持っていた黄金の槍を椅子へと変形しその上に座る。

「さあて……。次はどいつを殺そうか？」

そんな物騒なことを呟きながら、エネルギーは能力との複合を使った広範囲心綱^{マントラ}を使い、島にいる人間たちを物色し始めた。

…
†
…
†
…
†
…
†
…
†
…

エネルギーが満足げに笑って去った後、氷原に倒れ伏していたトウヤはムクリと起き上がり、多少焦げ付いてしまったコートを見て舌打ちする。

「あゝあ。特注品のコートが黒焦げだ。それにしても……なまじ強力な能力を持ちすぎると、足元がお留守になりがちになるみたいだな。まあ、この世界の悪魔の実の能力は努力して手に入れたものじゃないからそれも仕方ないんだろうが……」

ボソツとそんなことを呟きながら、トウヤは心を読まれないように再び自己催眠を使って自分の心理をロツクする。

実はトウヤ死んでなどいない。というか、エネルギーがマントラで確かめられるのはあくまで意識の有無であって、人間の生死ではないのだ。だから原作でもエネルギーがたおした人物の大半が生きていたかのようにトウヤも意識を失いはしたが、死ぬまでには至らなかった。

体のコンディションは……最高とは言えないが、戦えないことはない。

一応体のあちこちを確認して調べてみても多少動くときにしびれを感じる程度で大した障害は残っていなかった。

「さすが特注品の防電コート。リリカに無理言って作ってもらったかいがあった」

実はトウヤが来ているコートは、各所にまっすぐ地面へと延びる鉄線仕込まれている《避雷針コート》なのだ。黄金の船の調査という依頼内容を聞いたトウヤが、エネルギー対策にと考案しリリカに作ってもらった奥の手の一つ。

実はこのコート、ロビンとエイゼンにも着用を義務付けており、制御されていない雷撃ならかなりダメージを軽減できる優れたものな

のだ。

「それにしてもあそこまで規格外とはな……。厄介な奴が下に降りてきたもんだ。おとなしく月にでもいつておけばよかったのに……」

大方、一方通行アクセラレータが何かをしたため、多少原作と歪んでしまいエネルは月に行けなかったのだろうが……。それにしてもしわ寄せがやってくる地点がピンポイントすぎる。原作崩壊も結構だが俺を巻き込まない程度にやってくれ。（一方通行アクセラレータからすれば、『だったらロビンを返せこら』といたいところなのだろうが……）

とりあえず命は助かった。コンディションもまだまだ大丈夫……。だが……。

「負けちまったな」

結構情けない。内心で自分の戦いの評価をしつつトウヤは少しだけへこんだ。この世界にきて『真剣に殺し合い』をしてしまった初めての黒星。

相性が悪かったとはいえ、もう少しやりようがあっただろう。異世界最強の名がなく。

そんなことを考えながらも、トウヤは袖口に隠しておいた剣のキーホルダーを取り出した。

「まあ……。俺は本気を出さないうえでの敗北だし……。完全な黒星というわけでもないだろう」

「ほう。それは聞き捨てならないな？」

「!?!」

その時だった、突如後ろから聞こえてきた声にトウヤは、少しだけ冷や汗をかきながらいつものように軽口をたたく。

「おいおい。他のやつら倒しに行ったんじゃないかねえのかよ?」

「私は貴様のようなしつこい奴に空島で痛い目にあわされたからな。敵の生死をきちんと確かめないと気が済まんのだ」

そこには、先ほどまでと同じように雷を体中にほとばしらせたエネルの姿があった。どうやら先ほどこの場を去ったのは完全なブラフだったらしい。

この俺がだまされるなんて……。少し平和ボケしてしまっただか?

内心で自分の勘が衰えていることを嘆きつつ、トウヤは仕方なく剣のキーホルダーを握りしめた。

「それにしても奥の手か……。これはゆゆしき事態だな。おまけにマントラで読んだ貴様の心には『必勝』の二文字しか見えない。つまりは……。その奥の手とやらを使えば確実に私に勝てるということだろう?」

もはや……。

「許されぬ事態だ。神を倒す武器など……。この世界にはあってはならない!?!」

出し惜しみなど言ってられない！！

瞬間、エネルギーの怒声と同時に放たれた雷撃は数千近く枝分かれをし、そのうち数本がトウヤへと襲い掛かりあたりに荒まじい熱量をもたらす！！

「ゼウス雷霆！！」

そしてあたりが数上記の煙に包まれる中、エネルギーは鋭く目を細めてその中にいるであろうトウヤを睨みつけた。

「それがきさまの奥の手か？」

「久しぶりだな……」カランドホルグ《斬島剣》

柄に埋め込まれた水晶体をきらりと光らせながら、トウヤの手におさまっていたはずの剣は刃渡り2メートル近い大剣となってエネルギーの雷を受け止めていた。

「リーチ圧縮限定解除 0・01%・長さ」

トウヤはそういつて剣をふるい、あたりに立ち込めていた霧を払う。

「俺の世界ではな……お前みたいな《エレクトロマスター電撃使い》っていうのは結構いたんだ。そのため武装をする人間はまず『電撃対策』を視野に入れて武器の発注を行う」

そういいながら、トウヤはいまだに吹き荒れる雷の暴風をあつさりとその剣で切り払いエネルギーの攻撃を無効化した。

「この件もただの金属ではできていない。あらゆる金属・合金に勝る強度を持ちながら……電気は一切通さない『絶縁体金属・ミスリル』によって作られている」

トウヤはそついいながら、剣をエネルギーに向けた。

「つまり……お前の雷はもう俺には通用しない。そして、お前の体ももはや不死身ではない。ゴムの小僧の攻撃はきちんと決まったんだろう？ だったら、この剣の攻撃もきちんと有効判定されるはずだ。お前はもはや……神ではない」

「っ！？ 不屈き！！」

トウヤの挑発に怒髪天を衝く勢いで怒り狂うエネルギー。そして、エネルギーが右手を雷に変換し、トウヤは無言で剣を正眼に構えた。ビリビリと互いの殺気がぶつかり合い、空間がぶるぶると振動していき、罅でも入るんじゃないかと思えるほどの緊張感があたりを包み込み始めた。

最終決戦。いかにもそのような雰囲気空間が醸し出し始める……
…そんな時だった。

「待ちな……」

その言葉と同時に、エネルギーとトウヤがって向かい合っている場所のちょうど中央に……とんでもない衝撃波が襲い掛かり氷の大地をたたき割った！！

「なっ！？」

「何事だ!？」

あたり一带に吹き荒れる衝撃波に、トウヤは剣を地面に突き立て耐えきり、エネルギーは全身を雷にしてやり過ごした。

そして、その衝撃波が止んだ時には……。

「そいつにお仕置きすんのは私だよ。手エ出すな。トウヤ」

翻る白地に正義と書かれたコート。

普段のだぼいかつこうではなく、ピシッとした黄色いスーツ。両手に輝くのは鋼の鉄鋼。

「お前が遅いからこんなことになっているんだろう? どうしてくれる。奥の手まで使ってしまったじゃないか」

「男ちつさいことでギャーギャー騒ぐんじゃないよこの唐変木が。これでも早く来たほうさ」

最後にいつもはつけていないメガネを押し上げ、元海軍大将は凶悪な笑みをエネルギーに向けた。

「助けてもらった恩も忘れ……恩人の顔すら忘れ……恩人との思い出も忘れた貴様は、もはやただの鬼畜外道」

突如現れた人物はそういいながら、ダンツと足を踏み鳴らす。

「ならば罰するは助けた私の務めだろうが!!」

最後に彼女……ヘイゼルは猛々しく啖呵を切る！

「元海軍大将・黄猿。ミユラー・D・ヘイゼル！！ 世界の広さを教えてやるよ。神様気取りの恩知らずが！！」

元海軍最高戦力。あの赤犬・サカズキが一度たりとも勝ちを拾えなかった世界最強の格闘家がようやくステージに舞い戻った。

54話（後書き）

主人公……エネルにあっさり敗北。

ちなみに最後あたりに出てきた剣ですが、トウヤは剣術を習っていないのでそんなにうまくは使えません。

本来、チャンバラをするためのものでもないですしね……。正式な使い方は頂上戦争で明らかになります。お楽しみに。

55話

「なんだ貴様。死んで無かったのか？」

「……」

明らかかな嘲笑を浮かべながら、ヘイゼルを見下したエネルギー。しかし、ヘイゼルはそんなこと一切無視しながら剣を片手に持っているトウヤを見つめた。

「あんたのほそっこい腕でよくそんなごつい剣がもてるね？ どうなっているんだい？」

「いろいろとトリックがあるんだよ。というか、今はそんなことどうでもいいだろう？ あいつをどうするつもりだ」

「はっ！！ 私がロギアっただけで最強になったと勘違いしているような青二才に負けるとでも思ってるのかい？ だてに海軍最強の看板背負っていたわけじゃないんだよ」

完全にエネルギーを無視した形で雑談を始めてしまうトウヤとヘイゼル。当然エネルギーがそんな屈辱に耐えられるはずもなく……。

「不届き！！」

額に青筋を浮かべたエネルギーは、太鼓を二つたたき雷を龍の形にして解き放った！！

「6000万V^{ジャムプウル}雷龍！！」

雷で構成された龍はエネルギーの命令をしっかりと守る。とんでもない速度でうねる体を振り回しながら、雷の龍はトウヤと雑談をしていたため完全に後ろを向いているヘイゼルへと襲い掛かった！！

だが……。

「ふん！！」

ヘイゼルはそれに反応し、鼻を一つ鳴らすと、片手を龍のほうへ突き出した。……それしかなかった！！

「おいおい大丈夫なのか？」

トウヤがそういつた瞬間、龍がヘイゼルの手に激突！あたり一帯に爆風をもたらす！！

「ヤハハハハハ！！ 一度負けた存在が神には向かおうとはいいい度胸だ。だがしかし、やはり神には……」

エネルギーがそう言いかけた瞬間だった。雷の熱量によって溶けた氷が水蒸気となってあたり一帯に漂っていたのだが、北極島の強風がそれを吹き払いヘイゼルたちの姿をあらわにしたのだ。……まったくの、無傷な状態で。

「？」

どこかで見たとような光景に嫌な予感を覚えつつ、しかし自身の能力の圧倒的な自信を持っているエネルギーはその可能性からわざと目をそらす。空島と同じ轍を踏む。

「や、ヤハハハハハ！ うまくよけたようだな！！ だが次の攻撃はよけられんぞ！！！」

ちよつとだけ冷や汗をかきながら、エネルギーは右手を雷に変換。トウヤを仕留めた技をもってヘイゼルを打倒せんとした。

「ゼウス雷霆！！！」

氷原に走る雷の嵐。ヘイゼルは手を突き出したまま無言でそれを受け止める。

再び発生する大量の水蒸気！！ しかし、その中で起こっている光景をエネルギーはしっかりと目撃した。数十近い雷がヘイゼルの真正面に激突し……衝撃波をもって水蒸気を吹き払いながら、まるで見えない壁にぶつかったかのように、消滅してしまうのを！！

「……………！？」

そんな、ありえない光景にエネルギーは目を向いた！！悪魔の実の能力の相性が悪いならわかる（ルフィみたいに）。もとより攻撃が効かないのならわかる（アクセラライタ一方通行みたいに）。だが、自分の攻撃を無効化するなどという規格外な光景を今までエネルギーは見たことがなかった！！

「別に驚くことじゃないさ。覇気を極めた海軍将校ならだれでもできる技術だ。海軍三大将がそろえば白ひげの衝撃波だって防げる代物なんだよ。あんたみたいな青二才の攻撃程度、受け止められないわけがないだろう？」

文字通り規格外。というか、大将ならわかるが将校までできるのかこれ？と、ちょっとだけ頂上戦争の先行きが不安になるトウヤ。彼はいつものように空間を掴み取り捻じ曲げることよっての空間移動を《雷霆》^{ゼウス}発動時に行っており今は少し離れたところでエネルギーとヘイゼルの戦いを観戦している。

完全に空気になった感が否めないが、まあ、今回の主役は俺ではないしなと自己完結。

そんな主人公を放置しながら、神と海軍最強の戦いは続いていく。

「さあて……お仕置きタイムだ!!」

「くっ!？」

というか……一方的な虐殺になる予感をトウヤは感じた。

…
…
…
…
…
…
…

その頃のロビンとエイゼンは……。

「これどうしましょうっ？」

「持ち主もおらんようだし……。もらっていくでいいわ」

入り江に停泊していた海賊船（残骸）の中から彼らが集めたと思われる財宝を見つけ、ささっと回収していた……。

…
…
…
…
…
…

戦端を切り開いたのはヘイゼルだった。

「剃」

「!？」

トウヤ以上の速度とキレを持った剃によってエネルギーの目前へと瞬間移動したヘイゼルは、エネルギーが防御のために体を雷に変換するを

の完全に無視して、彼の鳩尾に痛烈な拳を叩き込んだ！！

「があ！？？」

「ガープ流奥義・愛ある拳！！」

明らかに怒りしかのっついていないであろう拳打は、エネルギーの背中から荒まじい衝撃波を突き抜けさせつつ、彼の心臓を一撃で停止させた！

「があ！？なんだ……なぜ私にさわれる！？？」

しかし、心臓が止まった程度でエネルギーは死なない。排撃を喰らったときのように自身の雷で心臓マツサージをし瞬時に復活したエネルギーはそう疑問の声を上げるが、ヘイゼルはそんなこと知ったとではないといわんばかりに、右足を突出し力強く地面を踏みしめた！！

震脚。

そこから発生した力のすべてを左腕に乗せて次はエネルギーの我をアッパーカットのように打ち抜く。

「我流拳闘術・昇流拳！！」

字が違う……。その技名を聞いたトウヤは若干顔をひきつらせたが、そんなことはお構いなしにヘイゼルはさらなる拳のラッシュをエネルギーに叩き込む。

「崩山拳！壊岩拳！連極拳！！」

両手による掌底一（イメージ的にはカメハ○波を打つ感じ）から、単純な腹パンチ（しかし、ヒットした時は『ボキッ!? バキッ!』という嫌な音が鳴った）、そこからの北斗百○拳一（確かに手がたくさんに見えた。ゴムゴムの銃乱打も真つ青である）。

もはや、戦いというかりんちに近い……。しかも、その間エネルギーは衝撃のあまりまったたくしゃべることができなかつたことがさらに哀れさを誘った。

「……こいつだけで海軍たおせないだろうか？」

トウヤがそう真剣に考え始めてしまうほどの光景である。

しかし、エネルギーも一応は空島最強の人物。黙ってやられているはずもなく……。

「くっ!? いいかげんに……しろ!？」

若干苦痛の色をにじませながら、エネルギーは雷となり雷速移動。ヘイゼルから遠く離れた地点に出現する。

そして……。

「エル・トル神の裁き!！」

今度は両手を使つての、普段よりも威力が上がっている極大の雷の柱をもってヘイゼルを攻撃した。

「ふん。やればできるじゃないか!！」

さすがにこれは手だけでは防げないと判断したのか、ヘイゼルはそんなことを言いながら構えを取り、右手に覇気を集約していく。

「だが、海軍大将に勝つには足りないね!!」

「!?!」

エネルギーが、何をといった表情になった時、ヘイゼルは右手を荒まじい速度で振るい覇気を飛ばした!

「我流・遠距離拳! 酷砲!!」

右手から打ち出された武装色覇気はすさまじい速度とつなりを上げながら高速回転。あたりの空気を巻き込みながらトンでもない勢いでエネルギーの雷とぶつかりあっさりとそれを消滅させた……だけで飽きたらず、その雷の一部を巻き込みながらエネルギーへと襲い掛かったではないか!!

「なっ!?!」

絶叫も上げられず覇気の暴風に巻き込まれるエネルギー。それが過ぎ去った後には、ぼろぼろになったエネルギーが転がっていた。

「Winner・私!!」

何やら決めポーズをとって自慢げに「どうよ」とドヤ顔をしてくるヘイゼルに若干の嘆息をしつつ、トウヤは一応拍手を送る。

もとより、エネルギーが勝てるような相手ではなかったのだ。自分ですえも《カラドボルグ》を使わなかったらどうなるかわからない。

まあ、ただで負ける気もしないが……。

そんな風にトウヤがヘイゼルの評価を改めていた時だった。

「認めんぞ……」

「！？」

もう再起不能だろうと二人が思っていた矢先に、エネルギーはふらふらとしながらではあるがなんとか立ち上がった。

これが主人公ならなかなか盛り上がるシーンなのだろうが、あいにく彼は悪役だった。

ヘイゼルは無言のまま拳を構え、エネルギーにとどめを刺そうと剣を使ってエネルギーの目前へと移動しようとした。

だが……。

「私は神だ……。敗北など……あつてはならんだああああああああああ！？」

「な！？」

「本日二回目だな……」

奥の手を何度も使つてありがたみがなくなる、という言葉を知らないらしい。とトウヤは嘆息をしながら、念のためカラドボルグの

手をかけた。

「二億V……雷神^{アマル}!!!」

雷の巨人は再び降臨し……本当の最終決戦の火ぶたが、今切って
落とされる!!!

56話

ゴロゴロゴロゴロ……。

鈍い雷鳴がとどろき、あたり一帯に暗雲が立ち込める。

「がああああああああ!!」

狂ったような怒声を上げながら雷の巨人はあたり一帯に雷撃をばらまく!

「ちっ!! 面倒なことになった!!」

「負けかけて正気を失ったのかい? まったくへたれた奴だね!!」

トウヤとヘイゼルはそんなことを呟きながら、トウヤがポシエツトから取り出した巨岩の後ろに隠れ何とか難を逃れていた。

エネルギーが雷神化してから現在十数秒が経つ。ソロソロのこの岩も壊れてしまっだろう。

「おい!! 何とかならないのか!？」

「とうくん。まあ、できないこともないんだけどね。というか私はロギアのボルサリーノを抑えて大将になった女だよ? ロギアが暴走した時に押さえつける方法なんていくらでも持っているよ」

「だったらさっさとしろっ!!」

「いや、でも『あれ』には結構時間がかかってね。海軍時代なら副官が時間稼いでくれたり、部下たちが命がけで守ってくれたんだけど、今『あれ』になるのはちょっと隙が多すぎる」

どうやらヘイゼルの奥の手は準備をするのに時間がかかってしま
うらしい。

「いったいどれくらい必要なんだ？」

「一分だよ……」

「一分か……」

正直言つてトウヤが匣を引き受けてひきつけておけるかどうか、微妙な時間だった。絶縁性があるカラドボルグを持っているとはいえ今のリーチでは少々心もとないうえに、トウヤは剣術に関してはずぶの素人。正直槍術の心得があるらしいエネルを相手取るには、かなり不安であった。

だが……。

「くそつ。それしか打開策はないか……。ヘイゼル。俺が一分ほど時間を稼いでやる。その間のその奥の手とやらの準備をしてくれ！」

「!? いいのかい？」

匣を買って出たトウヤに若干驚きの表情になるヘイゼル。一応頂上戦争では手を組むことを約束したが、それ以外で彼女を助けてくれるとは思っていなかったのだ。かりにも彼は王下七武海。海軍に

はあまりいい思い出がないだろうに。

「それしかないだろうが!!」

だが、トウヤはそんなヘイゼルの反応は完璧に無視して、カラドボルグを片手に巨岩から飛び出した。

「圧縮限定解除0・1パーセント・長さ^{リーチ}!! 圧縮限定解除0・005パーセント・幅^{コイテ}!!」

巨岩からトウヤが飛び出てきた瞬間、数千近い雷がトウヤへと襲い掛かる!!しかし、トウヤはその光景に臆することなく冷静に自分の能力を制御。剣にかけられた圧縮の一部を開放し、剣の長さとその幅を少しだけ拡大する。

長さは10倍の20メートルになり、剣というよりも長い棒といった風体になったカラドボルグはトウヤの腕の動きに合わせてまるで重さなどないかのように軽々と振るわれ、あたりの雷を弾き飛ばした!!

「きさま!?!」

「まずは俺が相手だ……神様気取り!!」

「ふとどきものがあああああああああああああああ!!」

鬼のような形相で無数の雷を振らせるエネルギー。トウヤはそれをカラドボルグを一闪、二閃することで何とかそれらの雷を払いのけていた。

「くそ……。やっぱり長くしても取り回しがつらいだけだな……。か
とって普通のリーチにしたら俺程度の腕じゃ雷は落とせない……。」「
到底人が操るものではない長さの剣に振り回されながら、トウヤ
は何とか雷の化け物と渡り合っっていく。

雷撃には薙ぎ払いを。神の裁きには剣の盾。雷霆には体を軸にし
ての剣の振り回しを。エネルの技に対して最も有効かつ的確な動作
をトウヤは次々とかえしていく！！

だが……。

「ごさかしいわあああああああああ！！」

怒声を上げ、両肩あたりに二発エル・トルの神の裁き、両手は稲妻サンゴ、その周
囲には四羽の雷鳥ヒノと、四頭の雷獣キケン、二頭の雷龍シヤムプウルがうごめき、全身か
らは雷霆ゼウスが発せられている。

「あ……これは死んだかも？」

「ああそつだ。神の名のもとに散れ！！」

エネルの最後通牒を皮切りにエネルが貯めていたそれらの技すべ
てがトウヤへと襲い掛かり、爆炎と水蒸気を巻き上げた！！

それからしばらくして、あたり一帯に沈黙が訪れる。トウヤの反応は完全に消えた。少なくともエネルギーの心綱マントラには反応が感じられない。

「…………ヤハハハハハハハハハハ！や、やはり…………我こそが神！」

エネルギーがそういつて、歓喜の笑い声をあげ、念のためとばかりにもう一発神の裁きエル・トルを放とうとした時だった。

「いやはや。ちゃんと働いてくれたじゃないか？」

そんな言葉が水蒸気の中から聞こえたかと思うと、水蒸気を切り裂き巨大な覇気の掌底が、エネルギーをに叩き付けられた！！

「!?!」

まるで見えない壁にぶつかっただかのように体の前面を平らにへこませながら、エネルギーの脳裏にはしまった！！という考えがかすめていた。

怒りに我を忘れ、近場にいるものすべてを殺そうとしていたが…
…彼が最も恐れるべきは一度たおせたトウヤではなく、通常状態で
は手も足も出なかったヘイゼルのほうだったのだ！と、いまさら
ながら彼の優秀な脳が答えを出していた。

しかし、時すでに遅し。

「さあて……。第二ラウンドだ腐れ恩知らず」

水蒸気の中から出てきたヘイゼルは、何故か真紅に燃え上がっていた。いや、肌や瞳が真っ赤に変色していたのだ。

彼女の体からは尋常ではない量の覇気が放出され、エネルギーの心綱^{マントラ}をジャミングしている。

「我流覇気操作術・全身覇気武装状態……名を《旭神》という」

雷の神の前に立った旭^{アサヒ}の神。彼女は今までの不敵な笑みを完全にひっこめ、絶対零度の無表情のまま戦場に立った。

…ナ…ナ…ナ…ナ…ナ…ナ…

「あれが覇気修行の完成形か……。なんという迫力」

おそらく霸王色覇気も使っているのだろうが……。それにしてもえげつない。絶対あれとはことを構えたくないな。

ヘイゼルが奥の手を伴い姿を現したのを見たとき、トウヤがいだいた感想がそれだった。

トウヤが雷に打たれる直前に彼女はトウヤと雷の間に割って入り腕の一振りであの雨のような雷の大群を薙ぎ払ったのだ。

「勝負は見たか……。あとは観戦させてもらおうとしよう」

トウヤはそういつて空間を握り、歪みを作って再び瞬間移動を行う。それによってあたり一帯に衝撃波がばらまかれるが、もはや神を名乗っても差し支えない二人にとってそんなものはそよ風にも等しいものなので、二人ともとくに文句を言うことはなかった。

「じゃあ……。いくよ。恩知らず」

トウヤが戦場から消えるのを見計らい、ヘイゼルはそういつて剣を使いエネルの眼前に出現した！

「!?!」

先ほどの掌底からいまだにダメージが抜けきっていないかったエネルだったが、それでもきちんと反応はできる。彼は体の各所から雷を放ち、なんとかヘイゼルを迎撃しようとした。

だが……。

「無駄っ!!」

ヘイゼルがそう怒声を上げるだけで声に乗った霸王色覇気が、あたり一帯を蹂躪。エネルの雷を完膚なきまで打ち消してしまう!!

「バカな!?!」

まさかこんな防御方法がとられるとは思って否かったエネルは、その光景に愕然とした表情で固まる。しかし、ヘイゼルはそんな彼にも容赦なく強烈な蹴りを叩き込んだ!!

「があっ!!」

「滅岩脚!!」

覇気によって強化されたそれは、すさまじい衝撃波を伴いながらエネルを直撃。彼の腹部に巨大なクレータを作り上げた!!

全身雷にしてあるのに血をはくというとんでもない事態に陥りながら、何とか距離を取ろうと雷速で移動を開始するエネルギー。しかし、かれが出現すると同時にヘイゼルはあつという間の距離を詰めエネルギーの真下に回り込みアッパーカットをするかのごとく腕を振りぬいた！！

「バカな！？ どうしてそんな速度で……」

「おしゃべりしている暇があるのかい？」

覇気によって強化された彼女の剃は通常の剃の約三倍の速度で移動が可能である。だから、さっきまでなら逃げ切ったといえる距離も《旭神》状態のヘイゼルからしたら、一瞬でいける範囲なのだ。

アッパーカットを打つと同時に右手から放出された覇気が、再び回転しながらエネルギーの顎を強打する！！ロギアになってから感じたこともないほど巨大な衝撃を感じながら、エネルギーは再び宙をうき意識の半分を刈り取られてしまった。

「ありえん……わたしは……神……神、神神神神かみ力ミ力ミ力ミカミかかかかかかかかかか！！」

狂ったようにもろろとうとする意識のかな、ぶつぶつつぶやき始めるエネルギーをしり目に、月歩を使いエネルギーより天高く舞い上がったヘイゼルは冷たく見下ろした。

「くだらないね。神なんてこの世にはいない……」

「私が神だ！！私は雷……神成のロギアだ！！超人パラミンアですらない貴様に……負けるはずが！！」

「能力者だけが最強だと思っているのかい、三下」

だからあんたは弱いのだ。

ヘイゼルは最後のそういうと、右手を大きく振りかぶり全身を巡っていた覇気を右手に集めそれを打ち出す！！

「我流遠距離体術・奥義！！魔人の大槌オズ・ハンマーアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

ヘイズルの怒声とともに放たれた覇気は、今までにないほどの巨大なエネルギー体となってエネルギーに襲い掛かった。そしてそれは、エネルギーを地面に氷に叩き付けると同時に下の氷を叩き割りながら海までエネルギーの体を押し込み、彼の悪魔の力を根こそぎ奪いとった。

暗く冷たい海に沈みながら、エネルギーが最後に思い出したのは……あの忌々しい白髪の少年の言葉。

『てめえが神だって？笑わせんな。下にはてめえよりもえげつなく……おぞましいほど強い奴らがごまんといやがるんだ』

その言葉を何度も何度も繰り返し思い出しながら、エネルギーの意識は深い闇へと……沈んでいった。

56話(後書き)

大幅改定!!

というか、もはや別物になった56話目です。ちょっと前に上げたのは……忘れてください!!

57話

すさまじい衝撃が氷原を蹂躪し、あたり一帯に破壊を巻き散らす。ヘイゼルの攻撃は、エネルギーのように熱量攻撃ではなく、単純な物理衝撃による攻撃だったためか氷原への被害が尋常ではなかった。

大量発生するクレバスに、巻き上がる積雪。

遠くで観戦していたトウヤも、自分の足元にひびが入って巨大なクレバスになり、落ちかけたときは本気で死ぬかと思った。

「やりすぎだあのバカ……」

何とか空間を掴み取り落下を回避したトウヤは、たるんだ空間を掴み取りながらため息交じりにクレバスから脱出していく。

そして、何とかクレバスから抜け出し丈夫な氷に足をつけたトウヤは、つかんだ空間を元に戻しエネルギーが沈んでいた巨大な穴のほうに視線を向け……大きく嘆息した。

「何してんだお前？」

「いや……つい」

トウヤが見たところには、ぼろぼろになったエネルギーを海から引き揚げ、巨大な穴から這い上がってきたヘイゼルの姿があった……。

…
十…
十…
……………
十…
十…
…

「せつかく倒したっていつのにどうするんだこれ？」

あれからしばらくたって……とりあえず船に帰ってきたトウヤたちは、この島に上陸していた海賊たちの船からお宝をパクって来て

いたロビンとエイゼンに再会した。

そんなことしていないで助けに来いよとトウヤは言ってみたが、

「そんな必要ないでしょう？あなた強いんだし」

「しかり。拙者の大将を務めるのならロギア程度で後れを取ってもらうては困るでござる」

なんて返事が返ってきてしまったため、正直何も言うことができなかつた。

まあ、それはさておき……。

「エネルギー殿……暴走してしまつてでござるか」

「いい人だつただけだね」

トウヤの船の医務室内部で、海老石の鎖で縛りつけられたエネルギーを見てエイゼンとロビンは少しだけ残念そうにつぶやいた。昨日はいろいろな話を聞いてもらつて結構仲良くなつていた二人だ。エネルギーが敵になつてそれなりにショックを受けているのだろう。

「で、どうすんの？殺すなら俺がやるが……」

「せっかく助けたのにそれはもつたいないね。思わずとはいえ助けちまつた以上私がきちんと面倒みるよ」

「でも、神の記憶を持ったままじゃ骨が折れるだろう？まさかずっと海楼石をはめておくわけにもいかないだろうし……」

「そうだねえ……」

トウヤとヘイゼルはエネルギーの処遇について話し合っていた。

正直、トウヤや……助けてしまったヘイゼルでさえエネルギーを生かして返す気はさらさらなかったのだ。ヘイゼルは箱舟から危険人物を解き放った責任を取って殺すつもりだったし、トウヤは神を名乗るこいつが青海にいてもろくなことにはならないだろうと思っただからだ。

しかし、エネルギーはここにいる。生きている。

「まったく。なんで助けたりなんかしたんだ」

「結構長い間に暮らしていたからね……。情が移っちゃまったかねえ」

ヘイゼルは若干恥ずかしそうに苦笑をうかべた後、最後に覚悟を決めたかのようにきりっとした表情でトウヤに宣言した。

「何度も言うけど、こいつの身柄は私が預かるよ。頂上戦争がひと段落ついたら、こいつが真人間に戻って普通の生活ができるようになるまで面倒を見ようと思う」

「だが、頂上戦争はもうすぐそこなんだぞ？ 戦争の間、エネルギーはどうするつもりだ？」

「まあ、そこはさすがに応急処置しかできないわけだけど……」

トウヤの疑問に、少しだけ苦笑を浮かべて答えるヘイゼルの両手には、鋼色に輝く手甲が二つ……。

「何をする気だ？」

「殴る。記憶がなくなるまで……」

今までに無いほどのスッ気あふれる笑顔でそう言ったヘイゼルにトウヤは若干顔をひきつらせて……。

「そ、そうか。殺すなよ？」

とだけ言って、ロビンとエイゼンをひきつれ部屋を出た。

「……トウヤ殿。助けなくていいでござるか？」

「何を言っているエイゼン。エネルギーが記憶をなくせば、青海は新たな脅威を迎え入れずに済むし、俺は天敵が一人消えるし、ヘイゼルは元の優しいエネルギーと一緒に暮らせる。みんな幸せになれるじゃないか」

「エネルギーさんは不幸だと思うけど……」

船室を出る時ロビンがそうツッコみを入れると同時に、

『な、なんだきさ……ぎゃあああああ！こ、この私を神と知っての……ぐあああああ！い、今ならまだ間に合う……寛大な私は許して……ぐべふおらあ！？ま、マジすいません！！なんでこんなことなっているのかは知らないけどゆるしてええええええええええええ！？』

そんな悲鳴が聞こえた気がしたが……。

「」「」……「」「」

きっと幻聴だろう。そう思い込むことにして三人は無言で船室のドアを閉めるのだった。

57話（後書き）

というわけで、エネルギー編終了です。

次回からは頂上戦争へのつながりとなる、短編集です。

仲間の小話と、ハンコック。あと、前の話に出てきた『悪魔』の話をする予定です。お楽しみに。

ニコ・ロビンと変態

トウヤがりリカとの交渉を終わらせ、しばらく組織設立のために奔走していたころの話である。

ロビンはフーシャ村におかれた『ハンターズ本部』の中に作られて研究室でトウヤが自分の世界から持ち込んだとっていた、化石や古代遺産を暇つぶしがてらに調査していた。

「大体こんなものかしら？」

遺物のデータをレポートにしてまとめた後、自分専用の書棚へと片づけるロビン。

海賊時代はこんなことできる施設はなかったから、今の状況はありがたいわね。

そんなことを考えながら、新たな遺物の調査にロビンが取り掛かるうとした時だった……。

「ろっびんちゃん！！」

突然真後ろから声が聞こえたかと思うと、何かがとんでもない速度でロビンに抱き着いてきた！！

「きゃっ！？」

意外とかわいい悲鳴を上げて驚くロビンに満足したのか、背後からの襲撃者は……。

「はあはあ……ロビンちゃんの髪の毛の臭いマジウマす……」

「離れなさい!」

どうやら満足していなかったようで、鼻息荒くロビンの頭に顔を突っ込んできた。ロビンはその声を聴いた途端に背筋に寒気が走ったので、慌てて能力を使いその蹴撃者に往復ビンタを喰らわせた。

「いた、いたいたい!?! ロビンちゃんちょっとしやれにならないから!?!」

そういつて悲鳴を上げながらロビンから離れた人物を、ロビンは少しだけ涙をためた目で睨みつける。

「セクハラはやめろ、といったはずよメフィストフェレス?」

「やくね。ほんのちよつとしたスキンシップじゃない。それにそんな顔されても怖くないわよ。むしろ欲情しちゃうわ!」

変態パワー全開でそんなことを言ってくるのは、黒い羽根を持った美女。《悪魔の実の能力者》メフィストフェレス。

トウヤが言うには『うちの暗部ではまず間違いなく最強格についてる人間』ということらしいが、やや変態じみているのでロビンはこの存在にいまいち恐怖を抱けずにいた。

自分の故郷の一件で暗部という言葉には敏感な彼女がだ……。

もしかしてこのひと……違う意味で凄い人なんじゃ?なんてこと

を考えつつもロビンはため息交じりに今日、彼女がここにやってきた用件を聞いてみる。

「で、今日はいったい何しに来たんですか？」

「一緒にお昼でも食べようかな？と思って……。どうせ研究に没頭してお昼なんて忘れていたでしょロビンちゃん」

「あ……」

いわれてみればお腹がすいている。そんな当たり前なことにはさら気づきながら、ロビン少し億劫そうに部屋に備え付けてある時計に目を走らせた。時刻は大体午前二時。昼食をとるにはやや遅めだ。

「なるほど……道理でおなかすいているわけだわ……」

納得……。といわんばかりの表情で自分の研究バカさ加減に苦笑をうかべながら、ロビンは隣のハンガーにかけてあった白衣を羽織った。

「わかったわ。マキノさんに軽いものでも作ってもらいましょう」

「もつちろ〜ん。わたしトラ肉の味噌煮がいいなあ〜」

「……おいしいの？それ……」

隣に立っている人物に色々な意味で戦慄を覚えながら、ロビンはのんびりと食堂に向かった……。

そんな彼女たちが食堂に向かう途中だった。何やら眉をしかめて

…
十…
十…
…
…
…
十…
十…
…

ため息をついているトウヤに出会ったのだ。

「どうしたの？」

「ん？ ああ、ロビンか」

珍しく困り果てた様子のトウヤに若干嫌な予感を覚えたロビンはとりあえず声をかけてみることにした。そんな彼女を見てトウヤは少し面倒そうに顔を向けてきたのだがそれがロビンだと分かるといつもの飄々とした表情になり煙草に火をつけ目をそらす。

「こんな時間に研究室から出てくるなんて珍しいな？ なにかあったのか」

「いえ、昼食とるのを忘れていたから今からメフィストフェレスさんと一緒に食へに行くところなんだけど……」

「おまえ……研究も大概にしておけといっただろうが……」

ロビンの状況説明に若干三白眼になるトウヤ。あきれてものも言えないのだろう。だが……。

「そんなことはいいの。何か困っていることでもあった？」

「それが……超能力開発部で少し問題が起こってな……」

苦虫をかみつぶしたような表情になりながら、トウヤが事情を説明しようとした時だった！

「ひゃっほう。美女の胸ゲットー！！」

そんな声が突然聞こえてきたかと思った瞬間、ロビンの胸が何かにわしづかみにされたように変形した！！

「!?!」

悲鳴を上げることができず、顔を真っ赤にして自分の胸を触ってくる何かを反射的に殴りつけるロビン！！

ゴキつというおとともに確かな手ごたえを感じたのだが……。

「な!?!」

ロビンが感触があった方向を振り返っても、そこにはだれもおらず、ハンターズのメンバーがあわただしく行き来する廊下が広がっているだけだった！！

「うそ？ 確かに何かを殴りつけたはずなのに……」

「わ、私もロビンちゃんの拳が何かをとらえる音を聞いたわ……」

啞然とする二人をしり目に、トウヤはスツと目を細めながらポシエットから黄色い球を取り出す。

「ロビン。メフィスト……めえとじてろ」

「「え……」」

二人が不思議そうに首をかしげると同時に、トウヤは彼女たちが目をふさぐことを待たずにその球を放り投げた！！

そして……。

カッ！！とその球は爆発してあたり一面に信じられない量の光をまき散らしたではないか！！

「うっ！？」

「イッタ！？」

ロビンもメフィストも、もろにその光を喰らい視界をあっという間に奪われてしまいうめき声を上げる。

「ちょ、なにをするの！？」

「めえとじてろっていったらどうが？」

「もっと早くに言っただけなの！？」

かろうじて壁に予備の目咲かせることで視界を確保したロビンがトウヤに向かって怒声を上げるが、そんなことができないメフィストにそんな余裕はないようである……。

「「めがあ……めがああああああああ！？」」

といいながらの打ち回って……。

「って、あれ？」

声が二つ聞こえたような気がする……。

ロビンがそんなことを考えながら慌てて地面を見てみるが、そこには何もいない。だが……。

「いい加減にしるよこら？ さっさと戻らないと殺すぞ、性犯罪者」

若干不機嫌なトウヤがそう見えない相手に声をかけると同時に、何かが立ち上がる気配とともに怒声を上げてきたではないか！！

「ごめんこうむる！！ せつかくこんな便利な能力を手に入れたんだ！！ フーシャ村に住む美人さんやハンターズ所属の美女たちの胸を揉みつくすまで…… 僕は決してこのあくなき闘争をやめるつもりはない！！」

「黙れこのド変態がああああああああ！！」

トウヤにしては珍しく、怒り心頭といった様子でその声の主を怒鳴るつけるが、何しろ相手は見えない存在だ。空回りしている感が否めない……。

「ではアディオス！！ 次のターゲットはマキノちゃんだぜえええええええええええ！！」

変質的な絶叫を上げながら、何かが遠ざかっていく足音が聞こえる。そしてそれが完全に消えた後、ロビンは三白眼になりながらトウヤにこう尋ねた。

「詳しい話……聞かせてもらっわよ……」

自分の胸をもまれたからか、はたまた見えない存在のセリフが不

愉快だったのかは知らないが……その声は、ロビンがとんでもなく
キれていることがわかる声だったという……。

……
……
……
……
……
……

「開発した超能力者の一人が逃げ出した!？」

「ああ……それもちょっと厄介な能力者でな。搜索が難航している……」

トウヤの口から飛び出したのは、何とも頭が痛くなるような話だった。

どうやら、先ほどの痴漢は最近トウヤが悪魔の実に代わる新たな異能として推奨し、開発に取り組み成功した《超能力者》だったらしい。

能力内容は光の制御。空間を縦横無尽に走り回り世界に色彩を与えているあれを自由に操ることが彼にはできるらしい。

本来ならば、黄猿のようなレーザー攻撃を行うことにこの能力を使うのだが、この能力に目覚めた男は通常の間とは少し違った思考を持っていたようで……。

「この能力をうまく応用すれば『透明人間』になれるんじゃないかと、そいつは考えたわけだ……。いわゆる『偏光迷彩』だな」

「で、その応用はうまくいってあの見えない痴漢が生まれたというわけね……」

なんともはや、すさまじい執念だと感心するべきなのか、もうちょっとまじな使い方があったらうとあきれるべきか……。

まあ、ロビンはそのどちらでもないようだが……。

「つ、つまり……そいつはロビンちゃんやほかのかわいい子ちゃんたちを触り放題なめ放題ということなの!？」

「あゝい、リリカ。このバカどっかにほうりこんどいて。話がややこしくなる」

「了解」

ぶるぶるとわななきながらトチ狂ったことを言ってくるメフィストをリリカに任せ、(リリカが出て行ってしばらくしたのち)『もつと激しく〜!!』という色っぽい声が聞こえた気がするが、トウヤとロビンは幻聴だということにした(トウヤはにこにこ笑っているロビンに少しだけ及び腰になりながら話しかけてみた。

「と、いうわけでロビン……お前にはしばらく外に出ていて……」

「トウヤ……」

しかし、そんなトウヤの提案は一切無視して、ロビンは今まで見たことがないようなきれいな笑みでトウヤにある計画を持ちかけた。

「すべては私に一任して。確実にあの屑を仕留めて見せるから……」

「あ、ああ。そうか……わかった。任せる」

その時のトウヤの背中にはびっしりと冷や汗が浮かんでいたらしい……。

…
…
…
…
…
…
…
…
…
…

男は『フへへへへ』と下品な笑みを浮かべながらハンターズ部の廊下を歩いていた。

普通ならばこんな男がいればまず間違いないでなく警察に通報されるに違いないだろうが、すべての人間にとって残念なことに、現在彼は『透明人間』だった。

ハンターズに入っただけでまじめに仕事をこなしていた彼。実は彼は、人格者として名をはせ、いくつもの海賊団を壊滅させ、北の海では知らないものはいないほどの圧倒的な人気を誇った花形賞金稼ぎなのだ。

そう。この能力を手に入れる前は彼はとてもかっこいい好青年だったのだ。弱きを助け強きをくじく。誰もが憧れるヒーロー。

しかし、この能力を手に入れた瞬間男は変わってしまった。いや、普通の男の子に戻ってしまったというべきだろう。

『偏光迷彩』この能力によって誰にも見とがめられることなく、女性に触ることができるようになってしまった彼は、今まで『自分はヒーローなんだから』と自制してきた性欲を爆発させてしまったのだ。

「うっへへへへへ！ マジですげえ……。まじですげえよお！！ま、まさかこんなにあっさり胸をもめるなんて……。ああ、神様！俺にこの能力をくれてありがとう！！」

神様もこんな邪まな気持ちで感謝されても困るだろうが、いろいろな意味でハイになってしまっているこの男にはそんなツッコミは届かない。

「よーし！！次はマキノちゃんだぜえい！！あの子はいろいろと一般人だから手加減してタッチするだけにしとこーっ！！」

男がそんな身勝手な手加減について決めるとき、男はようやくあ
ることに気づいた。

「あれ……人が……いない？」

そう。ハンターズ本部からはいつの間にか人の気配が消えており、
今までにないほどの静かな空間が作り出されていた……。

「ま、まさか僕の計画を邪魔するためにみんな出て行ったのか！？
だ、だが甘いね！！僕は透明人間なんだよ……。ばれないように窓
から出れば……」

男がそういつて窓に駆け寄った時だった。

突然すべての窓に木の板がおされ、ガンガンとくぎ打ちさ
れ始めたではないか！！

「なっ！？ ちょ！？」

男は当てて脱出を図ろうとするが、無理やり窓をこじ開けてしま
えばそこに自分があるのだと明かしてしまうようなものと気付き
慌てて踏みとどまった！！

「くっ！？」

『お困りかしら？透明人間……』

その時だった。突然ハンターズのあちこちからお無い声が発せら
れ始めたのは……。

「だれだ!!」

「あなたにもまれた人間といえはわかるかしら……」

さっきの美人さんか……。

男の脳裏に浮かび上がるのはトウヤとともにいたあの美女の姿。てつきりトウヤの彼女かと思い『僕より先にあんなおっさんに彼女ができるなんて!?!』と愕然としてしまい思わず嫌がらせをしてみたのだが……ほかの局員の話の聞くと、どうやら彼女はうちの大事な客人だったらしく、若干の後悔と申し訳なさを感じていた女性だ。

「ど、どうしてこんなことをするんだ?」

『私はあなたを許さないわ。だから勝負をしましょう。いまからあなたと私は鬼ごっこをする。私があなたを見つけたら私の勝ち。あなたが一時間逃げ切ったらあなたの勝ち……』

どうしてそんなことを?

男の脳の冷静な部分が警鐘を発する。やばい……何かがやばい! 具体的には異的なにおいがブンブンする。このまま勝負を受けてしまえば男はおそらくとんでもない目にあうだろう。それはわかり切っていた……。だが……。

『あなたが勝つたら……私の体のほかのところも……好きにしてい
いわよ?』

「のつたあああああああー!!」

男とは馬鹿な生き物だった……。何処からともなく聞こえてきた色っぽい声に、男は鼻血を出しながらサムズアップをし、その勝負を受けるのだった……。

それから数十分後……。男は煙に包まれたハンターズ本部の中を駆けずりまわっていた!!この煙は三分ほど前にこのハンターズ本部に注入されたものだ。おおかた彼の動きに合わせて煙がうごめくのみで、彼を捕まえようという心算だったのだろう。だが……。

「フフ……。愚かな!!煙をまいたら僕の姿が浮き彫りになるとでも思ったのか!!」

通常の体が透けているだけの透明人間だったら、まず間違いなく見つかってしまっていただろう。しかし、彼が使っているのは『偏

光迷彩』。光を自在に操り人間の形を形作る光を抜き取り、周りの光を素通りさせることによって透明な体を手に入れているのだ。

つまり、彼は周りの人間が見えるはずの光を操っているのだ。当然人の体が通過することによってうごめく煙すらも彼の能力にかかれが『動いていない』ように相手に錯覚させることも十二分にできる。

つまり……。

『くっ！！ どのにいるの！！』

「視覚に頼った作戦を実行したのが間違いだっただね！！僕を本気で捕まえたのなら視覚以外の五感で捕まえられるようにしておくべきだった！！」

はるか遠くに聞こえる焦った様な声音に、男は一人ほくそえんだ。追いかけてこの情勢は完全に男の一人勝ち、このままではロビンが更なる辱めを受けることは確実だった。

「えへへへ……。どんなことをしようかなー！！」

男がそんな風に、自分が勝った後ロビンにどんなことをしてもらうか妄想している時だった……。

「んあぁ？」

突然男の膝から力が抜け落ち、男はそのまま倒れてしまったのだ。

「あ、あれ？」

急いで足を動かさそうとして、踏ん張ってみるがまったく答えてくれない自分の足。

「いったいどうしたんだ!？」と、内心では慌てながらも、男は手を使ってその場から離れようとしたのだが……。

「なっ!？」

今度は手が動かなくなっていた!!

「ど、どうして!？」

『かかったわね……』

男が、慌てふためきながら必死にもがいていると、先ほどまで遠くから聞こえていた声がすぐ近くで発せられたではないか!!

「そんな……。いったい……僕の体に何をした!？」

口以外はもはや完全に言うことを聞いてくれない体。無様に地面に転がる彼に、声は明らかかな嘲笑を含んだ声で話しかけた。

『この煙がただの煙だと思っていたの?』

「な、まさか!？」

『ええ。そのまさかよ。この煙……実はある痺れ薬が気化したものよ。貴男に気づかれないように無味無臭にするのが大変だったわ……』

……』

そういえば……この煙なんだかやたらと黄色かったような……。

いまさらながら重要なことを見落としていたことに気づきながら、男はそのまま意識を失ってしまつたのだつた。

そんな彼を、無言で見つめるのは天井に咲いていた『目』と『口』の花。

「たっぷりオシオキして上げるから……。覚悟しておきなさい」

口の花はそういつと同時に、凶悪な笑みを浮かべ無数の花びらを散らしながら姿を消すのだった……。

後日談。

「おわったわよ……」

「はい……そうですか!!」

外に出てきたハンターズの面々がフーシャ村の人々に迷惑をかけるかどうか監督していたトウヤに、何の感情もこもっていないロビンの声が襲いかかった。

冷や汗をかきながらいつものような飄々とした雰囲気をつつ込め敬礼をしてくるトウヤに、特に反応を見せることなくロビンは近づき……。

「あの子を捕まえたら私のところに連れてきなさい。いいわね?」

「イエス……あいまむ」

ぞつとするような冷たい声音でそう言って自分の研究室へと去って行った。

「ロビンは怒らせないようにしましょう……」

「お前でもそう思うんだ……」

あとに残されたトウヤとリリカは、お互いとんでもない量の冷や汗をかきながら、ロビンへの認識を改めるのだった……。

更に後日談。

ロビンの拷問まがいのオシオキを喰らった男であったが、その後メフィストフェレスのもとにやられ……。

《僕の能力は二度と痴漢には使いません》という契約^{ゲツシュ}を結ばされることになる。だが……。

「ね、ねえ……あなたの能力って……ほかの人にも使えるの？」

「え、ええ。まあ……僕の体のどこかにふれていただければその人も透明になりますよ」

「なるほどね。ねえ、ちょっとお願いがあるんだけど？」

「はい？」

「今度は私も透明にしてくれない……」

「……」

その前に、ハンターズ内では《第二次変態大戦》と呼ばれる《ト
ウヤ・リリカ・ロビン》連合軍と《メフィスト・痴漢男》同盟軍の
内戦が勃発することになるのだが、またそれは別の話……。

ニコ・ロビンと変態（後書き）

われながら完成度ひくいなあ。こんだけ筆が乗らなかったのは久しぶりです。

よかったら感想よろしくお願いします。

とある屋台の吸血鬼とその仲間たち

グランドライン。ミコナッツ島。

酒とギャンブルで知られるこの島では、毎晩七時になると大通りを埋め尽くさんばかりの屋台が店を出している。

本当なら酒場でも営んだほうがいいのだろうが、それはこの島を統治する王国の法律によって禁止されていた。

理由はひどく簡単で……。

「カジノに比べて酒場は治安が悪くなりやすい。だったら商店を開く土地はすべてカジノへと変え、酒場は喧嘩のしにくいオープンな屋台で何とかしてくれ」

と国王が頭を下げてきたのだ。

別に客たちは酒さえ飲めればよかったので、酒場が屋台に変わったところで客足が減るわけもなく、今もこの島は世界各地からやってくる酒好きたちやギャンブル好きたちによってにぎわっていた。

そんな賑やかな町に並ぶある一つの屋台にそいつらはいた。

ヴァイ・クロスロード。イササギ・トウヤ。ミサキザキ・エイゼン。

ハンターズの裏の統領とその仲間たちが、今夜は珍しく一緒に酒をのみ、男だけの座談会を開いているところだった。

ちなみに、ロレンもきつちり連れてきてはいたのだが、先ほどトウヤが親父に頼んでおいたきつい酒を間違えて飲んでしまい、撃沈してしまっていた……。

対する大人勢はというと……。

「おまえ……いくらなんでも飲みすぎだろ？」

「バカヤロー。こんなもん飲んだうちに入らねーよ」

吸血鬼の特性なのか、単純に酒に強いのかは知らないが、ヴァイは400本目の一升瓶を片手に酒を飲んでた。白ひげも真っ青な飲みっぷりである。

その隣に座っているトウヤはグラスに大量の氷をブチ込んでちびちびとアルコール度数が高い酒を飲んでいる。見た目かなり貧乏くさい飲み方だ。

エイゼンは……。

「にやはははは！…！によいではごにやらんか。きゅうけちゅきどによはさけにおぼれないにんげんにゃということにゃんでしゅかにゃ」

「お前は正しい意味で飲みすぎだ……」

どうやら酒は好きだが酔いやすいという厄介な体質らしく、先ほどからヴァイ並みのペースで飲んではいろのだが、お猪口一杯飲んだだけでもうるれつが回っていなかったので、もっと早くに止めれ

ばよかったとトウヤは絶賛大後悔中だったりする。

何とも極端な酒飲み集団である。

「さて……。せっかく男だけでこんなところに来たんだ。女たちには聞かせられないお話をして日頃のうつぶんを晴らすとしよう」

「「おお〜!!」」

酒を飲みに来た男たちの行動パターンは昔から決まっている。楽しく飲みはっちゃけるか、愚痴をこぼしながらのからみ酒になるかの二通りである。

「はいはい!! じゃあ俺からトウヤに質問!!」

「なんだ？」

「ぶっちゃけお前誰狙ってんの!？」

「中学生かお前は……」

なんともはや子供っぽいヴァイの質問。これで自分の何十倍も生きていくのだというのだから不思議だ。精神年齢が10代で止まっている気がする……。

あきれきった声音でヴァイにツッコミを入れた後、ヴァイの質問を無視し酒を飲もうとするトウヤ。しかし……。

「……何のつもりだ？」

なぜか彼の手元にグラスはなく、いつの間にかエイゼンの手元に移っているではないか。

「いやいやいや……実は拙者も気になっていたりしたでござるよ。女ヶ島ではハンコック殿といい感じだったでござるが、そのあととくにモーシヨンを見せていないでござるし……」

「お前さっきまで呂律まわっていなかっただろっが!? 酔いはどうした!？」

「さあさあ答えるよ。誰にも言わないからさ」

中学生じみた、ヴァイの囁し立てに閉口しながら「ああ、もう、これ、なんか言わないと解放してもらえないな……」と、トウヤは直感的に悟り大きいため息をついた。

仮にも大人がこんな会話で盛り上がるなよ……。と内心で呆れながら、トウヤは煙草に火をつけ渋い顔で煙を吐き出す。

何とも言えない渋さを醸し出すトウヤ。そして、

「別に……今のところ特定の誰かに惚れたということはない。ハンコックは例外だが……今のところ女たちは仲間か部下か友人としてしか見ていないよ」

「え」

さもつまらなさそうにそんな声を上げる二人に苦笑をうかべ、トウヤはエイゼンからグラスを取り返し、お返しとばかりにヴァイに話を振ってみた。

「俺のことよりもヴァイルのことだろう？ どうしてお前あんな鬼畜に惚れているんだよ？」

「鬼畜ってお前……」

「ああ……。確かにリリカ殿ヴァイ殿に対してかなり厳しいでござるから……。ほかの人にはそれなりの対応をされているようござるが……」

「まったくだ。お前あれのどこがいいの？」

と、明らかにリリカをバカにした声音でトウヤたちがそう聞いてみるが、ヴァイはなぜか意味深な笑みを浮かべながら自信たっぷりにごう言い切った。

「バツカだな〜お前ら。あの人の良さがわかんね〜ようじゃまだまだ男になったとはいえね〜ぞ」

バカに仕切った声でそう言ってくるヴァイに、トウヤとエイゼンは少しむっとする。当然である。二人とももう結構いい歳なのだ。確かに数百年単位で生きている怪物と比べればガキかもしれないが、それでも二人には、自分なりに男を磨いてきたという自負があった。

「じゃあなんだよそのいいところって」

「よければご教授願いたいでござる」

「いいぜ。……まずあの人は見た目がいい!!」

「「え！？　まずそこ！？」」

なんともはや情けない切り出しである。

「バツカ。見た目は大事だろうが！　持つて生まれた顔ならまあ、シャーネーが……。それでもそれなりに磨く場所はあるもんだ。美人だってことはすなわちそれ相応に女を磨いているってことなんだよ」

「まあ確かに……。そういわれてみればそうかもしれないが……」

「見た目につられたみたいでなんか嫌でござる……」

何とも言えない表情で、ヴァイの説明に肯定を示す二人。それに調子づいたのかヴァイはさらに酒を飲み、饒舌にリリカのいいところを上げていった。

「それに基本的に言葉はきついが、最終的に人を見捨てることはないだろう。桃源郷がその証だ」

「ああ……。確かにあれには尊敬の念を禁じ得ないな。正直、迫害されている能力者がかわいそうだ……。なんて偽善の心じゃあそこまではできない」

空間を丸々一つ切り離し、そこにやってくる数多の外敵を追い返していったのだ。戦闘能力と……。それ相応の覚悟がないとあそこまでのことはできないだろう。聞いた話ではあの金獅子とも渡り合ったことがあつたらしい。

「大海賊時代を生き抜いた猛者すら恐れをなした桃源郷の主。白ひ

げの旦那も一目置いてるっていう話もあるが……あれは本当なのか？」

「ニューゲートの小僧のことか？ あいつなら年に一回桃源郷に酒を送ってくれているぞ」

「……まあ、年食っていればそういうこともあるのかもな……」

と、あまりに規格外すぎる人脈にややビビリながらも、トウヤは冷や汗を隠すために再びグラスに口をつけた。

もしかして自分とはんでもないものに手を出したのでは……。いまさらながらに後悔するトウヤである。

「それに何より……」

ヴァイは最後にそういいながら405本目の酒瓶を開ける。

「あのひと……笑うと可愛いんだぜ？」

最後にとんでもない事実を暴露したヴァイに、トウヤとエイゼンはカクンと口を開けて……。

「あいつ笑ったりするのか!？」

「き、きつと死刑宣告の時に笑うのでござるよ!……」

「お前ら俺の主をなんだと思ってるんだ!？」

真剣に恐れおののく二人を見て、さすがのヴァイもちよっただけ

怒鳴ったといふ。

……
十……
十……
……
十……
十……
……

船に酒臭いにおいをまとって帰ってきたトウヤたちに、目を吊り上げて真っ先にどなってきたのは最近仲間になったヘイゼルである。

「ったく。男ってやつは……。もう少しスマートに酒を楽しむことはできないのか!」

「うるさいな……。酔っぱらっているのは他の奴だろうが。なんで俺を怒るんだよ……」

あの後、ヴァイは結局二千本の酒瓶を一人で開けるまで酔うことはなかった。まあ、さすがにそれ以上は飲めなかつたらしく顔を真っ赤にしてぶっ倒れたが……。

エイゼンはヴァイの信じられない発言の後すぐにつぶれた。その時まで起きていたのは野次馬根性のたまものだろう。もうちょっとましなところで根性見せると言ってやりたいところではあるが……。

結局最後まで自分のペースで酒を飲み無事に帰ってきたのはトウヤだけ。結果、トウヤはつぶれてしまった三人を背負っての帰宅と相成ったのである。

「まったく……。こっちにそのバカを貸せ。無理やり酒を抜く……」

と、今すぐにも爆発しそうな声でヴァイを指差したのは、何を隠そう先ほどまでヴァイがべた褒めしていた彼の主、リリカ……。

そのあんまりと聞いていい態度に、若干の呆れと……。「ホントなんであんな奴にこいつは惚れているんだろう?」というわずかな疑問をにじませながら、トウヤは特に逆らうことなくヴァイをリリカに渡す。

「殺すなよ……」

「殺さんさ。というか殺しても死なん」

この男はな。

リリカは最後にそう言い残すと同時に、自分の船室へとヴァイを引きずりながら戻っていった。その後しばらくして……この世のものとは思えないような絶叫が、その船室から聞こえてきたが、トウヤはいつものようにそれを全力で無視する。

「にしても……笑顔がかわいいね。あいついつそんな顔を見たんだ？」

ヴァイの信じられない発言を思い出しながら、トウヤがぼそりとつぶやいた時だった。

「あら。リリカさんって結構笑ってるわよ」

ロビンがそんなことを言いながら酔いさましの水を持ってきてくれたのは。

「ああ？ いつだよ」

「船室でヴァイさんと一緒にいる時。ヴァイさん痛めつけている時に笑っているわ……」

その答えを聞いたトウヤは若干顔をひきつらせて……。

「そ、そうか……」

それ以上、この話題にはふれないことを決めたのだった。

ある魔術師の風物詩

「第一回。女子だけの……チキチキ納涼怪談大会」

「いえ〜い」

カーテンが閉められ明かりが消された、薄暗い船室の中にともる3本のろうそく。それを囲んで三人の女が氣勢を上げていた。

初めのやたらと気の抜ける声で今回の目的をはっきりと告げたのは、何を隠そうあのリリカだった。

そんなリリカに驚くことなく、平然と返事を返しているのはロビンとヘイゼル。どうやらこの二人はリリカのこの口調のことは知っていたようで、いたって普通の態度である。

「はい……。というわけで始まりました怪談大会。主催はわたくしリリカが務めさせてもらいます。なおこれは完全な番外編なので、登場する人物の性格、態度、メタ発言は本編《万有掌握》トレジャーハンターキングに俺はなる！〜》とは一切関係ありません」

予防線を張られた……。

「なるほど。つまりここではどんだけメタな発言をしても大丈夫ということね！〜」

「ロビン！？なんでそんなにやる気出しているんだい！？」

「いいんですよヘイゼルさん今回は無礼講ですから」

「言葉の意味を考えて発言しなよ!？」

珍しくツツコみに回っているヘイゼル。どうやら二人のはっちゃけ振りについていけないようだ。

「大体なんで怪談大会なんだい？ 夏はもう終わったよ?。」

「それは、作者があとがきあたりで『メンバーの小話を必ず一つ書く』と、勢いよく言ったわりにはネタが少なくてあえなく失速。仕方がないからほかのキャラのネタが思いつくまで私のような人気が低そうなキャラを使って時間を引き延ばそうという浅はかな考えのもとに作られた小説だからよ。『今夏だから怪談とかウケんだろ』という浅はかな考えのもとに作られたからよ」

「本当にはっちゃけているわね、リリカさん……。今まで絶対にネタにはしなかったメタ話たっぷり話しているし……」

完全な無表情で、小説的にはかなりアウトな発言をするリリカにロビンは若干顔をひきつらせた。確かにはっちゃけるとは言ったけど限度があるだろう……。と。

「で、まず最初にだれが話すの?。」

「じゃあ私からやるよ……。早くこのバカな話を終わらせたいしね」

そういつて手を上げたのは、まったくテンションが上がっていないヘイゼルである。なんやかんや言ってネタは持ってきているらしい。

「さて。これは私の現役大将時代の話なんだけど……」

1・ヘイゼルの話

海軍時代。私は今の青キジと同じようにあまり仕事をしない人間だった。でも大将になってからそうも言っていられない事態になっちまったのさ。だって、今までの身軽な立場から一変して海軍のトップ4の中にはいつちまったんだよ？

書類は嫌でも増えていくし、解決しないといけない案件もたまる。おまけにガープさんと同僚のクザンは仕事しないから、仕事がどんどん流れてくる……。一度は私も逃げ出そうとしたんだけど、センゴクさんとボルサリーノが死に物狂いで止めてきたり、赤犬が『やはり貴様は海軍に必要ない！』とか言っつて真剣に殺しに来たりしたから、しかたなく仕事をせざる得なくなっちまっつてね……。おまけに私は天竜人の護衛もしなくちゃいけないから、中将時代のように海に出ることもできなくなっつてしまっつたのさ。

それでストレスがたまっつていた私は、夜なかなか寝付くこともできなかつた。だからよく一人で夜の街に繰り出しては、眠気が襲っつてくるまで酒をかつくらっつていたもんさ。

その日も私は飲みに出かけていた。蒸し暑い……新月の嫌な感じの夜だつたよ。

酒場から『あんたいい加減にしないサイ』って言われて追い出された私は新しい酒場に行くためにふらふらと夜道を歩いていったんだよ。

そしたら、私の目の前に見覚えのある奴が歩いていくじゃないか。赤いスーツに真っ赤なバラを胸に刺した中年男性。そう……赤犬だよ。

大方残業でもしていたんだろうと、私は特に気にもかけず通り過ぎようとしたんだけど、その時私の耳にとんでもない言葉が聞こえたのさ。

「ああ、わかつちよる。ちゃっんと帰るけんそうおこるな」

怒るな？

私は不思議に思った。だってあの赤犬だよ？ 泣く子も黙る苛烈な正義を信念にもったあの堅物に明確な怒りを示してしかりつけている人間がいるんだよ！？ そりゃだれだって驚くじゃないか！！

私は……「これは面白いこと……もとい、事件だよ！！」と思いきや即座に赤犬をつけることにしたのさ。

彼はどんどん薄暗い方向に進んでいく。場所は閑静な住宅街。時刻は夜の二時。ただでさえ月が出ていなくて完全な闇に近いのに、住宅街の明かりがどんどん消えて行って視界はかなり悪くなっていた。

それでも赤犬は迷うことなく歩を進めていく。おかしい……いく

ら何でも歩みがしつかりしすぎている。

大将である私ですら何かを見るのが難しい闇の中、赤犬はまるで何かな操られているかのようにするすると歩みを進めていく。

私は言い知れない寒気を感じて、今すぐにも引き返そうとおもったのだけれど、でも彼から目を離すことができなかった。いつもいつも私にケンカを吹っ掛けてくるあいつの弱点を、ひよっとしたらつかめるかもしれない！ という考えが頭から離れなかったのさ。

そして、あいつはある一軒家に入った。中からブツブツと聞こえてくる二人の人間の声。

一つは赤犬の声。もう一つは知らない女。

もしかしてあいつ！

私はそう思っ慌ててその一軒家に飛び込む！！ そして、

「じゃからゆるしてくれよ、モモエ。わしの同僚二人が全く仕事もせんから、わしに全部仕事回ってきよるんじゃ」

「許しません！！ ただいまのキスをしてくれるまで許してあげないんですから！！」

「も」。ほんとすまんかった……」

「……」

…+…+…+…+…+…+…+…+…+…

「そう……。それは、奥さんにめっちゃデレている赤犬だったの！」

最後にそうしめくり、自分のろっそくをふっと吹き消すヘイゼル。リリカとロビンはそんな彼女の様子を見て、

「「え」」

何とも言えない顔でそう吐息をもらした。

そしてリリカがあきれきった声音で、ヘイゼルに、

「それのどの辺が怖い話なのよ？」

「だって、あの堅物がものすごい猫なで声で女に人に話しかけてんだよ！？ れっきとしたホラーじゃないか！！」

「いやまあ、確かにホラーだけでもさ……」

ベクトルが違う……。リリカは大きいため息をつく。

「なんだかもものすごく時間を無駄にした気分だ。麦わらの一味にいる一方通行アクセラレクターあたりに登場してもらってベクトル修正してほしいくらいだ。」

「ちなみにそのあとどうなったの？」

よせばいいのに、ロビンは無駄な好奇心を發揮してヘイゼルにそう聞いた。

「え？ 普通に殺し合いになったけど？ でも、あの赤犬が勝負のあとに『同僚の女の人に手を上げるんじゃないやありません！』って、奥さんに怒られているところが見れたのはよかったね」

とりあえずリリカは、自分のあずかり知らぬところで私生活を怪談にされてしまった赤犬に合掌をするのだった。

「じゃあ、次は私の番ね」

次にろうそくを取ったのはロビンだった。

この女。髪も肌も若干黒いうえに服装まで黒寄りのものを着ているから場の薄気味悪さが倍増している。

怪談の雰囲気似合っつて女としてどうなの？

リリカの内心を知る由もなくロビンは、少しだけ笑みを浮かべながらポツリポツリと話を始める。

「これは……まだ私がクロコダイルに勧誘される前の話なんです
ね」

2・ロビンの話

その海賊団は大きな艦隊を組んでいて、大戦力をもって略奪を行う海賊団だったわ。そんな海賊に欠かせない役割が『電伝虫による通信手』だったの。

何かしらの方法で詳しい連絡を取り合っていないと連携なんて取れないでしょう？

これは、その通信手が体験した世にも恐ろしいお話。

その通信手さん……名前は Aさんにしておきましょう。その Aさんはあまり真面目な通信手ではなく、電伝虫番の時間が深夜と

いうこともあって、電伝虫を番をしている時はいつも居眠りをして
いたわ。

その日も彼は居眠りをしながら電伝虫の前に座っていたわ。そん
な時だったの……

「プルプルプル……………プルプルプル……………」

電伝虫に通信が入ったのは。

いつもは電伝虫の着信音程度では目を覚まさない彼だったんだけ
ど、その日はどういいうわけか目が覚めてしまったの。

『誰だよこんな時間に……………』

心の中でそう思いながら、彼は電伝虫の受話器を取って通信に出
たの。

「はい。こちら旗艦。艦隊番号と役職をお答えし要件をお話しくだ
さい」

『Aか？ 俺だよ俺！！』

「なんだBかよ」

電伝虫の相手は違う艦隊に乗っている彼の友人だったわ。しばら
く会っていなかった友人の声を聴いてAさんは少しうかれた様子で
Bさんに話しかけたの。

「どうしたんだよこんな時間に。何か緊急事態か？」

『いや。たまたま電伝虫があつたからお前にかけてみようと思つてさ。そしたらお前に前渡した小電伝虫にでねーから、仕事でもしてんのかと思つてこつちにかけたらビンゴだつたんだよ。にしても、お前また居眠りしていたんだろ』

「うつせえな。いいだろ別に？」

二人は他愛もない会話を楽しみながら久しぶりの友人との再会を喜び合つたわ。そして、AさんはBさんの近況について尋ねてみることにしたの。

「おまえ……いまどうしてんの？」

『おれか？ 俺はいま五番艦に乗っているんだ』

Bがそこまで言つたとき電伝虫が突然奇声を発してキレてしまつたの。

「な、なんだ？」

ちよつと不審なきれ方だつたから、Aさんは不審に思つただけど『ちよつしでもわるいんだろ……』と思つてその時はたいして気にしなかつたの。

でも、その翌日の朝のことよ……。

たまたま五番艦から報告に来ていた違う友人がいたから、Aさんは彼にBさんの近況について聞いてみることにしたの。で、その人から帰つてきたのは……。

「何言つてんだお前。Bならこの前の海軍との戦闘で死んじまったよ」

という信じられないものだった。

Aさんは愕然としたわ。だったら、自分が昨日話した人間はいつたい誰だったんだ!?

得も言えない寒気がAさんを襲ったわ。背中にはびっしりと冷や汗をかき、体の震えが止まらなくなる。

今日は非番だつて言つてあるし……電伝虫はかかつてこないだろう。次Bがかけてきたときは少し話を聞いてもみよう……。わずかな希望にすがりつきながら、AさんはBサンにもらった小電伝虫を腕に巻きつけて寝室へいき、そして眠りについたわ……。

それから数時間後。彼がいつも電伝虫の晩をしている時間だったわ。

「プルプルプル………プルプルプル………」

小電伝虫に着信が入ったのは!!

「Bか!?!」

Bさんのことを気にしていたため眠りが浅かったAさんはすぐに飛び起きて、その娘電伝虫に返事を返した。

「B!?!」

『おお！？ どうしたんだよA。いきなりそんな大声出して……。あ、もしかして俺からの電話が待ち遠しかったとか？』

「そんな冗談を言っている場合じゃない！！ お前いったいどこにいるんだ！？ 5番艦の艦長さんに話聞いたら、お前この前死んだって……」

Aがそこまで行った時だった……。

「ブチッ」

突然電伝虫がそう叫び沈黙してしまったのは……。

「え？ おい、B！？」

Aさんは慌てて、何度も何度も電伝虫をかけなおそうとしたのだけれど、一向にBにはつながらない。そんなじかんが30分過ぎた時だったわ。再び電伝虫に着信が入ったのは。

「B！？」

「……俺、いま4番艦にいるんだ……」

今まで聞いたことがない、ぞっとするような低い声音でBとは違う誰かの声がAの電伝虫から発せられた。

「なっ！？」

再び沈黙する電伝虫。Aさんはもう恐ろしくなって慌てて小電伝

虫を捨てようとしたのだけれど、どういっわけかなかなか離れない。

そんな中再びの着信。着信までの間がどんどん短くなっている。Aさんはそのことに焦りながら、電伝虫を取ろうとはしなかった。しかし、電伝虫はどういうわけか勝手に着信に出てしまい向こうの声を届けてくる。

「俺……いま3番艦にいるんだ」

ぶちっ！

Aはその声を聞いてもう真っ青になった。

ち、近づいてきているのか!?

その考えに至ったAは死に物狂いで寢室を飛び出した!!

船長に……船長に助けてもらおうんだ!!

恐怖で埋めつく頭で何とかそう考えながらBは広い船の中を走っていく。その間にも電伝虫からの着信は、間を縮めながら何度も入ってきた。

「俺、いま2番艦にいるんだ」

長い廊下を走り抜け、

「俺、いま旗艦にいるんだ」

長い階段を駆け上がり、

「俺、いま旗艦の中にいるんだ」

再び長い廊下を走り抜け、

「俺、いまお前の部屋の前にいるんだ」

いくつもの扉を抜け、

「俺、いまお前の……」

船長室のドアに男が手をかけたとき、

「後ろにいるんだ……」

何かがぺたりとAの肩にふれた!!

「ぎゃああああああああああああああああああ!!」

Aが目を覚ますと、時刻はすっかり朝になっていたわ。Aはどういうわけか船長室の前に横たわるように眠っていたの。

「たすかった……のか？」

あたりを見渡し、怪しい影がないのを確認したAは安堵の息を漏らす。

理由は定かではないが、どうやら正体不明の声の主はAをあきらめてくれたらしい。

自分の強運さに笑いながら、Aさんはよっこらせと立ち上がる。床で寝ていたせいがかちこちが痛い体のストレッチをして、食堂へ向かおうとするAさん。そんな彼に……。

「ああ？ Aか？ どうしたこんな時間に？」

今日を覚まして朝食をとりに行くこうとしているのだと思われる、船長が顔を出した。

「ああ、船長。いや、ちょっと変な夢を見まして……」

「その年になってか。もはやギャグの域だぞそれ？」

「悪かったですね」

膨れるAさんに笑いかけながら、船長はAさんに質問をぶつけてきたの。

「ところで……おまえ、その肩についているの……なんだ？」

「は？ 肩ですか……」

いきなり何言っているんだこの人と、Aはじつと船長を見つめ……そして気づいた。船長の顔色が非常に悪く、まるでこの世で最も恐ろしいものに睨みつけられているかのような顔をしていることに。

「ほ、ほら……いるだろ？ お前の肩に……その気味の悪い……長い髪をした……」

Aは恐る恐る振り返って……そして、

「……………捕まえた」

……+……+……+……+……

フッ……。

余韻をたっぷりと残した後、ろっそくの火を吹き消すロビン。

そして、

「どんだけびびっているのよ……」

「「び、びびってないし!!」「」

お互いの体を支えあうように抱きしめあうハイゼルとリリカに三白眼を向けた。

仮にも元海軍大将と『死霊術師』がこの程度でビビるってどういふことといわんばかりのロビンである。

「べ、別にあなたの話が怖かったとかではなくてね……。い、いきなり室温が下がったから私達の体で温めあおうとしただけであって……」

「そう。涼がとれたみたいでよかったわ」

本当はこの後に、『その船員は日に日にやつれていき3日後に死亡。船長も彼が死んだ1週間後に死んだ』という、後日談があるのだが……今は言わないほうがいいだろう。

それにしてもあの海賊団。いままも海賊やっているのかしら？

ロビンの内心の考えに気づくことはなく（そっちのほづが誰にとっても幸せだろう）最後にリリカの晩がやってくる。

…+…+…+…+…+…+…+…+…+…+…

「さて……最後の話はわたくしリリカが披露させていただきます」

「よっ！！ 待ってました！！」

「楽しみにしているわ」

結局ノリノリで話を聞いているヘイゼルに、自分以上に話を期待するロビン。何せ相手は吸血鬼やらゾンビやらを普通に引きつれてくる怪物なのだ。

「いったいどんな話がきけるのか……」。

二人が期待に胸を膨らませる中、リリカがろうそくを手に取りスツと口を開く。

3・リリカの話

この小説。実は作者が飽きてしまったので今回でうちきりです。

……
十……十……
……十……十……

凍りつくロビンとヘイゼルをしり目に、意味深な笑みを浮かべて
去っていくリリカ。

ろつそくの光が遠ざかり。船室に完全な闇が訪れた……。

ある魔術師の風物詩（後書き）

「冗談よ……」

リリカはロビンたちが復活するのを待って、よじやくろくそくを吹き消した。

本当のあとがき。

ええ、もちろん冗談ですとも！！ 肝が冷えました？

「冗談にしてはたちが悪い？ はい。マジすいませんでした！！」

赤犬の奥さんの話ですが……実話だと面白いな〜と思って勝手に設定をねつ造しました。原作で赤犬に奥さんがいなくても怒らないでください。

ロビンが話した怪談はどうでしたか？ 怖がっていただけでしょうか？ ありがちな話だと切り捨てていただいても結構ですよ。一時期はやったメリーさんの電話という怪談をベースにしたものですから。

何度も何度も言うようですが、打ち切りではありません。まだまだ

だ続きます。

というわけで皆さんを安心させる予告編を。

次はロレンが主役です。

成長するコック

僕 レスター・D・ロレンの朝は早い。

料理とはもともと手間暇をかけてこそ最高のものができるもの。その言葉が本当であることを経験から知っている僕は、朝食を作るにも長い時間をかけて料理に臨むからだ。

確かに素早く料理を作らなければならない時もある。だが、時間が取れるなら、時間をかけるに越したことはないのだから……。

そんな僕の今日の朝食メニューは……。

「トウヤさんは朝からしつかり食ったほうが動きやすくなるって聞いていたからな。昨日ヴァイさんが釣った海王類でカルパッチョと酒蒸し。あとムニエルを作って……。魚類だけだと味に偏りが出るから肉も使いたいんだけどストックが少ないんだよ……。この前買ってきた豆を細かくすりつぶしたところに、ひき肉を少量加えて二時間ぐらいにソースで煮込んだハンバーグを出して勘弁してもらいますか」

基本的にうちの一味は人数少ないうえに大量に食事を取る人がエイゼンさんとヴァイさんだけなので量を作る必要がない。だから僕はこうしてのんびりと料理の味について追及ができる。正直船に乗るコックとしては破格の待遇だろう。

僕がそんな風に自分の仲間をほめたたえている時だった。

「ふあゝ。あれ？ ロレン殿ではござらんか。こんな時間から起き

ているとは……まじめでござるな」

ほかのメンバーの中では一番の早起きさんであるエイゼンさんが目をさまし、食堂にやってきたのは。

エイゼンさんは最近になった仲間になった二人のうちの一人だ。《ガス人間》でとつても強く、そして料理の味わかってんの？　と、ちよつとだけ思ってしまうくらい豪快に料理を食べる人である。

「ああ、おはようございますエイゼン……つて、何勝手に朝食食べているんですか!？」

僕が振り返つて挨拶をしようとしたその時、彼はいただきますのあいさつもなしに勝手に僕の料理を食べていました。

まあ、海賊なんだからある程度マナーがなっていないのは仕方ないですが、でも……。

「それ下味すらついていな生魚じゃないですか!?　ダメですよ!　食材だけ食べるなんて!!　せめて完成したものを食べてください!!」

料理人としてこのような暴挙を許すわけにはいきません!!　僕はつい先ほど完成させたカルパッチョをもってエイゼンさんに食べてかかります。

しかし、

「ふつ。まだまだ若いでござるなロレン殿」

「な、なんですかその意味深な笑みは!？」

エイゼンさんはやりと笑いながら僕のカルパッチョに手を付けることなく、切りそろえられた生魚の実を食べ続けました。

「いいでござるか、ロレン殿。我が出身の『ワの国』では、魚の大半はこうやって食べるものでござる!! 食材の生の味を生かし、ありのままの風味で、自然に感謝しながら食す。これこそワの国の食生活の信念ござる!!」

その時僕は雷に打たれたかのような衝撃を受けました!

な、なるほど。食材の活かし方には、そういった方法もあったのですね!!

僕は目からうろこが滝に用流れ落ちているような錯覚を覚えます。

まさか、僕が知らない調理方法がまだあったなんて。ゼフさん…世界はまだ広いですね!!

「ふっ。どうやら何かつかんだようでござるな」

食事を終えたエイゼンさんが、口元のソースを吹きながら僕に笑いかけてくれる。僕はそれににこりと笑みを返しながら、エイゼンさんに頭を下げた。この素晴らしき料理の伝道者に、最大の敬意を表しながら。

「はい。ありがとうございますエイゼンさん。昼食はエイゼンさんが言った……ありのままの味の料理を作り出したいと思います!!」

「ふむ。精進するでござるよ……」

エイゼンさんは最後にそう言い残すと、広い背中を僕に見せて去っていきました。

か、かつこいいー！ あ、あれが侍というものなのですねー！

僕がそんな風にしばらくの間ほうけていると、二日酔いでもしているのか、苦痛に満ちた表情でトウヤさんが入ってきた。

こんな時間にトウヤさんが起きるなんて珍しいが、おおかた二日酔いの頭痛がひどくなっただらう。

「あれ？ 何をしているのロレン」

「トウヤさんおはようございます。二日酔い覚ましのホットミルク入れますね」

「ああ、頼む。ところで朝食はまだできていないのか？」

「え、もう半分くらいはできてますけど？」

エイゼンさんとの会話のによって受けた感動のあまり、僕は朝食を作ることをすっかり忘れてしまっていました。それでも調理はほとんど佳境といいところに来ており、あとは二、三手を加えればすべての料理が完成するところまで来ている。

「でも、料理の臭いがしないんだが？」

「エイゼンさんのばかりあああああああああああああああ
あああああああああー！」

少しでもあの食い意地に張った怪物に感心してしまった自分を責めながら、再び料理を作り直すのでした。

ちなみに……朝食を作り終えた僕がみなさん呼びに行くと、何やら原形をとどめていないエイゼンさんがマストに吊るし上げられていたのですが……。

「……みなさん。御飯ですよ」

僕は特に何も言うことなく、笑顔で皆さんを食堂に迎え入れるの
でした。

ある侍の日常

これは、世界政府の仕事を終え、トウヤがハンターズ本部へ帰還し通信機開発にいそしんでいたころの話。

ミサキザキ・エイゼン。

新世界和の国出身の猛者であり、剣客である。

とある事情で今は剣を失ってしまっているが、本来彼の戦い方は刀を使つての総合格闘。ガスを充満させて戦うことなど、本当は彼の戦いの美学に反するのだ。

なので……。

「刀を買いたいのでござるがいいでござるか？」

「いいけど……。いるのか？ 刀？」

早朝に突然やってきてそんなことを切り出したエイゼンに、徹夜で通信気を作っていたトウヤは、クマができた目を胡乱気に向けた。

ぶっちゃけガス人間の彼には武装はいらないと思う。体から出される毒ガスを出せばたいいの敵は片付くのだから。というか、並

み居るロギアでさえも勝てるかどうか怪しい存在である。

「わかっていないでござるな。戦いはただ勝てばいいというものではないでござる。真の達人とは勝つの過程にもこだわるものなのでござるよ。それに攻撃手段は一つでも多いほうがいいでござるしな」

そういつて、もっともらしいことを言っているエイゼンの右手は、何かをよこせと言わんばかりに広げられトウヤに突き出されていた。

ミサキザキ・エイゼン。とある事情により……現在文無しである。

「はあ、あんま高額金は出せないぞ？ 財布のひもはミシヤーナが握っているからな」

トウヤはそういいながらも、机の引き出しにしまっていた自分の財布から札束を取り出しエイゼンに投げ渡す。こう見えてトウヤはトレジャーハンター。財宝集めでそこそこ稼いでいるのである。

「恩に着るでござる〜」

意気揚々と自分の部屋を去っていくエイゼンの背中を、トウヤはじつと見つめながら彼に聞こえないようにひとこゝろ呟く。

「まあ、あいつにはそのうち天然ガスを作ってもらおう予定だし……このくらいの出費は安いもんだろ」

ミサキザキ・エイゼン。ある世界にいればエネルギー問題を一挙に解決できるであろう、貴重な人材である。

…
十…
十…
…
…
十…
十…
…

意気揚々用途フーシャ村改め、フーシャ街に出たエイゼンは、最近噂になっているグランドライン帰り店主が切り盛りする武器屋へ

とやってきた。

薄暗い店の中には、棍棒やら槍やらが壁に立てかけられており、安そうな刀が樽に無数に突き刺さっている。ピストルはさすがにガラスケースの中に保管されているようだが、かなり雑多に積まれていて正直使い物になるかどうか不安になる光景である。

「こんにちはどいづる〜」

「いらつしゃい……。今日は何をお探しで？」

そこにいたのは頬についた十字傷が特徴的な、新聞を読みふけている店主。彼は、入店と同時に元気な挨拶をかましたエイゼンに特に反応することもなく、じつと手にもった新聞を読み続けながらそういった。

何とも無愛想な対応であったが、エイゼンは特に気にすることもなく迷わず刀のコーナーへと歩いて行った。

「ちよつと刀を探しに……」

「……」

そういったエイゼンに、少しは興味を持ったのだろうか。新聞にくぎ付けだった目を少しだけ動かし、店主は樽に突き刺さった大量の刀に近づいていくエイゼンをじつと観察し始めた。

この店主、実は新世界の名のある海賊団に所属していた剣士だったのだが、《四皇》カイドウによってその海賊団は粉碎されてしまった。唯一生き残った彼も、戦いに出ることができない体になって

しまったため海賊家業から足を洗い、こうしてのんびりと武器屋を営むことにしたのだ。

しかし、その観察眼は衰えてはいなかった。彼はエイゼンのことを一目で強者だと見抜き、いったいどんな刀を選ぶのかと、若干興味がわいてしまったのだ。

そして、彼は目撃した。エイゼンが樽の中に迷わず手を突っ込み、彼が仕込んだあたりを引くの。

「うーん。これは……」

ぼろぼろの柄に、色が剥げた鞘。正直誰も手に取らないであろう安物臭い刀だ。だが、エイゼンは迷うことなくそれを選び取り、鞘から刀身を少しだけ引き抜き、その刃紋を観察した。

「やはり良業物の『黒椿』ではござらんか。黒刀の中では質は落ちるが、それでもほかのものとは比べたら最良といって差し支えない名刀。このようなところで眠らせておくのはもったいないでござるよ店主」

ほう……。エイゼンが心配した様な声でそう言うてくるのを見て、店主はにやりと笑った。たいていの三流刀使いは見た目だけであの剣が良業物であることに気づかない。気づいたにしても、店主をバカにしながらその刀を安く買いたろうとするものだ。しかし、この男はその刀に気づき、もっといいところに置くべきだと注意してきた。

人格……腕。ともに良好。俺のコレクションを売るのにふさわしい人間だな。

店主はそう判断し、今までの無愛想な態度を引つ込めエイゼンに笑いかけた。

「やあ、すまないな。少しお前さんのことをためさせてもらったよ。悪いがそれは売り物じゃない。昔からの俺の相棒でね、誰かに譲るつもりはないんだ」

「でござるうな。よく使いこまれたいい刀でござる」

自分の相棒がほめられ、ますます機嫌がよくなる店主。そして彼は、奥へと引つ込み、

「あんにゃそんなところにおいておる刀は不釣り合いだろ。ほれ……」

二十数本の刀を抱えて再び戻ってきた。店主はそれらをカウンタ―におき几帳面に並べていく。

「こつちがあんにゃに売るもんだ。好きなの一本持っていきな」

この二十数本。すべてジェラキユール・ミホークとの争奪戦で勝ち取った最上大業物。

「昔は《千刃》と呼ばれた剣士だったんでな。これくらいは持っている」

王下七武海級実力者《千刃》のミロクはそういつて笑った。

…
十…
十…
……………
十…
十…

そんな風に打ち解けたかに思えた二人だったが……。

「何が気に入くわねえんだよ!」

「すべてでござる!! こんなちんけな刀を拙者の腰の下げるわけにはいかないでござる!!」

何やら今は険悪な雰囲気になっている。

「ちんけだと!? 刀剣使いならのどから手が出るほどほしがる最上大業物だぞ!？」

「そんなことは関係ないでござる!! 拙者が欲しているのはこのようなものではござらん!!」

「いったいなんだっていうんだ!! ミロクはそう思って舌打ちした。」

あれからかなり時間はたち、時刻は夕方。あのミホークの愛刀……黒刀《夜》に匹敵するほどの名刀たちをエイゼンは『いらぬ』と、いって切り捨てたのだ!!

「こいつ……頭おかしんじゃないのか!? ミロクは内心でそう叫びながら一応は自分が認めた剣士なので、彼の要望を聞いてみることにする。」

「じゃあ、いったいどんな刀だったらいんだ!？」

「そうでござるな」

店主の言葉に、エイゼンは顎に手を当て考え込む。昔自分が使っていた愛刀は……。

「長さは大体4尺程度」

「ふむふむ……」

「乱刃大逆丁字」

「ふむふむ……」

「ボタンを押すとドリルに変形……」

「さて……」

ちよつと待て、いろいろマテ。というか永久に待て!!

「なんだそのふざけた機能は!!」

「ふざけていないでござる!! かつこいいではござらんか!!」

「カツコよくねーよ!! なにその刀!? 剣士バカにしてんの!」
「?」

食って掛かるミロクに『なぜこの良さがわからない!?』といわんばかりの表情をするエイゼン。残念ながらこの場合、軍配が上がるのはミロクにであらう。

どこの剣士がドリルに変形するような刀をほしがるというのか。刀好きで有名なあのたしぎでさえも、正直遠慮したい刀だろう。というか……。

「それはもう刀じゃねええええええええええええええええええええええええええええええ!!」

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

後日談。

海軍本部にて。

がちゃがちゃがちゃがちゃ……。

ド派手な音を立てて変形する刀を呆然と見やりながらモモンガは
途方に暮れる。

とある海賊が持っていた大業物らしき刀を奪い取ったのだが、柄
についていたボタンに興味本位で触れてしまい、この刀の隠し機能

を発動させてしまったのだ。

そして、変形した刀がなった姿は……。

「どう見ても……ドリル……だよな？」

どうやって使ったこんなもの……。

夕日に照らされながら輝く円錐状のあれに、モモンガは茫然とするのだった。

ちなみにその数分後……たまたま通りかかった Dr. ベガパン
クが、

「ワンダフル!!」

とか言いながらその刀を引き取った後、さらなる魔改造を施しパ
スワードを言ったらコスチュームが出てきて変身できる機能を付け
加え、モモンガに返したのだが、やはりモモンガは扱いに困ってし
まい結局は、モモンガ家の倉庫の奥深くに、その刀は眠ることにな
るのだった。

旭神の日常(前書き)

いい話にしようと思ったのに……。

旭神の日常

フーシャ町内ハンターズ本部。

普段は、超能力を研究する白衣を着た科学者や、ロビンを中心に世界中の遺跡の資料を解析し歴史を調べる革製のコートをかきた集団が行き来する研究棟に、酷く不釣り合いな女がひとり歩いていた。

桜と金色の《悪》の刺繍が施された、黒く長い羽織をひるがえし、その下に来ていた薄い着流しををさらけ出しながら堂々と歩く女。そのせいで、放漫な胸の谷間が思いつきり外にさらされているが、隠すつもりはないようで、男性職員たちの死線を集めている。

髪は金で、瞳はすんだトルコブルー。老いを感じさせない妖艶な美女で、口元にはいつも不敵な笑みが浮かんでおり、目元の泣き黒子がチャームポイント（自分でそう言った）のこの女……名前はミユラー・D・ヘイゼル。

元海軍大将にして、圧倒的な戦闘能力を持つ怪物である。

そんな彼女がどうして研究者棟に現れたのかというと、ハンターズ裏の総帥であるトウヤに召集されたからだ。

まったく、人がせつかく仕事をしてきたっていうのにいったいなんだっていうんだい……。

ぶちぶち文句を言いながら彼女が訪れたのは、ボロイ扉の研究室。その鍵穴にやたらと豪華な力ギを突っ込み、彼女はそこの中へと入った。

「……………《^{ポトゲート}転移門》だったかい？ 相変わらず超能力っていうのは規格外だね……………」

「悪魔の实の能力のほうが規格外だと思うがな。文字通りあいつらは人間をやめているわけだし」

見た目とは裏腹に、一見ただけで高級品を使っていると分かる落ち着いた内装をしている、円卓が置かれた会議室を見て、ヘイゼルは大きいため息をつき、先に到着していたトウヤ（頂上戦争直前ということ浮足立つハンターズを抑えるための激務で、若干やつれてしまった）が『人のことは言えないだろうが』とばかりに眉をしかめた。

この会議室。実はある超能力者によって違う空間からつなげられたところである。この会議室には先ほどヘイゼルが使った鍵を持つものしか入れず、それ以外のものがあの扉にはいつても、あるのはポロイ研究資料と、ゴキブリの軍勢だけ。こうしてハンターズ上層部の情報は守られているのだ。

「それにしてもお前のその服装は似合わんな……………。違和感バリバリだ。今すぐ正義のコートとスーツに戻すことをお勧めする」

「なんだいなんだい？ 開口一番がそれかい。ほかのやつらからは『似合います！！』って、言ってもらえてるんだよ。感性おかしんじゃないのかい？」

トウヤとしては一応着物がある世界からきた人間なので、金髪青眼の妖艶な美女が和服を着ているところにも違和感がぬぐえないのだが、もとよりこの世界に人間はやたらとカラフルな髪や瞳

を持っているので、トウヤの似合う似合わないの基準はずれているものとして認識されてしまう。

トウヤとしては、海軍と戦ってもらう以上、いつまでも正義のコートを着させるわけにもいかなかったから、違う服をあてがってもらおうとしただけなのだが……。まさかこんなところで和の心を試されるなどと思いもしなかった彼である。

「まあいい。いまはそんな話をしに呼んだわけじゃない。仕事だへイゼル」

トウヤの言葉に、ヘイゼルはすさまじく嫌そうな顔になりさっと踵を返した。

「まてやコラ」

「ヤダやだヤダヤダ絶対ヤダ。私もう寝るすぐ寝る今寝る！！さつきグランドライン帰りの裏切者たちを粛清してきたところなんだよ！？ 私に休暇をくれてもいいじゃないか！」

そう。彼女は三日前に起こったハンターズに所属している元海賊たちが起こした、離島襲撃事件のケジメをつけるために、その海賊団を沈めてきたところだった。

当然彼女は疲れ切っており、正直いまはみじんも働く気が起きないのだが……。

「まあそういうな。それに今回の仕事は休みながらできる親切仕様だぞ？ よかったな俺が仏様でも敵わない《慈悲の心》の持ち主で」

「あんたに負けるなんて言われたら仏様も首くくって死ぬことを選ぶだろっよ……」

まあこの実在の仏様に比べたら確かにやさしいのかもしれないけどさ……。と、元自分の上官である仕事バカ（センゴク）の顔を思い出しながらヘイゼルは眉をしかめた。

そんな風にあくまで仕事を嫌がるそぶりを見せるヘイゼルに、トウヤは若干のため気を付きつつ、

「頼む……正直お前しか頼れるやつがないんだ」

「うっ……」

本当に疲れ切った声音でそんなことを言うてくるトウヤに、ヘイゼルは若干のけぞった後、

「はぁ……わかったよ」

大きくため息をつきながらその仕事を受諾した。

ミュラー・D・ヘイゼル。この数日間ですっかりとトウヤに心を許してしまった彼女だった。

…十…十…十…十…十…

「で、その子を預けられたというわけね？」

「きいてないよトウヤああああああ…！」

その翌日のハンターズ食堂。そこではにこにここと笑いながらコーヒーを飲むロビンと、げっそりとやつれた様子でつんつんとピラフをつついているヘイゼル。そして、

「だあだああああああ！」

「……………」

ヘイゼルの背中に背負われながら、何がうれしいのかわからないが、はしゃぎ続ける赤ん坊がいた。

そう。トウヤが頼んだ仕事とはこの赤ん坊のお守りである。

「なんでこんなガキをあいつが預かっているんだい？」

「ハンターズに所属していた賞金稼ぎの子供だったらしいわ。それがある海賊の討伐で返り討ちにあっちゃって……………」

「要するに孤児かい？」

若干の驚きをあらわにするヘイゼルにロビンは無言で頷いた。

「こついつ組織にはつきものな存在よ。普段はマキノさんが預かってくれているみたいだけど……………彼女いまそれどころじゃないでしょうし」

「火拳のエースの育て親の一人だったそうだしねえ……………。そんな奴が処刑されかかっているんだ。そりゃあまり心中穏やかじゃないのはわかるけど……………」

私も忙しいんだよ？

そんな言葉を呟きかけた彼女だったが、さすがにそれは自重した。家族を失いかけている女にそんなことを言っただけで平然としていられる

ほど、彼女は人間をやめてはいない。

「まあ、頂上戦争に参戦するまでは預かるしかないでしょうね……」

「でも私子育てなんかしたことないんだよ!？」

泣きそうな顔でそんな泣き言をいうヘイゼル。普段の様子からは考えられないほどの変化である。

「おお? つまりヘイゼル殿はその年で未婚ということでござるな? それはもう完全ないきおくれ……へぶらあ!？」

にやにや笑いながらそんなことを言ってくるエイゼンを殴り飛ばしながら、ヘイゼルはロビンにすがりつくような視線で頼み込んだ。

「頼むよロビン!! 一生のお願いだ!! この仕事代わって!!」

「まあ別に代わってもいいのだけれど……」

ロビンはそういった後無言である場所を指差した。そこには白い防護マスクをつけた研究者たちがロビンのことを待っており、

「うちの研究室古いもの調べまくるから、思いっきり小さなほこりがまい続けるのよ。だからその中に長時間いると子供は病気にかかる可能性が……」

「あんたに頼んだ私がバカだったよ!!」

ロビンの懇切丁寧な説明を聞き、顔を青ざめさせたヘイゼルは子供を抱えてあっさりと逃走。その赤ん坊をロビンから遠ざけるのだ

った。

「さすがにその反応は傷つくのだけれど……」

「そう思っただったらその汚れた格好でうちに来るのはやめてくださいロビンさん」

何やら大量のほこりが付着しているロビンの衣服を見ながら朝食を持ってきたロレンはため息をついた。

「だってわざわざ着替えるの面倒じゃない？」

「あんたが望む研究が無条件にできるようになったからって少しはつちやけすぎですよロビンさん。貴女女性なんですから、もう少し身だしなみに気を使ってください」

そんな風にロビンのことを諭しながら、ロレンはヘイゼルが消え去った方向をじっと見て一言、

「なんやかんやであの子のこと大切にしているのでは？」

赤ん坊が病気になることを恐れてロビンから遠ざけた彼女の姿は、まさしく母親そのものだったという。

頭痛でもするのか頭を抱えるトウヤ。そんなトウヤに、彼に仕事だと呼び出しを喰らったリリカとヴァイは『さっさと仕事について話せよ……』と、若干の青筋を浮かべながらトウヤに質問をぶつけてみる。

「それで……誰に渡すんだ？」

「単刀直入すぎるだろ……。あとお前たち仕事について聞きたいんじゃないかったのか？」

「そんなわざとらしく相談に乗ってくれって言わんばかりの態度をとられて、きかねえ様な奴がいると思ってるのかバカ」

ヴァイの明け透けな言葉に苦笑をうかべながら、トウヤは肩をすくめた。

「それは内緒で相談に乗ってくれていうのはできないか？」

「バカなことを……。少なくとも私たちが睨んだところではあんたがそれを送る可能性がある人間は三人いるのだぞ？　そんな状況で適切なアドバイスを期待するほうがどうかしている」

「だな……。まあ、その……なんだ『○○』に送る予定なんだが……」

トウヤから出た発言に、リリカは少しだけ眉を上げヴァイは意外そうな顔で『ヒュー』と口笛を鳴らした。

「ずいぶんと……早いな？　まだそんなに時間はたっていないだろ
っ」

「まあな。だが、それでも少し一緒にいただけで分かった。ああ、こいつに俺は　かもなつて……。そしたら案の定、いつの間にか忘れられない奴になっちまったよ」

いい加減俺も年だしな。そろそろだろう？

トウヤのその呟きに、リリカ達は若干考え込んだ後、ゆっくりと頷く。

不老不死である彼女たちにとってはそれはそれほど気にすることではない。だが、そうでないトウヤにとっては確かにその通りだろう。

というか、遅すぎるくらいである。

「だが、まだ少し早いだらう？」

「わかっている。今回は愚痴を聞いてほしかったただけだ。頂上戦争が終わるまで明かすつもりはねーよ」

なにせ……俺はあそこで死ぬかもしれないからな。

トウヤの最後の言葉は聞かなかったことにして、リリカとヴァイはトウヤの愚痴を聞き続けた。

…
…
…
…
…
…
…
…

「ま〜ま〜ま〜」

「だから……お姉さんだつてば……」

「ま〜ま〜……」

「はあ、だめだこりゃ……」

時刻は夕方。ハンターズ本部の屋根の上でヘイゼルはどうやら自分のことを母親と認定してしまった赤ん坊に、そんな身の程知らずな要求をしていた。

青キジと同一年の彼女。確かに見た目は若々しいが実態はれっきとしたおばさんである。

まあ、そんな風に言われても真剣に怒りださないところを見ると彼女もまんざらではないのだろう。

おまけに、どういうわけか彼女の手元には『子育て入門』と書かれた本まで置いてある。

「はあ。好きな男もいないのに子持ちになっちまったよ……。どうしてくれんだいあのバカ。責任とってくれんのかい？」

それでも迷惑しているというポーズをやめるつもりはないのか、ぶちぶち文句を言いながら、ヘイゼルは自分にこの子供を押し付けたあのトレジャーハンターの顔を思い出していた。

ガープ以外で初めて会った自分の格闘術についてこれる男……。

顔は……まあ、悪くないね。性格も……私好みだし。煙草と酒はやめてほしいけどね。

「なあ？ あんたはどう思う？」

「だあ？」

「あの財宝フエチと私とがくつついたら、いいとおもっ……」

そこまで言ったとき、ヘイゼルは顔を真っ赤にして自分の失言に気づいた。

な、何言っただい私は！？ 大体今更、いい男の一人や二人でお辰くような年じゃ……。

と、そこまで考えたヘイゼルは、あることに気づいてしまった。

海軍時代。同期のクザンは恋愛対象ではなく、悪がき仲間といったところ。ボルサリーノは部下だし、サカズキは天敵。師匠にいたのは恋愛感情じゃなくて憧れだし、ほかの中将たちはみんな妻子持ちだったから……。

よくよく思い返してみると恋愛経験が一切ない自分の過去に愕然としつつ、ヘイゼルは自分が抱えた赤ん坊を見下ろした。

「ま、まあ……。こっから先でも充分間に合うよね？ 私だっただまだ若いんだし……」

年齢40後半の焦りである。

「それにトウヤが選ぶのは、ロビンかハンコックのどっちかだろうしね……」

そう考えてみると、あの男……意外とより取り見取りのハーレムやるのかなのか？

いまさらながらそんなことを考えていたヘイゼルの背中に、

「誰がハーレムやるうだ」

「げっ!？」

目に大きなクマを作ったトウヤが、ひょっこりと屋根に顔を出したのだ。

…
ナ…
ナ…
……………
ナ…
ナ…

「仕事はいいのかい？」

「ひと段落ついたからな。あとの仕事はロビンたちがやってくれるらしい。戦争行く前に過労死でぶっ倒れられたら困るからだだよ」

「ははは。確かに……あんた少し働きすぎだよ」

「仕方がないだろう？ 仮にも世界にケンカを売ろうとしているんだ。準備はいくら重ねても足りないくらいだ」

自分の隣に寝転がったトウヤの言葉に苦笑を浮かべながら、ヘイゼルはある疑問をぶつけてみた。

「にしても……今回の戦い、あんたは無理していく必要はないだろう？ せつかくこんな大戦力を持っているんだ。適当にだれか派遣して、あとは結果を待つだけでいいじゃないか」

「ありえんな」

そんなヘイゼルの言葉を、トウヤは目を閉じながら否定した。

「俺がこの組織を作り上げたのは、俺たちが世界政府を裏切った後、公に狙われたりしないようにするための保険にするためだ。だが、

だからといって使い捨てにしていけないなどはつゆほども思っていない」

それは、信念の言葉。自分と同じ悲劇は決して起こさないと
覚悟の言葉。

「ここに集まってくれている人間は、実態を知るかどうかは別に
して俺に命を預けてくれている存在たちだ。そいつらが俺たちを見
えない力で守ってくれているように、俺たちは見える力であいつら
を守ってやる義務がある。だからこそ、頂上戦争参戦だ。俺たちは
あそこで目に見える圧倒的な力を見せつけて、ここにいる奴らの安
全を確保する義務があるんだ」

トウヤのその言葉に、ヘイゼルは少しだけ目を見開きながら自分
に格闘術をおしえてくれていたガープの言葉を思い出していた。

『確かに海軍がやっておることは海賊と変わらん。暴力をもって敵
を強制的の押さえつける、野蛮な行いなものじゃろう。だがな、それ
によって守れるものは……確かに存在するんじゃないよ』

じゃからわしらは、絶対正義の旗を掲げるのじゃ……。

ガープの言葉……。結局自分はその言葉を守ることではできなかつ
た。天竜人の護衛につき、踏みにじった人々の数はもう数えられな
い。

そんな自分が嫌になって、海軍をやめちまったけど……ここなら。

「守りたいものが……守れるかい？」

「……ああ、俺が保証してやる」

いつの間にか夕日は落ちて、空は闇に近い群青色に染まっている。一番星が輝きだし、昔の信念を思い出した旭神と、圧倒的な覚悟を持ったトレジャーハンターキングを照らす。

まるで、彼らのことを祝福するかのよう……。。

旭神の日常（後書き）

ルツチの話のついでのエニエスロビー編をやる案を思いついてしまったのですが、絶対に長編になると思うので、

『さっさと頂上戦争行けよ！！』

か

『ルツチ編をやって〜』

のどちらをするかアンケートを取りたいと思います。できれば協力してください。

海賊女帝との酒宴

「こ、これはなんといい飲み物なのだ!？」

「なんだい？ アマゾンリリーにはビールはないのかい？」

「ぎゃははハハハ!! 腹踊り〜」

「やめんかこのバカども!？」

「「「もつとやれ〜!」「」」

「ヴァイ……なにをしている？」

「ち、違うんです主!! これには深いりゆ……ぎゃああああああああああああああああああ!!」

フーシャ町。ハンターズ本部。

そこに普段は見ない珍しい客たちが来ていた。

それぞれ一人一人が引きつれている巨大な蛇。引き締まった体に露出の多いビキニのような服。

そして……何より重大なのは、そのすべてが女性であること。

女系戦闘民族九蛇。それが彼女たちの名前だった。

「フフフ……。これほど愉快的な酒盛りは久しぶりじゃ。最近世界政

府がこつちへ来いと再三命令を出してきおって心休まる暇がなくての……」

「行ってやったほうがいいんじゃないのか？ 十中八九《頂上戦争》のことだろうに」

「ふん！！ 優等生は言うことが違うの。じゃがあいにくと……わらわは世界政府が嫌いじゃ。お前を通して説得されようが、いかんもんはいかん」

「おつと？ ばれていたのか？」

「普段『忙しい忙しい』といって妾の来訪を拒んできていたおぬしが、突然『遊びに来い』と行ってきたのじゃ。何かあると思うのは当然であろう？」

まったく……。油断も隙もない男。

そういつて優雅にワインを口に運ぶのはボア・ハンコック。女系戦闘民族《九蛇》の女王にして王下七武海の一角を担う女傑である。世界一の美女と名高い怪物である。

その隣でウオッカを浴びるように飲んでいるのはハンターズ裏の総帥。裏王下七武海のリーダー イササギ・トウヤ。

先ほどの会話の内容通り、世界政府に尻尾を振らなければならぬトウヤは、交流のあるハンコックの説得を世界政府から命令されていたのだが、

「まあ、そんなに期待はされていなかったからな。別に俺の説得が

「どうこうで、行く行かないを決めてくれなくてもいい」

「行かないと決めておるといっておろうが。だが、そうなのか？」

「あたりまえだ。世界政府はお前が男と仲が良くなること自体ありえないことだと思っっているんだよ。奴らは、俺がお前と交流があるといっても二、三言葉を交わしたただけだと思っっている。正直お前がこっちに来たこと自体驚いているとおもうぞ？」

「ふむ……じゃがよかつたのか？ オヌシはハンターズに関係を持つておることは極力隠したいといっただけではないか？ それなのに妾をこんなところに招き入れ、あまつさえ宴会を開くなど……。世界政府が怪しむには十分な材料であらう？」

ハンコックの心配そうな疑問に、トウヤは不敵な笑みを浮かべて返答を返す。

「ふん。その程度のことはきちんと考えているさ。だが、俺たちはもう世界政府に匹敵する組織力を持つているんだぞ？ 当然情報戦を行うための暗部はきちんと用意してある。そいつらが、カームベルトからお前たちが出た時点で海軍側の諜報勢力を妨害してお前たちの行方をわからなくしたんだよ。だから、海軍は俺が連絡をいれたことによつて『俺とハンコックが接触した』という情報は持つていないが、『俺とハンコックがどこで会ったか？』という情報は持つていない。そんな状態で俺とハンターズの関係が勘ぐられることはまずないだろう」

なんともはや用意周到なことである。おそらく海軍自身もトウヤが何かをしたと踏んではいるのだろうが、あいにくと彼らの諜報機関である『C P』^{サイファーボール}は麦わらの一味のひとり《^{アクセラレータ}一方通行》の襲撃を受

けて壊滅。追い討ちとばかりに、遅れてやってきた麦わらの一味がCP最高戦力《CP9》を下したため、いまだに復旧のメドすら立っていない状況だ。

そんな彼らがきちんと機能しているハンターズの諜報組織のしつぽをつかめるはずもなく、トウヤがやったという証拠を見つければ不可能だろう。

「と、いうわけで……お前はもうしばらくのんびりとしている。明日ぐらいまでならこの島にいても大丈夫なように暗部連中に頑張ってもらっているからな」

「ずいぶんと大物になったものじゃな……。妾とあつた時はただの卑怯者じゃったのに」

「おまえ、ちょっと俺に対して辛辣すぎやしないか？」

ハンコツクの苦笑交じりの皮肉に眉をしかめながらトウヤはグラスを傾ける。そんな彼の様子にハンコツクはクスクス笑いながら騒ぎ続けている自分の仲間たちを見た。

姦しく笑い、盛大に飲み、肩を組んで歌う。そんな生き生きとした自分のクルーを見て、ハンコツクは少しだけ笑う。

「いいところじゃ。ここは……アヤツらのあんな顔、妾は初めて見た」

「？ 普段から尊敬されているじゃないか。お前が言うような不和は感じないが？」

「ああ、だがそれは恐れじゃ。妾のために従順に働き妾に仕えられて光栄ですと笑う。妾もそれで満足じゃったし、今もその気持ちに変わりはない。わらわは女王なのじゃ……。敬われるのは当然のこと。じゃが……」

ハンコックはそこで言葉を切り、今まで見たことがないようなきれいな笑みを浮かべた。いつものような傲慢な笑みではなく、まるで全てをいつくしむような、慈愛にあふれた聖母の笑み。

「お前と出会ってから、ああいった笑みが見れることも……悪くないと思えるようになったのじゃ」

そんな黄昏た様子のハンコックに、トウヤは少しだけ見とれた後、『ふんっ』と鼻を鳴らした。

「そんな表情ができたんだなお前。てつきりすべての感情を傲慢さに転換していたのかと思っていたぞ？」

「むっ……失礼な奴め。オヌシも妾に対しては十分に辛辣ではないか!!」

そんな風にハンコックが青筋を浮かべた時だった、

「へ、蛇姫様!!」

九蛇海賊団の一人が声をかけてきたのは。

つ高圧的なものだった。

だが、

「こ、こんなことでお楽しみを邪魔して申し訳ありません。で、でもわたしはどうしていいかわからないんです……。わたし……。ある男の人と飲んでいたんですが、その男の人に『かわいいね』って言うわねから動悸が止まらないんです。これはまさか、ニヨン婆様が言っていた病なのではと……」

顔を真っ赤にしてそんなことを言ってくる彼女を見て、ハンコックの顔から一気に血の気が引いた！！

「ば、ばかな！？ ま、まさか……。かかってしまったというのか！？ ニヨン婆が言っていた恐ろしいウイルスに！！」

「ウイルス？」

恐れおののくハンコックの様子に、トウヤは酒を飲む手を止め、そう聞いた。こいつらがこんなにおびえるなんて……。そんなにやばい病気なのか？ と。

とりあえず頭の中で伝染病用の緊急行動手順スクランブルを即座に組み立てるトウヤに、ハンコックは血の気の引いた顔でトウヤにその病の名を告げる。

「そう……。病じゃ。我々九蛇にとっては恐ろしい病。あのニヨン婆ですら発症し、島を出て行ってしまった、恐ろしい病……。その名も……。恋の病……」

「……………」

その名前にはしばらく無言になる。ウヤ。そして、

「えっ？ ツッコミ待ち？」

柄にもなく間抜けな表情でそんなことを言ってしまうのだった。

…
十…
十…
……………
十…
十…

「うちのバカどもは女日照りだから、それ言ったら泣いて喜んで承諾してくれるはずだ。まあ、あとでそいつを俺のところに入れてきてくれ。やばそうなやつだったら一応教えるし、優しそうなやつだったらお前らの恋愛観がどの程度なのかを教えてフォロー入れとくから」

「は、はい！！　ありがとうございます！！」

ペコペコ頭を下げて、件の男へと駆け寄っていく九蛇海賊団の団員を見送り、トウヤは隣でガタガタ震えているハンコツクに三白眼を向けた。

「ああ、恐ろしや！！　とうとう犠牲者が！？　妾はいつたいどうすれば！？」

「おまえな……クルーの恋愛の一つや二つでビビりすぎだろ？　笑って『頑張れよ』って言ってやればいいんだよ」

「な、ならぬ！！　ニヨン婆が言っていたぞ！！　恋はいつでもハリケーンじゃと！！　つまり……恋をすればハリケーンが吹くんじゃないろう！？　船乗りにとってこれほど恐ろしいことはない！！」

「吹くか、バカ……」

「おまけに恋をすると体が熱くなり、動悸・息切れ・気付けがおき、最終的には死に至ると!!」

「『救心』でも飲んでろバカ。しかも死なないぞ。少なくともそれが直接的な原因で死ぬことはない……」

「じゃが、恋をすれば子供ができるとニヨン婆が!!」

「それだけじゃできねえから安心しろバカアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

なんなのこいつ? 何歳児の恋愛観だ!? ちょっとだけ頭痛を覚えながらトウヤは根気よくハンコックに正しい《恋》についての知識を教えていく。

まあ、今まで異性がない生活を送ってきたのだから、こうなっても仕方ないとは思いはするのだが……。ん? そういえば女しかないなら九蛇ってどうやって子孫を残したんだ?

思わぬところでワンピース世界で一番謎とされる秘密にぶち当たってしまったトウヤだったが、考えることはやめておいた。そういう下世話な話は知らぬが花だというのがトウヤの持論である。

「な、なるほど……ニヨン婆が言う言うような奇病ではないのじゃな?」

「何回もそう言っているだろう……」

「ではトウヤ……オヌシもしたことがあるのか?」

これまた答えにくいことを……。トウヤはそう思いながら懐から煙草を取り出し火をつけた。

トウヤぐらいの年になると、若いころのバカでまぶしい恋について話をするとはまずしない。未熟な自分をさらしたくないということもあるし、恥ずかしいということもある。トウヤがそれを達観して笑い話として話せるようになるためにはまだまだ時間がかかるものだ。

だが、

「ああ……あるよ。ガキの時に一回と、二十歳の時に一回程な。まあ、後ろのほうは悲恋だったから詳しく話す気はおきんが」

とりあえずはそう答えることにした。ぶつちやけハンコックは恋について知らなさすぎる。このままでは悪い男に引っかけたてしまいうそな気がして友人として不安だったのだ。

「トウヤですらか……。やはり恋とはだれもが経験するものなのだな」

「まあ、お前ほどの年になって初恋もマダなんて、いき遅れもいいところだな」

「なんだかよくは知らんが、バカにされたことだけはわかったぞ？」

ニヤリと笑いからかいの言葉を飛ばすトウヤに、ハンコックは小さな銃ピストルキスを飛ばす。

トウヤはそれをあっさりと受け止め、握りつぶし、ハンコックに

向かってひらひらと手を振った。

「まあ、そのうちお前にも運命の相手が現れるんじゃないか？ 俺が思うに妻わら帽子をかぶった猪突猛進型の主人公気質君だと見るが……」

「やけに具体的な気がするんじゃないか？」

「気のせいじゃないか？」

まあ、アクセルが言うにはハンコックはあいつに惚れるみたいだし、あながち間違っているとは言えないだろう？

内心でそうつぶきながらトウヤは煙草の煙を吐き出した。文字通りそれで煙に巻こうとするトウヤに、ハンコックはにやりと笑いながら唇をトウヤの耳に近づけささやきかける。

「今はどうなのじゃ？ 本命が一人いるおつであるつ？」

「ぶっ！？」

思わず煙にむせるトウヤを無視して、ハンコックは素知らぬ顔でワイングラスを傾ける。

「おまえ……どこでそれを！？」

「ふむ。先ほど気づいたのじゃがどうにもわらわのメロメロの実の能力に《恋愛判定能力》があったらしくての。先ほどのクルーから感じた気配がオアシからも感じられるからもしやと思ったのじゃが、正解だったようじゃ」

私生活で意外と使えそうなメロメロの實の新能力に愕然としながら、トウヤはまいったなといわんばかりに頭をかき煙草を灰皿に押し付けた。

「まあ、いるっちゃいるが……お前や、さっきの女の子のような初々しい恋心じゃないぞ」

「なんじゃ？ 恋にもいろいろあるのか」

「違う。これはただ年を取って達観してしまっただけだ」

苦笑混じりにそんなことを呟きながら、トウヤは再びグラスを傾けるが、中の酒が空になっていくのに気づき舌打ちしながら近くを歩いていた臨時の給仕にオーダーを出す。（ちなみにマキノはいまだに再起不能）

「俺みたいなオッサンは恋をするにしてもお前たちみたいに燃え上がるような激しい恋はめったにしない。俺は枯れちまっっているからな。『この人のためなら全てを捨ててもいい!!』なんて思ったりはしないよ」

ただ……一緒に居れたら穏やかな気持ちになれるだろうなって……そう思ってたな。

画像にすれば間違いなくセピア色に染まっているであろうトウヤの枯れ切った言葉に、ハンコックは思わず乾いた笑みを浮かべた。

見た目通りオッサン臭い言葉だと思ったのだろう。正直こんな話をされてもハンコックとしては面白くとも何ともなかった。からか

いがないからである。

「俺のことより自分のことを心配したほうがいいんじゃないのか？
ハンコック」

「どついつ意味じゃ？」

「おまえ、もうすぐ三十路だろうが？ 早いこと相手を見つけないと、すぐに皺くちやおばさんになっちまうぜ？」

「ほう？ 死にたいと……。よかろう。望み通り石にして粉々に打ち砕いてくれるわ！！」

「うわっ！？ ちょ、待てハンコック！？ それはシャレにならない！！」

思惑とは逆に結局トウヤにからかわれることになりキレルハンコック。してやったりといった笑顔を浮かべながら逃げるトウヤ。

突如として始まった強力な能力者二人の喧嘩に、会場は一気に色めきたちどちらが勝つかの賭けが始まる。

こうして、ハンターズと九蛇の賑やかな酒宴はまだまだ続いているのだった。

海賊女帝との酒宴（後書き）

結局エニエスロビー編やることにしました！！

頂上戦争楽しみにしていただいていた方……本当にすみません！！

できるだけ楽しい話にしますので、なにとぞご容赦を！！

次回の主人公は二人です。

ロブ・ルッチ……そして、一方通行！！

奴らがやってきます！！

暗部最強と最凶の悪魔

闇夜にまぎれ一人の男がフーシャ町を駆け抜ける。

黒いスーツに、ナイフのように鋭い瞳。肩には白いハトが止まっている。

「突然の招集とは……人使いが荒いぜ!!」

肩のハトがそんなことをしゃべるのを横目に見ながら、男は無言のまま自分が港にかくしておいた船に向かってひた走る。

だが、

「こんな夜中に何をしているのかしら？ ルッチ」

突然かけられた言葉に、若干の驚愕と圧倒的な警戒を表しながら男は無理やり体の進路を変え、道路に身を投げ出した!!

瞬間、男が走り抜けるはずだった場所にとんでもない勢いで何か突き刺さり、最新しくなった石畳を粉碎する!!

「やっぱり……あなたが密偵だったのね」

「……いつから気付いていた」

黒いスーツを着た男……CP9最強の男ロブ・ルッチはかぶった帽子のずれを直しながら、空から、大きな羽音とともに現れた人物をにらみつける。

骨ばった黒い翼を背中にはやし、露出の多い衣装に身を包んだハ
ンターズ暗部を統括する巨怪　メフィストフェレス。

ルツチはその女怪をにらみつけながら、石畳に突き刺さった巨大
な槍を引き抜いた。

悪魔らしい三叉の鉾。その重量はかなりあるはずなのだが、そん
なことは一切無視して、ルツチが簡単にそれを操るのを見てメフィ
ストフェレスは口笛を鳴らした。

「さすがはCP9ね。人間としての出来が違うといったところかし
ら？　まあ、とりあえずあなたの質問に答えるのなら『入った当初
から』といったところかしら。暗部ではあなたの名前は有名なんだ
から潜入の時は偽名を使うことはお勧めするわ」

「……だったらどうして今まで俺を泳がせていた？　わざわざ泳が
せる必要はないだろう」

槍を構えながらそう尋ねてくるルツチに、ヘラヘラといやらしい
笑みを浮かべながらメフィストフェレスは手をふるい新たな武器を
召喚する。

無骨なとげが突き出た鉄球。モーニングスターである。

「別に殺すだけが諜報戦のやり方じゃないわ。むしろあなたみたい
な実力者は生かしてこそ意味がある」

メフィストフェレスはそう言いながら鉄球をぐるぐる回しながら、
そう答えた。

「あなた……今までハンターズにもぐりこんでどうだった？ 何かつかめたのかしら？」

メフィストフェレスの質問にルッチは微動だにせず、すきなく槍を構えている。さすがはCP9最強。ちよつとした会話で内心を明かすようなやわな訓練を積んでいないようだ。だが、

「何もつかめなかったでしょう？」

メフィストフェレスの確信に満ちた言葉を聞いたとき、彼の顔はゆがんだ。どうして知っているというように……。

「一級暗部組織がある組織は情報の防衛に關しても一級なのよ。内に入っている間諜がどの組織に所属して何を目的にもぐりこんでいるのかは大体つかんでいるわ。そんな奴らが知りたいものをちよつどいいときに隠すなんて造作もないことじゃないの」

メフィストフェレスのからかい交じりの声に、ルッチは思わずうなり声をあげた。道理で……今まで何かを調べようとすると、ちよつどいいタイミングで上司の邪魔が入ると思った！！ こいつらの差し金か！！ と……。

「仮にもあなたは世界最大の勢力《世界政府》最強の暗部組織《CP9》のエースなんでしょう？ そんなあなたが何の情報も持ち帰らず帰っていったらどうなるのかしら？ 『ああ、もうこれ無理だな』ってほかのやつらはすごすごと引っ込んでくれる。少なくとも『半端な間諜を送ったところでけむに巻かれるだけだ。あいてはあの《暗部最強》ロブ・ルッチすら出しぬいたんだから……』と思ってくれませんか？ そつすればハンターズに下手なちよつかいを掛けようとする

るやつらが減るわ」

「俺を広告塔にする気か？」

「はじめからそのつもりで生かしてあげただけど？」

そうでなければお前なんていつでも殺せた。言外にそう言ったメフィストフェレスの言葉がルッチのプライドを刺激する。

弱きことは悪である。それを信念に戦ってきた彼にとつて戦いにおいてだれかに見下されることはこの上ない屈辱であったのだ。

「暗部最強をなめるのなよ！！」

ルッチはその言葉と同時に《剋》を発動！！ 瞬時にメフィストフェレスの目前に移動。その胸にコブシに変えた両手をあて、六式の奥義を発動する！！

「なっ！？」

「六王銃ロクオウガン！！」

駆け抜ける衝撃。響き渡る轟音！！ それらがルッチの放った六王銃のすさまじいまでの威力を証明している。だが、

「ぎゅんねゅん。はずれ」

「！？」

六王銃を食らったはずのメフィストはにやりと笑い、自分の足元

を指差した。

そこにはまるでルツチの六王銃を食らったかのように陥没する、大きなクレーターが石畳に刻まれていて、

「私……別に人間としか契約できないとは一言も言っていないけど？」

「っ！？」

そのクレーターの底にあった石畳に裏に、小さな文字が刻まれている。それは石畳に彫りこまれているもので、どうやら道路を石畳に変える段階で業者に頼んでやってもらっていたものだと思われた。

そこにはこう書いていある。

『フーシャ町の地面全範囲はメフィストフェレスがその範囲内にいる限り、彼女のダメージのすべてを肩代わりすることをここに誓うと……』

「わかったかしら？ つまり私がこの町にいる限り私にダメージを与えることは何人であってもできないということ」

「くっ！？」

これが人外の力を持つ『動物系幻獣種』。文字通り《悪魔の実》の能力者……メフィストフェレスの力か！？

ギリギリと歯がみをしながら、それでもルツチは冷静さを失うこ

とはなかった。ルッチは《剃》を使い即座にメフィストフェレスから距離をとり、そのまま逃げを打ったのだ。

「勝てないとわかったら即座に逃げる。いい判断よロブ・ルッチ。やはり広告塔にふさわしい男。すっかりハンターズ暗部の恐ろしさを政界政府並びに、ほかの裏組織たちに広めてね」

にこやかな顔でルッチを送り出すメフィストフェレスに、ルッチは最後にこう吐き捨てた。

「いつかお前を殺してやる」

「やれるもんならやってみなさい。そうやってそれを実現できたものは今まで誰もいないわ」

だから私はハンターズ暗部の最強として君臨しているのよ。

妖艶な笑みを浮かべたメフィストフェレスのつぶやきを聞き、ルッチは初めて表情を動かし悔しそうな顔になった。

「もう少し時間があれば何か尻尾をつかめたかもしれないというのに……スパンダムめ！ 一体何の用だ！！」

ルッチはそう言いながら昨日やってきた世界政府からの指令書进行い出していった。

《CP9ロブ・ルッチに帰還命令。一週間以内に帰還しスパンダム長官の指示に従うこと》と書かれた指令書を……。

暗部最強と最凶の悪魔（後書き）

次はアクセル視点です！！

ある、たくらみの一方通行

アクセラレータ

一方通行は海に潜っていた。

悪魔の実の能力者ではない彼はこのような真似もできるのだ。

そんな彼は目の前に広がる光景を見て齒噛みしていた。

一方通行はこれでも気を付けているつもりだった。戦う時はこいつから遠く離れたところで戦ったし、もし攻撃を受けかけたときは何よりも優先して守った。だが、彼には変えることはできなかった。いや、おそらく変えることそのものに関しては成功したのだろう。

しかし、それはただの悪あがき。こいつの寿命を数か月ほど増やしただけ……。

このままではおそらく、水の都を通り過ぎた後しばらくたつてから、といういやらしい時間でこいつは死ぬことになる。仲間たちを抱いたまま、こいつは海に沈むだろう。

この先の冒険で描写されていないだけで、もしかしたらフランキー以外の船大工が手に入る機会があるかもしれない。だが、やはり船大工はガレーラで手に入れるか、フランキーを引き入れるかしたい。だから、あそこでの船の乗り換え騒動は必須。

しかし、この船にはキーマンであるニコ・ロビンがいない。その状態でもしもウソップとルフィの喧嘩が勃発した時、彼らを引き合わせる機会はもう二度とないだろう……。

だったら……

「すまねえ……メリー。一味のため、未来のため……俺の茶番に付き合ってくれ！」

そうつぶやいた一方通行はアクセラレータポンと彼の生命線にふれ、そこに入っていた罅を無理やり広げる。ゆっくりと……確実に……こいつの……メリーの命を……削っていく。

「恨んでくれて構わねーよ。俺あこつすることではか一味を守る手段が思う浮かばなかった」

海面に出てそうつぶやく一方通行に、羊の頭は苦笑をうかべたように見えた。

………

「カエルがクロールしてる〜!!」

けたたましい声に鼓膜を刺激され、アクセラレータ一方通行の一日は始まった。

「つつたく……なんだようっせえな」

「おや、起きたのかい？」

寝不足の体を引きずりながらハンモックを降りようとした一方通行に、聞き覚えのある声が真横から響き渡る。

「んあ？」

「おはようっ？」

そこには素っ裸で一方通行のハンモックにもぐりこんでいたアル

ビダがいて……。

「うち……。服着るバカ」

「あらあら反応が薄いね。せっかくお目覚めドッキリ、あわよくばそのまま襲ってもらおうという私の壮大な計画が……」

「黙れ。慎みのねえ女は嫌いだ」

「海賊になにもとめてんだか……。それにしてもあんた変わったね。昔はからかいがいのある純粋な奴だったのに……」

「うるせえ……」

おおよよ……。と泣き崩れるアルビダに毛布を投げつけつつ、一方通行は寝不足の目をこすりながら船室の外に出ようとする。その時、

「まだ青キジに負けたこと引きずってんのかい？ そんなに気にすることないと思うけどねえ……。むしろルーキーがあんな怪物相手にやりあった時点でどうかしていたのさ」

アルビダから飛んできた言葉に凶星をつかれ、一方通行はただでさえ悪人ツラな顔をさらに凶悪にゆがめる。

「うるせえな……。それじゃあ、ダメなんだよ。あれは目前だっていうのに……。海軍大将に歯牙にもかけられなかった……。そんなまじじゃ……。何も変えられねえんだよ……」

「あれ？」

「……なんでもねえ」

不思議そうに首を傾げるアルビダを放置し、一方通行は甲板へと出た。

……
……
……
……
……
……

「あら？ 意外と速かったわね？」

「プランナーはテメエか？ ナミ」

「だってあんたたちいつまでたってもくっつかないんだもん」

ケラケラ笑いながらそんなことを言ってくる航海士に舌打ちをし
ながら、一方通行はサンジにブラックコーヒーを頼む。

原作と違い青キジとの接触はモックタウンで起こった。予想外に
早まった彼の登場に、一方通行は度肝を抜かれたものである。彼の
言葉から推察するに、ニコ・ロビンがイササギ・トウヤに保護され
たと知っていたため、わざわざ麦わらの一味を調べる気は起きてい
なかったそうだ。彼との出会いは本当にただの偶然。なんでも仕事
をさぼってこの町に遊びに来ていたらしい。

だが、彼らは出会ってしまった。おまけにベラミーを一撃でルフ
イがたたきつぶした直後にだ。若手のルーキーで最近懸賞金が三億
にまで跳ね上がったルフィ。そんな彼が再びモックタウン近辺でそ
れなりの勢力を誇っていた海賊を叩きのめしてしまったのだ。青キ
ジに『お前……死んどくか？』といわせるには十分な戦果だった。

当然一方通行は事態が呑み込めないルフィを逃がし、青キジ
に戦いを挑み彼の足止めを行う。現時点の麦わらの一味で、海軍大
将に対抗できるのは自分だけだと思っていたし、またその通りだっ

ただだから。

そして、彼の予想通り、一味を逃がすために一人青キジに挑んだ一方通行は反射の力をいかななく発揮し、青キジの攻撃を完全に防ぎ切った。

しかし、だからこそどこかで慢心していたのだろう。その一瞬のスキを彼は突かれてしまった！！

『アイスタイム』

気が付いた時には意識が暗転していた。目が覚めた後チョッパ―に聞いてみると、一方通行は臓器のみを氷結され固まっていたという。

いくら反射が使えるといっても、彼の内臓にまでそれが働いているわけではない。そこを突かれたのだ。

仮にも頂上戦争に圧倒的な暴力で介入することにより、戦局をひっくり返すことをもくろんでいた彼にとって、青キジにあっさり敗北してしまったという事実は許しがたいことだったし、許されざることだった。

だから彼は必死に強くなるうとした。エネルギーと戦いログアに攻撃を当てるすべを習得し、覇気を求めて神官たちにマントラを得る方法を聞き出したりもした。（結局超能力者には覇気は使えないという結論が出てしまったのだが……）。

そんな風に強さを求めていたら、彼はいつの間にかこうなっていた。まるでオリジナルの一方通行アクセラレータのような、凶悪な性格に……。

まあ、それでも一味のみんなは変わらない態度で接してくれる。一方通行に惚れたと、嘘か本気かわからないことを言いながらついてきたアルビダも、強さを求めて狂ったように自分を鍛える一方通行を時々戒めてくれる。正直彼らには感謝してもしきれなかった。

だが、

「はあ？ 誰がお前なんか……！！ 死ねリア充白身男！！」

「ああん？ 死にてえのか？」

何やらやたらとサンジが突っかかってくるのは、正直かなり困ったが……。

そんな風に、いつものごとくガンを飛ばしあう二人に（それでもコーヒ―は持ってきてくれた）、屈託のない笑い声をあげながらこの船の船長……モンキー・D・ルフィが話しかけてきた。

「うはははははは！！ 見るアクセル！！ カエルがクロールしているぞ……！！」

「バカ抜かせ。カエルは平泳ぎするもん……」

そこまで言って一方通行は思い出した。

「ああ……そついやもうそんな時期か」

「んあ？」

「なんでもねえ。それよか前見とけお前ら。面白いモンが見れるぞ」

一方通行がそうつぶやき、ルフィたちが首をかしげた時だった。

「げこおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

やたら気合が入った鳴き声をカエルが上げるのと同時に、海の方から何かが荒まじい速さで接近！！カエルを見事弾き飛ばした！！

「」「」「」「」なあああああああああああああああああああああああああああああ！」「」「」「」

突如現れたそれ……海上を走る機関車に、一味は全員度肝を抜かれた表情になり、一方通行は一人だけ落ち着いた声音で呟いた。

「さあて……始まりだ。終りと始まりの……ウォーターセブン編が……」

俺はここで……一味を……抜ける。

アクセラレータ
一方通行の不穏なつぶやきは、機関車の轟音にかき消され、だれにも聞こえることはなかった……。

ある、たぐらみの一方通行（後書き）

+ 1 話

そして、物語が始まってしばらくたち。

ルフィ率いる麦わらの一行は、空島で手に入れた財宝を換金して手に入れた、札束を手に入れたゴイングメリー号の修復を頼むため、ガレーラカンパニーへと向かっていた。

「CP9？　なんだそれ？　うめえのか？」

「食いもんじゃないわよ！！　でも、本当なの。都市伝説じゃないの？」

「ていうか……なんでそいつらの行動をお前がしてんだよ！？」

「まあ、それは隣に置いとけ。いまは、そいつらがこの町にいてることが重要なんだよ」

真っ白な髪をがりがりとかきながら一方通行はそういう。

彼の言葉に、船の修理を頼みにガレーラカンパニーに向かっていったナミ、ウソップはじんわりと冷や汗を流した。

「お前の情報は常に正しーけどよ……でも、だったらそのCP何ちゃらってというのはどうしてこの町に潜入しているんだよ！！　ここは造船が盛んな町で政府の御用達だっというじゃねーか！！　そんなところをどうして……」

「なんでも……この町の市長のアイスバーグとやらがヤバイ兵器の

設計図を持っているって話だ。アラバスタのポーングリフにも記さ
れていた古代兵器ってやつだな」

「「！！！」」

一方通行の話はにわかには信じがたいものだったが、彼の情報が
間違ったことはいまだに一度もなかった。そのため、いくらこのよ
うな荒唐無稽な話でも、麦わらの一味は彼の言葉を信じる。全幅の
信頼を置く。

「よ、要するにそいつらにかかわらなければいいのでしょうか？ ア
イスバーグさんとやらもこの町の市長なんて偉い人なんだし、私達
みたいな海賊にはそうそうであつたりは……」

「だといいがな……」

「ぐは〜！！ 急に……俺の持病の『この島にはいけない病』
がああああああ！？」

冷や汗を垂れ流しながら楽観的な意見をはくナミを一瞥し、一方
通行は不吉な笑みを浮かべる。その笑みを見て、ウソップは突然胸
を押さえて苦しみですが、当然誰にも相手にされることはなかった。

そつだ……。これでいい。

そんな一味に、一方通行は苦笑を浮かべる。

これでこの町の厄介ごとにかいつらが巻き込まれることはなくな
った。幸いルフィは、俺の指導で、もう『ギアセカンド』『ギアサ
ード』は使える。ここでわざわざCP9と戦う必要はない。

これで俺は心置きなくこの一味を離れることが……

一方通行がそこまで考えた時だった、

「おい……アクセル!!」

突如ルフィが立ち止り、大声を上げて一方通行を呼び止めた!!

「ああ?」

突然のルフィの叫びに一方通行は思わず歩みをとめ、CP9にビビりまくっていたナミとウソップは抱き合いながら飛び上がった後、

「何突然大声出してんのよ!!」

「マジで心臓が縮むかと思ってたぞ!!」

ルフィをタコなぐりにした……。

「おい……おまえらア……」

ルフィが言いかけたことを聞かせる……。

一方通行は一瞬そう言いかけたのだが、波とウソップの表情があまりに鬼気迫っていたので……

「……」

とりあえず今回は沈黙を守った。性格が悪くなっても、意外なと

ここで前に出たがらない性格が残っている一方通行だった。

それから数分後……

「ふおふあふえ！！ ふあつふえにふいふいふいふおふあふあふえ
ふあふいふふふあふお！！」

「ルフィ……まずは顔が治ってからしゃべれ」

ナミたちにボッコボコにされたため、顔のあちこちにたんこぶを作ってしまった、意味不明な言葉しか発声できなくなってしまったルフィにため息をつきながら、一方通行はそういった。

よくよく考えたら、あいつらもうすでに覇気を使えるんじゃない……

ゴム人間とは思えないルフィの惨状に寒気を覚えながら、一方通行は手に持っていた焼きイカをほおぼる。ルフィはそれを物欲しげに見てくるが、あいにくとこいつに食料をやると根こそぎ食われることを一方通行は知っているので、甘い顔を見せることはなかった。

ちなみに、ナミとウソップはヤガラのレンタル屋へと向かっていて今はいない。

「で、お前はいつたい何が言いたかったんだよ？」

「おまえ！！ 勝手に一味から抜けたりしたらダメだからな！！」

焼きイカを食べた後いつの間にか顔が治っていたルフィに、相変わらずギャグ補正つてのはとんでもねエなおもいつつ一方通行はそう尋ねた。

そして帰ってきたのが、まるで心でも読んだんじゃないかと思えるほどの正確な釘刺し……。

一方通行は内心でそのことにひどく驚きながら、表情にはそのことを浮かべずいつものように凶悪な笑みを浮かべながら、ルフィの言葉を否定した。

「はア？ 何言ってるんだお前？ こんなところでお前たちと離れて何になるつつウんだよ？」

「そか！！ だったらいい！！ でもお前……サボみたいな顔してたぞ……！」

ルフィの言葉に、一方通行は少しだけ眉をかめる。まさか表情に出たとはなア……こいつは俺がメリーにしたことを気づかれるまでもう少し氣イ引き締めとくべきか？

一方通行がそう決意した後、ヤガラを連れたナミとウソップがこちらへと駆け寄ってくる。

こうして、一方通行の計画が発動するまでの時間は刻一刻と迫っていた。

…
十…
十…
……………
十…
十…

「んまー！！　噂のルーキーにこんなところで会えるとはな！！
おれはこの町の市長アイスバー……おい？　なんで後ろの二人はお
れの名前を聞いた瞬間絶望したように膝をつくんだ？」

「あア……。気にすんな。ちょっと持病が発病しただけだ」

ガレーラカンパニーについた一行を待っていたのは、当然のごとくアイスバーグだった。

当然最弱二人組は、この世の終わりとはかりにへこむのだが、一方通行はそれ以上のフォローを入れることなくルフィを前面に押し出し、船に関しては丸投げにした。

そして得た自由時間を彼は《自分が乗ることになるであろう船の物色》にスライドさせたのだ。これで一味を抜けた時の足を確保することもできるし、彼が仕組んだ策略のエッセンスにすることもできる。

そんな時だった。

「そんなところで何をしておるのじゃ？」

長く四角い鼻をもった、特徴的な船大工にあったのは。

+ 1 話 (後書き)

あんまり進まないな。

+ 2 話

長いく四角い鼻。帽子をかぶり目はまんまる……。

なんとというか小学生でもかけそうな単純な顔を作りをした、麦わらの一味のある人物によく似た男……。

「あア？ 誰だお前？」

「聞いておるのはこっちなのじゃが……」

ガレーラカンパニー一番ドック大工職職長。そして、この会社に潜入し古代兵器プルトンの設計図を盗み出そうとしている、C P 9 のひとり……カクである。

一方通行はそれに気づきながらも、平静を保ちいつものようにそう問いかけた。本当は今すぐにも痛めつけて《プルトン》から手を引かせてやりたいところだが、あいにくと、いまのこいつはガレーラカンパニー最強をつたわれる職長の一人。そんなところが見られれば、麦わら海賊団は別にC P 9にはめられなくてもお尋ね者になっってしまう。

そのため一方通行は我慢した。今すぐにこいつを打ちのめすことを……。

「見てわかんねエのか？ 客だ客」

「いや……みてわからんから聞いておるのじゃが？ 大体そんな悪人面した男がこんなところあいておったらたいいの常識人は声

をかけるわい」

「客に対して失礼なやろオだなア、おい。俺のどこが悪人ヅラだよ」

「鏡を見ることをお勧めするぞ……」

……意外と話しやすいやつだった。

「なるほどのお……。船の修理の査定と、万が一の時のために買う船を探しておったのか」

「まア、そういうことだ……」

その辺の積んであった角材に腰を下ろしながら、一方通行とカクは話し込んでいた。

カク実はかなりの聞き上手で、この数分間にすっかり一方通行の懐にもぐり込んでいた。まア、一方通行もカクが暗部の人間ということは知っているので、不用意なことは話さないようにしていたが……。

暗部の人間だからこそこういったスキルが高いのかもな。一番警戒すべきは善良な人間って言葉の意味がようやく分かった気がする。

内心でそんなことを考える一方通行をしり目に、カクは「じゃあ

……」といいながら立ち上がった。

「わしがちょっくら査定に言ってきてやるわい。船はどこに止めてある？」

「？ 今からか……。だいぶかかると思っぞ」

「安心せい。わしじゃったらどこだろうが往復自体に二時間はかからん。オヌシはここにいてゆっくりと、まっついていればええ」

「そっか？」

まあ、六式使えるんだしそのくらいは当然だろう。内心でそう思っていることを完璧に隠し一方通行は真剣に心配そうな雰囲気を取り繕う。

ここ最近やたらと上がった詐欺スキル。バロックワークスのクロコダイルすらだまし切ったその技量は、実際トウヤに並び始めているといっても過言ではないだろう。原作知識を持っていることを隠すにはそれなりの技量が必要だったのである……。

閑話休題。

まあ、とにかくだ……。こいつがCP9であろうと何であろうとゴイングメリー号の査定は一方通行の計画には必要不可欠なものだ。断る理由も特にないため、一方通行はとりあえずカクの申し出を受けけることにした。

「別にそいつはかまわねエが……。うちの船長が査定を頼んでいるはずだ。ダブルブックキングになってもしらねエぞ？」

「ああ、そいつは心配ないじゃろう。アイスバーグさんじゃったらまず間違いないクシに査定を頼みに来るはずじゃ」

カクがそういったとき、

「お〜い。カク……少し査定を頼みたいんだが……」

「ほらの？」

「ほう……」

アイスバーグがルフィを連れて現れるのを見て、一方通行は少し感心しカクは自慢げに鼻をのばした。(もともとかなり長いが……)

なお、カクの姿を見たときルフィが、

「あれ！？ ウソップが二人いる！？」

と驚き、ウソップに突っ込まれていたことは余談である。

…寸…寸…………寸…寸…

タッタッタッタッ！！

軽い跳躍音とともに、町を飛び跳ねる人物が一人。

突風のように街を走り抜け、市民たちに笑顔を振りまくその人物の名は《山風》…………カク。

彼は町の屋根を飛び移りながら、先ほどあった白髪の悪人面について考えていた。

（あれが妻わらの一味のブレン…………《カウンター反射》のアクセラレータ一方通行。なかなか

かとんでもない奴じゃったの。どういっわけかわしのことを警戒しとったようじゃし、これは計画を延期したほうがいいじやるうか？)

内心でそんなことを考えているなどおくびにも出さず、カクは声援を送ってくれる市民に手を振った。

(やはりルッチが抜けたのは痛いのが。あ奴がおればもう少し計画は早くできたかもしれん。じゃが、わしの目から見てもハンターズの勢力拡大速度は異常じゃし……。まあ、今回の配置換えは仕方ないものと割り切ろう)

そうこうしているうちに彼は見つけた。正式な港に泊まっている羊頭の個性的な船を。

「さあて……仕事の時間じゃー!!」

彼はそう呟き屋根から地面へと飛びおり、とんでもない速さで船へと近づく。彼はCP9のカク。だが、今はガレーラカンパニー職長《山風》のカクだ。長い間大工職をやってきたプライドにかけて、彼は仕事に手は抜かない。

…
…
…
…
…
…
…
…
…

「まさかお前が帰ってくるとはな……ハンターズはどうした？」

現在休業中と看板を下げたブルーノズ・バー。そこには大きなマントをはおり顔を隠した一人の男と、グラスを磨く店主ブルーノがいた。

時刻はまだ昼過ぎ。酒場にとっては暇な時間であるためこのようなことができる。

男はブルーノに渡された酒を口に含みつつ、まるで感情が死んだかのような平たんな声音でブルーノの質問に答えた。

「長官命令だ。こちらを優先しろとのことだ」

「スパンダムか……。それほどまで古代兵器にこだわるとはな」

ハンターズよりも自分の出世を優先した長官を馬鹿にしつつ、ブルーノは男に出すためのつまみを作り始める。

「まあ、どちらにせよお前が帰ってきたのはありがたい。計画はもうすぐ始まるからな。お前がいれば成功間違いなしだろう」

「……そうかな？」

ブルーノの言葉に男は少しだけ声を震わせ、港で見かけた白髪の少年を思い出す。

「初めに忠告しておくぞブルーノ。もし一方通行に目をつけられたらお前は戦おうとはするな。奴をやれるのは……おれだけだ」

悪魔の実を食べたことにより跳ね上がった野生のカン。そのカンが「手を出すな!!」と警鐘を鳴らす海賊の少年を思い出しつつ、男……ロブ・ルッチは凶悪な笑みを浮かべて笑うのだった。

…十…十…十…十…十…

時刻は夕方。ゾロは先ほどやってきたウソップそっくりな船大工の言葉を思い出し、ため息をつく。

「メリー……お前は……ほんとうにもう、走れないのか？」

先ほどの船大工が出した査定の結果は《修復不能》。どれだけ頑張ったところで、この船が再び海に出ることは不可能だろうというものだった。

ゾロはそのことに内心でひどいショックを受けつつ、いつものように冷静にそのことをどうやってクルーに伝えるかを考えている。

そして、

「お前の敵は……必ず取るからな……」

船大工が言っていたもう一つの査定の結果を思い出し、今まで彼が出したことがないほどの怒気を放出した。

あの船大工は、最後にこう言ったのだ。

『竜骨の傷の広がり方が、途中から一気に広がりすぎじゃ。明らかに何者かが《故意》に傷を広げた可能性が高いじゃろう。何か心当たりはないのか?』

と……。

その時ゾロはみじんも疑っていなかった。

自分の仲間の中にメリーの命をわざと削り取った《裏切り者》がいることを……。

+ 2話（後書き）

というわけでこんな仕上がりになりました！！

迷いましたがやっぱりルツチは参戦させることにします。

ではでは、また次回！！

+ 3 話

「そオいやア……ウソツプはどこ行ったんだ？」

「「え？」」

……
+ ……
+ ……
+ ……
+ ……

時間は少しさかのぼり……とある裏路地。

「はあはあはあはあ！！！」

もじやもじやの髪を頭に巻いたバンダナからのぞかせた、ゴーグルをつけた少年は巨大な鞆を抱えながら、息も切れ切れに走っていた。

彼の名前はウソップ。麦わら海賊団の狙撃手である。

ガレーらカンパニーに船の修理を頼みに来ていた彼が、どうしてこのようなうすぐらい裏路地にいるのかということ……

「まちやがれええええええええええ！！！」

「逃げ脚だけは早い奴だぜ！！！」

「そのお金おいてけやああああああ！！！」

ガラの悪い言葉を吐きながら、彼を追いかけてくるのは特徴的な鎧に身を包んだ、この町の荒くれども。フランキー一家。

つまりはこういうことである。物珍しさにルフィたちと離れガレーラの中を見学していたウソップ。そんな彼に町で目をつけていたフランキー一家は、仲間から離れた彼を拉致し、彼が持っていた二

億ベリーという大金をかつさらおうとしていたのだ。

しかし、いくら一味の中では最下層の実力に分類されるウソップであっても、それなりの修羅場をくぐってきたいっぱしの海賊だ。彼はフランキー一家が見せた一瞬のすきを突き、見事逃走に成功！
隠れる場所が多そうなの裏路地に逃げ込んだのである。

だが、

「ふはははは！！ バアあああああああああ力！！ ここら辺は俺らの庭だぞ！！ よそもんのおまえに俺たちを負けるわけがないだろうがああああああああ！！」

「く、くそ！！」

そう。地元のフランキー一家とここにきて数時間しかたっていないウソップでは、頭に入っている地理知識の質も量もダン違いであった。

ウソップが隠れるであろうところにはすでに人員が配置されており、彼らをまこうと必死に複雑な裏路地を駆け抜けても、行き着く場所には必ず違う敵がいる。

このままでは捕まる！！

ウソップはそうさとり、攻めて金だけでも……とばかりに、二億の金が入ったカバンを近くを走っていた用水路に捨てようとした！！

だが……。

「はい、ざんねええええええええええええん！」

その目論見は、横手から伸びた手によってあっさりと封じられ、ウソップは後ろから飛びかかってきた大人数の男によって、行動を封じられた！！

「ち、ちくしょおおおおおおおおおおお！！！」

泣きそうになりながらも、必死に拘束から逃れようとするウソップ。だが、数の暴力にかなうはずもなく、抵抗むなしくウソップの手から金が入ったかばんはもぎ取られた。

「ギャハハハハハハハ！！ やったぜ！！ これで兄貴の長年の夢がかなう！！！」

「ま、待ってくれ！！ それは、おれたちの船を……仲間を治すのに必要な金なんだ！！ 頼む、他の物なら何でもやるから……お願いだからそれだけは！！！」

「うるせえええ！！！」

ウソップの必死の懇願も、男たちには届かなかった。

必死に男たちにすがりつくウソップを、フランキー一家の一人が蹴り飛ばし、他のメンバーがリンチを加える。

「海賊が何言つてやがる！！ お前ら海賊は世間から外れた犯罪者だ！！ 海軍も市民も……誰も助けたりはしてくれねえんだよ！！ そんな奴らが今更お願いだあ？ 笑わせてんじゃねえよ！！！」

げらげら下品な笑いを浮かべながら、男たちの暴力がウソップの体をぼろぼろにしていく。

ちくしょう……おれが弱いせいで……仲間の金を……メリーの修理を……こんなことでふいにしちまうのか!!

体中に走る激痛を感じながら、ウソップが自分のふがいなさに涙を流したとき、

「なるほど……確かに海賊ははぐれもんだア。犯罪に巻き込まれようが、金を奪われようが助けてくれる奴なんていやしねエ」

それはコツコツと、硬質な脚音を響かせながら裏路地に入りこみ、

「だかなア……それは逆でも通用すんだよ三下ア」

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああ!?!」

フランキー一家の一人を、ヤード単位で吹き飛ばす!!

「おまえらは海賊に手エ出したんだ……何言われても文句はいわねエよなア?」

凶悪な笑みを浮かべ、不気味な白をともなつた暴力が、裏路地に舞い降りた。

…
十…
十…
…
十…
十…
…

「すまねえ……アクセル。おれが、おれが弱いばかりに……」

「はア？ 何言ってるやがる。おまえはきちんと俺らの金を守っただろがア。これ以上くだんねエこと言ってる体力減らすようなら、しめおとすぞ」

肩にボロボロになったウソップを担ぎながら、白い少年
ラレクタ
通行はそうだった。

一方
アクセ

彼らの後ろには、死屍累々となったフランキー一家が転がっている。

あるものは壁に頭からめり込み、あるものは角材の下敷きになり、あるものは地面にたたきつけられ、あるものは骨折した体のどこかを抑えてのたうちまわっている。

このとき、一方通行の手によってフランキー一家に与えられた被害は……約八割。

こうして、フランキー一家はしばらく間、活動不能となり本来ならエニエスロビーにやってくるはずの面々はことごとく戦線を外れざる得なくなるのだった。

…
…
…
…
…
…
…
…

ぼろぼろになったウソップを担いで船に戻ってきた一方通行を待っていたのは、

「メリーが誰かにわざと傷つけられた可能性があるだど!!」

怒りに燃えるルフィの言葉だった。

あア？ ようやくかよ……。

一方通行はそう思いながら、怒りに燃えるルフィにゆっくりと歩み寄る。

「おい、ルフィ」

「あ、アクセル!! きいて……って、うわあああああああああ
!? ウソップおまえどうしたんだ!! 医者あああああ!!
いしゃあああああああ!!」

慌てふためくチョッパーに「医者はテメエだろうが」とチョップ
で落ち着かせつつ、ウソップとた渡した後、

「何騒いでやがる騒々しい。船の査定は終わったのか?」

と、しらじらしくそう聞いた。

「メリーは……なおらねえ」

ルフィの苦しそうな言葉に、ウソップは顔を上げた。

「ウソップ!! まだ動くな!! 傷がひどいんだ!!」

「な、なんでだよルフィ!? 金さえあれば……メリーは治るんじ
やねえのかよ!?!」

さあて、始まる。

おれの……一世一代の大芝居だ。

明らかな狼狽を示すウソップを冷静な目で見つめながら、一方通
行はこぶしを握り締めるのだった。

+ 3 話 (後書き)

なかなか話が進まない……

+ 4話

「メリーが治らないって……どういうことだよ!」

「ウソツプ! 落ち着きなさい!」

「これが落ち着いていられるか!! だって、メリーは俺たちの仲間だぞ!! それが治らないって……」

怪我をしているにもかかわらず大声を上げ騒ぐウソツプ。ルフィはその光景に、一瞬だけ表情を動かすが、

「……」

すぐに引き締めて言い切った。

「メリーはここでおいでいく。俺たちは新しい船に乗り換える!!」

「!?!」

ルフィの簡潔な言葉に、ウソツプはしばらく口をパクパクと動かした後、

「ほ、本気で言っているわけじゃないよな?」

震える笑顔でそう聞いた。

信じられない。そんな雰囲気全体から垂れ流しつつ、ウソツプはルフィに掴みかかろうとした。

「おйлファイ！！　いつていい冗談と悪い冗談が！！」

「やめねエか」

しかし、それは横手から伸びた白い手によって妨害され未遂に終わる。

今まで黙っていた一方通行が、とびかかろうとしたウソップの襟首を掴み取り、チョッパーのもとに引き戻したのだ。

「この感情で動くバカが、何も考えずにそんなこと言うと思ってるのか？　少し頭を冷やせウソップ」

「だって……だってよお！！」

「まア、こオなることはわかっていたがよオ……お前ら、船フネごときでござゃござゃ騒いでんじやねエぞ」

そして、一方通行は平然とした表情で、淡々とした様子で、そう言い切った。

…十…十…十…十…十…十…

「『『『『『『『！？』』』』』』」

驚きの表情で固まる妻わらの一味。一方通行はそれを胡乱気な顔で見ながら、

「どうした？」

「どうしたって……あんた何言ってるのよ？」

「め、メリーとここで別れなきゃならないんだぞ？ おまえは何とも思わないのかよ!？」

「おもわねエな」

言い切った。

「船なんざどこまで行ってもしよせんは消耗品だ。いずれ使えなくなる時が来るだろうってことは分かっていた。それが今だったって言うだけの話だろーが。まあ、ウォーターセブンにつくって聞いて下準備をしていたかいたがあったってもんだが……」

「おい……おまえ今何て言った？」

一方通行は言葉の端々に、自分の行いをおわせる言葉を紛れ込ませる。

焦って早口になっていないか？ 若干声が震えていないか？ 仲間にはれるようなへまはしていないか？ そんなことを考えながら、彼は本当に何も感じないと言わんばかりの顔で、毒が含まれた言葉を紡いでいった。

「あア？ 船なんざ消耗品だったんだよ」

「違う……そのあとだ!!」

「ん？ あア……。下準備していったつつウほうかア？ 仕方ねエだろーがよオ。使える船を買い替えるなんつたらもしかしたらガレーラからの協力が得られないかもしれねエだろオが。おめエらも後味悪いだろオし。だから、俺が竜骨のヒビを若干でかくして、ち

ようどこの島に着いたあたりで限界が来るようにしたんだろオが」

次の瞬間！！

ルフィの腕が一方通行の顔をとらえ、容赦なく彼の体を吹き飛ばした！！そこには、ずいぶんと昔に教えた《木原神拳》の理論が使われており、一方通行の反射をルフィのコブシはやすやすと貫通する。

「きゃっ！？」

「ルフィ！？」

「アクセルウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ！！」

突然のルフィの行動に、クルーは騒然となった！！ナミは悲鳴を上げ、サンジとゾロは暴れるルフィをあわてて押さえつける。だからその間、誰も気づくことはできなかった。

一方通行が、どういわけは少し安心したかのような顔をしていたことに。

「ってエな……何しやがる！！」

一瞬見せた安堵の表情を即座にかき消し、一方通行も怒声を上げて飛びかかる。だが、そちらはアルビダが即座に動き抑え込んだため、大事に至ることはなかった。

「おまえ！！何したかわかってんのか！！おまえは仲間を手に掛けたんだぞ！！」

ルフィの怒声が響き渡り、ウソップが信じられないとばかりに一方通行をみる。チョッパーは険悪な空気に耐えられないのか、泣きそうになりながら「やめろよお!!」と二人の間に入る。

「ふざけたことぬかしてんじゃねエぞ!! この船はおれが手を出さなくてもどの道もすぐ使えなくなっていやがったんだ!! だったら、最高の船大工のいるこの島で新しい船を買い替えたほうがいいに決まっつてんだろオが!!」

「それはおまえが手を出さなかったら、メリーはまだもう少し走れたかもしれないっつことだろうが!! 船の買い替えは次の島でもよかった!! 俺たちがメリーにしてやれることは、ぎりぎりまでこいつと一緒に旅を続けてやることだろ!!」

「感情に流されてんじゃねエぞ!! 次の島でガレーラ以上の船は望めねエ!! おまけにここの船大工たちは、グランドライン屈指の腕と戦闘能力を持つ船大工たちだ!! これからの旅で船大工の仲間は必須になってくる!! だったらここで引き抜かなくて、いつ引き抜くっつウンだ!! だから俺は、船を買い替えるついでに仲間にできそうな人材を……」

「そんなことのために……今の仲間を犠牲にしたのか!!」

「船長なら理解しろルフィ!! 一味の先のことを考えたら、これがベストな選択だろオが!!」

「この船の船長はおれだ!! おまえが……一味の未来を決めるな!!」

微量の覇気が混ざったルフィの怒声が、船の中を蹂躪した！！

「!?!」

今まで感じたことがない、圧倒的な存在感の嵐に一方通行は少しだけひるむ。

これが……霸王色!? なるほど……かなり厄介な力だな。酔っちまいそつだ。

だらだらと冷や汗を流しながら、それでも一方通行は演技を続ける。それが……彼が一味でできる、最後の仕事だから。

「ざけんじゃねエぞ!!」

一方通行はアルビダの拘束を無理やり振りほどき、ルフィにつかみかかる!!

「てめエが船長だア!? 自覚してんなら少しは船長らしいことをしやがれ!! 感傷に流されてチャンスを逃し、船員を危険にさらすのがてめエの判断なら、そんな奴は船長とはいわねエ!! ただのバカだ!! だいたい、いまだに俺にタイマンでかったことがねエテメエが偉そうな口きいてんじゃねエぞ!! おまえが弱かったからおれは青キジに……」

「やめねえか!!」

決定的な言葉を一方通行が吐き出す前に、サンジが怒声を上げその言葉をさえぎる。

それだけは言っではいけない。それをいつたら戻れなくなる。本能的に彼はそう悟ったのだろう。

だが、一方通行は止まらない。このまま進むと、彼は決めたのだから。

「おまえが弱かったせいで、俺は青キジに殺されかけたんだ!! 仲間一人守れないような雑魚を……俺は船長と認めねエ!!」

「!!」

一方通行は、そう言いきると、自分のほうを信じられないといった様子で見つめるルフィに、視線を合わせないようにしながら突き放す。

「い、いい加減クルーごっこには嫌気がさした。テメエがただのバカならこのままでも何とかやっていけると思ったが、俺の一味への気遣いを船長命令で蹂躪するなら仕方がねエ、俺はテメエに決闘を申し込む」

若干震えてしまった声を、必死でごまかしながら、一方通行は吐き捨てる。

「俺が勝ったら、俺が一味の船長だ。テメエはこの船から降りろ、ルフィ」

そして、決闘は始まった。

仲間を傷つけられ、信頼を裏切られ、どうしようもなくなったルフィと、

身を呈して仲間をかばい、自分の身を差し出すことによってウン
ツプとルフィの不和を事前につぶした一方通行の、悲しい決闘が。

+ 4話（後書き）

鬱展開！！

ちなみに、麦わらの一味全員は木原神拳の存在を知っています。

+ 5 話

自国は夕刻。

しずんだ太陽が入江を紅く照らすなか、二人の人間が向かい合い無言のままにたたずんでいた。

一人は白い髪を持った、悪人面の超能力者。

もう一人は仲間に帽子を預けて、鋭い瞳で超能力者をにらみつける、悪魔の実の能力者。

「本気なんだな？」

「そりゃこつちのセリフだぜルフィ。お目が俺にタイムマンで勝ったことはねエだろオがよオ。しっぽ巻いて逃げてもよかったんだぜエ」

白い髪の少年……一方通行は、ルフィをバカにしきった笑みで脅しつける。ルフィはそんな彼に目をつぶった後、

「お前……変わったよ」

「変わらないといけなかったんだよ。テメエが弱いせいでない！」

一方通行は、悲しそうにつぶやいたルフィに怒声を飛ばし、戦闘を開始した！

まずは小手調べ。足元にあった砂利を軽くけりベクトルを操作。弾丸のような速度をもった砂利たちは、弾幕となってルフィに飛来

しその体を容赦なく貫く！！

「きかああああああん！」

しかし、ルフィの体はゴムである。打撃銃撃は基本的に効かない！！

体に直撃した砂利の衝撃を見事に吸収し弾き飛ばすルフィ。だが、そんなものは予想の範囲内。一方通行は反射を使いながら、足元のベクトルを操作。とんでもない速さで走りながら、ルフィを肉迫していく！！

「死ね！！」

「！？」

とんでもない速度で振るわれるのは一方通行の右腕。ルフィはそれにえも言えない寒気を感じ、あわてて自分の体を翻しその腕をよけた。

実は一方通行の腕にはすでにベクトル操作が仕込まれており、ルフィの生体電気を逆転させるように発動されてたのだ。

「よくよけたじゃねエか。だがルフィ。体制はすぐの立てなおさねエと……」

冷や汗を流しながら、荒い息をするルフィを見て、一方通行は凶悪な笑みを浮かべる。その隣には巨大な岩がころがっており、ルフィは俺から飛んでくる攻撃を察知し、ふたたび回避運動をとった。

「こオなるぜエー!!」

そんなルフィをあざ笑うかのように、一方通行はその巨岩をなでるように触った。

瞬間。彼のベクトル操作が発動し、巨岩が砲弾のように吹き飛ばす!!

「ギャハハハハハ!! カエルみたいにつぶれる、ルフィいいいいいいいいいい!!」

狂ったような笑い声をあげ、攻撃の結果を見届ける一方通行。

そして、巨岩はルフィがいたところを直撃し、すさまじい衝撃と砂煙を巻き上げた!!

「ルフィ!!」

「あのやろう!? 本気でルフィを殺す気が!!」

「だが、ルフィはゴムだから、あれくらっても大丈夫だろ!?!」

「ばか、くらって平気だからって無事でいられるわけじゃない!! あんな岩に押しつぶされたら、いくらルフィでも抜け出すことはできない!! その間一方通行はルフィをタコ殴りにできる!!」

後ろの船から聞こえてくる、不安に満ちた声。一方通行はそれに小さく謝罪をしながら、岩のほうへ近づいていく。

おそらく……彼はここで負けるのだろう。

「お前がおれに、勝てるわけねエだろうが！」

その名言が俺に対してつかわれるとはな……本望だぜ、ルフィ。

かすれゆく意識の中で、そんなくだらないことを考えている自分に嘲笑を浮かべつつ、一方通行はルフィに完敗した。

+ 5話（後書き）

一方通行敗北!!

ルフィとは長い付き合いなので、実はぼろっと自分の反射の攻略方法を教えていたりします。

「こいつは……一体どういうことだ!!」

ウソップを襲ったフランキー一家が、ぼこぼこにされた揚句、放置された裏路地に、その男は立っていた。

顔を覆う大きな仮面。どういうわけか、ひじから先が肥大し信じられないほど太くなった両腕。体を覆うマントの中からのぞくのは趣味の悪いアロハシャツと、着物と呼んでいいのか迷うほどぴっちりとした……海パン。

変態。まごうことなき変態が、怒りにわななきながらその裏路地に立っていた。

「俺のかわいい子分たちが……趣味のいいオブジェに変形されちまっているじゃねーか!!」

「あ、あにき……確かにこのセンスは半端ねえですが、そんなことを言っている場合じゃありません!!」

「そっかわいな!!」

「じゃれになってないだわいな!!」

……若干人とは違う感性を披露しつつも、かたわらにいた包帯を巻かれた子分の男と、四角い髪形をした女子分二人にいさめられ、かれは怒りのボルテージを上げていく。

「こんなことをしゃがったのはどこのどいつだ!」

「こいつのようで!」

怒りに燃える男が吠えたとき、男の気分が一枚の紙を取り出し男に見せる。

そこには、

『懸賞金2億ベリー カウンター 《反射》 アクセラレータ の一方通行』

とかかれた、目つきの悪いある美の少年がうつつていて……。

「こいつかあ……。俺の子分をこんな目にあわせてくれたのは……」

仮面の男はそっぴなながら、彼の一味である麦藁の一味の船がある方向へ歩みを進み始める。

彼の本職は船の解体だ。海賊船は無料で解体し、その材料は根こそぎ売り払っても文句はいわれないため、この島にやってきている海賊船の情報は常に入手しているのだ。

だからこそ、彼は一方通行の居場所が分かる。

「この島には、手を出しちゃいけねえ男がいることを、こいつにおもいしらせてやるぜ」

怒りに燃える男の名前は、フランキー。自称ウオーターセブン裏の顔。ガレーラカンパニーの職長と同等……いや、もしかしたらそれ以上の実力を持つ怪物である。

「じつは……始めるじつは」

……
+……
+……
+……
+……
+……

光のささない漆黒の闇の中、四人の人影が仮面をかぶる。

一つは雄牛。一つは鬮體。一つは貴婦人。一つはクマ。

それぞれ尋常ではない雰囲気を出しながら、どういつわけか気にかけるほどでもないと感じてしまうほど存在感が薄い。

トウヤがこの場にいたら眉をしかめてこういっただろう。

ああ、少し前の俺と同じ……こいつらは、闇世界の手練れだ！と。

「作戦を開始する。絶対正義の名のもとに……」

「……絶対正義の名のもとに」「」「」

大津波……アクアラグナの前兆なのか、大いに荒れるウォーターセブンの中に、彼らは信じられない速さで飛びだした。

しかし、どういいうわけか雨がかなり降っている。正直かなり鬱陶しかったので反射で水滴をはじいているのだが……。

「どオいうわけだ？ アクアラグナが来るのは明日のはずだろオが？」

まるで、ワンピース史上最悪の津波が来る前兆のような光景に嫌な予感を覚えつつ、一方通行は手早く傷の手当を締めくり、近くに転がっていた木材を拾い松葉づえのような形になるように削る。

彼がナミのように気象学を学んでいたら気づいたのかもしれないが、実はここ数カ月のあいだ、全世界の海が一カ月につき一センチずつ水位を下げていたのだ。その影響でアクアラグナの到来が早まり、原作よりも早い時期に津波がやってくることになってしまっていたのだ。

その原因は……一方通行以外のもう一人のイレギュラーの策なのだが、そんなことは一方通行は知らなかったため首を傾げつつ海から少しでも遠くへ逃げるための努力をするしかない。

木材をベクトル操作で制御した石で削りつつ、ある形の整えた一方通行は、その完成作品を見て自虐的な笑みを浮かべる。

「おいおい……松葉づえつつたらもつとシンプルな形があるだろオが……。なんでこんなもん作ってたんだよ」

オリジナル一方通行が使っていたような、近代的デザインの松葉づえ。木材で忠実に再現されたそれをつきながら、一方通行はおぼつかない足取りで、岩でこつこつした入り江に立つ。

そんなふうには、彼が揺れまどっているときだった……。

『ゴツ！！』

町中に響き渡ったかと思われる轟音がウォーターセブンに響き渡り、ガレーらカンパニーの三番ドッグが崩落したのは！！

「なっ！？」

ガレーらのほうから立ち上る怒声と黒煙を見て、一方通行は茫然と固まる。

「馬鹿な……なんでだ！？ どうしてだ！？」

アイスバーグの襲撃か！？ 早すぎる。だったらなんだ？ 海賊の襲撃？ それもない。この島にはガレーらを同行できるような大物は上陸していない。原作知識でもそうだし、もしかして俺やトウヤのせいで変わっているかもと上陸した後調べもしたが、そんな海賊団はヒットしなかった。

だったらなんだ？ いったいなんだ！？

そのとき彼は気づいてしまった。

CP9はアクアラグナに合わせてアイスバーグ襲撃を行ったのだ。だったら、アクアラグナの来訪が早まったらその襲撃が早まるのも必定！！

「くそつたれ！！」

一方通行の今後の計画としては、麦藁の一味を抜けたと大々的に宣伝しながらアイスバーグ襲撃に介入、助ける予定だったのだ。そうすることによって、一方通行は完ぺきに麦藁の一味から離反したことがガレラカンパニーから世界に伝えられるだろうし、一方通行は政界政府の弱みを握れる。おまけにアイスバーグに恩を売ることができ、船を格安で譲ってもらえるかもしれないという一石二鳥どころか一石三鳥な行動。

なによりも……原作知識で知っていて救えるかもしれないものをすくわないなど、後味が悪いにもほどがある。だから一方通行はアイスバーグを助けるための計画を綿密のたてていたのだ。

だが、その計画は早くも狂う。

原作と比べてあまりに早すぎる、CP9の計画実行によって。

「まだ間に合うか!？」

ダメージを負っているとはいえ、所詮相手は体術使い。一方通行の敵ではない。

そう思い、彼が足元のベクトルを操作しガレラカンパニーに向かって大跳躍をしようとしたときだった。

「よお!! 元氣してるかい!! お兄ちゃん!!」

その言葉とともに現れたのはマントに仮面の巨漢。

そのあまりに見覚えのありすぎる人物の登場に、一方通行は思わ

ず眉をしかめる。

「んゝスーパー！！ スーパーな俺様が子分の仇……取りに来たぞ
コルウア!？」

その怒声を上げながら、マントと仮面を脱いだ男は……。

両腕を頭の上にもっていき、肥大した両手を合わせ、そこに刻まれた星マークを完成させながら、少し傾くといった独特のポーズを決めてそう言った。

暴風に翻るアロハシャツ。嵐の風をもともしないぴっちり海パン。

そんな彼を見て一方い通行がはじめて言った言葉は！！

「きゃあああああああああああああああああ!？」

悲鳴でした……。

覚悟はしていたが思った以上にダメージがかかったようである。

一方通行……ぐれてしまっではいるが麦藁の一味の中では最も常識を持つ存在。変態への耐性は……ちょっと持ち合わせていなかったようである。

+ 6話（後書き）

一方通行……実は

的な？

わからない人は別に気にしないでください。まだどうするか決まっていますし。

まあ、その方針になったらちょっと修正しなければならない箇所がちらほらと……。

+7話

一方通行がひとしきり悲鳴を上げた後、場には何とも言えない沈黙が下りた。

それはそうだろう。カッコよく(フランキー主観)登場を決めたと思った矢先、突然相手に悲鳴を上げられてしまったのだ。

ウォーターセブンの住人からならまだいいが(なれているから)、さすがに初対面の人間にここまでおびえられるのは鋼のハートをもつ(比喻抜きで)フランキーでも結構傷つく。

「俺の格好って……そんなに変か？」

フランキーは傷ついていて……

「変だわいな」

傷ついて……

「変だわいな」

き、傷ついて……

「オッケー！！ さすがは俺様！！ 変態の名に恥じめ立派な悲鳴の上げられかただったぜ！！」

……傷ついていたと思ったのだが、どうやら勘違いだったようだ。

「まあそんなことはともかくだ、オニーちゃん！！　ちょっと俺に付き合ってもらえねーか？」

落とし前をつけるためになー！！

そう言っつて、何事もなかったかのように再びポーズを決めるバカ三人。

しかし、その光景に肝心の一方通行は一切反応を返さなかった。

「「「？」」」」

そのことに、さすがに不信感を抱いたのか、馬鹿三人が一方通行に歩み寄る。

そして……

「兄貴……こいつ気絶しているだわいな」

「気絶しているだわいな！！」

「アウトッ！！　俺様の迫力に恐れをなしたんだな！？　さすがはスパーパーな俺様だぜ！！」

麦わら海賊団元クルー一方通行。常識人の彼にとってフランキーという規格外の変態は、少々刺激が強かったらしい。

…
十…
十…
…
…
十…
十…
…

昔々の話である。

神から能力をもらい、ワンピース世界に転生してきた一方通行だったが、神は転生先の面倒までは見てくれなかったらしい。

彼が初めて自意識を持ったとき、まず最初にうつったのはごみの山であった。

どこだここは！？ と愕然としながら彼は周りを見渡す。あいにくと彼の原作知識は頂上戦争の終わりでルファイが逃げ延びるところまで。ルファイの過去の話は全く知らなかったのだ。そのため、グレイターミナルの存在も知らず、自分がどこにいるのかもわからなかった。

そんな風に混乱し、ごみの中で身もだえしながら状況を確認しようとする彼。だが、体は思うように動いてはくれない。当然である、たいていの転生者と同じように、意識を持った彼の姿は赤ん坊。学園都市最強とうたわれた能力を持っているといっても、今の彼にできることなど限られている。

そして、グレイターミナルはそんな彼の成長を待ってくれるほど甘い場所ではなかった。

「おい……ほんとうかよ？ こんなところから赤ん坊の声が聞こえるなんて」

「まじだつて！！ きつと誰かが捨てて行ったんだ！！」

そんな声とともに、一方通行の周りの瓦礫がどけられていく。

誰か来た！？ 助かった！！

そんな風に安堵の息を漏らす一方通行。赤ん坊のくせになかなか様になっていく行動だった。だが、あいにくと世界は彼にやさしくはなかった。

「おお？ ほんとうにいたよ！？」

「なっ！！ いったとおりだろ？」

瓦礫が取り去られ、できた隙間から除くのは二人の男の顔。どう
いうわけかかなりみすばらしく、そして凶悪な顔をしている二人だ
ったが、転生した直後であった一方通行には、そんなことは気にな
らない。

ここから俺の『俺TUEEEEEEEEE！！』伝説が始まる
んだな！！ と信じて疑っていなかった。だが、

「これではばらくは食う飯に困らないな！！」

「ああ！！ いつもんとところに売り払って金に換えようぜ！！」

男たちの言葉に、赤ん坊だった一方通行は氷結した。

こいつら……いまなんて……

「それにしてもあの貴族様はいつたい何考えていらっしやるんだろ
うな？ こんなうすぎたねえ餓鬼ども大量に買い込んで」

「うわさじゃ、奴隷みたいに鎖をつけてこき使ったり、面白半分で
殺したりしてるんだとよ」

「マジで〜。うわ〜鬼畜〜！！」

「そんな奴にガキ売りつけている俺らも人のこと言えねえけどな！

「！」

「ちげ〜ね〜！！！」

ゲハハハハハハ！ 下品に笑う男たちの言葉を一方通行は理解できない。いや、理解したくなかった。

どうしてだ？ なんでだ？ 前世ではろくなことが無かったら。まともに生きることすら許されなかったから。神様が事故をしてくれたおかげでようやくあの地獄から抜け出せたのに、どうしてジブンハマタコンナトコロニイル？

壊れかけ始めている自意識を、必死に理性で保ちながら一方通行は身をよじって男たちから少しでも距離を取ろうとした。だが、そんな彼の抵抗もむなしく、男たちはゆっくりと彼に手を伸ばし、

「さあて……また、おいちゃんたちの御飯になってもらうよ〜」

「うらまないでねえ〜ギャハハハハハハハハ！！！」

そんな男たちの笑い声に、言いようもない恐怖を感じた一方通行は無意識のうちの能力を発動してしまった！！

そして、

「「あ？」「」

一方通行が触れていたごぶし大の二つのゴミが、凄まじい勢いで男たちへと飛び、その頭部に直撃。

「はっ!？」

そこで、一方通行は悲鳴をあげかけながら飛び起きた!!

「はあはあはあはあ……夢? くそつたれ……最近みねえと
思ったのに」

だらだらと流れる冷や汗を自分の服の袖で拭い取りながら、一方通行はそうつぶやいた。

夢に見たのは転生直後の光景。いま思い出しただけでも吐き気がするほどおぞましい思い出。グレイターミナルに遊びに来ていたエース、サボに拾われ一緒にいたずらをするようになってからは見ないようになっていたのだが……どうしていまさらになってまた……。

「はっ……自問自答する必要もねえな……」

ルフィと離れたからだ。今まで自分とともにいてくれた……自分

を守ってくれた兄弟と離れたから……。

まったく……いつまでたってもヘタレだな俺は……。

一方通行はそう笑いながら、ベッドから抜け出そうとして、

「あア？」

ようやく気付いた。

ここ何処だよ？

ようやく自分が見覚えのない場所に寝かされていたこと……そして、いつの間にかルフィとの決闘でポロポロになった服から清潔な服へと着替えさせられていたことに気づき、氷結する一方通行。その時、まるで狙い澄ましたかのように！！

「スーパーいい目覚めかオネーちゃん！！ そりゃそうだ！！ 今週の俺はスーパー女には優しいからな！！」

海パンアロハのど変態が部屋に入ってきた！！

「……………」

一方通行はその男の登場にあんぐりと口をあげながら一言……

「テメエなんで俺の秘密……………」

「ああ？ そんなもん、俺がスーパーお前の着替えを手伝ったからに決まって……………」

瞬間。一方通行が下りたベッドがベクトル操作によって瞬時に加速。砲弾並みの速度をもってフランキーを吹き飛ばした！！

「あぶふう！？」

「出てけこのドヘンタイイイイイイイイイイイイイイイイイ！！」

普段は見られないような表情で、顔を真っ赤にした彼……もとい彼女な一方通行。前世での本名は鈴科百合子。男になりたいと転生直前で願い、しかし神のいたずらによって結局性転換した一方通行として生を受けてしまった……ある意味悲劇のヒロインである。

＋7話（後書き）

ははははは……やっちゃったぜ!!

後悔も反省もしているが訂正はしない!!

だってキャラが弱かったから!!

ボロボロのごみの山の中、一方通行は女であることを隠すためにボロボロの布を体に巻きつけながら、ゴミを拾って生計を立てていた。

正直言って原作介入を起こす気はもう全くなかった。なにせこの世界に来て初めての能力の使い方が、人間の頭部を石榴に変換することだったのだ。

正直それがトラウマになってしまい、いまだに能力をまともに制御できていない。なにより、あれほど簡単に人が殺せる自分の能力が怖かったのだ。

正直自分は甘く見ていたのだろう、人を殺すということ。原作に介入するということ。

自分があこがれた二次創作の主人公たちはけっこうアツサリと人を殺していた。へらへら笑って、にこやかに笑って、平然とあっさり、完膚なきまで自分の強さを見せつけていた。

だから、自分もそれができると、前世でのうさを晴らせると思ったのだ。

だが、結果はこれだった。やはり人殺しをした後の衝撃はすさまじく……二、三日の間はあのシーンを思い出すたびにすさまじい嘔吐感に襲われた。いまだに能力を使おうとすると四肢が震え、まともに入らない。

だから一方通行は原作介入の道を捨てた。自分みたいな人殺しが、ルフィのような人物の隣に立つてはいけないと……。そう思っていた。

だが、

「おいおまえ!!」

神様は……

「昔からここらをつろついている灰色の幽霊っていうのはお前か！
！ サボから聞いたぜ!! 前にお前のことを襲ったこの荒くれどもを返り討ちにしたらしいな!! おれは今仲間を集めている！
！ おまえ、おれの仲間になれ!!」

どうやら、一方通行に平穩をくれるつもりはないようだった。

ふらふらとゴミを集めていた一方通行に近づいてきたのは二人の少年。

がれきの山に転がっていきそうな鉄パイプをそれぞれ片手ずつに持ち、にこやかに話しかけてきた。

「追い払ったも何も……肝試しにやってきた彼らが僕を本物の幽霊と間違えて勝手に逃げかえっただけですよ？」

「え!？」

「なっ!？」

一人は癖のある短い黒髪に個性的な文字が書いていあるオレンジ色のランニングを着込んだ少年。もう一人はぼろくなければ貴族が着てそうな上等な青いコートに身を包み、頭に帽子とゴーグルをつけた金髪を限界まで短くしたの少年。

二人の名前はグレイターミナルの悪童サボと……エース。彼らと出会ったことにより、絶望に満ちた一方通行の生活は、一気に原作へと接近していくことになる。

…
十…
十…
…
…
十…
十…
…

「言い残すことはねえかメタルマン？」

「お前の体……結構柔らかかったけど胸はねえよな？」

「遺言はそれでいいのか？ ああん！？」

場所はフランキーの隠れ工場。もともとトムズワーカーズの事務所だったここは、天才船大工トムの手によって、アクアラグナに十分耐えられるような構造になっている。

そんな由緒正しい（？）工場で、いま……一つの殺人事件が起ころうとしていた！！

「待つてだわいな！！」

「兄貴はあんたの命の恩人だわいな！？」

「だとしても女の裸見て平然としている奴を許しておけるわけねえだろオがア！！ だいたいてめエらがいたんだったら、着替えはお前たちに任せてあいつは外に出ているってことができたんじゃないかねえのか」

「「「あ!?!」」」

「馬鹿だろオ!? お前ら本当に馬鹿だろウオ!?」

もうすっかりと一方通行アクセラレータのキャラを投げ捨て、顔を真っ赤にしなからバカ三人組につかみかかる一方通行。とうぜんだ。

彼が彼女であることをしっているのは義兄弟のエースと夜中に夜這いをかけてきたアルビダだけ(本当はもう一人いたのだが今は故人になってる)。ルフィにできるだけ一緒にいたいがために、自分の性別を偽っていたのだ。

まあ、アルビダに『大丈夫。わたしはおんなでもいけるよ?』といわれた時は本気で性別ばらしてやるうかと思っただが……。

そうしたら一味全員がアルビダ止めてくれるだろうし……。まあ結局言えなかったのだが。

おまけにアラバスタでの入浴イベント回避したり何かといらぬ苦勞を背負ったりもしたが……。

あれ? デメリットのほうが多くね? いやいや……むしろ俺もルフィの近くにはいれないわけだから、ばれてもよくないか?

一方通行の冷静な部分が彼にそうささやきかける。

が、

「それとこれとは話が別だあああああああああああああああ
!?!」

「どれとどれだ!? アブエッフ!?」

結局顔を真っ赤にした一方通行の一撃によって砲弾のように吹き飛んだ三人は、とんでもない勢いで壁につっこみそこに大きな穴をあけブランと四肢を垂らすのだった。

……

それからしばらく経ち……。

ひとしきり暴れて落ち着いた一方通行は、壁に突っ込みオブジェと化した三人組を何とか壁の外に引っ張り出しまともに会話ができる状態にしておいた。

壁に突っ込んだ割に三人ともかなり元気で、暇つぶしがてらにウクレレとダンスを踊っている。

まったくギャグ補正というものは恐ろしいものだ。

「でよお、おねーちゃん」

「オネーちゃん言っなー!!」

「お前なんであんなところでポロポロになってたんだよ」

「……………」

一方通行は、最近サンジの勧めですうようになつた煙草に火をつけながら、フランキーの質問にチツと舌打ちを漏らした。

正直答えたくはないのだが、こいつらには一応傷の手を当てをしてもらった恩義がある。だんまりというのも失礼だろう。

そこはさすがの偽一方通行。基本的性格が善人なだけにはあり受けた恩はきつちりと返すのが信条だった。

「仲間と多少もめたんだよ。ちよつと、船のことだな」

「船え？」

その言葉を聞き若干眉を動かすフランキーに、一方通行はため息をつきながら事の次第を話した。

普段の彼ならこんなことを話さなかつただろう。原作知識を持っていることがばれる可能性もあるし、何より相手は原作の主要メンバー。下手な知識を与えて、自体が悪い方向に転がる可能性が無きにしも非ずなのだ。そんな危険な橋は渡れない。

だが、一方通行はこの時ひどく弱っていた。

身体面ではなく精神面で。

だから、彼は暴露してしまったのだろう。今まで彼が命懸けで守り通してきたこの秘密を……。

「おれはな……未来を知っているんだ」

壇。

そこに置かれた彼らの仲間フネに、見知らぬ少年が金づちをふるいながら何かをしている。

霧が濃くてその少年の顔はわからない。だが、悪いことをしているようには見えなかった。彼がその光景を見てそんなことを考えているとき、霧を切り裂き飛んできた一人の男がその少年の隣に立った。

「……まさか本当に見れるとは。お前は……メリーでいいのか？」

それは、ちよつと前に一味を追放された裏切り者。白い髪を持ち悪人面をした仲間を殺した張本人。

彼は一瞬で胸の内に怒りを燃やし始めたが、そいつが言った言葉が気になり声を上げることを踏みとどまった。

『メリーでいいのか？』 どういうことだ？

その時、少年がにこりと微笑みながら男に近寄って頭を下げた。

「ああ？ ありがとう？ 何を言っている？ おれは何もしていない」

その時、彼は気がついた。

少年の口が動いている。何かを男に話しかけていると。

彼は少年の口の動きをじっと見つめ、何を言っているのか確かめ

た。屋敷のガラスで区切られた幼馴染との会話によく使っていた読唇術を使っているのだ。

少年はこう言っていた。

『ずっと船を守ってくれてありがとう』

『僕を大切にしてくれてありがとう』

『少しでも長く航海ができるように、気を使ってくれてありがとう』

『でもごめんなさい』

『僕はもう……もたないから』

『だから……』

『君が判断するところで、僕を沈めてほしいんだ』

『《ゲンサクチシキ》だったっけ？ 君は未来を知っているんでしょ』

『僕より素晴らしい船が彼らに与えられる場所を知っているんでしょ』

『だからお願い』

『僕が彼らを抱いて沈む前に……』

『どうか僕を殺してほしい』

『アクセラレータ一方通行』

…
†
…
†
…
†
…
†
…
†
…

そこで彼は 麦わら海賊団狙撃手・ウソップはだらだらと汗を流しながら、飛び起きた。

「うそ……だろ？」

そして、彼が振り向いたその先には先ほど夢に出てきた少年が立っていた。

「メリー？ メリーなのか！？ あの夢は本当なのか！？」

ウソップの叫びに人影は少しだけ首肯し答えを返す。

闇に隠れて顔を見ることはできない。月明かりに照らされた口だけが、するすると動きウソップに意思を伝えてくる。

『どうか彼を助けてあげて』

『どうか彼を見捨てないであげて』

『彼は……僕と同じくらい、大切な仲間じゃなかったの？』

『ウソップ』

最後にそういうと人影は消えた。

まるで霧のように……

ウソップは、少年が立っていた場所をしばらく茫然と見つめていたが……

「大変だ……」

事の重大さに気付いた彼は、あわてて一味を起こすために近くのハンモックで寝ていた仲間たちをたたき起す！！

「大変だ！！ 大変だ！！ 一方通行を……今すぐ探し出さないと！！」

麦わら海賊団の長い夜が始まった。

+ 8話 (後書き)

次回・・・フランキーのターン!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9732q/>

†万有掌握†《トレジャーハンターキングに俺はなる！》

2011年10月12日11時55分発行